

九州縦貫自動車道  
埋蔵文化財調査報告

(1)

1972

宮崎県教育委員会

## 序

最近，国土開発に伴う各種土木工事の進展はめざましいものがあり，これが史跡，埋蔵文化財等土地に密着した遺跡保存のうえに重大な影響を与えつつあることは周知のとおりであります。わが宮崎県も神話と伝説に彩られる土地柄だけあって縄文，弥生から古墳時代にかけての古代遺跡が数多く存在しております。このたび，九州縦貫自動車道えびの・高原間28.8キロが建設されることになり，日本道路公団との事前協議により主要遺跡についてはあらかじめ路線から除外し，路線決定後さらに路線内の実地踏査を実施しましたところ，9ヶ所の遺物散布地を確認しました。このため，県教育委員会は昭和47年度において日本道路公団の委託をうけて遺跡の発掘調査を実施いたしましたのであります。

発掘調査の結果，地下式古墳26基をはじめ，馬具，剣，土器など当時の貴重な資料が確認されました。

この調査にあたっては，日本道路公団小林工事事務所のご理解とご協力を始めとし，地元えびの市，小林市，高原町ご当局ならびに地元の方々のご協力とご鞭撻を賜わり，ここに心からお礼申し上げます。

また，本書の刊行にあたり数々の困難な問題を克服されて執筆にご苦勞いただいた調査員各位に心からお礼を申し上げ報告といたします。

昭和48年3月

宮崎県教育委員会  
教育長 穂積正晴

## 例 言

- 1 この報告書は昭和47年に宮崎県教育委員会が道路公団の経費負担によって実施した九州縦貫自動車道路の建設工事によって消滅する埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の概要である。
- 1 記述の大部分は、えびの市内の地下式古墳に関するものであるが、地下式古墳は宮崎県の中部以南を中心に、鹿児島県の1部にわたって存在する特殊な墓制で従来これを地下式土壙、地下式墳、地下式横穴など種々の名称で呼んでいたが、本報告ではこれを地下式古墳の名称に統一した。それは一般に地下式古墳と呼んでいるのと、地下に掘られた単なる土壙や横穴ではなく、遺骸を安置し副葬品を蔵めた内部主体を有し且つその主体を墳丘で蔽っていたことも、この調査で明らかになったからである。
- 1 地下式古墳は地表から垂直に地下に掘り下げた竪穴の部分と、その底から横に玄室への通路である羨道と、その奥に内部主体である玄室を有するが、この竪穴の部分を従来は単に竪穴と呼んできたけれども、本報告ではこれを竪穴式前室の名称に統一した。それは縄文時代や弥生時代の竪穴住居を竪穴と略称するのと混同される虞れがあるのと、この部分は中国古墳の前室や横穴の前庭に当るからである。
- 1 本報告の執筆は各項の末尾に記す通りであるが、実測および製図は調査員および同補助員が全員であたり、写真の撮影は調査員が全員で行なった。
- 1 本調査にあたっての調査計画、および報告書の編集発行については、主として県教育庁社会教育課主幹寺原俊文および文化財係職員(主事 森山重美・主事 白石 勇)が担当した。

## 目 次

第 1	発掘調査の端緒と概況 .....	5
第 2	えびの市内の遺跡 .....	7
	1 小木原遺跡 .....	8
	2 小木原古墳 .....	11
	3 <sup>小木原古墳</sup> 地下式 A 号墳 .....	29
	4 久見迫遺跡 .....	38
	5 馬頭遺跡 .....	65
第 3	遺跡の特徴と年代 .....	79
第 4	小林市内の遺跡 .....	104
	1 こまくりげ遺跡 .....	104
	2 平木場遺跡 .....	120
	3 竹山遺跡 .....	135
第 5	高原町内の遺跡 .....	146
	1 鷹巣原遺跡 .....	146
	2 立山遺跡 .....	151



## 第1 発掘調査の端緒と概況

九州縦貫自動車道は最近における国土開発の盛行と交通事情の激化に対処するため、昭和40年に基本計画が定められ、翌41年に整備計画が決定、福岡県北九州市門司区から宮崎県えびの市に至り、ここから鹿児島市と宮崎市との2道にわかれるもので、全延長約409kmにおよぶ路線が決定ないし計画されている。このうち本県に関するものはえびの市から宮崎市までの約82.1kmである。

このような道路の開発は、本県の産業や文化の発達上きわめて喜ばしいことであるが、この開発のために本県の歴史上にきわめて重要な埋蔵文化財が破壊されることはまことに遺憾なことである。そこで昭和42年9月30日に文化財保護委員会（現文化庁）と日本道路公団との間に、文化財の保護と開発との調整のために定められたものが「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」であって、それによれば、公団の事業施行前に両者の協議によって、埋蔵文化財の包蔵地については3種の必要な措置をとることが定められている。第1は事業地区に含めないもの、第2は事業地区に含めるが保存をはかるもの、第3は発掘調査を行なって記録を保存するもの、である。そして公団は第3の発掘調査を都道府県教育委員会に委託して実施するものと定めている。

今回の調査もこの覚書に基づくもので、今回は宮崎県関係のうち、第1期工事の行われるえびの市から高原町に至る28.8kmの地区についてである。宮崎県教育委員会では文化庁の指示により昭和44年7月21日から7月31日までこの区間の遺跡分布調査を実施したが、道路予定地を中心に約4km幅の地内にある遺跡48ヶ所を確認し、その分布図を日本道路公団に提出した。

道路公団ではこれにより、覚書の第1に該当するものを除いて路線を決定し、なお路線内に埋蔵文化財があるか否かの調査を県教育委員会に求めてきた。県教育委員会では昭和46年県文化財専門委員の石川恒太郎と県社会教育課主幹兼文化財係長寺原俊文を小林市に派遣、両名は同年8月31日9月1日日本道路公団小林工事事務所の所長浅野佳夫、庶務課長池田昌夫、用地課長唐見安男氏および県土木事務所の用地買収係員らと協議した後、道路予定地をともに歩いて調べた結果、えびの市大溝原遺跡、久見迫遺跡、小木原遺跡、馬頭遺跡、小林市のこまくりげ遺跡、手塚遺跡、竹山遺跡、千谷遺跡、高原町の立山遺跡の9ヶ所を覚書の第3に該当する遺跡として発掘調査して記録を保存することとしたのである。

その後土地買収が1部進捗しなかった関係もあって多少遅れたが、県教育委員会では昭和47年7月24日から9月3日まで発掘調査を行なった。本報告書はその記録である。なお前記9ヶ所の遺跡のうちえびの市の大溝原遺跡は買収が終っていなかったため今回は調査不能で後日の調査に残された。また小林市の手塚遺跡は発掘の結果文化財の包蔵が少なかったのと同市の平木場遺跡に、小林市の千谷遺跡は同市の鷹巣原遺跡に変更した。調査員は次の通りであった。調査指導員大正大学教授齋藤忠，調査員県文化財専門委員石川恒太郎，同日高正晴，県総合博物館主任田中茂，同主事茂山護，宮崎高等学校教諭安楽勉，宮崎市教育委員会主事野間重孝，延岡市立南小学校教諭岩永哲夫，調査補助員，宮崎大学学生田上哲，同面高哲郎。

なお遺跡の担当者は次表の通りである。

遺 跡 名		調 査 期 日	調 査 担 当 者	調 査 補 助 員
小 木 原 遺 跡	鳥 越	7月25日	石 川 恒 太 郎	田 上 哲
		8月2日	田 中 茂 野 間 重 孝 岩 永 哲 夫	
	古 墳	8月20日	日 高 正 晴	
		8月27日	茂 山 護 安 楽 勉 野 間 重 孝	
久見迫遺跡		8月3日	石 川 恒 太 郎	田 上 哲 面 高 哲 郎
		8月12日	田 中 茂	
		8月16日	野 間 重 孝	
		8月27日	岩 永 哲 夫	
馬 頭 遺 跡		8月28日	石 川 恒 太 郎	田 上 哲 面 高 哲 郎
		9月4日	安 楽 勉 岩 永 哲 夫	

遺 跡 名	調 査 期 間	調 査 担 当 者	調 査 補 助 員
こまくりげ遺跡	8月 5日 8月 12日 8月 16日 8月 19日	田 中 茂 野 間 重 孝	面 高 哲 郎
平木場遺跡	8月 6日 8月 19日	日 高 正 晴 茂 山 護 安 楽 勉	
竹山遺跡	7月 25日 8月 1日	日 高 正 晴 茂 山 護 安 楽 勉	面 高 哲 郎
鷹巣原遺跡	8月 2日 8月 4日	田 中 茂 野 間 重 孝	面 高 哲 郎
立山遺跡	8月 2日	茂 山 護 安 楽 勉	

## 第 2 えびの市内の遺跡

えびの市は宮崎県の西南隅，鹿児島県と熊本県境に接するところで，市の中央を川内川が東から西に貫流しており，その上流は市内で多くの支流に分れている。九州縦貫自動車道は，一般国道268号線えびの市役所の西方1.3kmの地点から東北方に伸び国鉄吉都線と直角に交叉して大字灰塚で東方にUターンし，そこからは一般国道221号線にほぼ平行して小木原を通過し東進する予定である。この道路が灰塚から川内川の支流長江川を渡り，さらに同じ支流の池島川を渡ったところに小木原の台地がある。これは池島川の東岸にある南北に長い河岸段丘で，この丘上に北から南へ小木原，久見迫，馬頭の遺跡が相接して在る。以下それぞれの順に発掘の結果を記そう。



## 1 小木原遺跡

池島川東岸の台地上の北端にあたる上江鳥越から、その東南の栗林を過ぎて東方のバス停留所に出るところまでをここでは小木原遺跡と呼ぶこととする。今回調査したのは、この台地上の栗林から北の部分と、栗林の南方バスの停留所に曲る道路の西側に接して存在した円墳状の小盛土のケ所とであったが、円墳状の盛土は後に廻しここにはまず鳥越について記すこととする。(第1図) 小木原の鳥越台地はほぼ東西に広がっているが、この台地の西端部はかつて鳥越城があったところといわれている。この西端部から東方約230mの栗林に至る間の畑地に8ヶ所のトレンチを設定して7月25日から8月1日まで調査した。 第1トレンチ

(第2図) は西端の突出部、南側の崖に平行して長さ20m、幅2mのもので、深さは表土下の黄色のローム層までで場所によって深浅はあったが、ほぼ50cm内外であった。この地方は地下式古墳が多いので、それを発見するためであった。しかし発見することができなかつたので、第1トレンチを1m幅ずつ北方に拡張し、9m幅に及んだが土壌墓らしいものは若干あったけれども何らの遺物もなく、確認することができなかつた。そこでその東北方に長さ10m、幅2mの第2トレンチを設定したが駄目であった。ところが土地の人が先年ここで大きく土地が落ち込んだところがあるというので、地主についてその場所を確かめ、そこで第3トレンチを南北の方向に長さ10m、幅2m掘ったところ、落ち込みの地点を掘りあてた。これをその穴に従って拡張して行ったところ1つの遺跡に達した。

また田中、野間両調査員の第3班は、これから農道を距てて東南の栗林に接する畑に、幅2m、長さ20mの第4トレンチ、その延長線上に同様の第5トレンチ、さらにその延長に同様の第6トレンチを設定して弥生式土器が多く包含されているところを発見した。これを南方に12m拡張しさらにその東方に、栗林に沿うて同様のトレンチを南北に設定して多くの土器片を得た。これらの土器片はほとんどみな弥生後期のものであった。しかし住居址の存在を認めることはできなかつた。ここに近代の建築の跡があったので、住居址はその際破壊されたものと考えられる。

さて第3トレンチによって掘り当てた穴は地下式古墳の破壊されたものと思われる。その大きさは東西3m、南北2.25mの円形に近い形で、この地方は黒色の表土が50cm内外あり、その下に30cm内外のローム層があり、その下は深い礫層である。この穴は地表下2.40mの深さで、礫層に深く掘り込まれ、羨道を探したが見いだすことができなかつた。しかも2.40mの底に礫に混って白色の粘土があり、その範囲は長さ1.80mに及んだ。また穴の中はほぼ中央に立石があって、それに

よって2区に分けられ、西方は砂礫層で、東方は粘土層であった。しかも何らの遺物も発見することができなかった。自然崩壊によって穴ができたことは地下式古墳の玄室の天井が崩壊したものと思われるが、土地の人の語るところによれば、その後多くの人がこの穴に入っているらしいので、1部が砂礫層である関係から、次第に崩壊し、遺物はなかったか、有っても持ち去られ、古墳の形体も著じるしく変化したものと考えられるのである。

ところでその周辺を調査したところ、この穴の西方約1.50mのところ、南方1.50mのところ、東方1.25mのところ、と3個の遺構が発見された。またその北方には数個のピットらしい穴があった。われわれはこの穴のあるところを第3トレンチ(第3図)A区、その西方をB区、その南方をC区と名づけたが、B区とC区には竪穴住居に似た遺構、A区の東側に土壇らしいものA区の北側に4個の穴があったわけである。土壇らしいものはここでは各トレンチで見いだされたものの類で、遺物もなく、何のために掘られたものか明らかでない。またピットらしい穴も古いものか新しいものか明らかでないので、他の2つの遺構について記そう。

#### A、第3トレンチB区の遺構

これは第4図に見られるごとく、方向はほとんど正しく東西、南北に位置している。形は隅丸方形に近い形であり、長さは東西1.82m、南北1.85mで、地表下の黄色ローム層内に25cmの深さに掘られている。床面には中央北寄りに東西35cm、南北30cmの窪みがある。また東北隅に4個、窪みの北方に1個の穴がある。この小ピットは直径北から6cm、6cm、5cm、8cm、5cmで深さは北から6cm、13cm、12cm、22cm、10cmであった。また外側に西から北に3個の穴があり、西方の穴は90cm外側に直径8cmと直径3cmのものが接しており、深さは6cmである。西北のものは50cm隔れたところにあり、径8cm深さ12cmである。その東にあるものは55cm隔れてあり、直径10cm深さ11cmである。またこの竪穴には埴の土器1個があった。

この竪穴は縄文や弥生時代の竪穴住居址にその形が酷似している。しかしだいたい1.85m四方で、住居址としては形があまりに小さい。しかし土器があったし、その形も整っているから、人工の遺構であることは確かである。柱穴もあるから、これは小さいながら竪穴式の家であることは明らかである。家ではあっても住居でない小屋、倉庫の類は多い。或いはお祭りをしたのか、作業場か、何れにしても古墳時代の家には違いないと思われる。

### B、 第3トレンチC区の遺構（第5図）

これは南北に長い形のもので、南北の長さ2.75 m、幅は南端で85 cm、南端から1.70 m北のところは最も広く1.27 m、北端は85 cmであるが、底部はかなり小さく、長さ2.52 m、幅南端で70 cm、最広部1 m、北端40 cmである。方向は極めて正確に南北に方位している。底は南より北が凹んでおり、深さは南方は20 cm、北側は35 cmである。床面の中央ほぼ南寄りに扁平な石が1個あった。石はほぼ四角形で長さ30 cm、幅18 cm、厚さ9 cm～12 cmであった。穴の深さは30 cmであった。

最広部の東西の端にピットが1つずつあり東側のものは20 cm×13 cmで深さは30 cmであった。西側のものは26 cm×22 cmで深さ30 cmであった。そして床面には中央から北側に埴器の破片が多く散乱していた。そして中央にあった扁たい石は、これを裏返すとこの石は石皿であった。

この遺構も1種の竪穴住居に近い、長さ底部で2.52 m、幅中央で1 m内外であるから、1人の人が住むには充分である。特に生活用具である石皿の存在を注目せねばならない。この竪穴はB区のものより、より生活的であるから、これは疑うことなく竪穴住居の1種と見てよいであろう。しかしこれもB区のものと同様に形が小さいことが問題となるが、すでに石皿があったことから、これも作業場と見るべきではないかと考える。

これと類似の家屋址は、宮崎市江田原の憶中学校々庭にあった弥生前期の遺跡にあった家の跡に似ていることを認めざるを得ない。

（文責 石川恒太郎）

## 2 小木原古墳

### 1 はじめに

小木原古墳のある上江台地は吉都線加久藤駅の東南 1.7 km, 川内川の分流, 池島川の左岸に位置する細長い丘陵である。標高は 254 m あり, この小木原台地から西方へ坂を下って 500 m の地点に中世期, 伊東・島津両軍の古戦場, 木崎原がある。

この小木原一帯には以前から地下式墳が多数発見され, 地元の木崎原操氏が調査されてきた。ちょうど, 小木原古墳より東側, 約 60 アールの地域はすでに砂利採取のため, 全面的に約 3 m 下の砂礫層まで採土工事がなされ, そのさい, 約 39 基の地下式墳が破壊されたとのことである。また, この附近に 2~3 基の円墳が在存したが, 現在は本墳のみ 1 基原形を留めていた。ところが, この地点が九州縦貫自動車道予定線に入ったため, 事前に発掘調査を行うことになった。

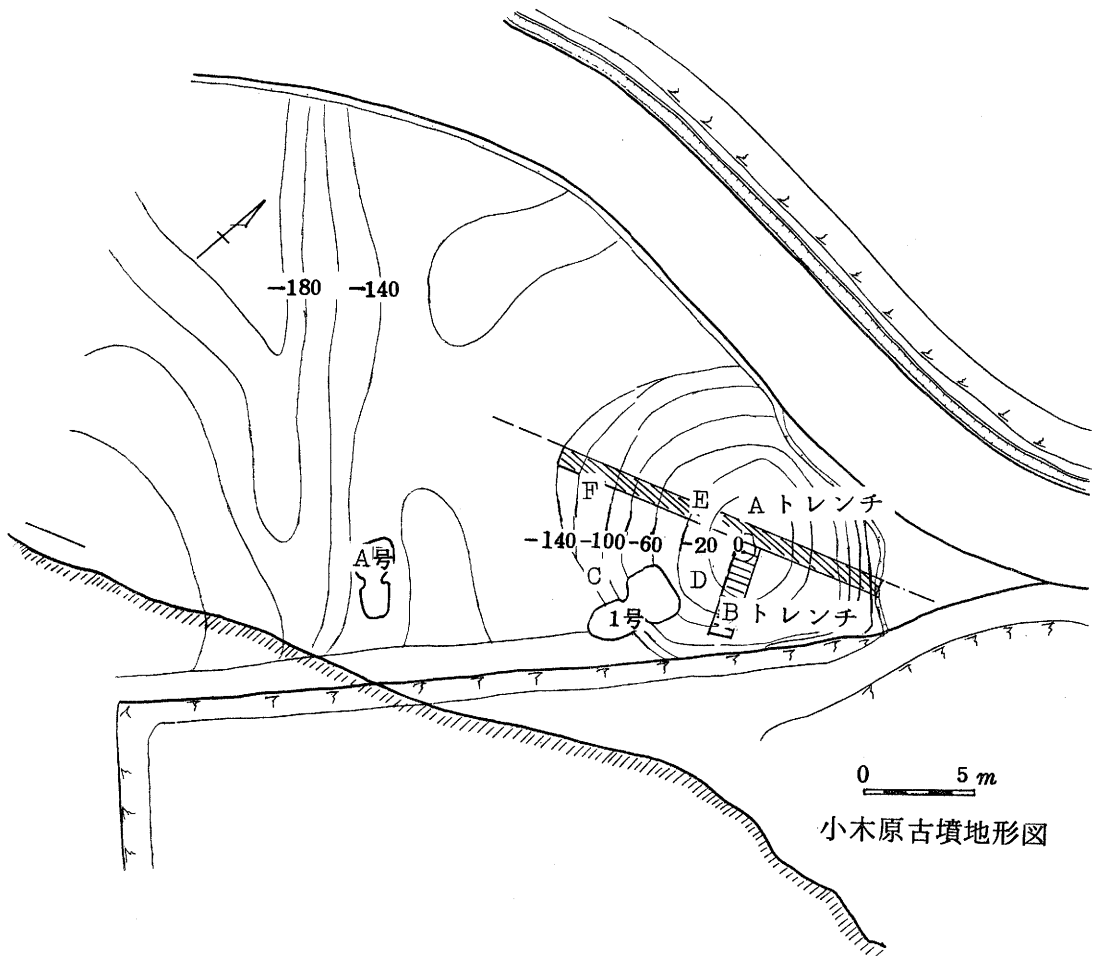
現在, 1 基だけしか残存していない高塚墳を調査するにさいして, しかも, 周囲には数十基の地下式墳が発見されたということから, 本墳を徹底的に調査し, できるならば, 封土を発掘調査しながら除去してゆき, この高塚墳に地下式墳が伴うかどうかを究明することにした。封土は高速道路建設工事により, 何れにしても消滅するのであり, この両者の相互関係を解明するには絶好の機会でもあった。

本墳の調査では前半の数日間, 齊藤 忠博士の御指導をおおぎ, なお, 実測は安楽 勉氏が担当した。茂山 護氏も調査員として参加するはずであったが, 家事の都合で帰宅されたので, 全期間を通じて, 主として, 筆者と安楽氏の 2 人で調査を進めた。なお, 後半, 野間重孝氏の応援を得ることができた。

### 2 古墳の外形

本墳は池島川の方から小木原台地を東に通じる約 5 m 幅の市道にそって位置している高塚墳である。比較的墳頂の低い古墳であるが, 外形は周囲が, かなり, 破壊されている。しかし, 中心部が, ほとんど, 完全に遺存していたことは幸いであった。

墳丘には灌木類の切株などが残っており, また地山には全般的に, おうとつも見られる。墳丘の表面から数点の須恵器片が発見されたほかは, 葺石らしきものも認められなかった。なお, 周隍など特別の施設は, 何ら施していない, ごく一般的な円形墳である。墳丘は南側から西側にかけて原形が保持されているようであるが, 北側は道路の開削などによって, かなりくずれ相当に変化している。



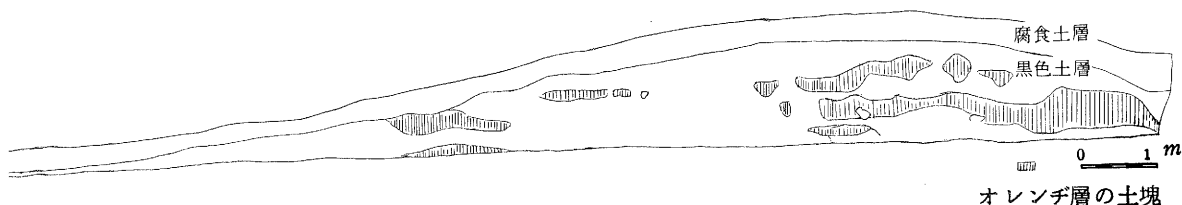
小木原古墳地形図

また、東南部は数年前の砂利採取の開発工事にて、封土の中段から下の傾斜面は殆ど掘削されている。さらに、北東部は以上のべた両側のような破壊状態ではないが、ある程度、古い時代に、封土の削除が行われ、そのため、急勾配になっている。結局、この円形墳の西側だけが、築造当時の原形を保っていることになる。なお、南側墳頂から60 cm～70 cm 下った地点に少し凹んだ箇所があった。

墳丘の径は（最長）16 m，高さ1.2 mとなっているが、腐蝕土がかなり推積しているので30 cm前後は高くなり，1.5 mぐらいになると思われる。

### 3 古墳の内部構造

まず、原形がよく遺存している墳丘西南部の裾から墳頂を通り東北端まで幅1.5 mのAトレンチを入れる。しかし、途中でさらにトレンチを西の方へ3 m延長した。それは墳丘周囲の周溝の有無を確認するためである。それで、このトレンチの長さは18 mとなり，さらにこれを6等分して1区画を3 mとした。発掘調査はAトレ



第2図 小木原古墳西側セクション

ンチの第1区画から始められたが、最初に、表土はぎを行う、灰黒色の腐蝕土は約35cmの層位をなしていたが、この下層はやゝ硬質の黒色土層となっている。この表土中から須恵器が数点発見された。なお、第1区画の表土下から土師器片1点出土す、Aトレンチ3～4区の封土傾斜面では、約35cmの表土下は直ぐ火山灰質黄褐色粘土塊混在の黒土層になっているが、墳頂に向うに従いこの層の上にさらに、黒色土が約35cmから40cm推積されているので墳頂に進むにつれて墳丘は高さを増してゆく。この表土下の黒色土層は、おそらく、墳丘の築造された当時の墳丘表面であると推察される。墳頂部にあたる5区では表土下約60cmのレベルから下に約1.1mの幅をもって、黄褐色粘土塊層が三重に重なって堆積されていた。この火山灰質黄褐色粘土塊層は6区では第2段目のみが細長く延びていた。さらに、1区地表面下約35cmのレベルを古墳築造期の地表面として墳頂部を測定したところ、高さが1.7mあったので、Aトレンチの発掘を一応、そのレベルまで掘り下げて平坦にした。また、Aトレンチ5区の間層土層中から土師器片数点が出土した。なお、2区の表土下より土師器の破片が数点発見され、1区には自然石4点が同一レベルに配列してあった。火山灰質黄褐色粘土は5区の中心部では40cm～50cm大の土塊となっている。この5区の黄褐色粘土層の見られる部分が本墳の主体部にあたるので、副葬されている遺物を検出するため、綿密なる調査をなしたが、何らの遺物、遺構も発見されなかった。しかし、主体部と想定される地点に、広範囲に、火山灰質黄褐色粘土塊を埋置して固めていることは、何か意味を有しているようでもある。えびの市久見迫発見の地下式墳で玄室閉塞用に同一の黄褐色土塊を使用していることを考慮に入れると、この土塊は埋葬にさいして、一種の信仰的意義があるのではないかと考えられる。すなわち、自然石ではなく、土塊を用いて、自然石の有する呪術的意味をもたせたのかもしれない。このことについてはさらに、検討してみる

必要がある。Aトレンチの発掘が終ったのでつぎは、このトレンチに直角に墳頂から南側に幅2 m、長さ4 mのBトレンチを設ける。このトレンチもAトレンチと同一地盤まで掘り下げたか、何も遺物らしきものは発見できなかった。しかし、墳丘傾斜面で地表下約40 cmの地点から須恵器の破片が少し出土し、また、Bトレンチの西壁に接して砂礫層が墳丘面下1 mにして現われた。

ひき続いて、D区の封土除去作業に取りかかる。この区でも墳丘の下方傾斜部一帯から須恵器の破片が出土している。さらにE区、F区と封土の除去を行ったが、D、Eともに墳丘傾斜部、すなわち、墳頂から約5 m下った地点(D、C区と同一レベル)から須恵器の破片が少々出土した。

#### 4 地下式墳の調査

墳丘の内部構造については、Aトレンチ、Bトレンチを入れ、さらに主体部の地盤まで掘り下げて発掘調査を行ったが、火山灰質黄褐色粘土塊以外は、遺物、遺構らしきものは認められなかった。そこで、C区の墳丘上に見られる凹みにシャベルを入れて調べると、内部に広がった陥没穴が認められたので、一応、地下式墳と見なし、調査の主力をこの箇所注ぐことにした。そして作業員の一部をもって、並行してD・E・Fそれぞれの区域の封土除去を行った。

D区の墳丘表土中からは近世期と思われる数点の陶器片と2層の黒色土層には須恵器の破片が散見できた。

まず、陥没穴の上部にある草木の根を除去すると、おそらく、後世、搬入されたと思われる薩摩焼系統の陶器片がかなり出土した。年代は多分、近世のものと推定されるが、陶器片についてはさらに、究明してみたい。最初は、比較的小規模の地下式墳のように感ぜられたが、落下した土塊を上げてゆくうちに、内部が相当に大きいことが判明してきた。そして、陥没した穴は玄室の天井部であり、落下していた黄褐色粘土塊も天井部に相当するものであることが確認された。堆積している土の量が多いため、夕方までで、ようやく墳丘面から2～3 mのレベルまで達した。

玄室全面に見られる火山灰質黄褐色粘土塊は約30 cm前後の大きさのもので、この土塊が相当量、堆積していたため、土あげ作業は難渋を極めた。そのうち、砂礫層の床面の一部が現われ、また、羨道と推定される部分の70 cm上部に、やや下方に傾斜した扁平な板石が認められたので、一応、玄室内部の作業を中止し、竪穴式前室と推測される地点を中心にして、墳丘裾に相当する部分の発掘を進めた。表土下約50 cmの黒色土層中から多量の須恵器破片が一面に破碎された状態で出土し

この中には内側を青海波文、外側は格子の叩き文のある大形甕の破片も混じていた。なお、同一のレベルに10数点の土師器の破片も散布しており、その中には高杯の脚も見出された。これらの土器片は堅穴上部に長径約1.3 mの楕円形状に散らばっていた。この土器片の散布場所が墳丘の下方傾斜面にあたるので、このことが何を意味しているものか関心のあるところであるが、おそらく、呪術的意義を有するものであろう。また、これらの土器片の配列の仕方が墳丘傾斜面にそうのではなく、堅穴上部に平面に埋置された状態にあるので、この地下式墳との関連において、この土器片群を考察した方が妥当なようである。しかし、この堅穴上面に直ぐ隣する西南側にも須恵器の破片がかなり出土し、また、D区の墳丘下部傾斜面でも少々発見されている。なお、E区でも甕の破片と思われる須恵器が1点混入していた、そして、これらの土器片はすべて同一レベルの地点から発見されていることを考慮に入れると、さらに、祭祀的な立場から考究してみる必要がある。

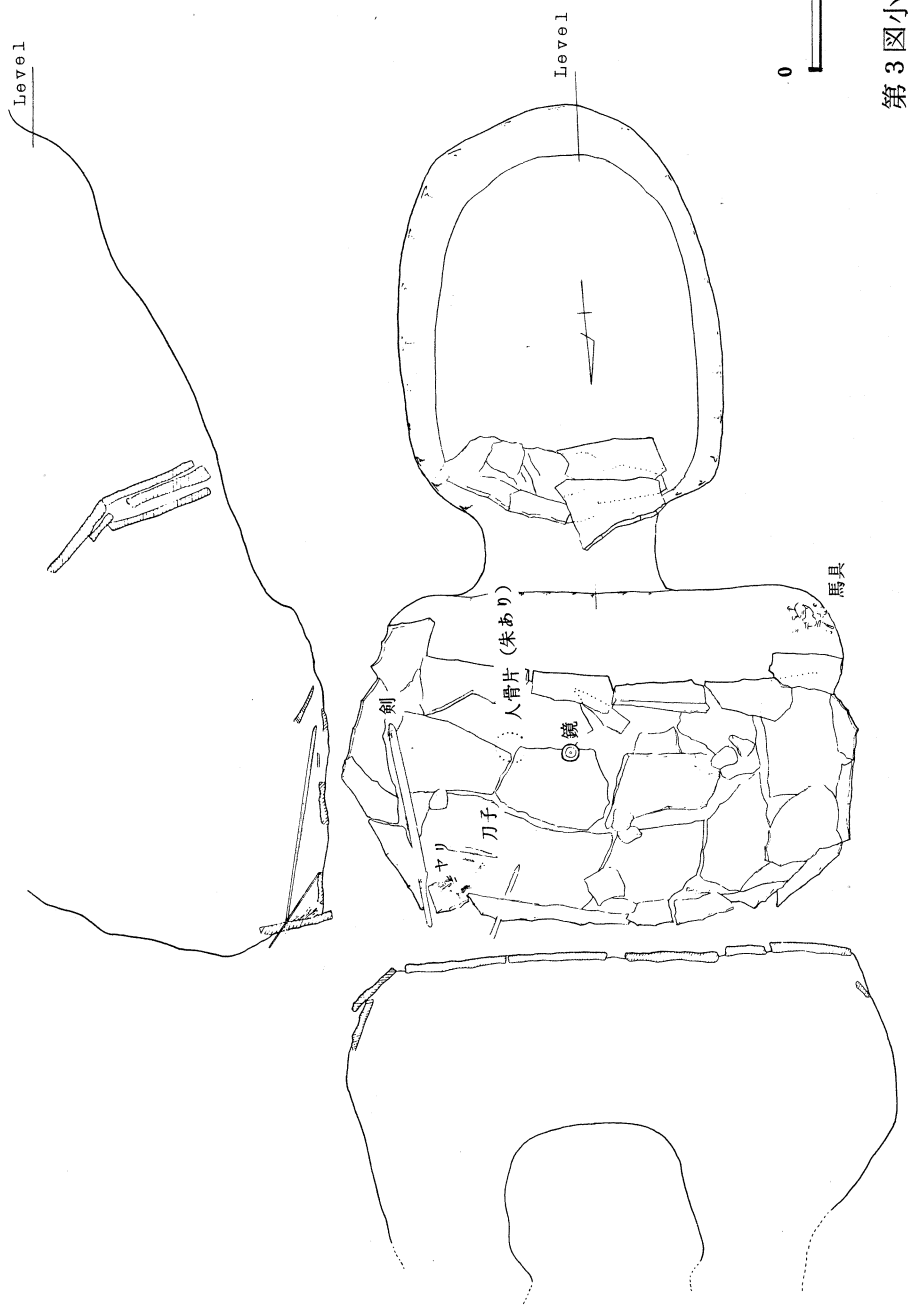
堅穴上部の土器片群よりさらに約10 cm下ったレベルから火山灰質の黄褐色粘土層になり、この層に楕円形に堅穴が造られている。そして、その中は砂礫を混在した黒色土で埋められていた。以前、この周辺にて木崎原氏が調査された地下式墳で堅穴の閉塞用の蓋石の上に、砂礫混在の黒土を土盛した例があったが、これも、方向が横向きになっているだけで同一形式ではないかと考えられる。

堅穴内部の砂礫混在黒色土を完全に掘り上げると馬蹄形状の堅穴式前室が現出した。そして、羨門にあたる部分に扁平な安山岩質の板石9枚で、2段に積み上げ、閉塞してあった。

主軸にそって長さ2.2 m、幅は中央部で1.7 mとなっている。深さは黄褐色土層の上面から約1 m、墳丘の表面からは1.6 mある。この堅穴式前室は周辺から15 cm乃至25 cmの幅で多少の傾斜をして落ち込んでいるが、さらに南側端から北に約70 cm西側端から東に約40 cmの地点からそれぞれ急カーブになって深い掘り込みとなっている。この堅穴式前室から玄室に通ずる羨道の入口、すなわち、羨門は板石で塞いであるが、その羨道と推定される長さも僅か45 cmの短いものである。羨道は玄室の床面へ下降しているので、閉塞用の板石も、やゝ、前に傾斜をもって立てゝあった。堅穴式前室の床面に連なる羨道の底部は玄室の床面から90 m高いレベルにあったが、羨道の上部は、すでに崩壊されていたので、その構造は不明である。さらに、これらの板石を除去すると、すぐ玄室に連らなっていた。

陥没した穴は、玄室の天井から羨道の上部にかけての落下した規模が大きいもの





第3図小木原地下式墳

となり、2日間を要して土あげ作業をした。

玄室の主軸方向は北12度西であり、羨道は南の方に開口し、主軸に対して、玄室は直角に、矩形状になっており、その中央から少し東寄りに羨道はつけられていた。

玄室の形状は、長方形であるが、四隅が丸みをおびている。東西の幅は2.5 m、奥行1.7 m、羨道部の幅は、玄室との接続部で1.1 mとなっている。高さは天井が崩壊しているので明らかでないが、床面から墳丘の表面までは約2.4 mあった、天井部の形体は全く把握できないが、床面から約1.5 mの高さまで火山灰質の黄褐色粘土層があるので、その範囲内に天井が構築されたとすれば、天井の高さも、1.5 m以内ということになる。

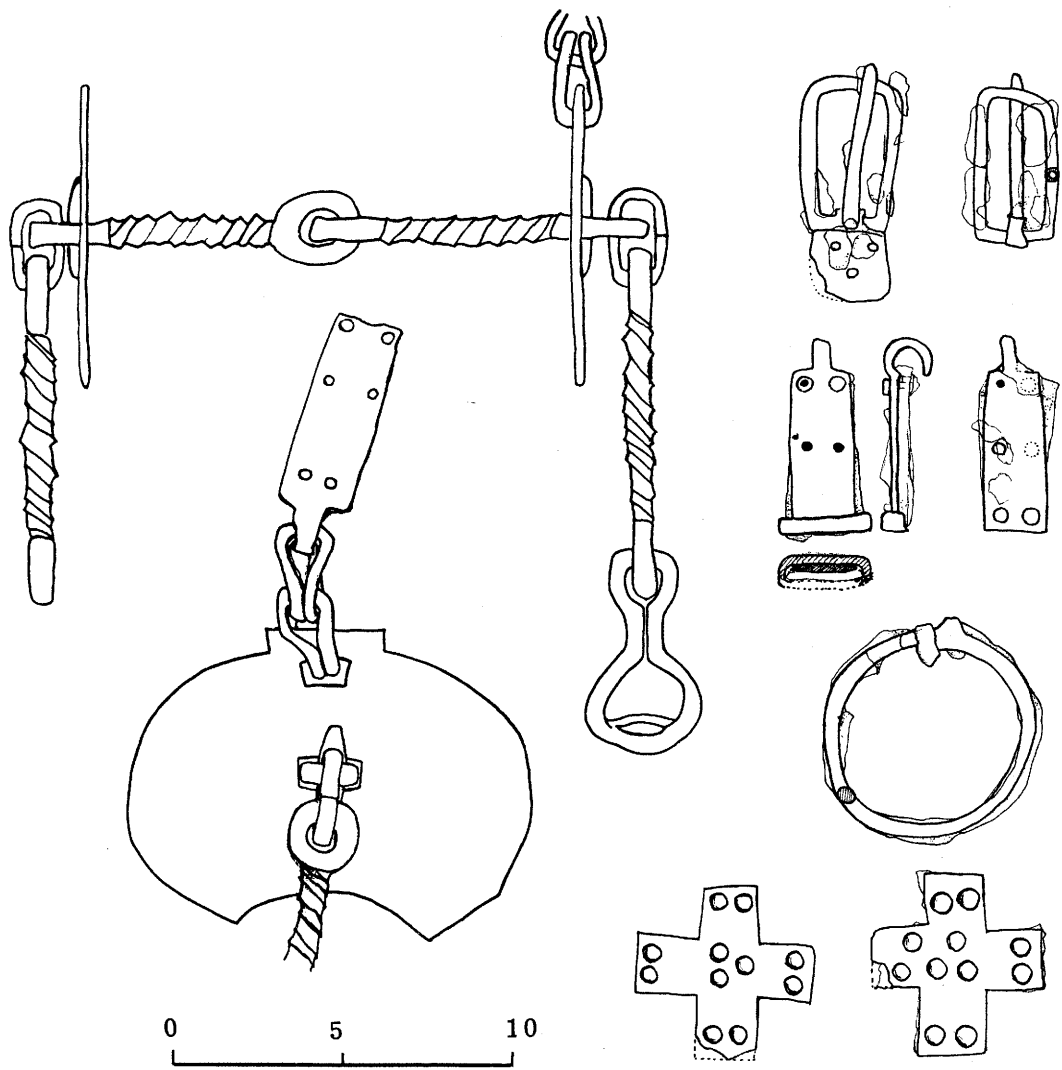
玄室の東西おびに北側壁にそって、安山岩質の扁平な12枚の板石(30 cm～60 cm)が一行に立てかけられ、また、その南側から約50 cmの東西の線に5枚の板石が北側に傾斜をもって一行に立て、あった。さらに、これらの立石の内部床面には15枚の比較的大きい扁平石が一面に敷きつめられていた。また、この敷石の上に、あたかも、主体部を囲むように5ヶの自然石が配置されていた。被葬者は、おそらく、この自然石と一行状の立石との間の細長い区画内に安置されたものであり、頭部と思われる人骨片が東側壁から約70 cmの地点の丸の点線内に、また、下顎骨片らしきものも、これらとともに伴出された。なお、胸部と堆定される地点から小形の仿製鏡が一面、背面を上にして発見された。ところで、東側壁にそってかなり長い直刀が一振、副葬されていたが、さらにこの直刀の西、45 cmの地点に剣一振、北側壁に立てかけてあった。それから、この剣と直刀との間に、刀子が一振置かれていたが、なお、長い直刀の柄のそばから多数の鉄鏃が検出された。さらに玄室西南部の隅に轡関係の馬具が一揃い埋置されていた。

## 5 出土遺物

### (1) 馬具 (第4図)

#### (A) 轡 (銜 1組、引手、鏡板各 1対)

全体に錆化しているが、ほぼ完全な形で遺存していた。馬の口にかませる喰<sup>は</sup>は2本の鉄製丸棒(9.9 cm)を中央で連結した二連式のものであるが、この2本の丸棒は両端が環状になっており、一端は鏡板の中ほどの孔部にそう入され、他の端は喰の中央部で環状になって互に交っている。そして、この両端の環状部を除く部分(4.8 cm)には鉄線様のもので整然と巻いてある。手綱をつける引手も喰と同様に両端が環状になり、その中間の鉄製丸棒には螺旋状に鉄線が巻きつけ



第4図 小木原地下式墳出土馬具

である。長さは喰のものより少し長くて10.2 cmある。さらに、上端の環には、長さ6 cmの引手壺がつけられている。楕円型の鏡板も完全な形をしており、中央部で喰の環状になった端がそう入され、さらにそれに、一ケの遊環が交わり、そして、引手に附着している。また、鏡板上部にある立聞の方孔の部分に二重の鎖状の鉄環が結着され、それに鉤金具が附着している。鏡板は横幅が12 cm、縦幅が7.7 cm、それに厚みは3 $\frac{m}{m}$ と測定される。この轡では、鏡板の外側で鉄製の遊環一ケを介して、喰と引手が連結している。

#### (B) 辻金具、鉸具ならびに革金具

面繫の交叉部に付着する辻金具が2ケ発見され、かなり錆化しているけれども形状はよく保たれていた。中央部に革留用の鉸3ケが足とともに残っているが、さらに、四方にそれぞれ2ケずつ付けてあるのが明瞭に見られる。辻金具の幅は5.6 cm、厚さ2 mmとなっている。つぎに、革帯の留金具である鉸具も、ほぼ形体を整えて副葬されていた。2個出土したが、それぞれ大きさが異っている。大きい方は長さ4.7 cm、幅中央部で2.8 cmであるが、他の1ケは長さ4.6 cm、幅2.5 cmである。

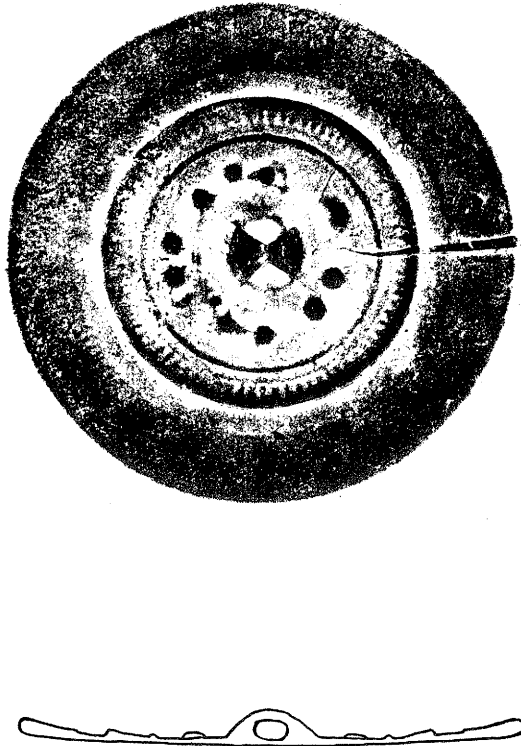
さらに、革金具6ケが発見された。すべて長方形をしているが、そのうち、4ケは鉤金具、2ケは革留金具となっている。4ケの鉤金具のうち、2ケは鏡板の立聞の鎖に附着している。この鉤金具の一方は、だいたい、長方形のままに遺存し、鉸の跡も6ケ認められる、そして、一端は鎖の中に深く折り曲げて、そう入してある。その長さ5.7 cm、折り曲げた部分3.8 cmである。他方も同様に立聞の鎖にそう入されているが、半分のところで折れているので形体は十分につかめない。しかし、鏡板全体のバランスから考えると、ほぼ前者に類似した鉤金具のようである。また、残り2ケの鉤金具はともに同様な長方形をなし、一端が鉤になっている。鉸はともに6ケ付いている。なお、両金具ともに革帯を通すための輪金が端に付着してある。その長さは4.7 cm、幅(中央部)2 cm、それに厚さは2 mmである。それから、革留金具も2ケもほとんど、同一のもので長方形をなし鉸とともに、4ケずつ付いている。長さ3.7 cm、幅2.1 cmまた、厚さは2 mmとなっている。最後に、鉄製の環が一ケ出土しているが、使用目的が明かでないので、どのような名称をつけてよいか分らない。

しかし、馬の頭部に装着された馬具の金具ではないかとも考えられる。その径は6.5 cmである。

(2) 獣形鏡 (第5図)

本鏡は玄室のほぼ中央部、北側壁から80cm、東側壁から1.17mの地点の敷石の上に、背面を上にして発見された。この鏡から東、約30cmのところの下顎骨らしき人骨片が見られたので、ちょうど胸部あたりに、副葬されたものと考えられる。

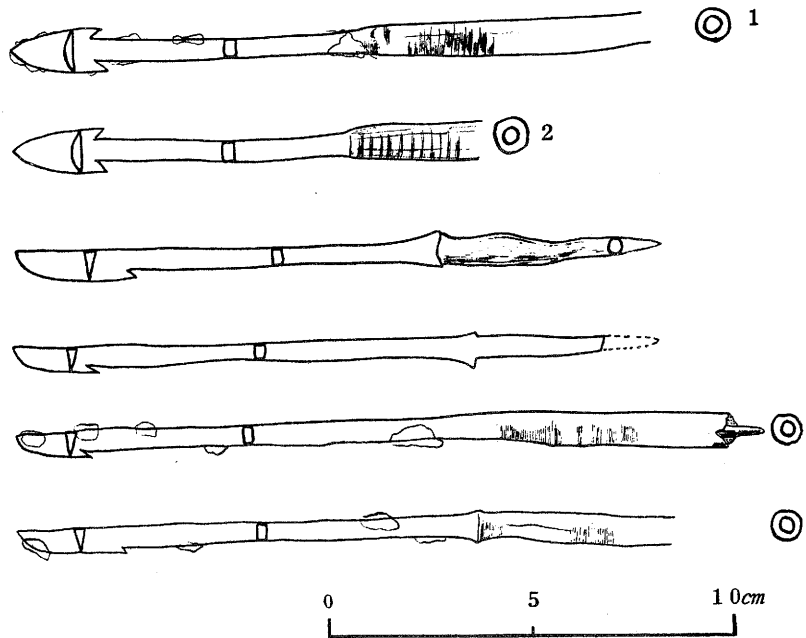
鏡は平縁の獣形鏡で、両面とも大部分、緑錆化している。しかし、背面の内区は文様が割合よく認められる。形式はいわゆる、小形仿製鏡であり、獣形鏡の獣体の模倣が形式化され、一見水鳥のような形のものや、何と表現してよいか分らないような文様もある。全体に文様の配列が不整然としており、獣形と想定されるもの3ヶ、乳は5ヶつけられている。鏡の径は9cm、厚み3mmである。内区に接して鋸歯文帯がめぐらされているが、さらにその周囲に細目の鋸歯文帯が施されている、しかし、二重の鋸歯文帯も、たぶんに形式化されており、外区にあたる縁はやゝ反りのある素文のものとなっている。鈕をはじめ、背面全体に手ずれらしき痕跡がかすかに認められる。鏡は両面ともに、一部を除き全般に淡緑色を呈している。



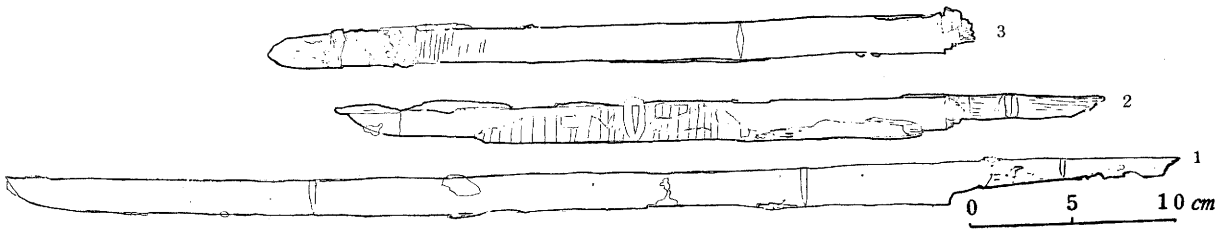
第5図 小木原古墳地下式玄室出土獣形鏡

(3) 鉄 鏃 (第 6 図)

玄室内床面から検出された鉄鏃は 27 本あったが、いづれも錆朽して完全なものは殆んどなかった。それでも、篋被の部分を残しているものが多数あり、鉄鏃の形態を比較的良く保っているものがかなり見受けられた。本墳から検出された鉄鏃はすべて同一形式のものばかりである。すなわち、腸袂のある細根片刃箭式のもので、身の断面は三角形を呈している。篋被は大部分保たれており、身と篋被の長さ 10 cm ~ 14 cm のものが 24 本数えられ、そのなかに莖が竹の篋にさし込まれて一部遺っているのが 3 本ある。それには、桜の皮らしきもので巻かれてあるのも認められた。また、このうちには、図示されているような棘のついた篋被も数本検出された。なお、身の部分と篋被をわずか残し、折れて検出されたものが 7 本認められる。



第 6 図 小木原古墳地下式玄室出土 鉄鏃



第7図 小木原古墳地下式玄室出土 直刀・剣

(4) 刀 剣 (第7図)

地下式墳の玄室東北部の隅に直刀，刀子各1振と剣1振の計3振の刀剣が副葬されていた。板石上に置かれていたため，保存状態もかなり良好である。

(A) 直刀と刀子

かなり，長大な直刀であり，ほとんど原形を保っている。身も相当に長く，全長1.13m，莖も完全に遺っており，目釘孔も2ヶ認められる。刃関も明瞭に認められるが，鑄はない。背関の厚さ9mm，身の中ほどの幅3.5cm，鋒もほとんど完全な姿をしている。莖の長さ20.2cm，身の長さ90.15cm，重量もかなりある。

刀子は板石の上に，鋒を西向きにして置かれていた。ほぼ全形を遺しており，全長31cm関の部分で，幅3cmとなっている。

(B) 剣

玄室の北側壁に立てかけてあったため，剣身が少し曲っている。また，関の部分で莖は欠失しているので，全長は不明である。身だけの長さ60.6cm，その断面は菱形をしており，両刃もほとんど，直線の原形を維持している。鋒は丸みを有しており，また剣身に鞘の木質片が数ヶ所，附着しているのが認められる。剣身の幅は中ほどで3.5cm，関の部分で幅3.9cmである。

(5) 土 器

出土した土器は，その配置状態から見て，埋葬前に細かく破碎して埋納されたようである。そして，封丘主体部と想定される箇所とか地下式墳玄室内からは一片の土器片も発見されず，墳丘の封土内，あるいは地下式墳の堅穴上部というような場所から多量の土器片が検出された。出土した土器は大部分が須恵器であり，一部分，同一レベルから土師器も共伴して見出された。須恵器は土師器に比較して，多様な

形態のものがあり、色調もほとんど黒灰色を呈している。焼成も堅緻であるが、器形としては蓋坏，大形の広口壺それに器台などが副葬されていた。

最初，墳丘に入れたAトレンチからは土器片はほとんど，出土しなかったが墳丘部の封土内黒色土層から土師器の小破片が約20点だけ，検出された。また，Bトレンチの封土内からも，須恵器片数点，土師器片がわずかに認められたのみである。なお，地下式墳の堅穴上部，表土内，とD区墳丘傾斜面の封土表面より薩摩焼系統などの近世のものらしい陶器片がかなり発見された。土器の出土状態をのべるにあたり，墳丘をC・D・E・Fの4区画に分けて考察する。

#### (A) 須恵器 (第8図)

##### ① 地下式墳堅穴上部出土

##### 広口壺 (図 C15)

封土表面下40cm～50cmの黒色土層中に破碎された状態で，広口壺の破片が多数，約1.3mの長さで楕円形状に埋納されていた。図15は広口壺の口縁部であるが口径3.45cmあり，3本の稜線が2段になっているが，その間に，櫛描波状文が施されている。これの胴部は，すべて碎かれているので不明であるが，約7.5cm前後と推定される。この大型須恵器片の外表面は格子目の叩き文になっているが，内表面は鮮やかな青海波文である。

##### 埴 (図 C16)

表土下3.5cmの地点から出土したもの，頸が短く1cm，の立ち上りしかない。口径は7.5cm，胴部は膨らんでおり，高さ9cm，胴部の長径12.5cmとなっているが，本調査の出土品の中では数少ない完形品である。

##### 器台 (図 C14)

出土した須恵器片を復元して，ある程度形式を整えたものである。3本の稜線で4段に区分されており，上二段には長方形の透孔，下二段には三角形透孔が施されている。各段の間には，深い櫛描波状文が認められる。このような器台が発見されたことは最近の宮崎県の調査では珍しいことである。高さ2.8cm，底部の径2.8cmとなっている。

##### 蓋坏 (図 C1.2.3.4.)

坏類はことさら，細かく破碎されているので，ほとんど，復元もでき兼ねるが，わずかに内側に反れた蓋受を有する坏の身の破片がかなり見受けられ，意外に古式のようなものである。そして，底部の破片も認められるが，平坦である。また，堅穴式前室の上部の西側に隣接して，同一レベル上に，須恵器片の一群が発見された。





だいたい、蓋坏類がほとんどであるが、蓋受の立ち上りが、やゝ内反りなって幅広くつくられている。

罎 (図 C 12. 13. 17)

3ヶともに破片だけである。図12は罎の口縁部であり、径は上端部で13cmある。細目の櫛描波状文が施されている。また、図17は胴部の張った罎の破片であり、図13は罎の口縁部であり、図17の上部口縁部と見なしても、さしたる差異はないと思われる。何れも、罎としては古式の方である。図13の口縁部の径は13.5cm。

② D区出土

墳丘の東側下部傾斜面の地表面下約30cmの地点から広口壺の口縁部(図D)(径16cm)破片が1点出土したが3本の稜線が2段に通っておりその間を細目の櫛描波状文が施されている。その外に大形の甕か埴かの破片が約20点認められたが、文様は外面が格子叩き文、内面が青海波文様となっている。

③ E区出土

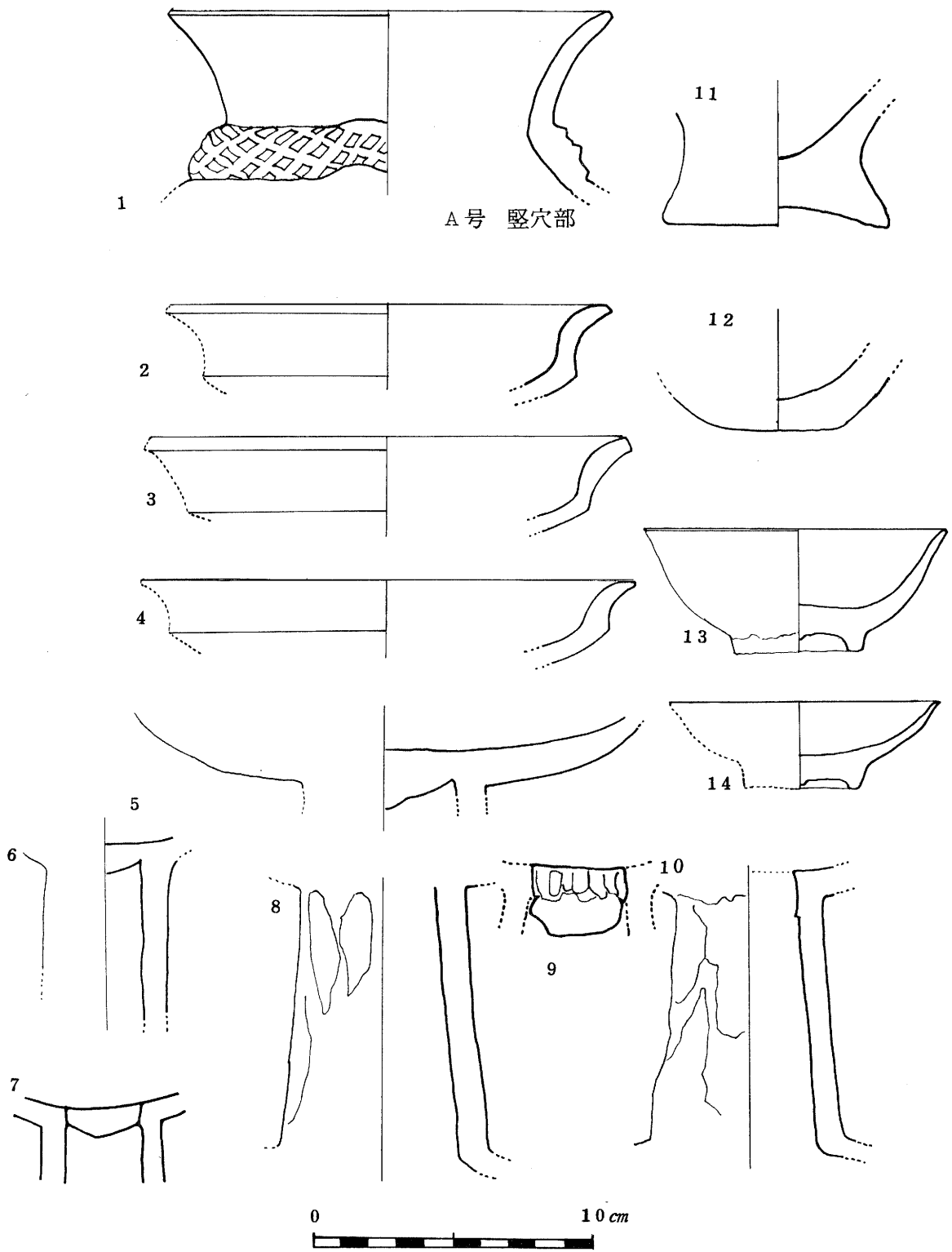
図11のように蓋受の立ちあがりの低いものがこのE区のみに出現している。ほかの地点出土の蓋杯は高い蓋受を有しており、須恵器編年として、この古墳の築造される時期が、次の形式に移行する過渡期のものかもしれない。また、図Eに見られる埴形土器の口縁部も出土しているが、このような形態のものも、ほかには見当たらないようである。E区ではこのほかに、坏および、大形甕らしきものの胴部の破片も確認された。須恵器の発見された地点はDE同様、墳丘下部傾斜面の封土下約50cmの黒色土層中である。図11の坏は径6.1cm、深さ4cm。

④ F区出土 (図 7.9)

C区の須恵器片が出土した同一レベルの墳丘傾斜面から図7.9のような蓋坏の身と蓋が検出された。この2ヶがセットであったかどうかは確認できない。このほか、封土内の黒色土層から大甕の胴部と見なされる破片、坏の底部などを含む破碎された土器片などが見受けられた。図9の坏は径11.5cm、深さ5.5cmであり、図7の坏の蓋は径11.5cm、深さ4.2cmとなっている。

(B) 土師器 (第9図)

本墳の調査において、出土した土師器は須恵器に比して、極めて少なかった。そして、埋納された土師器は細かく破碎されており、しかも、器形が高坏を主としていたことも、信仰的な立場から見て、送葬儀礼的意義を有しているようでもある。



第9図 小木原古墳出土・土師器

発見された地点はC区竪穴式前室上部，上部，およびその直ぐ西側さらに，F区の墳丘下方傾斜面などであり，それらの箇所からそれぞれ高杯の脚の部分と碎かれた土師器片が検出された。

このほか，D区封土内および，Aトレンチ5区内などからも，少量の土師器片を確認した。それから，高杯の脚部はすべて，脹らみはなく，垂直になっており，編年的にも，古式に属するようである。なお，わずかではあるが，比較的小さな平底の土師器片も発見された。おそらく，甕形土器の底部ではないかと考えられる。3ヶ出土している高杯は，すべて脚部のみ発見されており，製作される際に，坏部と別に作られたことが明かである。また，坏部の口縁部と底部との接続部分に稜線が1本走っている。脚部は裾が多少広がっており，なお，坏部が脚にのるつけ根には，はめ込式の丸い「へそ」が認められる。

図(8)，C区出土の高杯の脚は底部で径5.4cm，高さ9.5cm，坏(3)は口唇部の径16.6cmとなっている。

## 6 ま と め

以上，小木原古墳の封土を除去しての完全調査とその墳丘下に出現した地下式墳の発掘調査についてのべてきたのであるが，この調査で問題視されることは，この古墳の墳丘と，その下から発見された地下式墳とは如何なる関係にあるかということである。墳丘の調査については，その主体部と想定される内部からは何らの遺構，遺物は発見されず，ただ，黄褐色粘土塊が積み重ねるようにして主体部に埋納されているに過ぎなかった。それにひきかえ，地下式墳からは比較的多彩な遺物が出土しました，内部構造も相当な規模のものであった。そして，地下式墳の主軸の延長線が墳丘の中心部を向いていることなど，諸般のことがらを考慮に入れる時，必然的に小木原古墳の主体部は，この地下式墳ではないだろうかと推測される。しかし，C・D・E・F各区の墳丘傾斜面の封土内から須恵器，土師器が多少出土したことは，被葬者が埋葬される過程において，墳丘も，ある信仰的な意義を有していたものと見なされる。しかも，地下式墳上部から出土した須恵器，土師器と墳丘内部から発見された土器とは，ほとんど，同一形式のものであることからしても，これが，呪術的共通の場であったことが窺われる。この調査から想起されるのは六野原の地下式十号墳の調査(1)で本墳と同様，円形墳下に地下式墳が現われ，発掘調査の結果，墳丘内にはほとんど遺物，遺構は認められず，その下部に存在した地下式墳からは大型の玄室とそのなかに豊富な遺物が発見された。ただし，その報告書によると，発掘の途上において多数の須恵器，弥生式土器片が封土中から出土したとあり，こ

れを附近の畑中より投げ上げたものと断定していることには異議のあるところである。おそらく、これらの土器片は、本墳の封土中の土器片と同様、意識的に埋納されたものであろう。しかし、弥生式土器片とあるのは、おそらく土師器片の誤りであろう。また、筆者が西都原にて発掘調査した地下式<sup>(2)</sup>第四号墳の場合も、その上部に高塚墳としての第百十一号墳が築造されており、上の墳丘は調査していないので、その相互関係については明かでないが、墳丘の裾に竪穴を存し、玄室は墳丘下に堀削されていた。

高塚墳がその下に地下式墳を相伴する古墳として、正式の発掘調査をなしたのは本墳を加えて、従来3基であるが、この外にも時折、高塚墳の裾に地下式墳が陥没することがある。しかしながら、県内に三・四百基は存在すると推定される地下式墳の場合、相伴する高塚墳というのは特殊な例に過ぎないようである。

つぎに、出土遺物についてであるが、轡類を中心にした馬具は比較的古式の関係品が出土しており、また仿製鏡としての獣形鏡が発見されたことも、地下式墳としては、編年的にある程度、溯るようである。さらに、須恵器においては、立ち上りの深い蓋受を有する蓋坏また、透孔のある器台、それに大形の広口壺なども出土して、須恵器編年としては、第Ⅱ類に比定されそうである。なお、土師器においては高坏の脚部の形式、またそのつけ根にはめ込む「へそ」の存在、あるいは、高坏の坏部に見られる稜線などから、土師器の様式としては和泉式後半期ごろと推定される。最後に、地下式墳の様式について考察し、まず玄室が主軸に対して、直角になっており、羨道なども約40cmという短いものである。玄室内部からは土器は全く出土しなかったが、竪穴上部、墳丘の盛土内に土器片を埋納していることは全く、須恵器などを副葬しない古式古墳から、玄室内部に多数の土器を副葬する様式に移行する過渡期の年代のものではないかと考える。それらのことを考慮に入れると、この地下式墳の編年を第Ⅱ様式A類<sup>(3)</sup>に比定したい。

これまで、考察してきたことから、小木原古墳の築造年代は、5世紀末から6世紀初頃にかけての時期に推定される。

なお、古墳の実測図は安楽勉、出土遺物の測図は茂山護がそれぞれ担当した。

(文責 日高正晴)

(註)

- (1) 六野原古墳(宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告第13輯) 宮崎県
- (2) 「日向地方の地下式墳」日高正晴『考古学雑誌』43巻4号
- (3) 「宮崎県桃木畑地下式A号墳」日高正晴『古代学研究』64号

### 3 地下式 A 号 墳

#### 1 はじめに

小木原古墳から南西約 9 m の地点で、地面にわずかではあるが、凹み箇所が発見されたので発掘を試みた。この地下式 A 号墳は宮崎県では中部以南で、一般に、認められるもので、いわゆる、地表面には何らの封土を有せず、すべて、地下に内部構造の認められる形式である。ところで、本墳は小木原古墳で発見された地下式墳と、ほとんど形態を一にしている。

#### 2 内部構造

まず、陥没している崩土の掘り上げ作業を始めたが、発掘が進捗するに従い、意外に、土量の多いことがわかり、土塊上げは丸一日を要した。そして、大量の崩土が落ち込んでいた大穴は玄室内部ということが判明し、しかも、陥没している箇所は天井部に相当することも確認できた。その結果、玄室の規模、形状も小木原古墳の地下式墳と類似していることも明かになった。玄室は主軸に対し、直角に横に長く、四隅は円形状に丸く形づくられている。しかし、頭初はもう少し、矩形状を呈していたようである。方位は北 50 度東となっているが、この玄室は火山灰質の黄褐色土層とその下の砂礫層とに掘削されている。玄室には板石などを敷きつめた形跡は全くなく、また、特別な遺構も見あたらなかった。調査の結果、内部床面の北西部、壁面に近く、柄頭を北に向けて、一振の直刀が発見された。さらに、その莖に直ぐ接近して鉄鏃が 3 本検出された。また、北側壁にそって約 1 m の長さにわたり、人骨片が認められたが、その東端には下顎骨片らしきものも検出された。なお、床面の中央部にも人骨片が埋葬されていた。

玄室は主軸線で、奥行 1.8 m、幅は中央部で 2.45 m、天井部は完全に崩壊しているので、高さは不明であるが、床面から地表までは 2.38 m ある。さらに、床面から少し上って南側壁中ほどに羨道部らしきものが開口し、しかも閉塞用の板石も姿を現わしたので、竪穴式前室と想定される箇所を主軸線上に選び発掘を進めた。

まず、表土を掘り上げると、下に約 50 cm 幅の黒色土層があるが、その下層部、竪穴上層部に破碎された土師器片が埋納されていた。

これを復元してみると、図(1)のように甕形上器の口頸部に、張り付けをなし、その上に格子の刻み込みを施している。小木原古墳の地下式墳竪穴上部からは多数の須恵器片が発見されたが、ここからは一片の須恵器も検出されなかった。黒色土層の下は火山灰質の黄褐色土層となっており、この層に、やや長方形の竪穴式前室

が掘り込まれ、そして、竪穴内部には砂礫混在の黒色土が埋め込まれていた。この竪穴式前室は羨道に向って、かなりの傾斜をなし、玄室に連続する地点は、安山岩系の板石にて閉塞されていた。しかし、調査結果は、羨道の天井部がすべて崩壊したことによって、閉塞用板石も、多少崩れて、散乱していた。竪穴式前室の奥行 1.95 m、中央部の幅 1.65 m、深さは中ほどで 80 cm となっている。

羨道は玄室床面から 60 cm 土った南側壁面に開口しており、羨門には板石が 10 枚前後、立てかけて閉塞してあるが、ほかに、自然石 10 数ヶ置かれてあった。羨道は玄室に向って約 40 cm の長さで末広がりになっているが、玄室と羨道との区分が明確でない。羨道の幅は羨門で 1.05 m、中央部で 80 cm、高さは天井部崩壊のため不明となっている。

### 3 出土遺物

地下式 A 号墳から出土した遺物としては、玄室床面から直刀 1 振、鉄鏃 3 本それに、竪穴式前室上部から土師器の破片が数点発見されただけである。

#### (1) 直刀 (第 7 図 2)

砂礫層の上に置かれていたため、比較的保存度がよく、刀身も鋒の部分から約 6 cm の箇所折れていたが、復元の結果、完全な刀身となった。拵は鞘の一部分と柄がかなり残っている。刀身の全長は 73.6 cm、身幅は関の部分で 3.4 cm、重ねは 7 mm、それに莖は 14.6 cm となっている。柄には鹿角製刀装具が施してあり、鐔と縁に相当する部分が 2.5 cm の長さで、関に密着しており、また、莖にも鹿角製の柄が施してある。また、莖の先の部分に目釘が 1 本現われている。鐔と見なされ、箇所は幅 1.3 m で一段がついている。

鞘の部分は中ほどでかなり遺存しているが、上部を桜の皮で巻き、さらに、その上を繊維質の細糸で等間隔に整然と巻きしめてある。桜皮の一部に光沢まで遺しているのはおそらく、漆液をかけて保存度を良くしたものであろう。

#### (2) 鉄鏃 (第 6 図 1.2)

尖根長三角形の鉄鏃が 3 本、直刀の柄のそばから発見された。これらには、すべて、逆刺が付いており、断面は片丸造となっている。

このうち、一本は長さ 11.5 cm で篋被に、桜の皮による、かねまき、まで認められるが、ほかの二本(約 6 cm)は篋被の半分を残して折れている。

#### (3) 土器 (第 9 図左上)



第10図 小木原古墳A号墳



竪穴式前室上部の黒色土下層部から、土師器片が破碎された状態で埋納されていた。

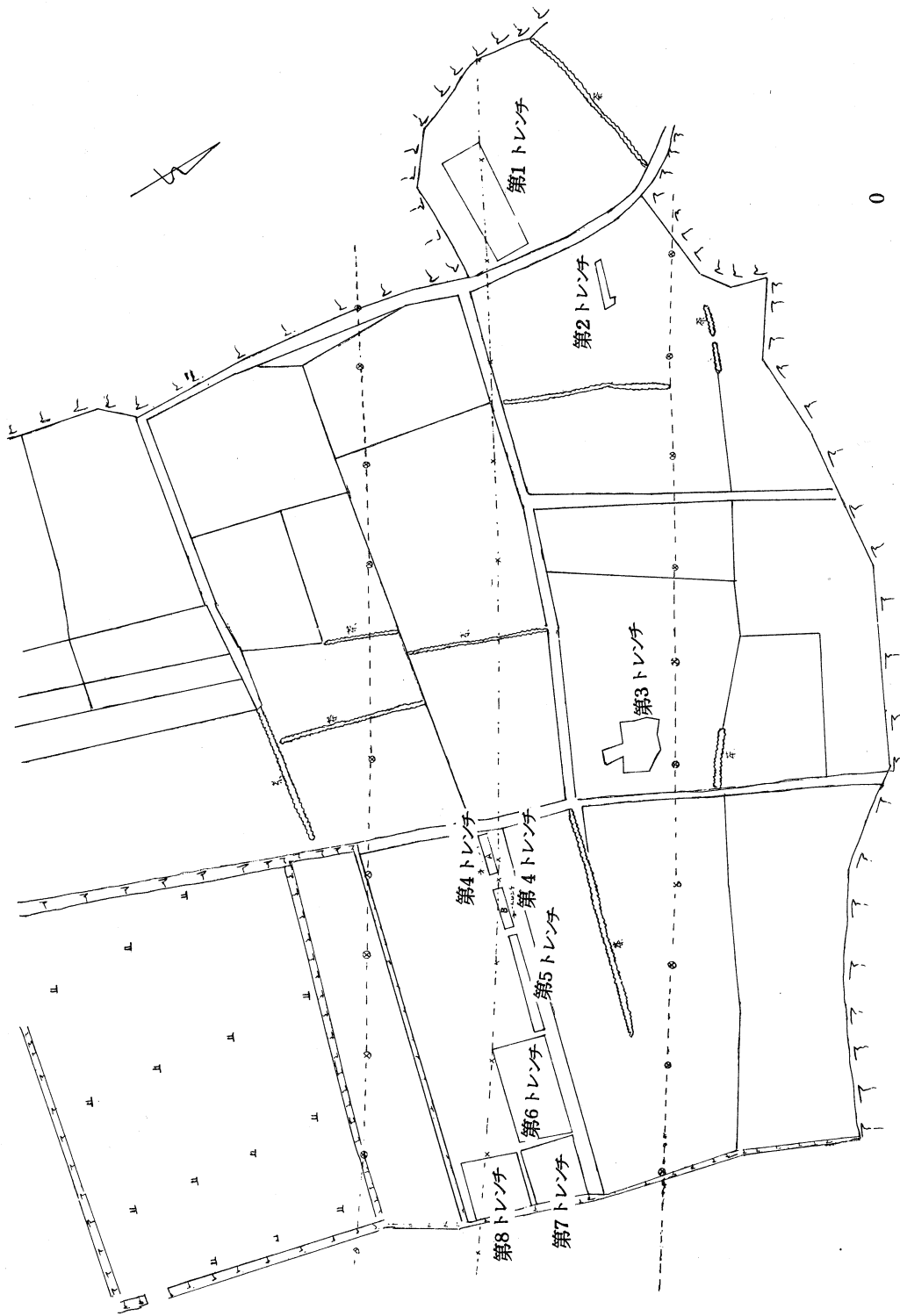
この土器片は外反りの「く」の字形口縁を有する甕形土器であるが、興味あることはその頸部に、格子目の刻みを有する張り付け帯（約2 cm幅）をめぐらしていることである。この形式の土師器は古式に属するものであるが、張り付け文を有していることは、この時期になっても、南九州特有の弥生式終末期の手法が伝わっていたのであろう。ところで今回の発掘調査においては、この弥生式的様相を有する古式の土師器が各遺跡において散見された。何れにしても、年代的に溯る土師器片のみ検出されたことは注目すべきことである。

#### 4 ま と め

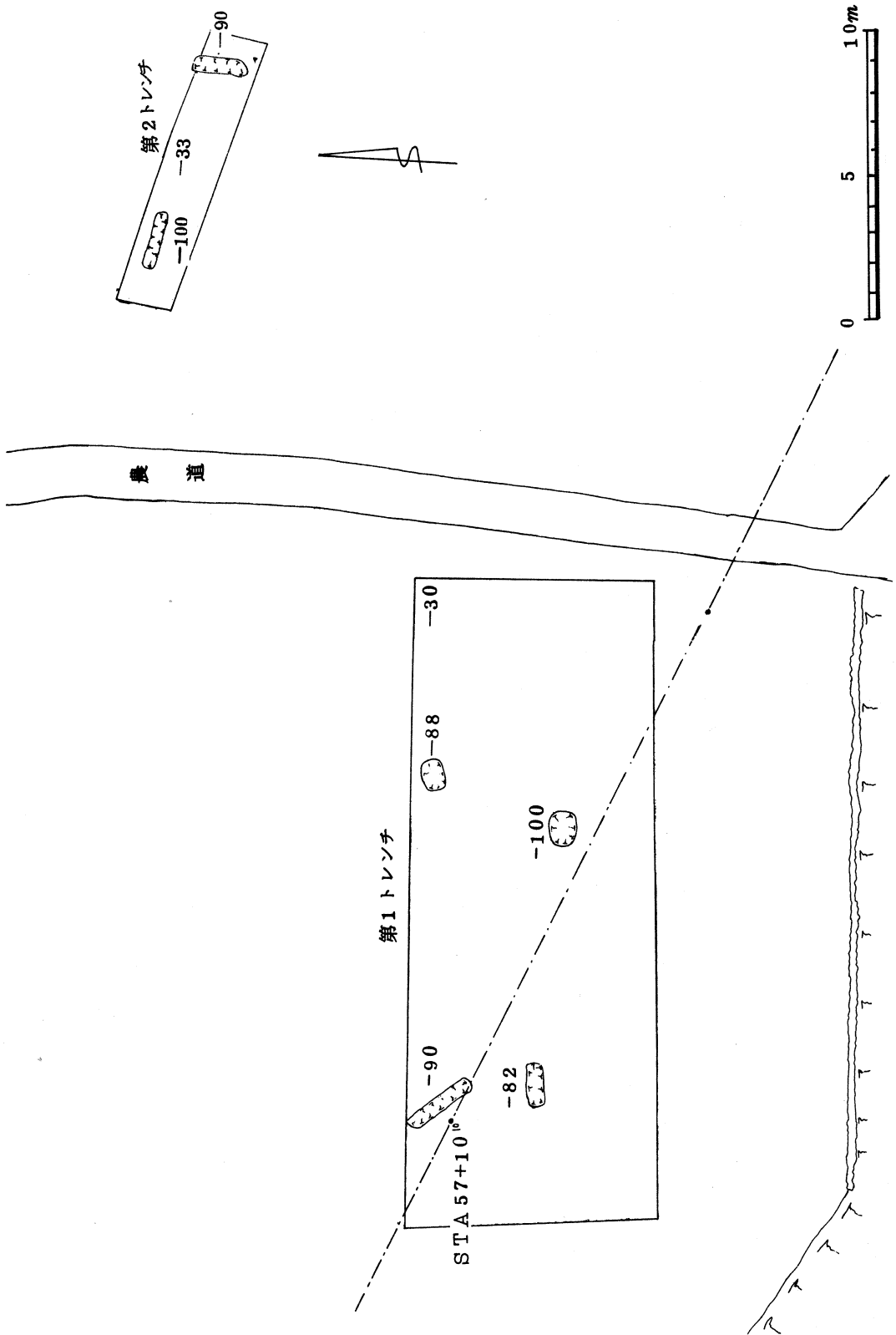
本墳の内部構造は小木原古墳の地下式墳と全く同一形式のものであり、玄室、羨道などにおいても、ほとんど、同様な規模を有している。しかし、玄室内の出土遺物については小木原古墳の場合より、だいぶ、貧弱に見える。

しかも、敷石などもなく、簡易な副葬法をとっている。けれども、鹿角装の直刀が出土し、あるいは、竪穴上部に数点ではあるが、古式の土師器片が検出されたことは特色づけられるものである。編年的には、小木原古墳の地下式墳と同時期ごろに比定されるが、両方を比較した場合は、わずかの時期ではあるが、地下式A号墳の方が溯るようでもある。

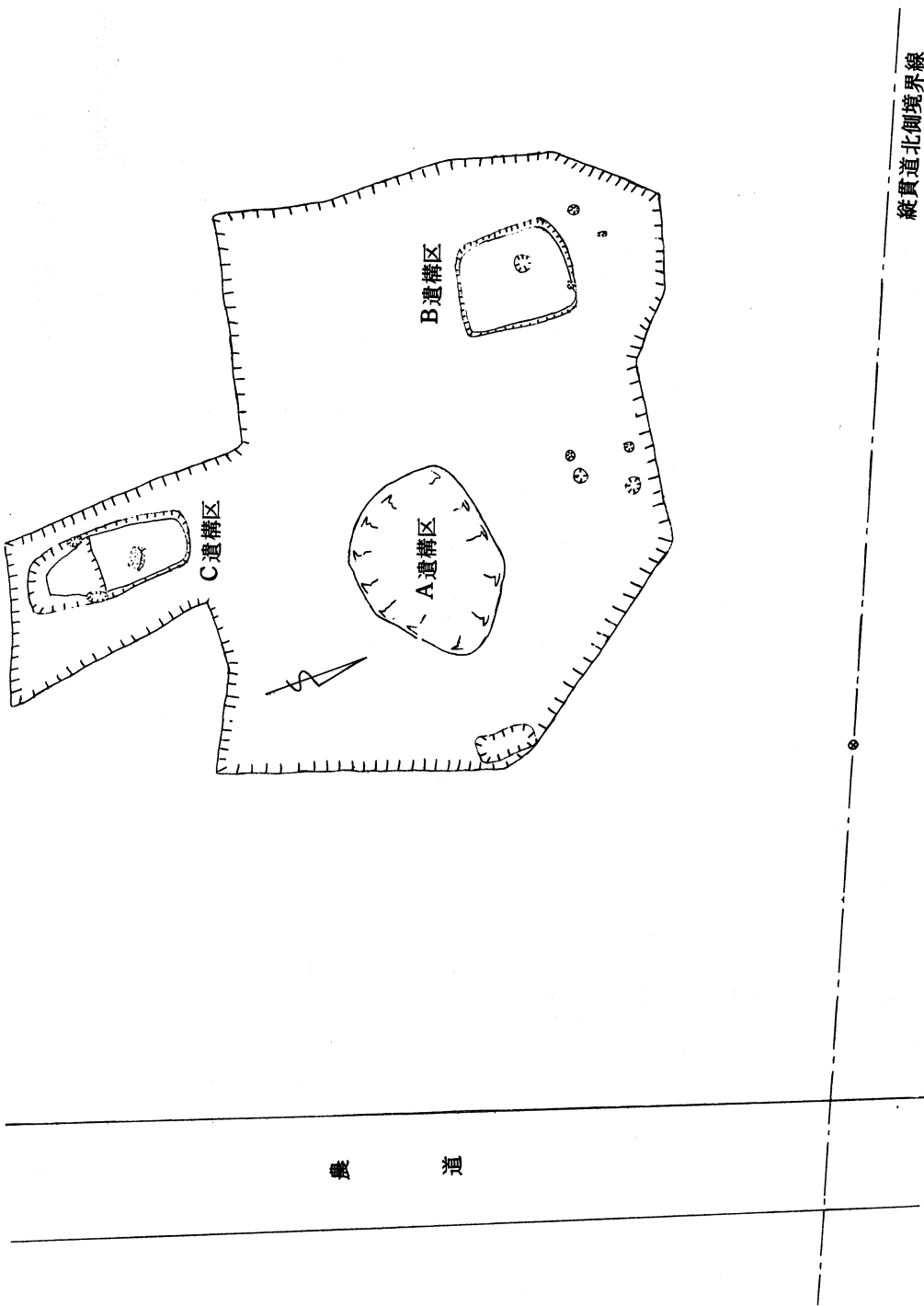
（文責 日高正晴）



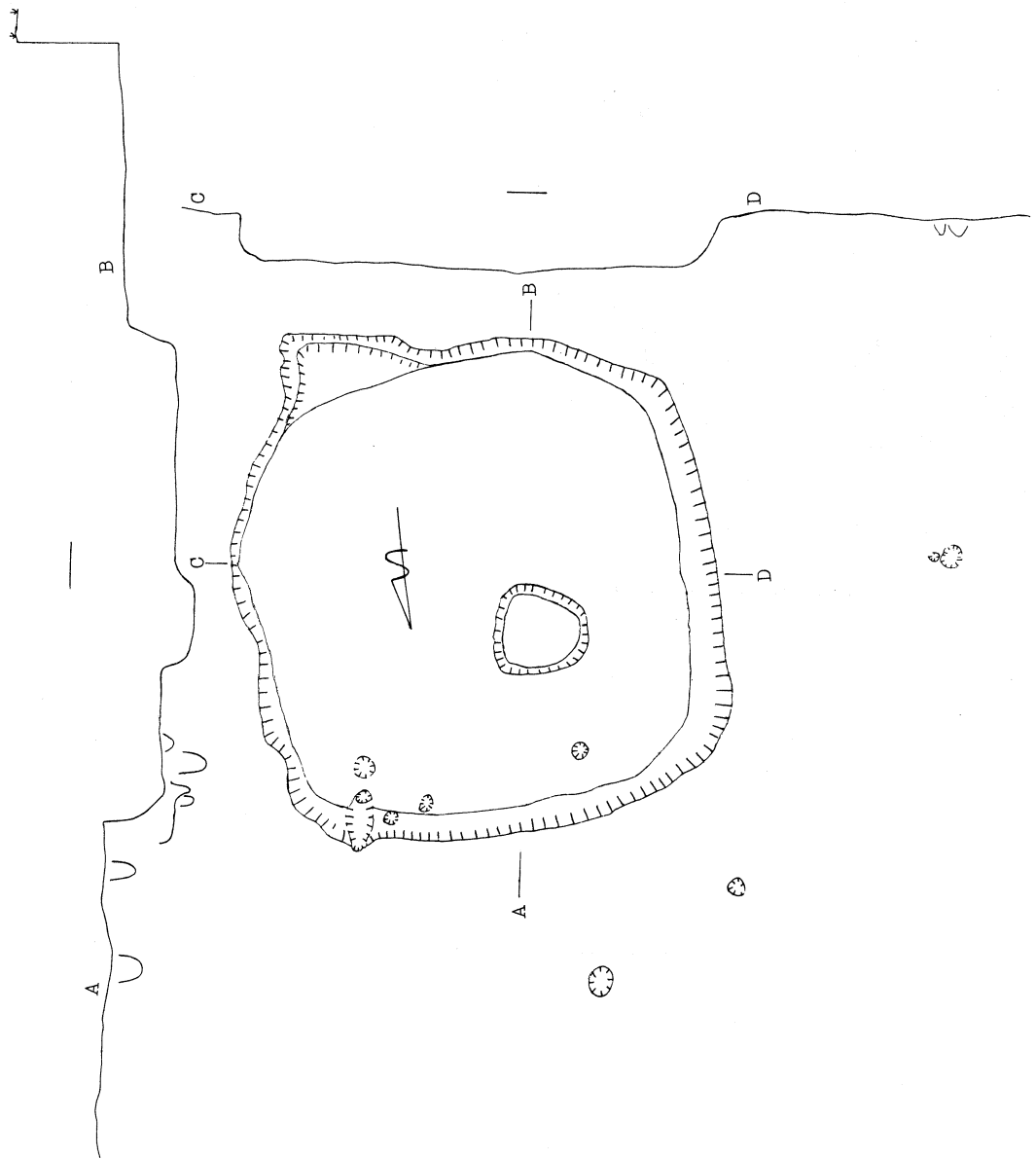
第1図 鳥越台地形図



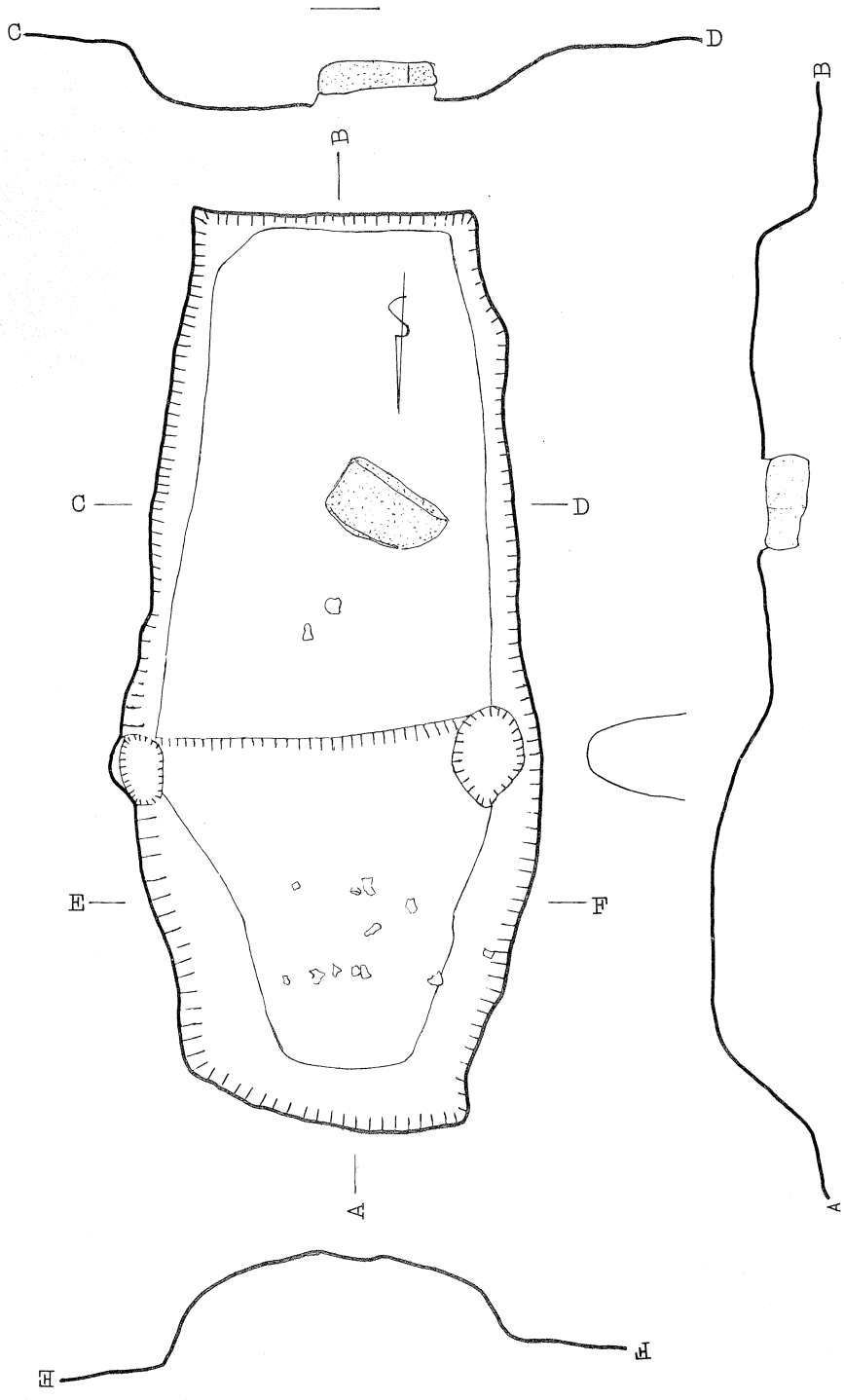
第2図 鳥越台地 (第1.2トレンチ)



第3図 鳥越台地第3トレンチ



第4図 鳥越台地第3トレンチB区遺構



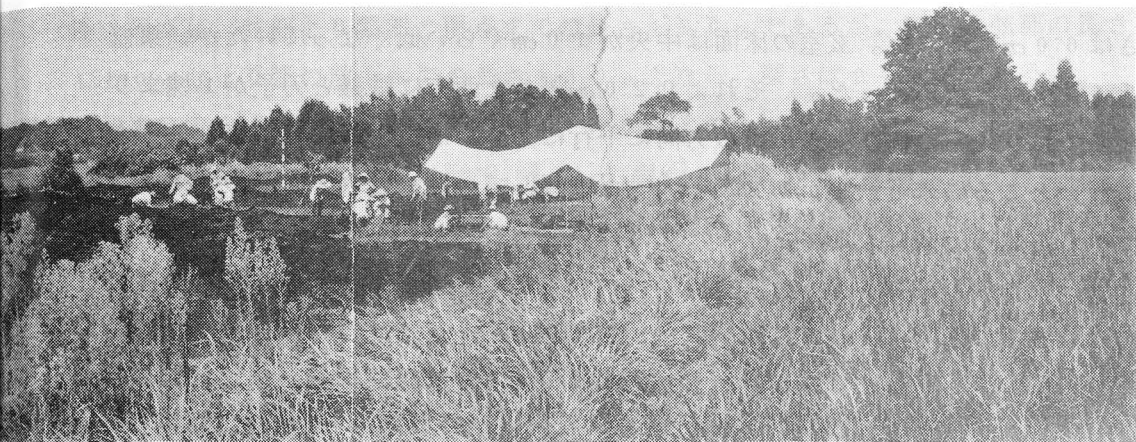
第5図 鳥越台地第3トレンチC区遺構



#### 4 久見迫遺跡

久見迫は小木原の東南方の台地で、小木原と同じく池島川の東岸に形成された河川段丘であるが、小木原の部落から久見迫と谷を距だてた西北方の畑地（部落の道路を距てた前方）は地下式古墳の群集地帯で、現在までに家屋の建築や畑地の水田化によって破壊された地下式古墳は約120余基に及んだのである。この地層は表土の下にローム層がありその下に厚さ2m～3mの砂礫層があるが、最近の建築の鉄筋化に伴う砂利不足から、砂利業者はこの地下の砂利に着目し、畑主より砂利を買入れ、表土をブルドーザーで押し除け、下の砂利を取り去るのである。そしてもとの表土を戻せば水田となすことができる。従って地主は砂利を売るうえに手を濡らさずして水田を得ることができるので、この地方の畑は水田化が進められているが、この地下式古墳は地下の砂利層に玄室を設けているので、以上のような古墳の破壊が行われるのである。しかもこの小木原の地下式古墳は堅穴式前室を土で埋めず、そのまま空洞とし、その上部に蓋石を置いて閉塞しているものであった。従って今回のえびの地区の調査に当たっても、このような形式の古墳に遭遇するものと思っただが、後に述べるごとく、このような形式の古墳は1基も見出だされなかった。

久見迫の台地は、第1図に示すごとく、西北から東南に広がる丘地で、われわれが調査した地域は、縦貫道路に含まれる土地に限られたので、池島川に沿う断崖の西北端に近い部分であって、西北は小木原との境をなす峡谷の上から東南に長



久見迫遺跡全景

さ 8 2 m，幅 4 0 m の地域であった。ここを 8 月 3 日から同 2 7 日まで（但し人夫の休日のため 8 月 6 日の第 1 日曜と 1 3，1 4，1 5 日の旧盆を休んだ）発掘調査を行なって第 1 図に見られるごとく 1 0 基の地下式古墳と土壙 1 基を発見した。以下それらの遺跡と遺物について記そう。

#### (1) 地下式第 1 号墳

ここで発見した地下式古墳と土壙とは第 1 図に示す通りの位置にあったが古墳の番号は発見順に命名した。第 1 号墳は第 2 号墳とともに、ここの断崖に沿うて幅 2 m，長さ 2 0 m の第 1 トレンチにその竪穴式前室の埋土が現われて発見された。その位置はこの台地の東南隅に近い崖に面したところにあった。

ここの地層は深さ 4 0 cm 内外の黒色の表土の下に深さ 3 0 cm 内外の黄褐色のローム層があり，その下に褐色の粘土質土層が深く入っているが，場所によっては粘土質土層の下に礫層のあるところもあったが，第 1 号墳は黄褐色のローム層から褐色の粘土質土層の中に玄室を置いて竪穴式前室を南に玄室を北にして営なまれていた。その形は第 2 図に示す如く竪穴式前室は南北に長い長方形に近く，長さ 1. 4 0 m，幅は中央で 8 0 cm，最広部 1 m で西側の壁が東側より 2 5 cm 長い。深さは 8 5 cm である。北壁に羨道があったが，その部分を大きい粘土の塊りで閉塞していた。

羨道は奥に開いた形で，入口の幅 5 5 cm，長さ 6 0 cm，玄室に接するところ（女門）では 1. 2 0 m となる。天井は平らであった。玄室はその北方にあり，東西に長い長方形で羨道に対して平入りとなっていた。東西の長さ 2. 2 0 m，奥行 1. 2 5 m で西壁が東壁より 5 0 cm 長い。天井は平らであったがは入れないので切り落したが，



高さは60 cmであった。玄室の床面は中央が1.0 cmぐらい低くなっていたが、東壁に近く骨片の痕跡があった。それより20 cm隔れた西方に鉄鏃と刀子が1塊まりとなっており、室のほぼ中央に室の方向に平行に刀1口が柄を西にしてあり、その鋒に近いところに朱と鉄鏃があった。人骨が遺存していないけれどもその痕跡があったから南北の方向に人が葬られていたものであることが知られる。

#### 遺物 (第3図)

この古墳の遺物は刀1口、刀子2口、鉄鏃10本であった。

- ① 刀子 全長15 cm, 身長9 cm, 身幅1.8 cm, 莖幅0.7 cm, 厚さ0.2 cmである。
- ② 刀子 全長10.5 cm, 柄長3.2 cmで柄部に木質が残っている。身長7.2 cm, 身幅0.7 cm, 棟幅0.2 cmである。
- ③ 刀 全長64 cmで柄部はよく残っており柄は断面が幅3.5 cm, 厚さ1.8 cmの卵形を示し木質に桜の皮を巻き、その上に薄い木質が1部残っている。そして柄頭から5 cmのところに目釘がある。身長は計り難いが身幅は3 cm, 棟幅0.7 cmである。  
この刀には長さ13 cmで尖根刀形の鏃が錆着している。
- ④ 鉄鏃 全長12.7 cm, 平根鉾形身幅3 cm
- ⑤ 同 全長13.7 cm, 平根鉾形身幅3.5 cm
- ⑥ 同 全長14.8 cm, 柳葉の大形
- ⑦ 同 全長11.8 cm, 三角形平根身幅4 cm
- ⑧ 同 全長17.5 cm, 穂長2 cm, 身幅1 cm柳葉尖根
- ⑨ 同 柄のみで現長12.8 cm
- ⑩ 同 全長15.8 cm, 尖根柳葉, 鏃が3本錆着している。
- ⑪ 同 全長16 cm, 鉾形尖根
- ⑫ 同 全長16.2 cm, 同, 同
- ⑬ 同 全長13.5 cm, 同, 同

注、遺物の番号は実測図の番号である。

#### (2) 地下式第2号墳

第2号墳は第1号墳の北方に約5 mを隔てて存在した。方位はほぼ東西で竪穴式前室を東、羨道と玄室を西としていたが、正確に言えば古墳の中軸線は東西の方向より30度北に傾いていた。(第4図)

竪穴式前室は上部が広く底に行くに従って縮まり、上部はほぼ半円形で、弦部の

長さ約 2 m, 弦部より弧部の頂点までの長さ 1.90 m であるが, 底部は弦部の長さ 1.10 m 弦より弧の頂上までの長さ 1.30 m となる。深さは 2.20 m である。

羨道は竪穴式前室の西壁に開口していたが, その入口を大きい粘土で蔽い塞いでいた。羨道はやや口の開いた形で, 幅 70 cm, 奥行 85 cm, 高さ 60 cm 天井は平であった。

玄室は北側に一方的に張り出し不正形であるが, プランは四角形のようなものである。奥行 1.5 m, 幅 1.5 m で, 床面は前室の底より羨道の入口へ約 10 cm 高く, 羨道の底は次第に降って玄室に達し, 玄室の底は羨道より 15 cm 低い。天井は平であったが危険なので天井は落したが高さは約 60 cm であった。玄室の床面には何らの施設もなく奥壁に近く室に平行に人骨 1 体が頭を南にして伸展葬されていたと思われ, 大腿骨 2 本と左腕骨, 橈骨が平行してあり, 頭部付近に鉄器の痕跡があった。従ってこの古墳では副葬品はすでに消滅していた。

### (3) 地下式第 3 号墳 (第 5 図)

第 3 号墳は第 2 号墳の北方に約 3 m を隔てて存在した。この古墳は第 4 号墳とともに, ここの地下式古墳の代表的な形をしていた。方位は竪穴式前室を東南に, 羨道と玄室を西北にして造られていたが, 竪穴式前室はやはり上部が広く底部がやや縮まる形であるが, 上部は古墳の方向に長い楕円形に近く長さ 2.03 m, 幅 1.60 m で底部は長方形に近く, 長さ 1.25 m, 幅 1.20 m で深さは 1.07 m, 床面は 1 部掘り過ぎがあったが原形はほぼ平らであった。

羨道はその西北壁にあるが, ここは巨大な四角な粘土で塞がれていた。羨道は奥に開く形で, 入口の幅 70 cm, 奥行東側 65 cm, 西側 70 cm で玄室に接するところの広さは 1.10 m であった。天井はやや外に開いており, 床面は玄室に向かって 23 cm 降っていた。高さは入口で 50 cm, 奥で 60 cm であった。

玄室は東方に張り出した形であるが, だいたい隅丸長方形に近く, 奥行 1.90 m, 長さ 2.40 m で, 天井は平たく高さ中央で 60 cm, 床面も平らであるが奥壁は天井が降り, 床面が上って斜めに接触している。東西の両壁も同様であった。床面には室の中央より東側に人骨 2 体が葬られており, 玄室の入口に近く頭蓋骨があり, その奥に骨片が散乱しており, さらに東側に骨片が南北にあった。実測図で知られるように, 骨片や骨は入り交っているが, 古墳の方向に向かって 2 列に並んでいることは, ここに 2 人分の屍体が葬られていたことが知られるのである。そして入口に近い 1 組は頭蓋骨が入口に近くあるので, 頭を入口の方に置き足を奥の方にして葬られていたものと思われる。またこの 2 体の人骨が玄室の中央から東側にのみあるこ

とは、玄室の西側は将来の死者を葬むるために備えたもので、この種古墳が家族墓であるという性格を示しているものである。

副葬品は玄室の入口東寄りの頭蓋骨の南方2.5cmのところに、侵入者から人骨を衛るかの如く刀子1口が柄部を東に刃を外に向けて置かれており、その東方20cmのところに剣1口が古墳の方向にほぼ平行に柄部を南にして置かれていた。

遺物は人骨2体分と剣1口、刀子1口であった。(第6図)

- ① 剣 全長68.5cmの蛇行形剣である。柄長11cm、莖幅3cmで木質が少し残っている。身長57.5cm、で蛇行しており身幅は3cm人の臼歯が銹着している。
- ② 刀子 全長11cm、柄長5cmで、柄には木質が残っていて丸くなっている。身幅は0.6cm、棟幅0.2cmである。

註 蛇行剣というのは、剣身がS字状に蛇行しているもので、スマトラのマライ族の用いるクスリと呼ばれる剣で知られているが、日本の古墳から出たものは、石川県江沼郡勅使町狐塚、兵庫県加西郡在田村亀山などが報ぜられているほか鳥居竜蔵博士が延岡市浄土寺山の粘土棺中から発見されたものがある。何れにしても珍しいものである。

#### (4) 地下式第4号墳(第7図)

地下式第4号墳は第1号墳の東南に8mを隔てて発見されたもので、ここの古墳の最も代表的な形の古墳であった。ここの土層は表面に20cmの深さの表土があり、その下に黒色の土層が60cmないし70cmの深さで入っており、その下に赤褐色のローム層が50cm内外の深さで入り、さらにその下に黒褐色の粘土質層が10cm内外の深さで入り、その下に淡褐色の粘土質土層があるが、古墳は赤褐色ローム層から淡褐色土層を羨道および玄室として造られていた。方向は竪穴式前室を南に羨道と玄室を北にして設けられていた。

竪穴式前室は半円形で上部が広く底にゆくに従って縮まっていた。すなわち上部は弦部の長さが1.40m、弦から弧の頂上までの長さ1.70m、中央の幅1.55mであった。底部は弦部の長さ1.10m、弦より弧の頂点までの長さ1m、中央の幅1.10mであった。深さは1.25mで底面は羨道に向って降ること25cmであった。

羨道は北壁にあり入口を粘土で閉塞されていたが、入口の幅65cmで、長さ55

cm, 奥に行くに従って漏斗状に拡がり玄室に接するところでは幅 1.10 m となっていた。羨道の天井は平らで、底は玄室に向って 10 cm 降っていた。

玄室は東西に長い楕円形に近い形で、長さ 2.50 m, 奥行 1.30 m, 天井は中央が高く 70 cm, 底は平らで、玄室のほぼ中央奥寄りに完全な人骨 1 体があり、頭を東に足を西にして葬られていた。頭蓋骨の端から足の蹠骨までの長さは 1.50 m であった。副葬品は何もなかった。

#### (5) 地下式第 5 号墳 (第 8 図)

地下式第 5 号墳は第 4 号墳の東方に 9 m を隔てたところで見いだされた。その方向は竪穴式前室を東に、羨道や玄室を西にして設けられていた。しかし第 8 図に見られるごとく玄室の前に幅 35 cm, 深さ 55 cm, 長さ 2 m の溝状のものがほぼ南北に掘られており、これらの後世の工作物によって古墳はかなり壊されていた。

竪穴式前室はほぼ四角形で、南北の長さ 1.85 m, 東西の長さ 1.60 m で、深さは 60 cm であった。羨道は壊れてほとんど存在しなかった。

玄室は南北に長く 1.65 m, 奥行 40 cm, 天井は平たく、高さ 40 cm という変形のもので、天井は斜めに降って玄室の底に達していた。玄室のほぼ中央に玄室に平行して鉄鏃 2 本があった。

遺物 鉄鏃 2 本が錆着していた。

#### (6) 地下式第 6 号墳 (第 9 図)

地下式第 6 号墳は第 5 号墳の南西方に 4 m を隔てて見だされた。この古墳は竪穴式前室を南に羨道と玄室を北にしてほぼ南北に方位していた。正確に言えば古墳の中軸線は南北の方向より 10 度東に傾むいていた。

竪穴式前室は上が広く底に行くに従って縮まるもので、上部は南北に長い長方形をなし、長さ 2.50 m, 幅 1.75 m であるが、底部は半円形で、弦部の長さ 1.10 m, 南北の長さ 90 cm で、羨道はその北側にあり、その入口は粘土で嚴重に閉塞されていた。深さは 1.33 m であった。

羨道は竪穴式前室の北壁に開口し奥にやや開いていたが、入口の幅は 70 cm, 長さ 75 cm で、玄室に接するところでは幅 90 cm であった。高さ 55 cm で天井は平らであった。

玄室は東西に長い楕円形で、奥行 1.70 m, 東西 2.70 m で床面は竪穴式前室、羨道より 25 cm 高い。天井は平らで高さ 50 cm であった。

遺物は玄室の東南部に轡と雲珠、刀がありその北方玄室の中心線に近く剣1口と鉄鏃2本があり、東北壁に接して刀1口があった。

遺物 (第10図)

- ①剣 全長71cm, 柄の長さ15cm, 柄には木質があつて幅2.5cm, 厚さ2.3cmである。身幅3cm, 厚さ0.6cmで鞘口に鹿角装がある。
- 刀子 全長20.5cm, 柄長6cm, 身長14.5cm, 身幅2cm, 棟幅0.5cm, 柄には木質が少し残っており, 柄幅1.5cm, 厚さ1.2cm, 柄頭から2.5cmのところ目釘穴がある。
- 刀 全長39cm, 身幅2.5cm。
- 鉄鏃 長さ14cm, 銚形平根である。
- 鉄鏃 長さ13.5cm, 同上。
- 轡 円轡で8.8cm×7の扁円形の上に四角形の面繫受がついている。一方は8cm×7.5cmの扁円形の上に面繫受のついているものである。喰は長さ各9.5cm, 引手は長さ15cmで, 搦の輪はなく引手は喰の端についており, 引手の壺金に変わった形の金具がついている。
- 鏡 1対  
木製であつたらしく鳩胸や舌はないが, 鏡具頭には8字形の環を2重にした鎖状の金を4段つけている。
- 雲珠 2個であるが, 1個は半分である。

(7) 地下式第7号墳 (第11図)

地下式第7号墳は第1号墳の北方に1.5m隔てたところに竪穴式前室を設けて, その北方に羨道と玄室を置いて造られていたがその方位はほとんど正確に南北に向いていた。竪穴式前室は半円形で, 上部が広く底に縮まる形であつた。上部は弦の長さが1.80m, 弦より弧の頂上までの長さ2.17m, 底部は弦の長さ1.30mで, 底は羨道に向つて30cm傾斜していた。

羨道は竪穴式前室の北壁の弦部に設けられており大きい粘土で閉塞されていた。その形は南と北の両端が開き, 羨門の幅は80cmで羨道の方向は西北に向いていた。長さは60cmで玄室に接するところの幅は1mとなつており, 天井は平らで高さ1m, 底は玄室に向つて20cm傾斜していた。

玄室は東西に長い長方形で、西壁より東壁が短かく、西壁の長さ1.30 m、東壁の長さは1 mで北壁は2.20 m、南壁の西端から60 cm、東端から60 cmの間に幅1 mの羨道が開口している。従って南壁は全体で2.20 mとなる。玄室の天井はすでに落ちており、玄室部には黒い土がいっぱい詰まって発見された。それで天井を落して調査したが、天井の高さは中央で80 cm、周辺は60 cmであった。また床面は平らであった。

遺物は人骨は既に消滅しており、玄室のほぼ中央東寄りのところに剣1口が東西に方位して在り、西壁に接して剣1口と刀子1口鉄鏃3本があった。この古墳の北側に大形の須恵器の埴が1個あった。

#### 遺物 (第12図)

- ① 剣 全長24.7 cm、柄長6 cmで木質が残っている。身長18.7 cm、身幅3.2 cmである。
  - 剣 全長67.5 cm、柄長12 cm、幅3 cmで木質が残っているが、鏢のところは幅7.5 cmである。身幅は4 cmである。
  - 刀子 身が欠損しており、現長5.5 cm、柄長4.5 cm、身幅0.8 cm、棟幅0.2 cmである。
- ② 鉄鏃 全長20 cmで折損しているが、銚形の尖根で先端より8 cm上ったところに逆刺がある。
  - 鉄鏃 全長14 cm、身長9.5 cm、尖根で同上逆刺がある。
- ③ 鉄鏃 全長16 cm、身長10 cm、尖根で同様の逆刺がある。

#### (8) 地下式第8号墳 (第13図)

地下式第8号墳は第1号墳の東に1.5 mを隔てて竪穴式前室を南に羨道と玄室を北にして造られていたが、その中軸線は南北の方位より37度西に傾いていた。

竪穴式前室は半円形で、やはり上部が大きく底部が縮まる形であった。上部は弦部の長さ1.20 m、弦より弧の頂点までの長さ1.20 m、中央の幅1.40 mで、底部は弦部の長さ90 cm、弦より弧の頂点までの長さ1 mで、高さは1 m、底は羨道に向って傾斜すること20 cmであった。

羨道はほとんどなく、玄室は奥行25 cmないし30 cm、広さ1.20 mで、天井は低く入口の高さ50 cmで、入口より斜めに降って奥底に達しており、床面には何らの遺物もない点から見て小児の墓と思われる。

#### (9) 地下式第9号墳(第14図)

地下式第9号墳は第7号墳の北方に3m隔て、第8号墳の東北に4m隔てた位置に竪穴式前室を北に羨道と玄室を南にして、他の古墳とは逆の方向に造られていたが、その形は第8号墳と同じであった。

竪穴式前室は半円形で上が広く底に縮まる形で、上部は弦部の長さ1.55m、弦より弧の頂点に至る長さ1.60mで、底部は弦の長さ1.20m、弦より弧の頂点に至る長さ1m、深さは1.17mで、底は羨道に向ってやや傾斜し傾斜は5cmであった。

羨道は粘土をもって塞がれていたが、入口の幅75cm、長さ25cm、奥に拡がって玄室の接点では90cmであった。天井は平らで高さ45cm、底は玄室に向って5cm降っていた。

玄室は東西に長い長方形で、西壁の長さ70cm、南壁は2.20m、東壁は斜めに西に寄って55cm、北壁の東端から斜めに50cm、西端から50cmのところに羨道が開口していた。天井は入口から奥に傾いており、その高さは入口で40cm、奥で20cmで、底は平らであった。

遺物は玄室のほぼ中央に東西に方位して人骨片1と歯1本および刀子1口があった。

#### 遺物(第15図)

人骨 長さ20cm内外の脛骨らしい骨片と臼歯である。

- ①刀子 全長8cm、柄長4.5cmで柄には木質が残っている。身の先端は折れており、身幅は1.5cmで先細りとなっている。棟幅は0.2cmである。

#### (10) 地下式第10号墳(第16図)

地下式第10号墳は第1号墳の東南方に9mを隔てて在った。ここはこの丘地の西南隅にあたり、われわれが天幕を設置していたところであった。方位は東南に竪穴式前室を置き西北に羨道と玄室を設けたものであった。

竪穴式前室は半円形で、上が大きく下に縮まる形である。上部の弦部の長さ1.40m弦より弧の頂点までの長さ1.65m、中央の幅1.50m、底部の大きさは弦部の長さ1.10m、弦より弧の頂点までの長さ1.20m、中央の幅1.10m、深さは45cmで底は平らで砂利層であった。

羨道は西北の弦部にあって粘土で入口を閉塞してあったが、入口の幅63cm、長

さは東方で50 cm, 西方は25 cmで著じるしく短かい。

玄室は隅丸長方形に近い形で, 奥行1.85 m, 幅2.20 m, 天井は平たく高さ4.5 cm底は平らであった。遺物は玄室の東寄りのところに鉄鏃と刀とが直角に置かれていた。

#### 遺物 (第15図)

①刀 長さ25.5 cm, 身長16.5 cm, 身幅2 cm, 棟幅0.3 cm, 莖幅1.5 cmで木質がある。

鉄鏃 全長18 cm, 鉾形平根で刃幅3.5 cmである。

#### (11) 土壙1号 (第17図)

土壙1号は第1号墳と第7号墳との中間にあり, 南北に長い楕円形で, 上部が大きく底に行くに従って小さくなる形であったから, 初めは地下式古墳の竪穴式前室であろうと考えたが, 羨道を閉塞した粘土がないことを審かりつつ掘り進めるうちに, 深さ90 cmに達して馬の歯と骨片および馬具が発見されたので, 馬を葬った土壙であることが知られた。壙の底部は南北7.5 cm, 東西1.05 mの楕円形をなしていた。遺物は底部西寄りのところに南側の壁に接して馬具(轡1揃い)があり, その北方20 cmのところに馬の歯と骨片があった。

#### 遺物

轡 これは地下式第6号のものと同様で, 鏡板に代る円口輪と喰と引手より成るものである。口輪は楕円形で高さ6.3 cm, 幅9 cmで, 鉄材は幅1 cmである。面繫受けの部分はこの楕円の上に高さ1 cm, 幅3 cmの立聞である。引手は長さ14.5 cm, 径0.5の丸い鉄で作られている。

馬を葬った例は本県ではさきに昭和17年に国富町の六野原で馬を葬むった土壙が見いだされているが, 馬の骨とともに馬具が葬むられていた例は今回が最初であるとともに日本全国でも稀有の例である。孝徳天皇の大化二年(646)に発せられた薄葬令によれば亡き人の馬の殉葬を禁じているが, この時代に僻遠の日向国の人たちがそのような禁令を知っていた筈もないが, 故人の愛馬を葬るという古い時代の風習を, ここに葬られている人びとが持っていたということは極めて興味ある事実である。



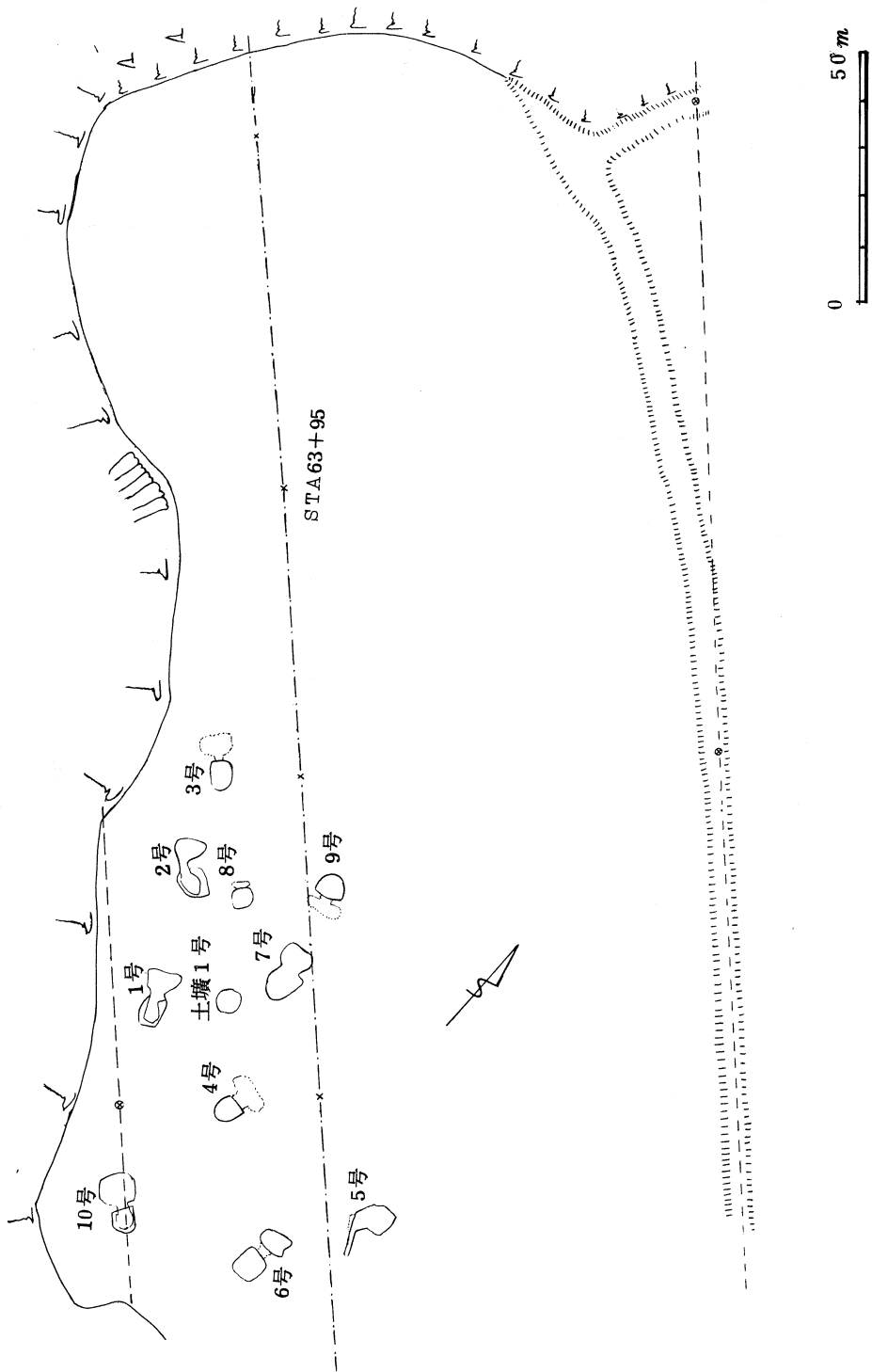
(12) そ の 他

以上のほかこの台地には大小長短の土壙が数多くあった。とくに縦横に溝状のものが掘られていたが、その用途も、掘られた時代も知ることができなかった。

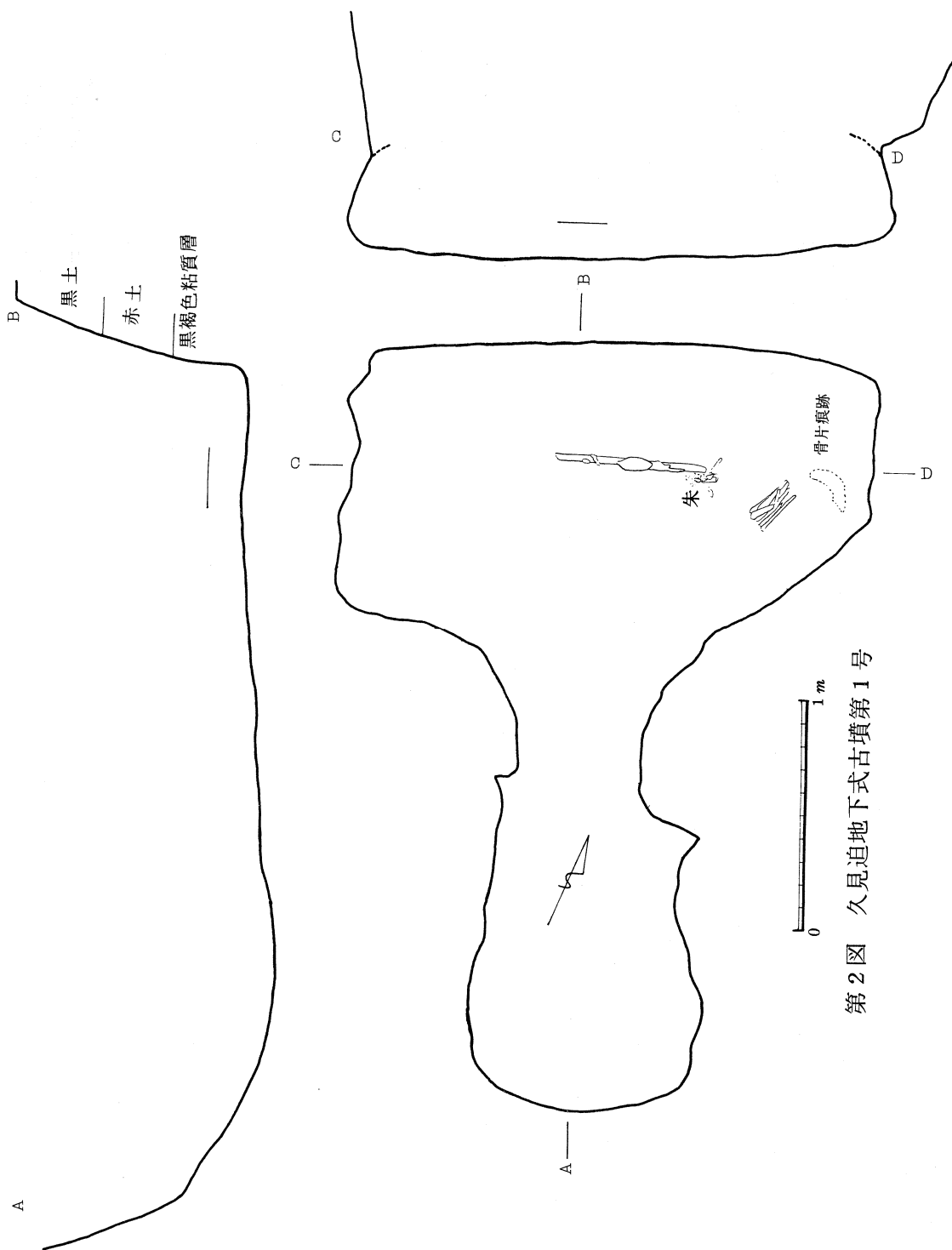
特に図のほぼ中央に見える溝をめぐらした四角なものは方形周溝墓に似た形であるが、周囲に埴器の破片が散布していただけで、その他には何らの遺構もなかった。

ここには参考のため記録した。

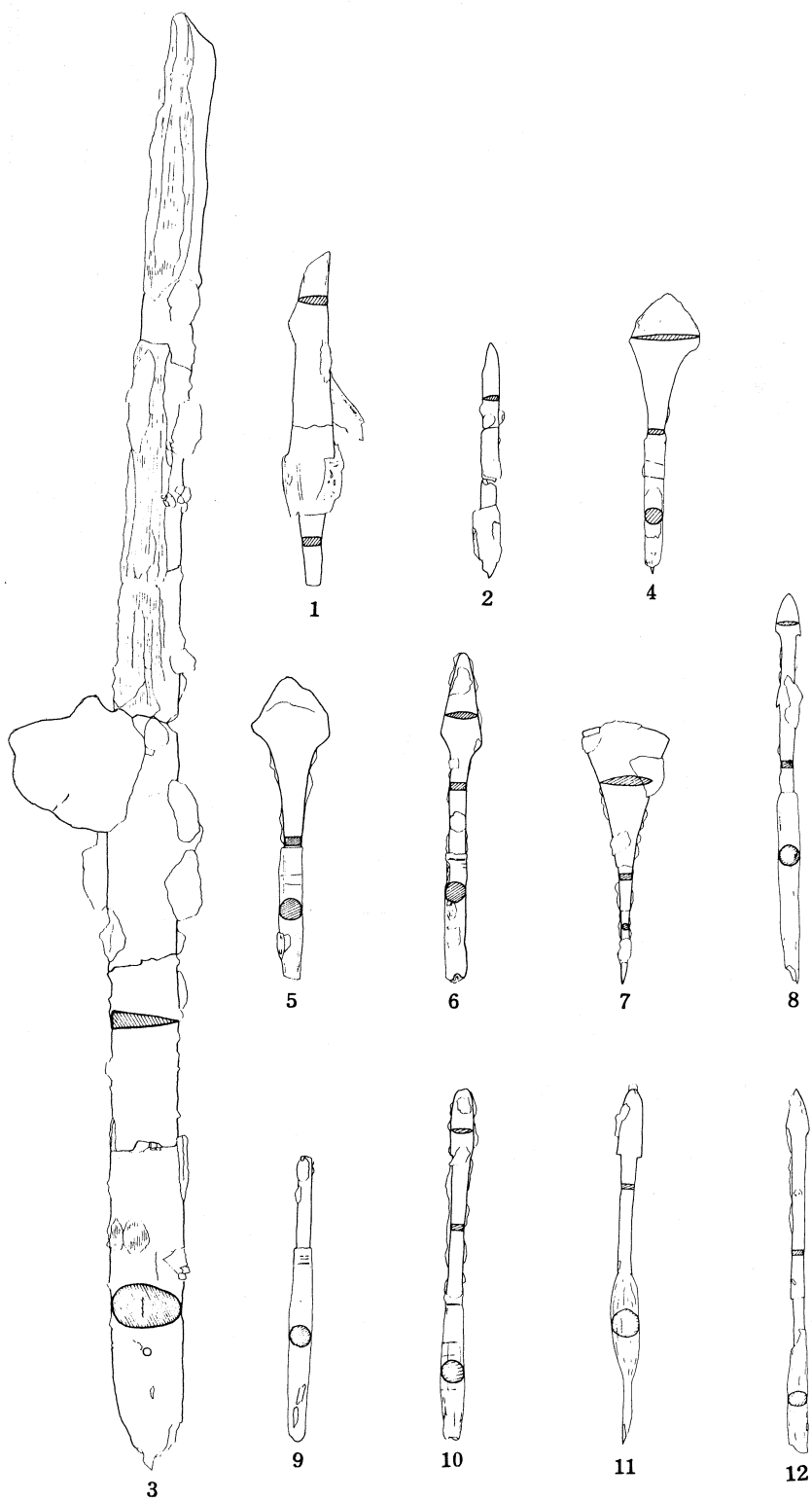
(石川記)



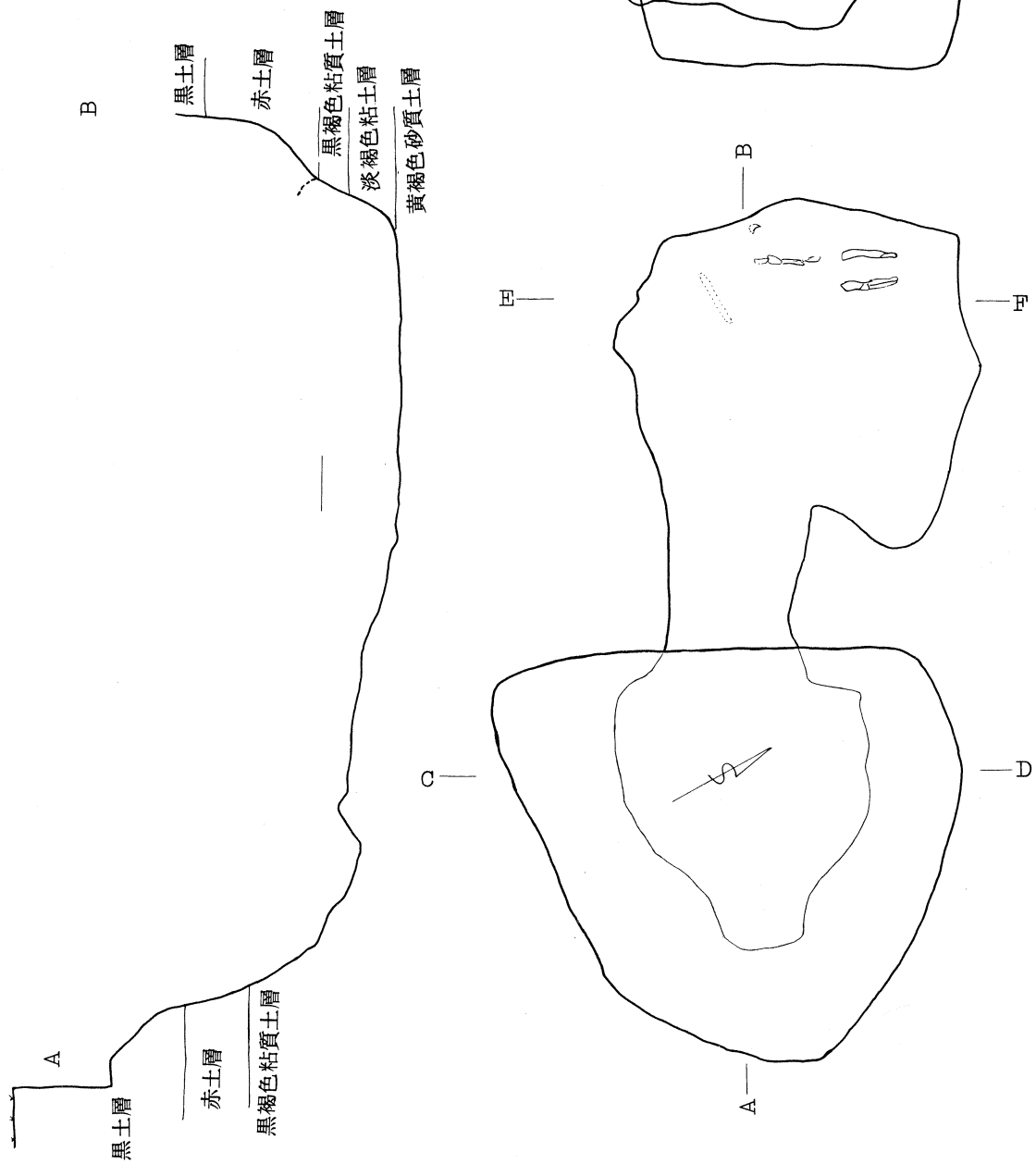
第1図 久見迫地下式古墳群地形図



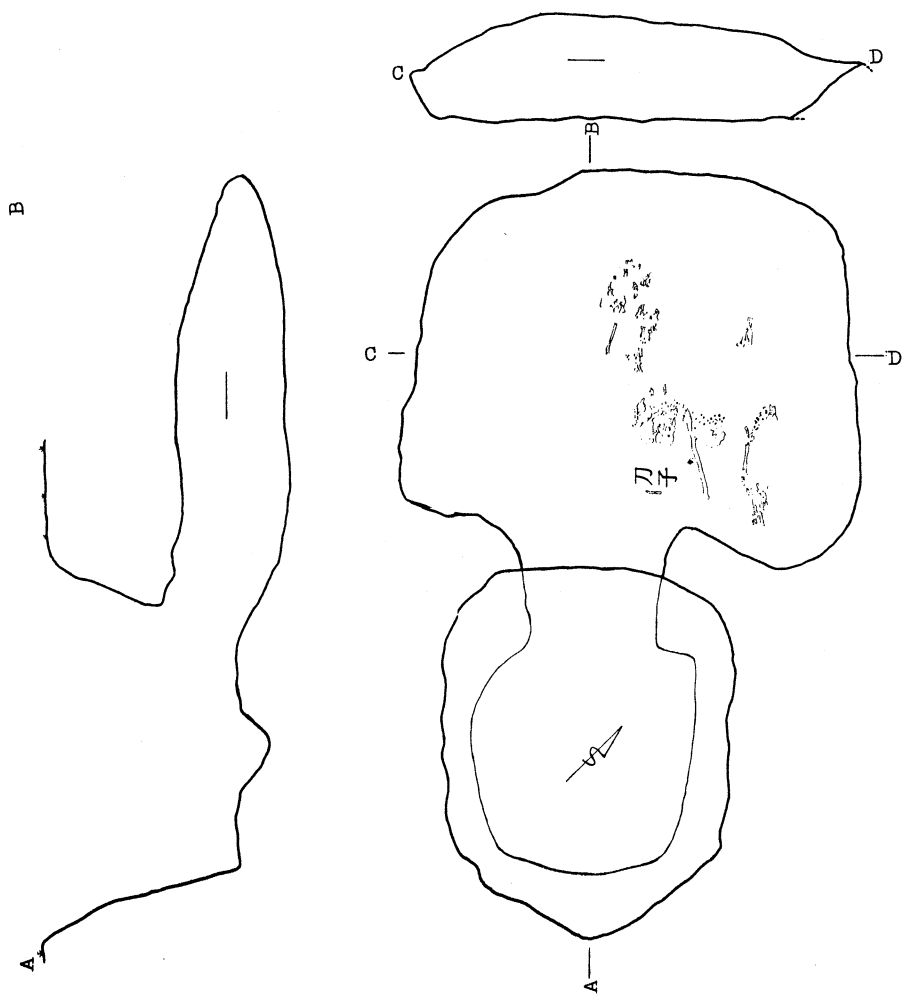
第2図 久見迫地下式古墳第1号



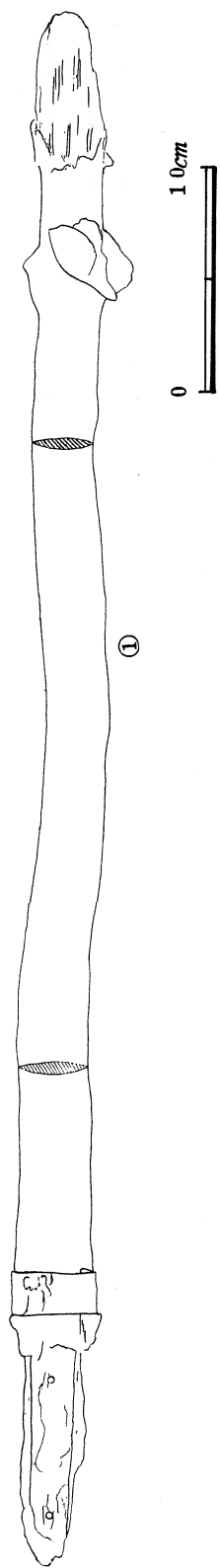
第3図 久見迫地下式古墳第1号出土実測図



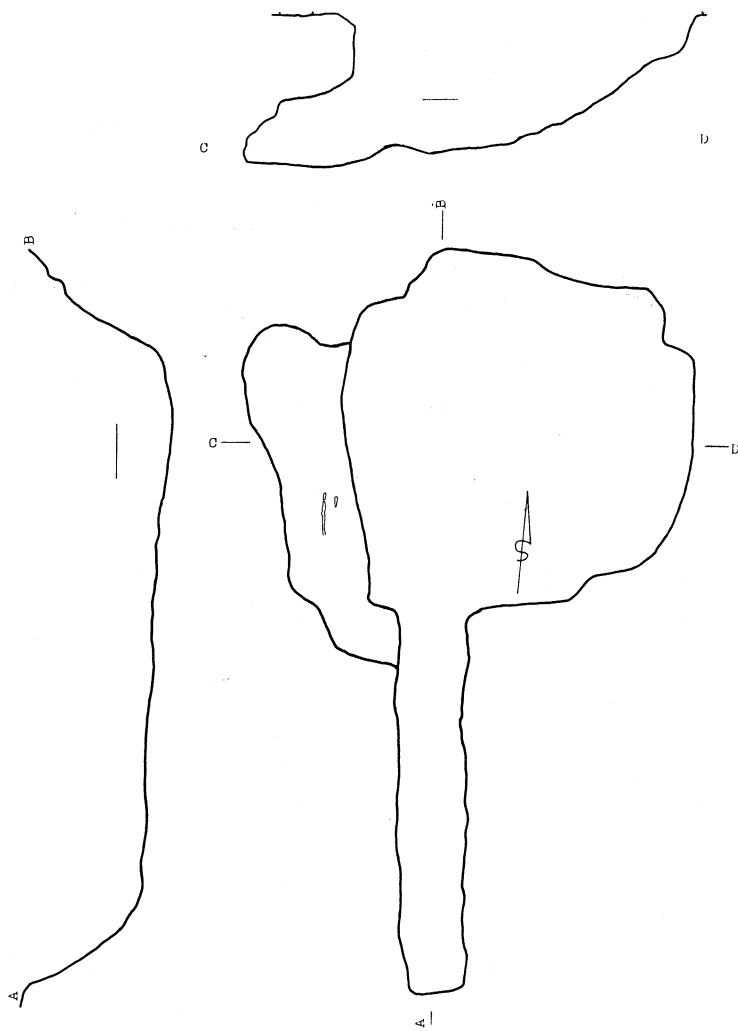
第4図 久見迫地下式古墳第2号



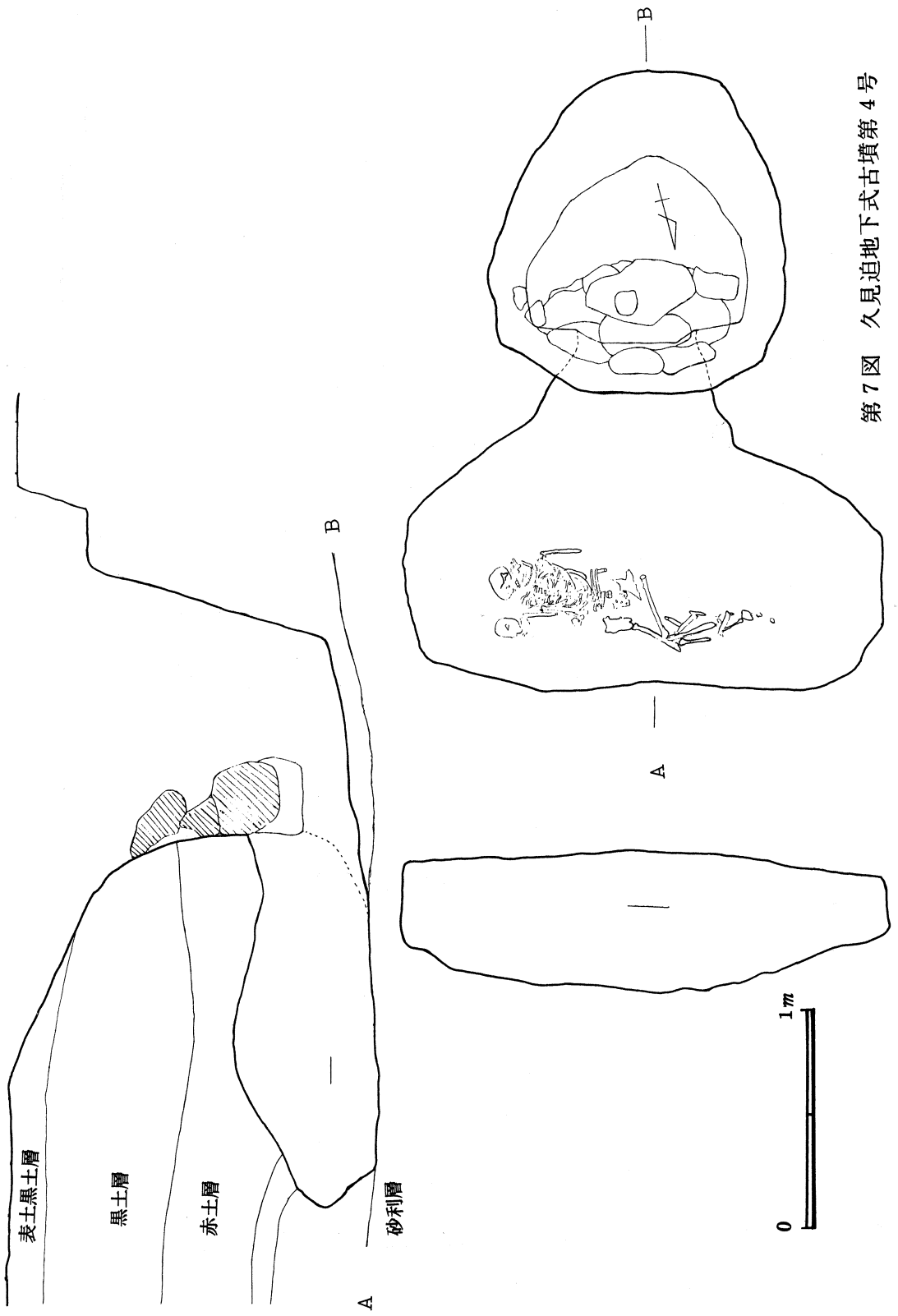
第 5 图 久見迫地下式古墳第 3 号



第 6 図 久見迫地下式古墳第 3 号出土遺物実測図

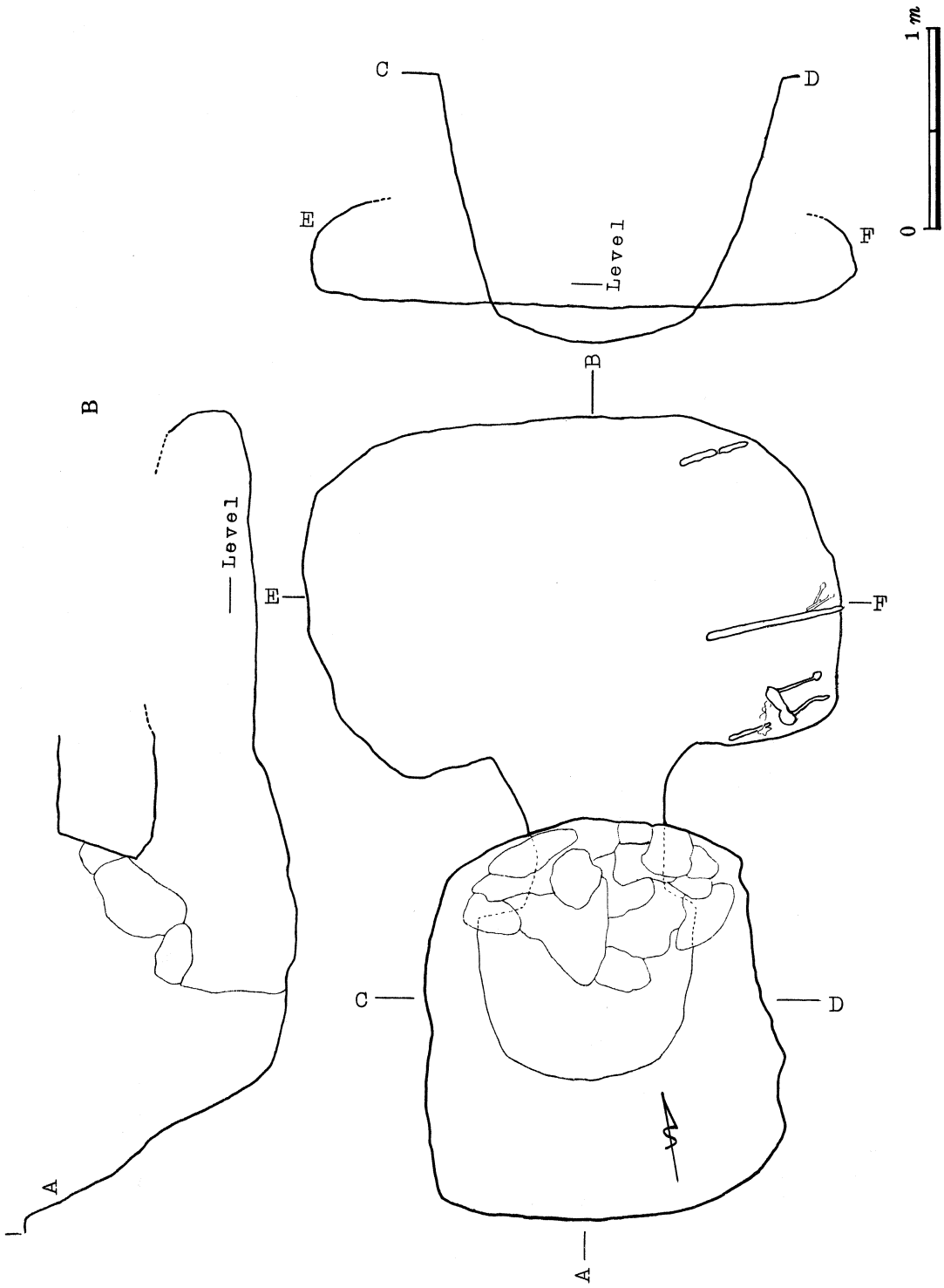


第 8 図 久見迫地下式古墳第 5 号

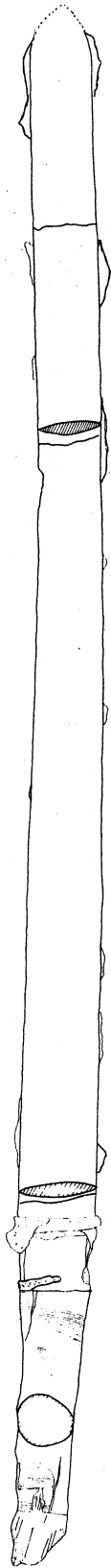


第7図 久見迫地下式古墳第4号

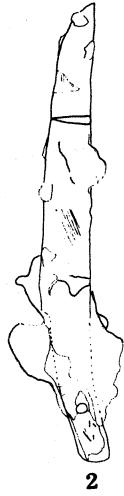




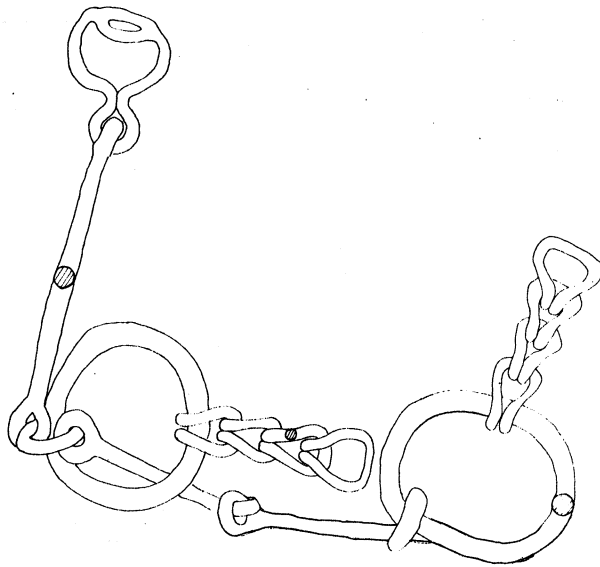
第9图 久見迫地下式古墳第6号



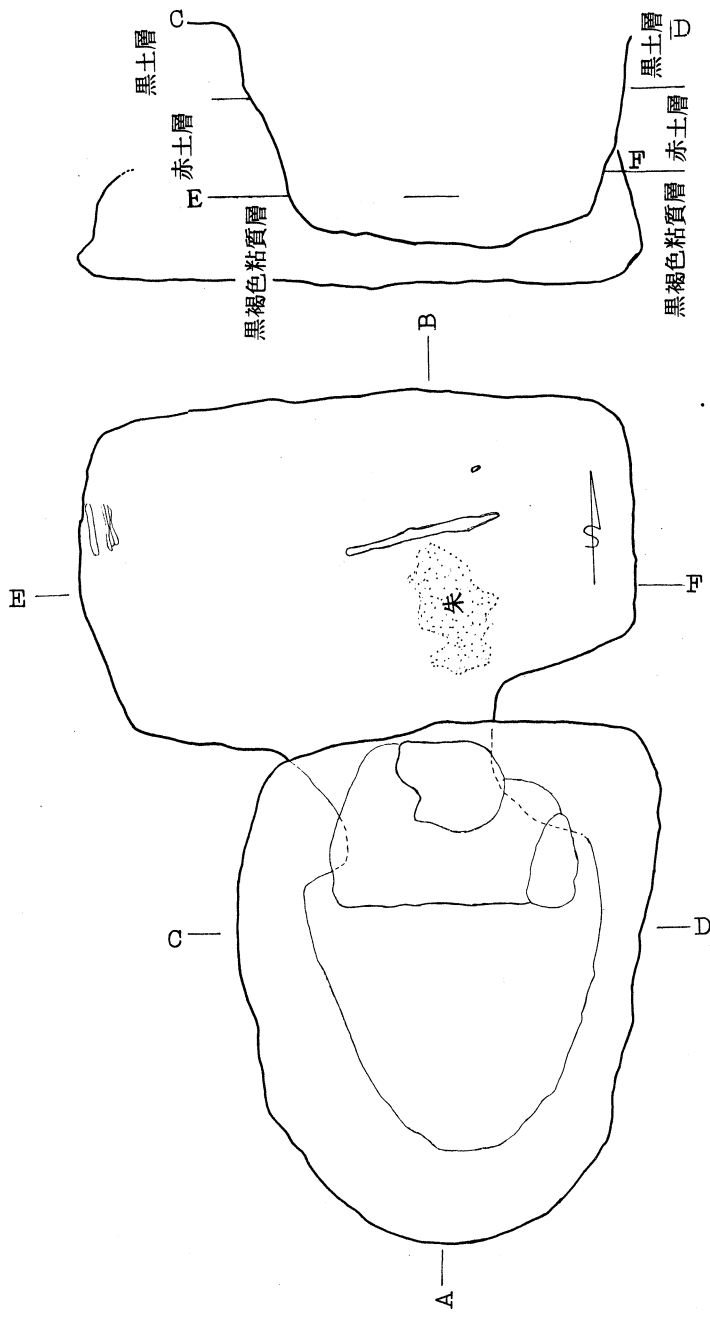
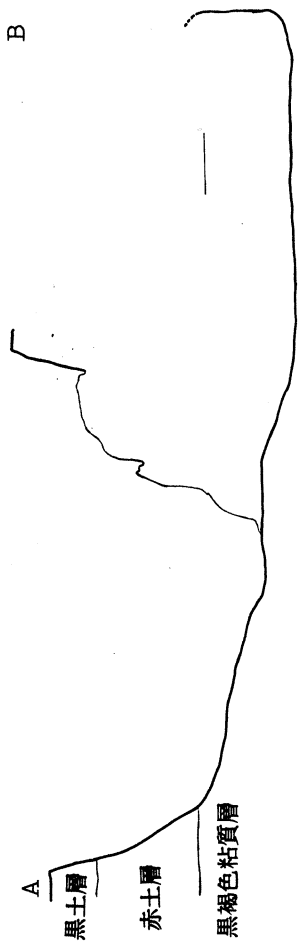
1



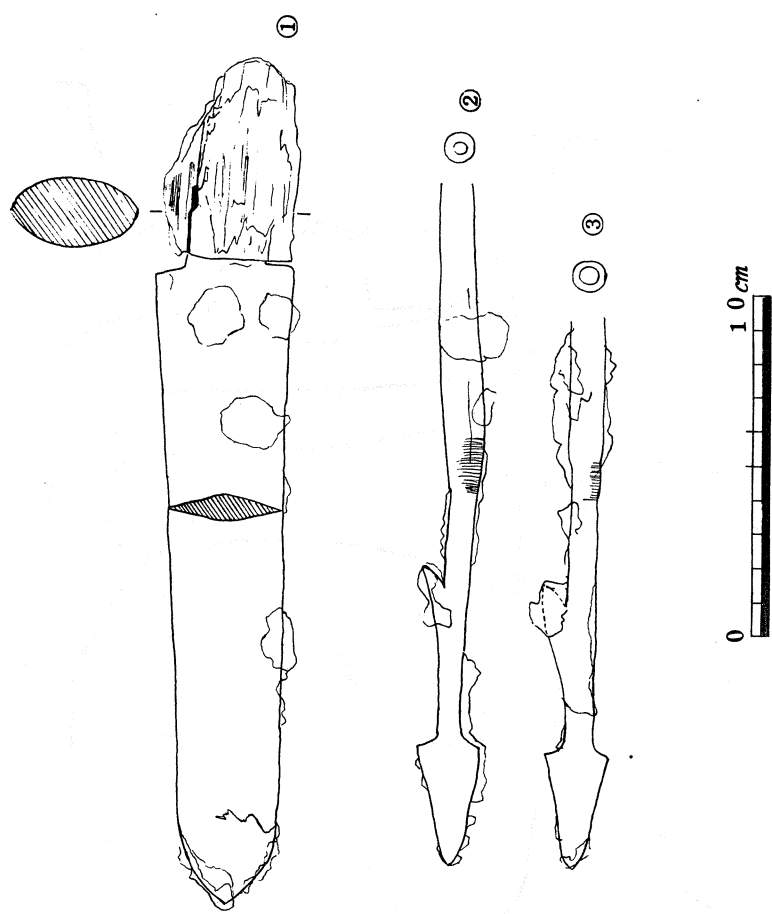
2



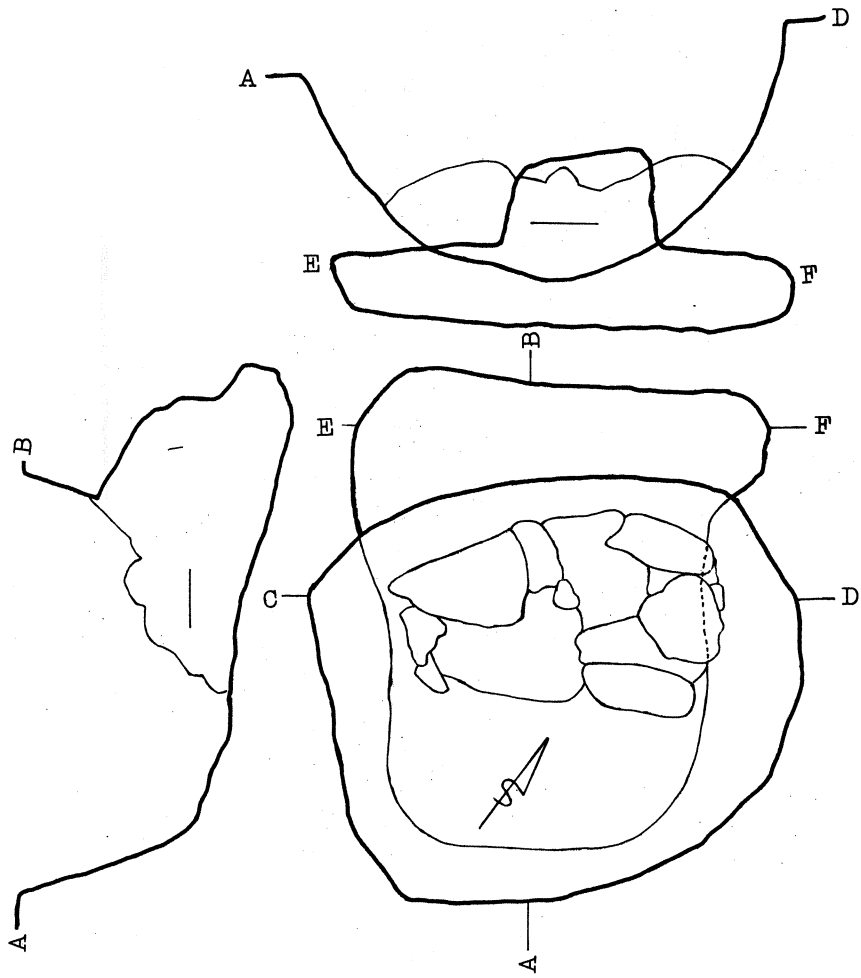
第10図 久見迫地下式古墳第6号出土実測図



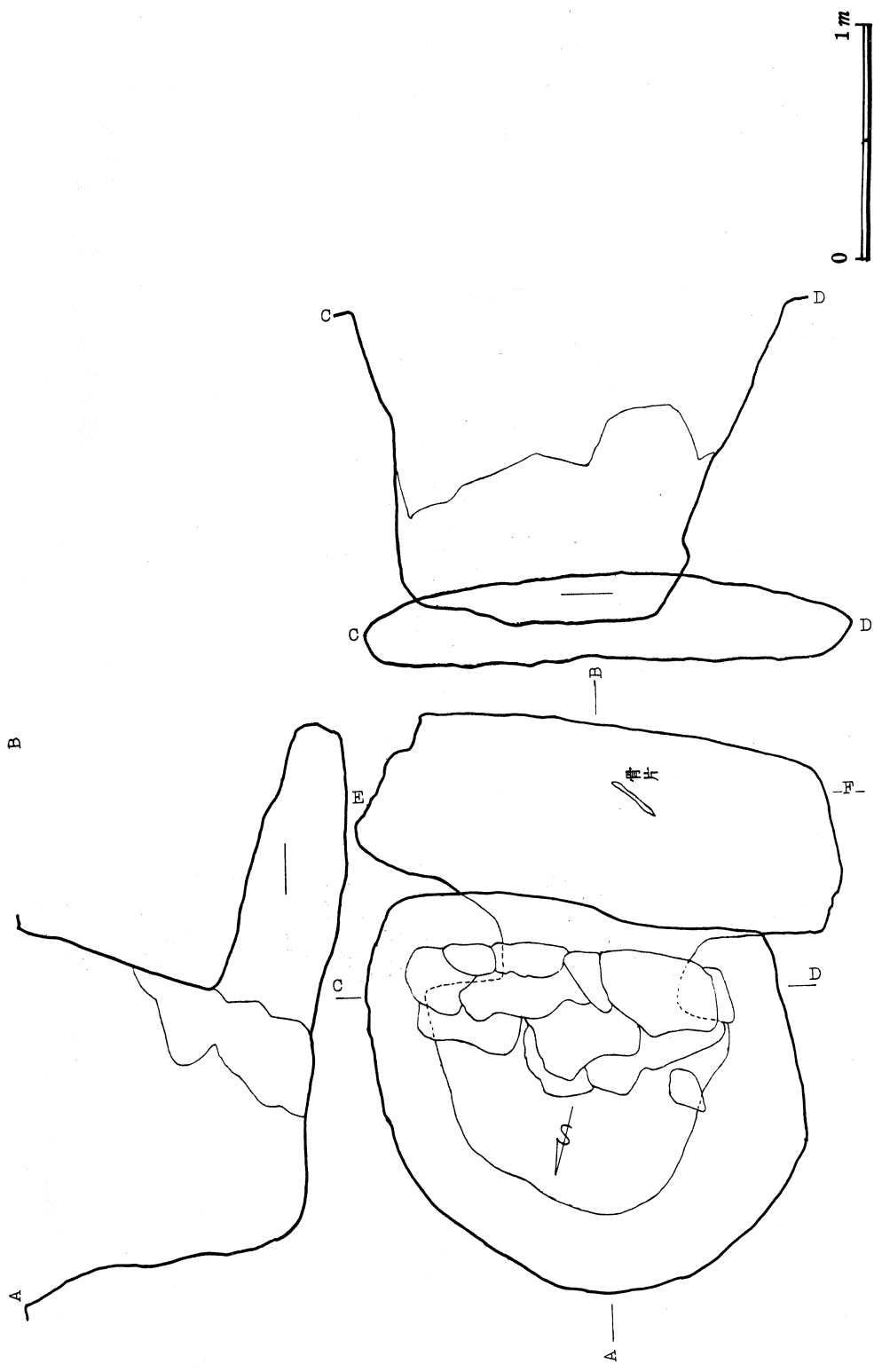
第 1 1 図 久見迫地下式古墳第 7 号



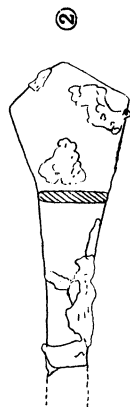
第 1 2 図 久見迫地下式古墳第 7 号出土遺物実測図



第13圖 久見迫地下式古墳第8号

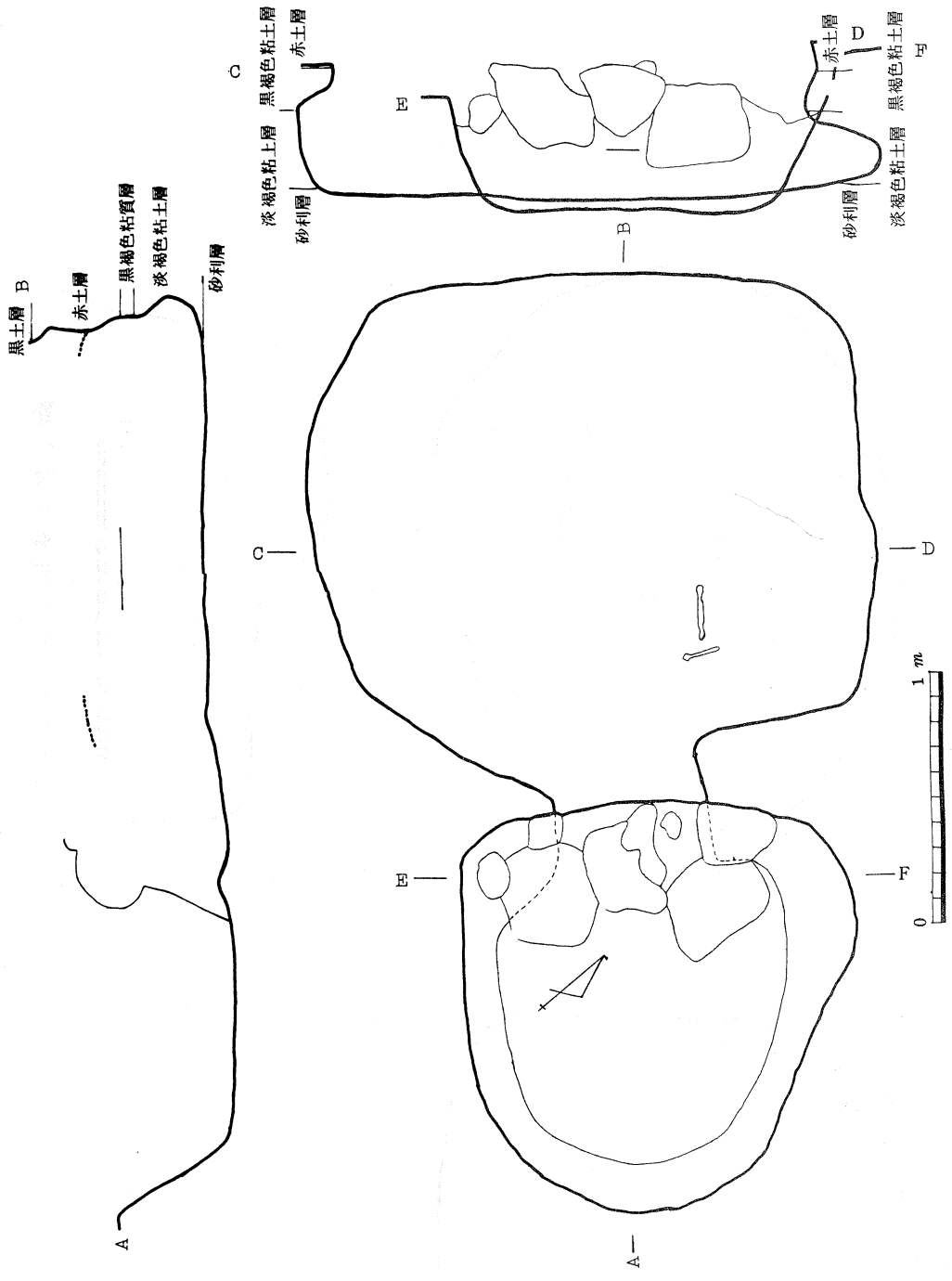


第 1 4 図 久見迫地下式古墳第 9 号



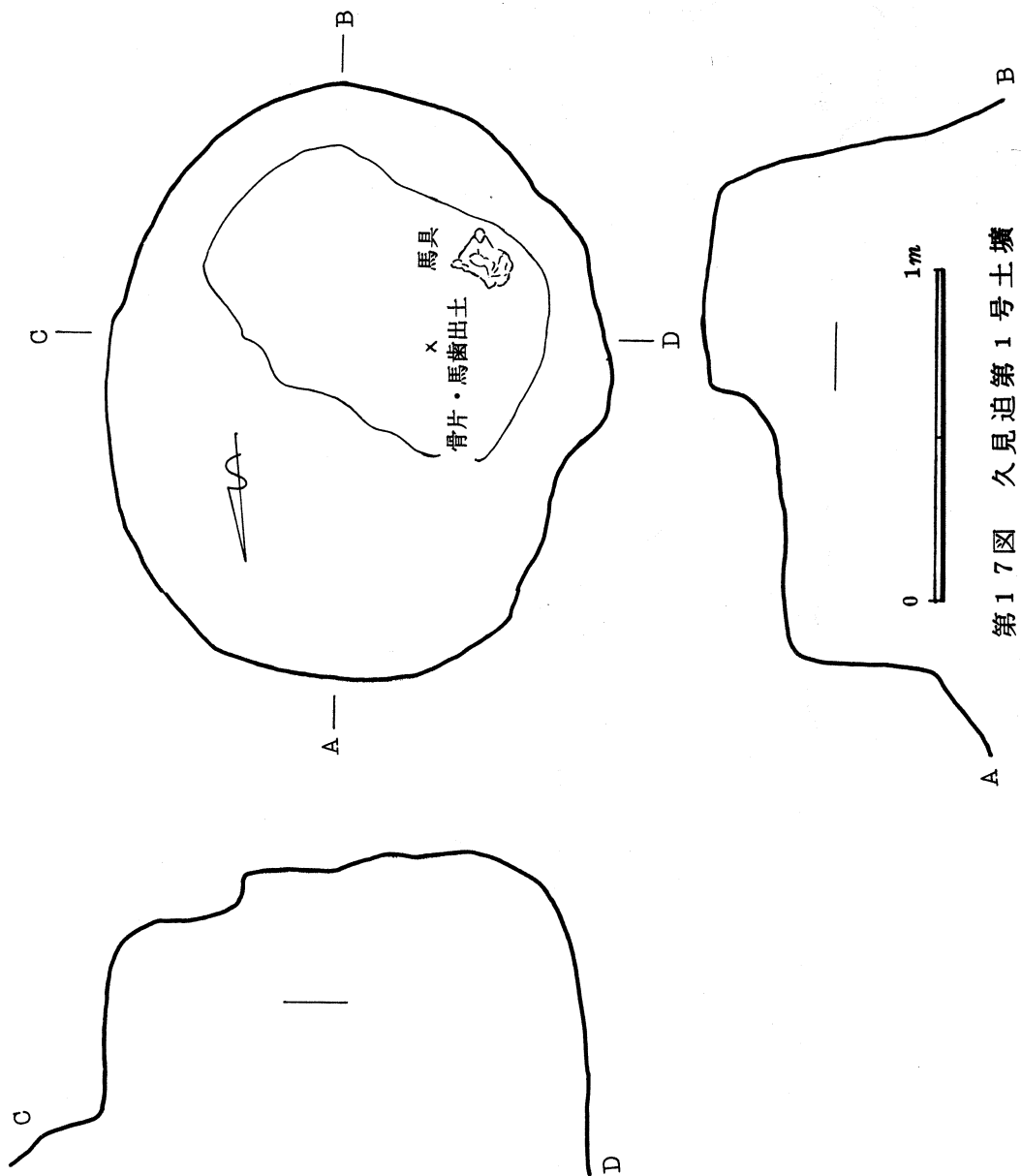
久見迫地下式古墳第9号・出土遺物

第15図 久見迫地下式古墳第10号出土遺物



第 16 図 久見迫地下式古墳第 10 号





第17圖 久見迫第1号土壙

## 5 馬頭遺跡

馬頭遺跡は久見迫遺跡の東方に続く台地であるが、ここに元龜3年(1572)5月4日島津氏と伊東氏が戦った木崎原合戦の後に悪病が流行したので、戦亡者の霊を鎮めるために建立されたという馬頭観音が祭られているためここを馬頭と呼んでいるわけで、久見迫や小木原と同じく池島川の河川段丘である。この丘地は西北から東南に長い台地で長さ95m、幅30mぐらいで、東北方に1段低い畑地と水田があり、この畑地を水田としたとき、地下式古墳が1基発見されたという。また東南の外れに断崖の崩壊したところがあり、そこは道路予定地外であったが、そこにも地下式古墳の竪穴式前室の1部が見えていたので、この台地を選んだわけである。しかし台地の東南部の約3分の1には近代の墓があつたりしたので発掘は西北部の延長60m、幅30mに限った。ここは8月29日から9月3日まで発掘調査をなし、地下式古墳13基と土器包含地1ヶ所、土壙1ヶ所を発見した。(第18図)以下その詳細を記そう。

### (1) 地下式第1号墳

地下式第1号墳はこの台地の西北端にあり台地の西北側の断崖に沿うて東西に幅2m、長さ20mのトレンチに竪穴式前室がかわって発見されたもので、竪穴式前室を南に、羨道と玄室を北にして、ほぼ正確に南北に方位して造られていた。竪穴式前室は久見迫のものと同じく、土をもって充満されていたが、これを排除すると半月形で上が大きく底に行くに従って縮まる形で、上部は弦部の長さ1.80m、弦より弧の頂上までの長さ2.10m、中央部の幅1.70mあり、底は弦部の長さ1.30m、弦より弧の頂点までは1.35m、中央の幅1.25mで、深さは80cm、底は中央に窪まり、最深部は深さ1mであった。北方の弦部に羨道があり、その入口は久見迫同様大きい粘土塊で閉塞されていた。

羨道は入口の幅55cm、長さ90cm、玄室に接するところの幅70cm、天井は平らで高さ40cm、底は玄室に向って20cm高くなっていた。

玄室はその奥に続き、ほぼ東西に長い隅丸の長方形で、奥行1.16m、幅2.55m、天井は落ちていたが高さ80cmぐらいであったと考えられた。底は中央に向って傾斜し、中央が10cm低かった。

この地層も久見迫とほぼ同様で、表土の下に黒色の土層があり、その下に赤褐色のローム層があって、さらにその下に褐色の粘土質土層があり、玄室はこの粘土質土層に設けられていた。遺物は玄室の西壁に接し、南壁から40 cmのところに馬鐸2個と轡1組があり、その北方50 cmのところに杏葉2個と雲珠3個があった。また玄室の中央ほぼ玄室の中心線のところに刀2口と剣1口が鋒を西にして置かれていた。さらにこの刀剣の東方壁に接して馬具があり、その南方30 cmのところに鉄鏃や刀子が1団となってあった。またその西方30 cmのところに勾玉1個があり、その西北10 cmのところに刀子1口があった。さらに東側壁の北寄りのところに、天井に近く10数本の鉄鏃が塊ってあったが、位置が高いことから見て筈を下にして矢を逆さまに立ててあったものと思われる。

この古墳には人骨はすでに消滅していたが、玄室の中央に縦に刀剣3口が鋒を西にしてあって室を2分しており、その東西に馬具があり、勾玉は南側の東部にあったことなどから見て2人分の人体が東を頭に、足を西にして葬られていたものと考えられる。それにしてもこの古墳からは勾玉1個、馬鐸2個、剣2口、刀2口、刀子3口、杏葉2個、轡1組、雲珠3、鉄鏃29本を数えたのであり、その遺物の豊富さにおいて今回調査した古墳中の随一といえることができる。ことに勾玉や馬鐸の副葬は注目すべきもので勾玉の地下式古墳よりの出土はえびの市では最初のことであり、馬鐸は前に小木原から1個出ているが、2個発見されたのは今回が初めてであった。なおこれら遺物の玄室内の配置は第19図の通りであった。以下主な遺物について詳記しよう。

#### 遺物 (第20図)

- 勾玉 1個  
長さ1.3 cm, 中央の幅0.6 cm, 厚さ0.4 cm, 孔は1方より穿って径0.3 cmである。石質は緑色を帯びた石であるが、翡翠ではない。
- ⑦刀 全長65.6 cm, 身長56.5 cm, 身幅2.8 cm, 棟幅0.8 cm, 莖幅2 cm, 厚さ0.5 cmである。
- ⑤刀 全長67.5 cm, 身長56.5 cm, 身幅3 cm, 棟幅0.5 cm, 莖幅1.5 cm, 棟幅0.3 cmである。
- ④剣 1部柄が欠損しているが、現長26.8 cm, 身長22.8 cm, 身幅2.8 cm, 莖幅1.5 cm, 厚さ0.3 cmである。
- ①刀子 柄を欠損しており現長7.2 cm, 身長5.7 cm, 身幅中央で0.8 cm, 棟幅0.2 cmである。

- ⑧ 刀子 全長 14 cm, 身長 10 cm, 身幅 1.2 cm, 棟幅 0.3 cm, 莖幅 1 cm, 厚さ 0.3 cm である。
- 刀子 全長 15 cm, 身長 13 cm, 身幅 2 cm, 棟幅 0.4 cm, 柄部は不明である。
- ⑨ 鉄鏃 全長 8 cm, 剣形, 身幅 2 cm。
- ⑩ 鉄鏃 全長 8 cm, 同 身幅 1.5 cm
- ⑪ 鉄鏃 全長 14.5 cm, 平根鉾形刃幅 3.6 cm, 刃は先端だけである。
- ⑫ 鉄鏃 全長 9.6 cm, 犁形平根, 刃長 2.5 cm。
- ⑬ 同 全長 15.4 cm, 尖根, 幅 1.3 cm, 矢柄径 1.3 cm。
- ⑭ 同 全長 12 cm, 尖根, 幅 1.5 cm。
- ⑮ 同 全長 13.5 cm, 尖根鉾形
- ⑯ 同 全長 12.3 cm, 同 幅 1.5 cm。
- ⑰ 同 全長 7.6 cm, 尖根, 幅 1.8 cm。
- ⑱ 同 全長 13 cm, 尖根, 幅 1.5 cm。
- ⑲ 馬鐸 青銅製で高さ 8.5 cm で, 断面は扁円形を呈し, 下底は弧状に入り込んでいるが, 下底の径は 5.5 cm × 3.2 cm で, 入り込みの高さは 2 cm である上部舞は 3.3 cm × 2.2 cm で, 鈕は半円形で, 幅 0.8 cm, 厚さ 0.3 cm である。舞に楕円形の穴があるのは舌を吊るすための紐を通すところである。片面に文様らしいものが見えるが, 鏞のため明らかでない。
- ⑳ 馬鐸 同じ青銅製で高さ 10 cm, 1部破損しているため底径は知り得ないが, 舞の径は 4.5 cm × 3 cm でやはり楕円形の孔がある。鈕は半円形で高さ 1.7 cm, 鈕の幅 0.8 cm, 片面に隈取りの中に斜格子目文が幽かに見える。この中に砂に混って動物の骨と, 青銅鏞をかぶった小さい口字形の金属があった。
- 動物の骨は宮崎大学農学部にて鑑定を依頼中である。
- 註 馬鐸は馬に懸けて音を発せしめるものであるから舌があるのが普通であるが, 舌が発見される例は稀で, 愛媛県宇摩郡妻鳥村の妻鳥古墳出土の馬鐸は朱漆塗の角製舌がついているというから, これもそれに類するものかも知れない。

②杏葉 扁円形で幅 8.5 cm, 高さ 7 cm, 厚さ 0.3 cmで上に懸垂のための突起があるが, それは高さ 3.5 cm, 幅 2 cm, 厚さ 1.5 cmである。

③杏葉 同形で幅 9.5 cm, 高さ 7.5 cm, 突起は欠失している。  
この両杏葉は鉄地金銅張であったかも知れないが, 今は鉄錆のため鉄製としか見えない。もちろん模様の有無もわからない。

雲珠 3個である。繫につける辻金具であることはいうまでもない。

轡 1組

轡は鏡板と喰と引手より成るものであるが, これは鏡板ではなく円轡である。円轡はやや扁円形で幅 10 cm, 高さ 8.5 cmの上に四角な面繫受がついている。これに喰と引手がついているものである。

其他 鉄器の中に馬具の1部である尾錠3個, 鎖状の鉄器などがあり, また用途不明の鉄器も1個ある。それは長さ 5 cm, 幅 1.8 cmの鉄器の裏側に上端と中央と下端に両側から留金があつて内側に曲っているもので何かをこれで留めていたものである。

## (2) 地下式第2号墳(第21図)

地下式第2号墳は第1号墳の南方に9 mを隔てて堅穴式前室を北に羨道と玄室を南にして造られていた。その方向は南北より35度西方に傾いていた。

堅穴式前室は半円形で, 上部が広く底部で縮まる形であり, 上部は弦部の長さ 1.60 m, 弦より弧の頂点までの長さ 1.70 m, 中央部の幅 1.70 mであるが, 底は弦の長さ 1 m, 弦より弧の頂点の長さ 1.25 m, 中央の幅 95 cmである。高さは 70 cmで底は平らであった。

羨道の入口は粘土で蔽われており, 入口の幅 70 cm, 長さ 45 cmで西側は中央が膨れていた。玄室との接点では 85 cmで, 天井は平らでやや外側に開いていた。高さは羨道の入口で 43 cm, 玄室との接点では 33 cmで底は平らであった。

玄室は東西に長い長方形で, 西壁の長さ 85 cm, 南壁の長さ 1.77 m, 東壁は西に傾いて 70 cm, 北壁は東端から斜め 40 cm, 西端から 37 cmの間に羨道が開いていた。底は平らで壁は丸味をもって天井に続いていた。天井の高さは 70 cmであった。遺物は東壁の中央に近く鉄鏃があり, その南方南壁に近く鉄鏃1本と羨道に近い中央部に人骨1片があった。

## 遺物

鉄鏃 2本、長さ25cmと17cmの尖根式である。

### (3) 地下式第3号墳(第22図)

地下式第3号墳は第2号墳の南方3.5mを隔てて竪穴式前室を西に羨道と玄室を東にしてほぼ東西に方位して造られていた。その方位は正確に記るせば、古墳の中軸線は東西の方向より10度西に傾いていた。

竪穴式前室は半円形で上部が大きく底に行くに従って縮まる形をなし、弦部の長さは1.65m、弦より弧の頂点までの長さ1.70m、中央の幅1.60mである。底部は弦部の長さ1.30m、弦より弧の頂点までの長さ1.05m、中央の幅1.15mで、底の深さは地表下90cmで、底部は羨道に向かって15cm降っていた。

羨道の入口は大きい粘土で嚴重に閉塞されており、これを除くと東方に開口した。入口の幅は75cm、長さは南が北より27cm長く北方は48cm、南側は75cmで奥で多少開き玄室との接点の長さは90cmであった。高さは75cmで、天井は平たく、底面は玄室に向かって15cm降っていた。

玄室はその奥に続き南北に長い楕円形で、南北の長さ2m、奥行は南側で70cm、北側は95cmであった。天井は壊れたが、高さ87cmで平たかったようである。床面は平坦で遺物は玄室の入口南側寄りに1があっただけであった。

遺物 刀子1、全長7cm身長3cm身巾2cm厚0.15

### (4) 地下式第5号墳(第23図)

地下式第5号墳は第3号墳の東南方に5mを隔てて竪穴式前室を南に羨道と玄室を北にして造られていた。その方向は南北より22度西に傾いていた。

竪穴式前室は半円形に近い形で、上部は弦部の長さ1.75m、弦より弧の頂点までの長さ2.20m、中央部の幅1.55mで底は弦部の長さ1.30m、弦より弧の頂点までの長さ70cm、中央の幅1mで深さは1.10mで竪穴式前室の入口から階段状に降っているが底は平らである。

羨道の入口は大きい粘土で閉塞されていたが、入口の幅は55cm、長さ西側90cm、東側は20cm長い。天井は平らで、高さ70cm底も平らであった。玄室の接点では開いて幅1mとなっていた。

玄室はその奥に続き東西に長い長方形をなし、東壁の長さ1.50m、北壁の長さ

2.55 m, 西壁は1.45 m, 南壁は東端から60 cm, 西端から斜めに1.20<sup>m</sup>のところの間に羨道が開いている。従って羨道は玄室の東寄りに開いているわけである。天井は落ちていたが, 高さ1 mあったものと推定された。床面は平らで遺物は玄室の北壁に接した東方に刀1口が鋒を西にして壁に平行してあり, 室の東南隅に近く剣と鉄鏃, 刀子があり, さらに玄室の西北隅に雲珠および馬具と鉄鏃, 刀子などが1塊となって在った。遺物は刀1口, 剣1口, 刀子4口, 鉄鏃7本, 轡1組, 雲珠4個であった。主な遺物は次の通りである。

#### 遺物 (第24図)

- ⑫ 刀 全長91 cm, 身長75 cm, 身幅3 cm, 棟幅0.7 cmであるが, 鞘が1部残っており, 鞘は幅4.5 cm, 厚さ3 cmの卵形である。莖の長さ16 cm, 莖幅2 cm, 厚さ0.4 cmで莖の端より2.5 cmのところと12.2 cmのところに目釘穴がある。
- 剣 全長24 cm, 身長19 cm, 身幅3.5 cm, 柄長5 cm, 莖幅2 cm, 厚さ0.3 cmである。
- ① 刀子 全長13.5 cm, 身長9.5 cm, 身幅1 cm, 棟幅0.3 cmで, 柄部に木質が残っている。
- ⑦ 刀子 全長19 cm 柄部に木質が残っている, 身長14 cm, 身幅1.7 cm, 棟幅0.5 cmである。
- ⑧ 刀子 全長17.5 cm, 鞘に入っているが, 身幅1.3 cm, 棟幅0.2 cmが測られる。
- ⑩ 刀子 全長30.5 cm, 身長23.5 cm, 身幅2.5 cm, 棟幅0.5 cm, 柄長7 cm, 莖幅1.5 cm, 厚さ0.4 cm, 柄頭より2.3 cmと5 cmのところに目釘がある。
- ⑨ 鉄鏃 全長14.5 cm, 鈍形尖根, 刃幅1.3 cm。
- ④ 鉄鏃 全長16 cm, 鈍形平根, 幅2.5 cm。2本錆着している。
- ⑥ 鉄鏃 全長9.5 cm, 鈍形平根, 幅2.3 cm。
- ⑪ 同 全長8.5 cm, 鈍形尖根。
- ② 同 全長15.3 cm, 柳葉, 幅2 cm。
- ③ 同 全長14 cm, 鈍形, 幅2 cm。
- ⑤ 同 全長7.5 cm, 鈍形, 幅3.8 cm。
- ⑬ 轡 鏡板と喰, 引手より成る。鏡板は片方は折れている。完全な方は長さ10 cm, 幅7.5 cmで上に面繫受の突起があり凸字形に近い。

喰の両端を鏡板の窓に通しているもので、喰は長さ各 8 cm で 0.7 直径の円い鉄でできており、引手は長さ 1 2.8 cm, 径 0.8 の丸い鉄でできている。

雲珠 4 個である。1 個は長さ 5 cm × 5.4 cm, 幅 1.4 cm の中央に径 2 cm, 高さ 1.2 cm の円形のものがある。

#### (5) 地下式第 6 号墳 (第 25 図)

地下式第 6 号墳は第 5 号墳の東南 8.5 cm のところに、竪穴式前室を東に羨道と玄室を西にして造られていた。その方位は東西の方向より 12 度南に傾むいていた。

この古墳は後世に破壊されたらしく、玄室に石臼のようなものが落ち込んでいた。古墳の形は竪穴式前室はほぼ円形で、やはり上が広く底で縮まる形であった。上部は東西 1.30 m, 南北 1.30 m で底部は東西 6.3 cm, 南北 8.0 cm の楕円形で、深さは 7.5 cm で底は平たくその西壁に羨道が穿たれていた。羨道の閉塞も壊れていたが、羨道は入口で幅 4.0 cm, 長さ 6.0 cm, 玄室の接点での幅は 8.0 cm, 高さは 4.0 cm が計られた。天井は壊れており、底は玄室に向って若干降っていた。

玄室も天井部が破壊されていたが南と北の隅には天井の一部が残っていた。玄室は南北に長い楕円形で、長さ 1.80 m, 東西の奥行は中央で 1 m であった。天井は平たく、北方で高さ 5.0 cm, 南方では 4.0 cm であった。床面は平らであったが、遺物は何もなかった。

#### (6) 地下式第 7 号墳 (第 26 図)

地下式第 7 号墳は第 6 号墳の東方に 7 m を隔てて竪穴式前室を南にしてほぼ南北に方位して造られていたが、その方位は南北より 25 度西に傾いていた。

竪穴式前室は半円形で、上部が大きく底に向うに従って縮まる形である。すなはち上部は弦部の長さ 1.60 m, 弦より弧の頂点までの長さ 1.65 m, 中央部の幅 1.65 m であるが、底は弦部の長さ 1.15 m, 弦より弧の頂点までの長さ 8.0 cm, 中央部の幅 1.20 m であった。深さ 8.7 cm, 底は羨道に向って 3.0 cm 降っていた。

羨道は入口を粘土で閉塞され入口が開いている形で、入口の幅 9.5 cm, 長さ 6.0 cm, 玄室の接点では 7.0 cm であった。天井も入口で上に開いており入口の高さ 3.7 cm, 少し降って又上に上りつつ玄室に続いていた。底は玄室に向って 4.3 cm 降っていた。従ってこの古墳の竪穴式前室と羨道とは玄室に階段状に降っていた。



玄室は東西に長い長方形で、北壁が南壁より15 cm長い。奥行1.55 m、東西の長さ2.60 m、天井の高さは70 cmで底は平坦であった。遺物は玄室の東壁に接する南側に環状の鉄製品が1個あり、北側に鉄鏃が1本あった。また西側に南壁から北に43 cm、西壁から40 cmのところに長さ16 cmの平根の大きい鉄鏃が1本刃を東にして玄室の方向と併行してあり、その北にこれに併行して刀子1口があった。

#### 遺物

鉄鏃 全長16 cm平根巾4 cm

同 全長9 cm、柄部のみ 径

環状鉄器 巾0.6 cm、厚0.3 cmの鉄片を経5 cmの半円状に曲げたものである。

刀子 長15 cm、身長9 cm、身巾2 cm、棟巾0.4 cm

#### (7) 地下式第8号墳(第27図)

地下式第8号墳は第7号墳の東南方に8.5 mを隔てて竪穴式前室を西北に、羨道と玄室を東南にして造られていたが、その方位は南北より55度西に傾いていた。

竪穴式前室は半円形で、上方が下底より大きくなっており、上部は弦部の長さ1.60 m、弦より弧の頂点までの長さ1.75 cm、中央部の幅1.50 mで底は弦部の長さ1.40 m、弦より弧の頂点まで1 m、中央部の幅1.30 mで深さは70 cm、底は羨道に向って8 cm降っていた。

羨道の入口は粘土で閉塞されていたが、入口の幅75 cm、長さ西側で40 cm、東側で60 cmで天井は平たく高さ60 cm、底は玄室に向って15 cm降っていた。

玄室は東北から西南に長い長方形で、西南部が羨道が短かいだけで広く、奥行は東北で1.3 m、西南で1.47 m、中央は奥壁が外に張り出しているのので1.65となっている。長さは2.27 mである。天井は落ちていたから高さは不明であるが、底はほぼ平たく遺物は室の東北側に2本、西南側に2本の鉄鏃があった。

#### 遺物

鉄鏃 4本中2本は破片、1本は平根、1本は尖根である。

### (8) 地下式第9号墳(第28図)

地下式第9号墳は第8号墳の東北方に6.5mを隔てて竪穴式前室を東北に羨道と玄室を西南にして造られていた。その方位は南北より古墳の中軸線は37度東に傾いていた。

竪穴式前室は半円形で、上部が底部より大きい形であった。上部は弦部の長さ1.40m、弦より弧の頂点までの長さ1.58m、中央部の幅1.35mであったが、底部は弦部の長さ1.20m、弦より弧の頂点までの長さ1.20m、中央部の長さ1.10mであった。深さは1.10m、底は羨道に向って階段状に55cm降っていた。

羨道は西南の壁に穿たれ、入口は粘土で嚴重に閉塞されていた。入口の幅は75cm、長さ55cm、奥でやや開いて玄室との接点では90cmであった。天井は平らで、若干入口の方に高くなっており入口の高さ64cm、玄室の接点の高さ68cmであるが、これは底面が玄室に向って6cm降っているからである。羨道の入口の中央西寄りのところに刀子と鉄鏃が各1本併行して刃を外に向けて置かれていた。

玄室は西北側に1方向的に設けられ、奥壁の中央より西北が外に張り出しているので古墳の平面形は洋鍵のような形を呈していた。玄室の大きさは奥行1.20m、長さ1.76mであった。天井は穹窿形で、高さは97cmと推計された。床面は平らで玄室のほぼ中央、西北側の羨道の壁の延長線上に近く刀1口が西北壁の線に平行に、柄部を外に向けて置かれ、この刀には刀子1口がやや交叉して鏤着していた。

#### 遺物(第29図)

- ②刀 全長53.7cm、身長46.8cm、身幅2.5cm、棟幅0.8cm、柄長6.9cm、莖幅1.8cm、厚さ0.3cm、そして柄端より1.5cmのところに目釘がある。この刀は鞘の1部を遺存しており、鞘口に銅装が施こされている。銅装は幅3cmの銅板を巻いたものでこの部分の断面は卵形を呈している。
- ①刀子 全長9.7cm、身幅0.7cm、棟幅0.2cm、柄には木質が残っている。
- ③刀子 これは刀に鏤着しているものである。全長19.7cm、身長16.2cm、身幅1.5cm、棟幅0.3cm、莖幅0.7cm、厚さ0.3cmである。
- 鉄鏃 全長6cm

(9) 地下式第10号墳(第30図)

地下式第10号墳は第9号墳の北方に5.5mを隔てて竪穴式前室を西南に、羨道と玄室を東北にして造られていた。その方位は古墳の中軸線は南北の方向より40度東に傾いていた。

竪穴式前室はやはり半円形で、上部が大きく底部にゆくに従って縮まる形であった。上部は弦部の長さ1.70m、弦より弧の頂点までの長さ1.45m、中央部の幅1.95mで、底部は弦部の長さ1.50m、弦より弧の頂点まで1.07m、中央部の幅1.55mで、深さは1mあり、底は閉塞粘土のあるところまで平たくそれから10cm降って羨道に続いていた。

羨道は東北の壁に穿たれ、入口を粘土で閉塞されていたが、入口の幅は75cm、長さは東南側で30cm、西北側が40cmで極めて短かいが内に開いていて奥では1mとなる。天井は平たく、高さ57cmであった。床面は平らであった。

玄室はその奥に続き奥行1m、長さ1.80mの楕円形をなし、四方の壁が上方に縮まり、天井は中央が高く高さ90cmであった床面は羨道より25cm低く造られていて平らであった。それでこの古墳は地表からの深さ床面まで1.40mであり、床面は砂利層であった。そして奥壁の中央に接して壁に平行に刀1口が柄を東南にして置かれていた。

遺物(第31図)

- ③刀 全長1.02m、身長85cmで鉄鏢を有するものである。身幅3.5cm、棟幅0.7cm、身にも木質の1部が残っている。柄は幅2cm、厚0.5cmで木質が残り、桜の皮で巻かれている。鏢は鉄製無地で、長さ8cm、幅7cmの卵形で、幅は2cm、厚さ外側0.5cmで柄につく方は薄い。

(10) 地下式第11号墳(第32図)

地下式第11号墳は第10号墳の西方に8mを隔てて竪穴式石室を東に羨道と玄室を西にして、ほぼ東西に方位して造られていた。その方位は東西の方向より約30度北に傾むいていた。

竪穴式前室は半円形で、上が広く底が小さい形であった。上部は弦部の長さ1.40m、弦より弧の頂点までの長さ1.30m、中央部の幅1.35mで、底部は階段状に東より西に降って底に達し、弦部の長さ1m、弦より弧の頂点までは50cmで、深さ65cm、底は羨道の中央まで20cm降っている。

羨道は入口を粘土で閉塞していたが、入口の幅 7.2 cm, 長さ 3.5 cm で玄門での幅は 8.5 cm である。底は中央から平らで天井は平たく高さ 3.5 cm であった。

玄室は南北に長い楕円形に近い変形で、南北の長さ 2.15 m, 奥行 1.10 m, 天井は平たく高さ 5.5 cm, 底も平らであった。遺物は玄室のほぼ中央に鉄鏃が 1 本、その北方に刀子 1 口があった。

#### 遺物

刀子 全長 8.2 cm, 柄を欠損しており、身幅 2 cm, 棟幅 0.4 cm である。

鉄鏃 長さ 6.5 cm, 平根剣形, 刃幅 3.5 cm である。

### (11) 地下式第 12 号墳 (第 33 図)

地下式第 12 号墳は第 7 号墳の南方 6 m, 第 8 号墳の西方 3 m のところに、竪穴式前室を西南に、羨道と玄室を東北にして造られていたが、その方位は南北より 5.5 度東に傾いていた。

竪穴式前室は半円形で、上が広く底に縮まる形であった。上部は弦部の長さ 1.20 m, 弦より弧の頂点まで 1.75 m, 中央部の幅 1.40 m で、底は弦部の長さ 1.15 m, 弦部より弧の頂点まで 1.30 m, 中央部の幅 1 m で、深さ 1.40 m, 底は平らであった。

羨道は東北の壁に穿たれ、粘土で閉塞されていたが、外側と内側に開く形で、入口の幅 7.0 cm, 長さは北側で 3.2 cm, 南側 4.0 cm, 高さは 7.0 cm, 天井は平らで、底も平坦であった。

玄室は不正形で、奥行 1.70 m, 長さ 2.10 m, 天井は壊れていたが、底は平らであった。遺物は東壁に刀が 1 口柄を下にして斜めに立ててあったほか、東北壁に鉄鏃 5 本その他の鉄片があった。

#### 遺物 (第 34 図)

①刀 全長 3.9 cm, 身長 2.7 cm, 身幅 2 cm, 棟幅 0.5 cm, 莖幅 1.5 cm, 厚さ 0.5 cm, であるが、この刀は関から莖に漸次細まる作りである。

鉄鏃 5 本とも刀形で尖根である。

### (12) 地下式第 13 号墳 (第 35 図)

地下式第 13 号墳は第 10 号墳の西北方に 6 m を隔てて農道の岸に竪穴式前室を南に、羨道と玄室を北にして、ほぼ南北に方位して造られていたが、玄室の 1 部は

道路によって切断されていた。古墳の中軸線の方法は南北より15度西に傾いていた。

竪穴式前室は半円形で、上が広く底に縮まる形であった。上部は弦部の長さが1.40m、弦より弧の頂点までの長さが1.45m、中央部の幅1.90mで、底部は弦部の長さ1.10m、弦より弧の頂点まで1.10m、中央部の幅1.30mで、深さは60cmあり、底は羨道に向ってわずかに5cm傾斜していた。

羨道は北壁に穿たれ、入口を粘土で閉塞してあったが、入口の幅80cm、長さ15cm、天井は平らで高さ70cm、底は平らであった。

玄室は東西に長い長方形であるが、東側の壁を道路で切断され、東壁の長さ1.10m、北壁は1.55m、西壁は西に1部膨れて1m、南壁は東から斜めに1.05m、西から斜めに20cm、その間に羨道が開いている。天井は平たく高さ40cm、床面は平らで遺物は玄室の西北隅に馬具が重なっており、室のほぼ中央に鉄鏃があり、羨道の入口に接した南壁に鉄片があった。

#### 遺物(第36図)

##### 轡 1組

輪轡で、9.5cm×7.6cmの扁円形の上に幅4.5cm、高さ2cmの面繫受があり、これは厚さ1cmである。

喰は長さ10.5cmで径0.8の円い鉄で造られている。

引手は長さ21cmで、径1cmの円い鉄で造られている。

##### 錠 1組

木製の錠であつたらしく、木質部は消滅しているが、八字形のこれを吊した鉄板に鋸のついたものが残っている。これを8字形の鎖を2重にしたものを3段つなぎ、その上に鉸具頭をつけているが、鉸具頭は長さ8cm、幅4.5cmで3段の鎖は長さ7.5cmのもの2段と7.3cmのものが1段である。

##### 雲珠 1個

菱形である。菱形には四本の鋸が各角にあり幅5.5cm、高さ3.8cmである。

##### 鉄鏃

#### (13) 地下式第14号墳(第37図)

地下式第14号墳は第13号墳の西北に5.5mを隔てて竪穴式前室を南に羨道と

玄室を北にして、ほぼ南北に方位して造られていたが、正しい方位は南北の方向より40度西に傾いていた。

竪穴式前室は楕円形で、上が広く底にゆくに従って縮まる形であった。上部は南北の径2.10m、東西1.80m、底部は半円形がゆがんだ形で、弦部の長さ1.20m、弦より弧の頂点までの長さ1.10mである。深さ70cmで底は羨道に向って若干上っている。

羨道は北壁に設けられ入口を粘土で閉塞してあったが、入口の幅77cm、長さ70cmで奥に開いており、玄室の入口では1.10mとなっていた。底は入口で15cm下がり漸次奥に行くに従って上っていた。天井は平たく高さは入口で40cm、奥で60cmであった。

玄室はその奥に続き、東西に長い楕円形で長さ2.30m、奥行1.20m、底は奥にゆくに従って高く、入口より10cm高い。天井は平たく高さ60cmであった。床面にはほぼ中央西寄りに骨片が少しあったほか人骨はほとんどなかった。西壁に接して剣1口が壁にほぼ平行に、柄を北にしてあり、これと交叉して刀1口があつた。剣の南側に鉄鏃が1塊まりとなっており、刀と鏃塊との間には朱が多く残っていた。また鏃塊の西方の羨道入口に刀子2口があり、その西方西壁に接して鐙があり、その西方にも馬具があった。

#### 遺物(第38図)

- ⑦ 剣 全長67.2cm、身長57cm、身幅3.5cm、柄長10.2cm、莖幅2cm、厚さ0.4cm。
- ⑧ 刀 全長36cm、身長27cm、身幅2.3cm、棟幅0.4cm、莖幅1.5cm、厚さ0.4cmで柄頭から1cmのところに目釘がある。
- ⑬ 刀子 全長21.5cm、身長14.5cm、身幅2cm、棟幅0.4cm、柄に木質が残っている。
- 刀子 全長11cm、身長8.5cm、身幅1.2cm、棟幅0.3cm。
- 刀子 全長8cm、柄折れ、身長7.6cm、身幅1.5cm、棟幅0.4cm。
- ⑫ 刀子 全長12.3cm、身長7.5cm、身幅1.5cm、棟幅0.4cm、莖幅1cm、厚さ0.3cm。
- ① 鉄鏃 無莖、長さ6.8cm、幅中央で1.8cm、逆刺あり。
- ② 同 長さ12.5cm、逆刺あり、幅中央で1.8cm。
- ③ 同 長さ14cm、柳葉尖根。
- ④ 同 長さ10.3cm、鉾形、逆刺あり、身幅2.4cm。

第13号のものと同じく木製であつたらしいが木質はすでに消滅している。上に長さ8 cm, 中央の幅4.5 cmの鉸具頭があり, その下に木製の鳩胸や踏込, 舌に当るものがあつたらしく, 長さ12.5 cm, 幅1.8の鉄板に鉸3を有し八字形に先端を拡げたもの2個づつがついている。

#### (14) 土器包含地

地下式第3号墳の南に接して黒色の土層の中に埴器や須恵の破片などを多く包含しているところがあり, はじめここも古墳ではないかと思つたが, 古墳ではなく単なる包含地であつた。その包含する面積は, 第3号墳の南に接してほぼ東西に長い楕円状の地域で, 東西6 m, 南北3 mであつた。住居址ではないかと思つたが, 古墳時代後期にこのような住居址があるはずもないので, 次に述べる土壙第1号と関係があるのであらうと考えられる。但し須恵器を含んでいることは1考を要する。

#### (15) 土壙第1号

馬頭土壙第1号は地下式第5号墳の南方7 mのところであり,

土壙はほぼ南北に長い楕円形で, 南北1.08 m, 東西8.7 cmで, 深さ2.8 cm, 底は径7.5 cmで平たいもので, 図に示すごとく, この土壙内には6個の埴器の盤が入っていた。

ここの地層は表土の下に厚さ3.3 cm厚さのオレンジ色のロームが入っており, その下に7 cm内外の褐色粘土質土層があり, その下は黒褐色の土層となっているが, この土壙はオレンジ色のロームの2.1 cm下から黒褐色土層に掘り込んでいた。

この土壙が何のために設けられたものであるかということは俄かに断定しがたい。われわれは限られた日程を僅かに残す時点でこの遺跡に出遇つたが, 次ぎつぎに発見された地下式古墳に追われて, この遺跡を十分に追及する時間を持たなかつたので, ここには将来の参考のために記録するに止めたいが, 私考をもってすれば恐らく埴器の窯で, この壙内に薪と粘土製の器を入れて焼いたものと思われる。壙内な

どが著じるしく焼けていなかったのは、それほど度々焼いていなかったものと考えられる。埴器は須恵器と異なり赤焼きで火度が低いから、このような穴に薪に埋まるようにして焼けば出来るのである。色が赤いのも開放されたところで酸化焔で焼かれたことを示している。

### 第3 遺跡の特徴と年代

以上に記したごとく、えびの市内の遺跡は小木原で地下式古墳3基（1基は破壊されたもの）家の跡2個、久見迫で地下式古墳10基と馬を葬った土壇1基、馬頭で地下式古墳13基と土壇1基、包含層1ヶ所を発見して調査した。もとより大部分は地下式古墳であったが、これらの地下式古墳は小木原のものを除いて、久見迫の10基と馬頭の13基はみな同じ形式のものであった。すなはち竪穴式前室は半円形またはその変形のもので、この竪穴式前室を土で埋めたもので、羨道の入口の前を巨大な粘土質の土塊で閉塞していた。そしてこの閉塞以外には、どこも閉塞してはなかった。玄室はほとんど長方形または楕円形であったが、みな竪穴式前室と羨道とに対して直角（平入り）に設けられ、天井は平たく、家形をなすものはなかったし、壁にも棚状の施設のあるものはなかった。

このような形式は、小木原のバス停留所の南と北に100基以上も発見された地下式古墳が、ほとんど竪穴式前室を土で埋めず、その上に蓋石を置いて、前室の頂上（入口）を閉塞していたものと、著じるしい相違を示していた。

このような久見迫や馬頭の古墳は、地下式古墳の中でも後期に属するもので、古墳時代でも後期の1300年ぐらい前（7世紀）のものと考えられる。

なお遺物について見れば、馬具の副葬が多いことが感ぜられた。これを前に比較した小木原の地下式古墳と比較すれば、小木原では衝角付兜や短甲が相当に出土したが、今回は甲冑は1個も出なかった。もちろん今回は20余基を掘ったに過ぎなかったからでもあろうが、それにしても久見迫と小さい谷1つを隔てるにすぎない小木原から甲冑が出て、久見迫や馬頭からは甲冑が出なかったという事実は、古墳の形式の相違と関係がないとは云えないように思われる。

古墳時代後期のこのような群集墳は家族墓であると考えられる。地下式古墳が羨道の入口または竪穴式前室の入口を閉塞していることは、この閉塞を撤去して次の死者を葬るための準備であって、現に1基の玄室に数基の人骨が葬られている事実

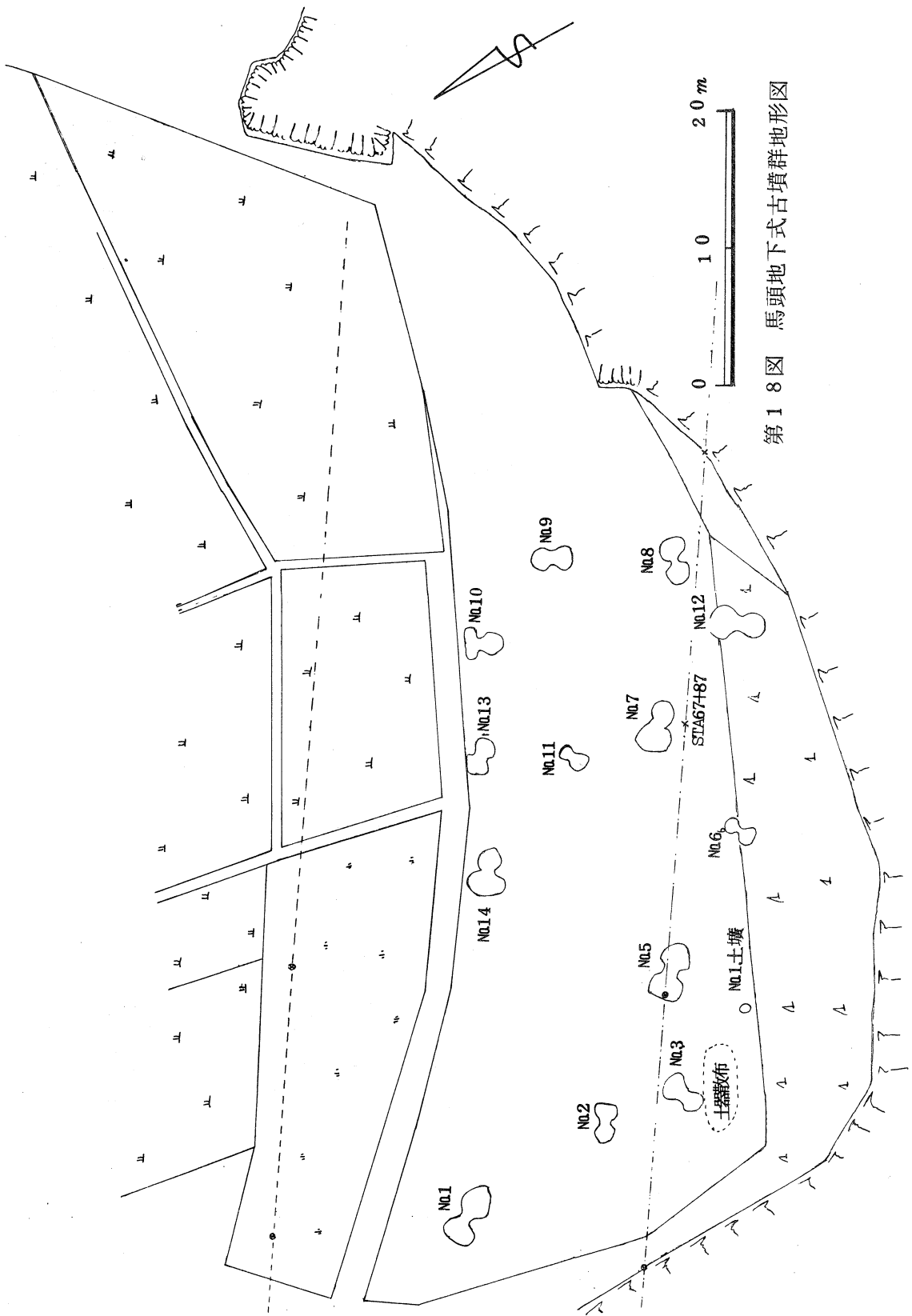


がこれを示している。つまり1基の地下式古墳は1家族の墓であると考えられるが古墳時代後期の日本の社会は父家長制家族の社会であったといわれている。父家長制の家族というのは、単婚家族が沢山集まった家族で、その上に男性の家長が居たのである。だからそれぞれの地下式古墳は単婚家族の墓であり、それが10基集まった久見迫には、10の単婚家族が集合した久見迫氏の墓であり、馬頭は13の単婚家族が集合した馬頭氏の墓であると見ることができる。そして勾玉や馬鐸、馬具などを多く副葬していた古墳が父家長の墓であると見することもできる。

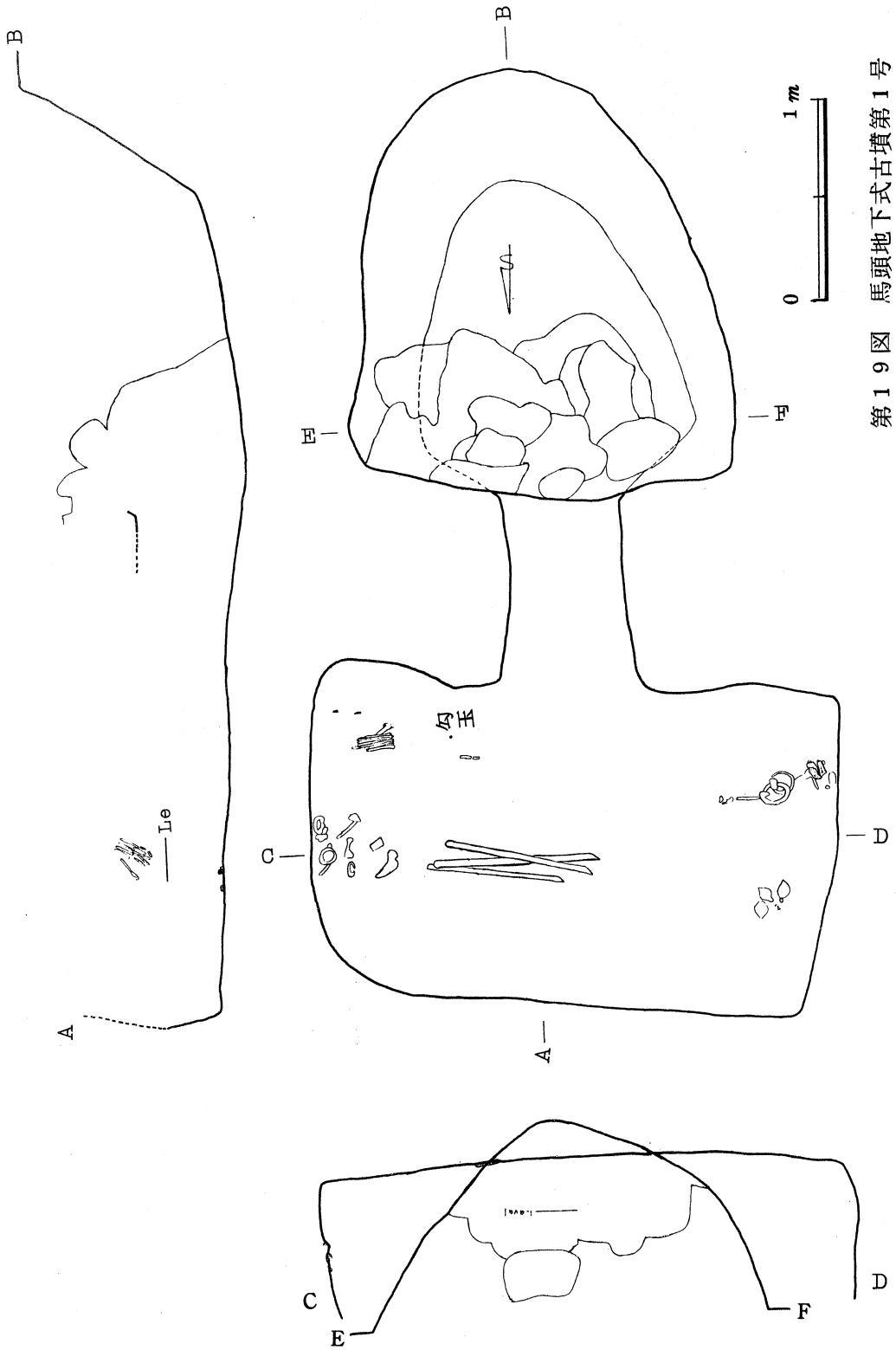
小木原にも、このような幾つかのグループがあったわけであるが、このように古墳の形式が異なることは、これらの古墳の主である家族の職業または社会的役割の違いではないかと思われる。竪穴式前室を埋めるのは地下式古墳1般の形式であるが、これを埋めずしてその上に蓋石を置くものは、宮崎県ではえびの市のみに見られるもので、鹿児島県にもこの形式があるから、この形式のものに甲冑が多いということは、夷守といったような特別の役割をもった人の墓ではないかと考えられるのである。

なお、今回の調査の学術的価値について1言すれば、従来地下式古墳は破壊されて発見されたもののみを調査したのであるが、今回は積極的に未発見のものを発見して発掘調査した点において最初のことで、その意味では学術上に貴重な調査であったといえることができるであろう。

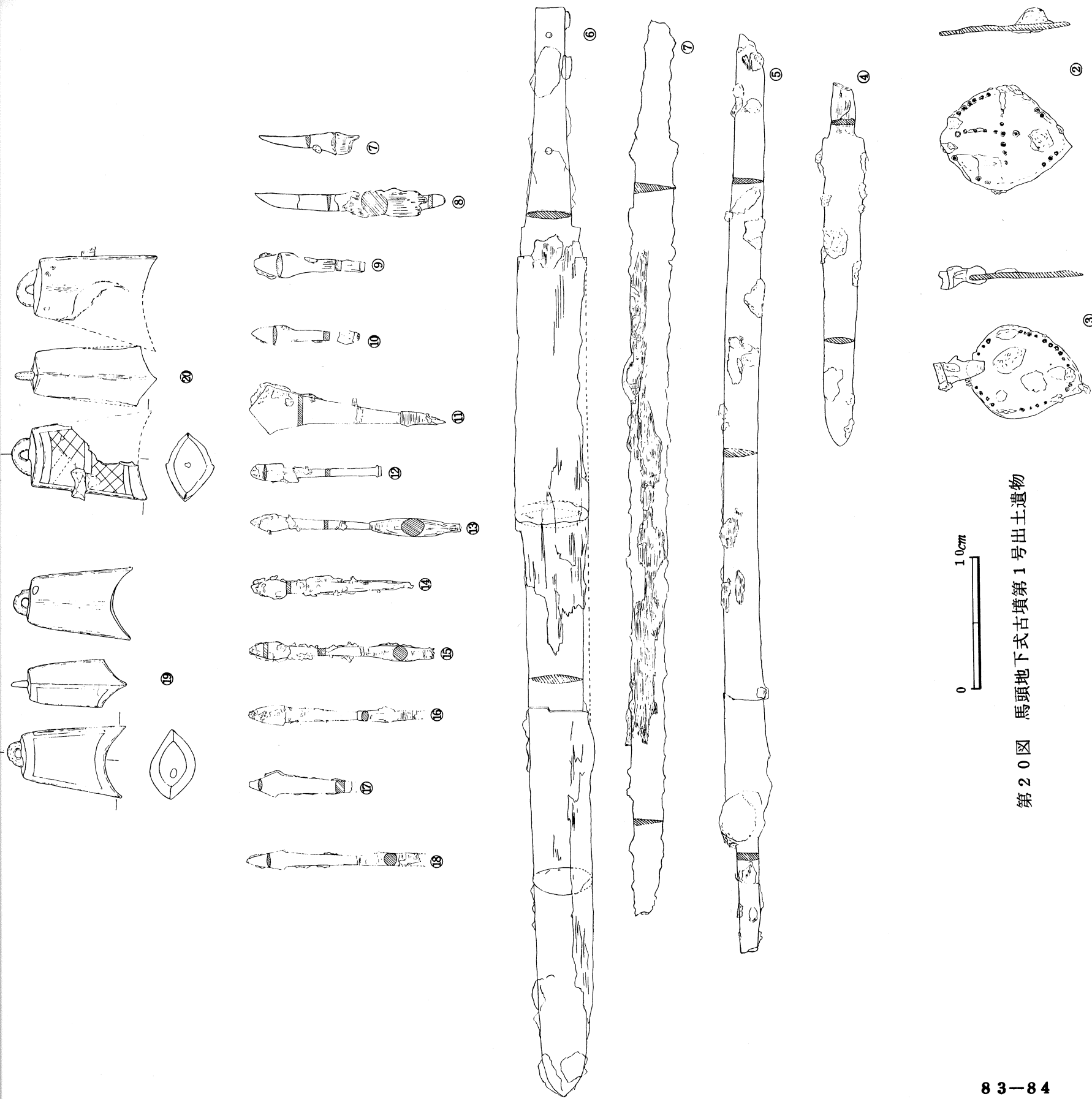
(文責 石川恒太郎)



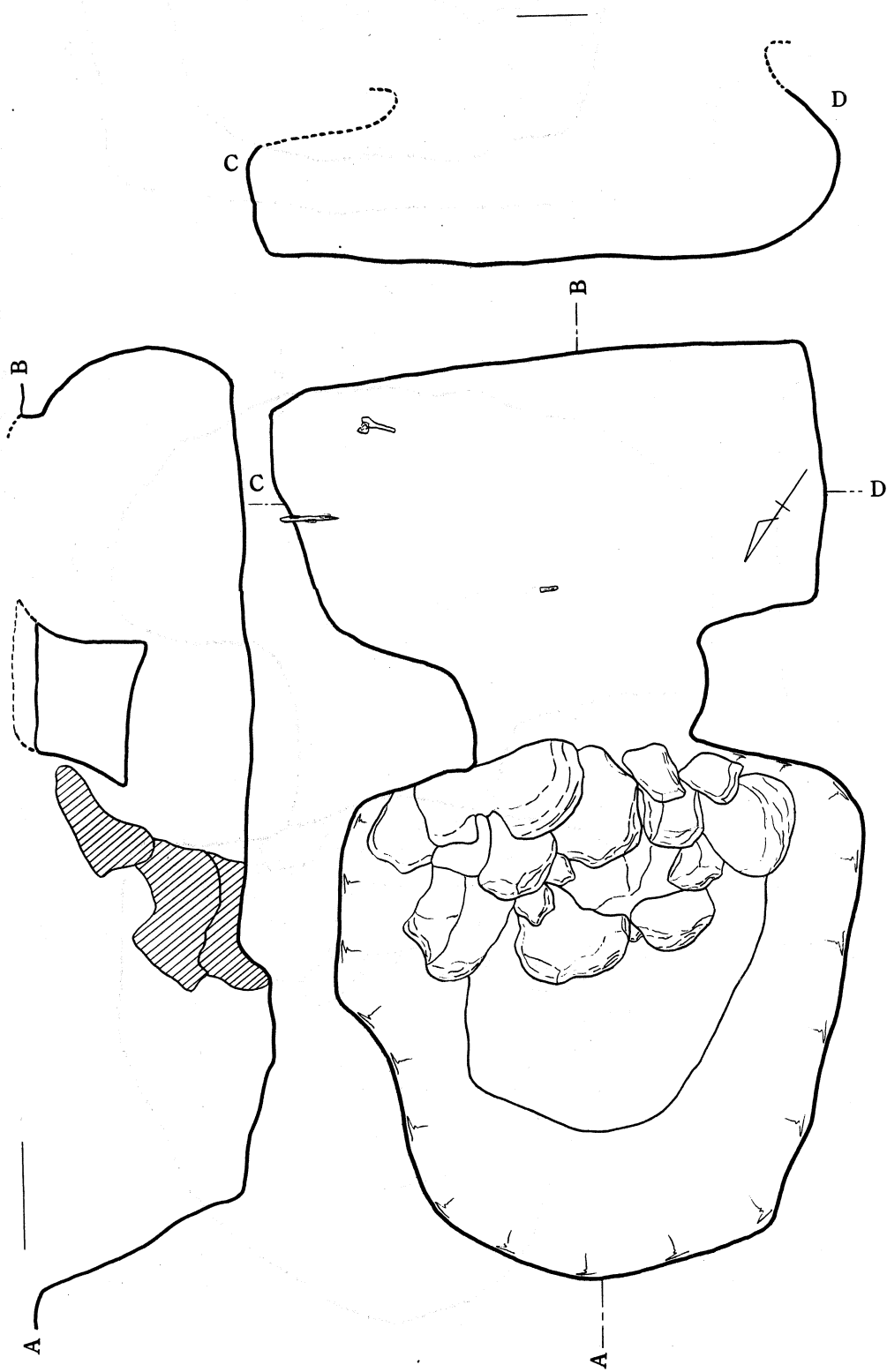
第18圖 馬頭地下式古墳群地形図



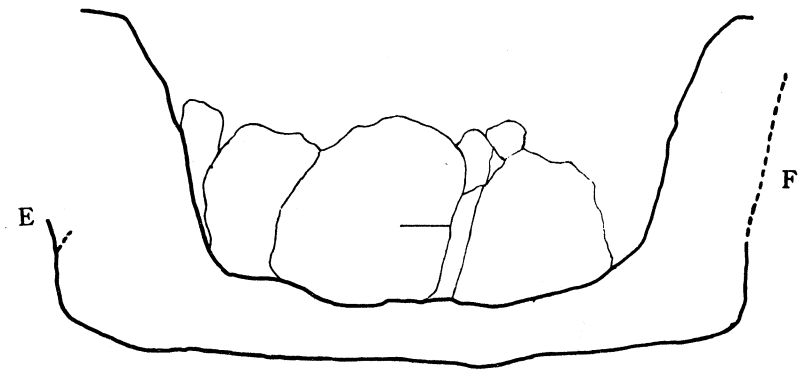
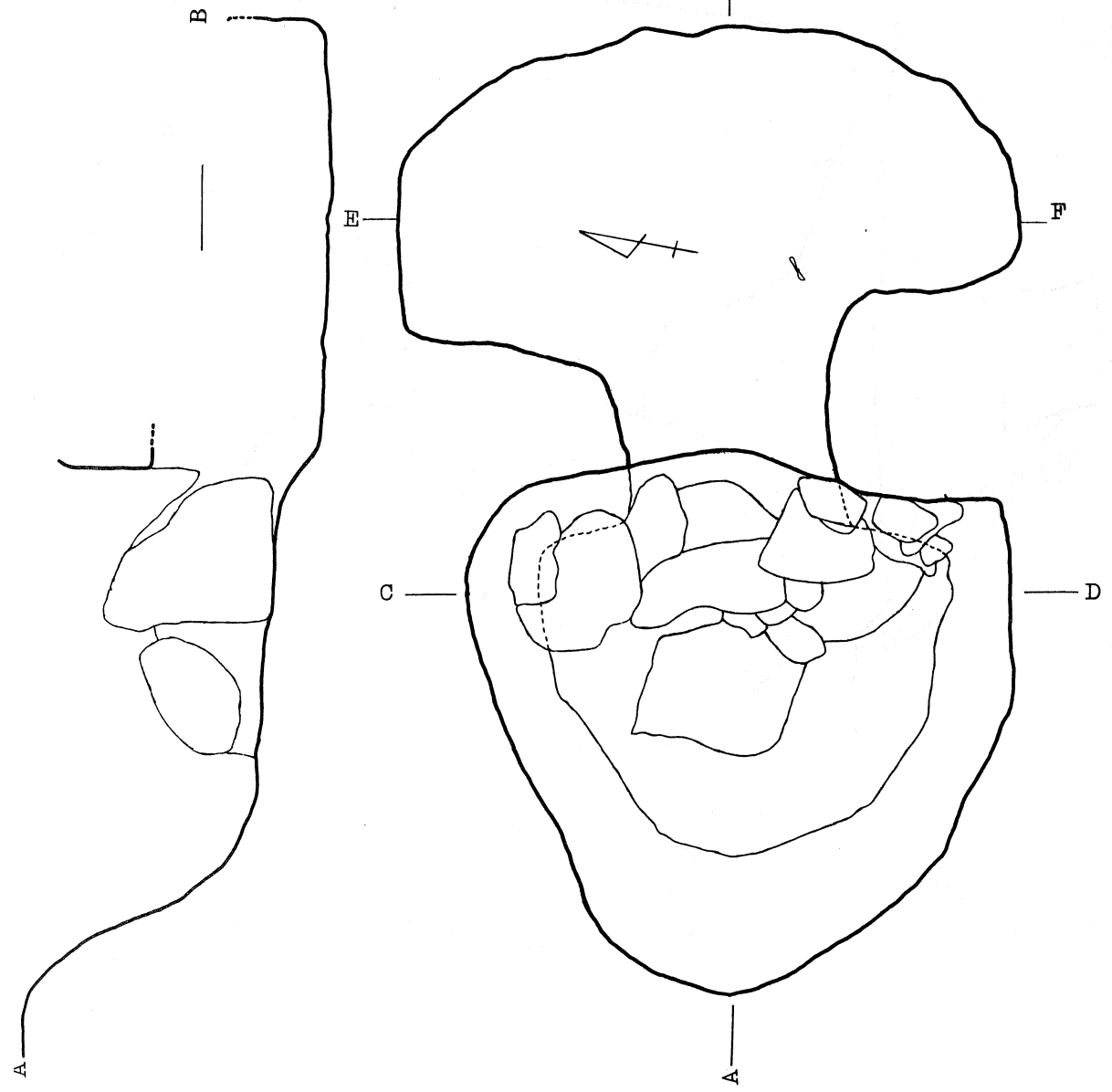
第 19 図 馬頭地下式古墳第 1 号



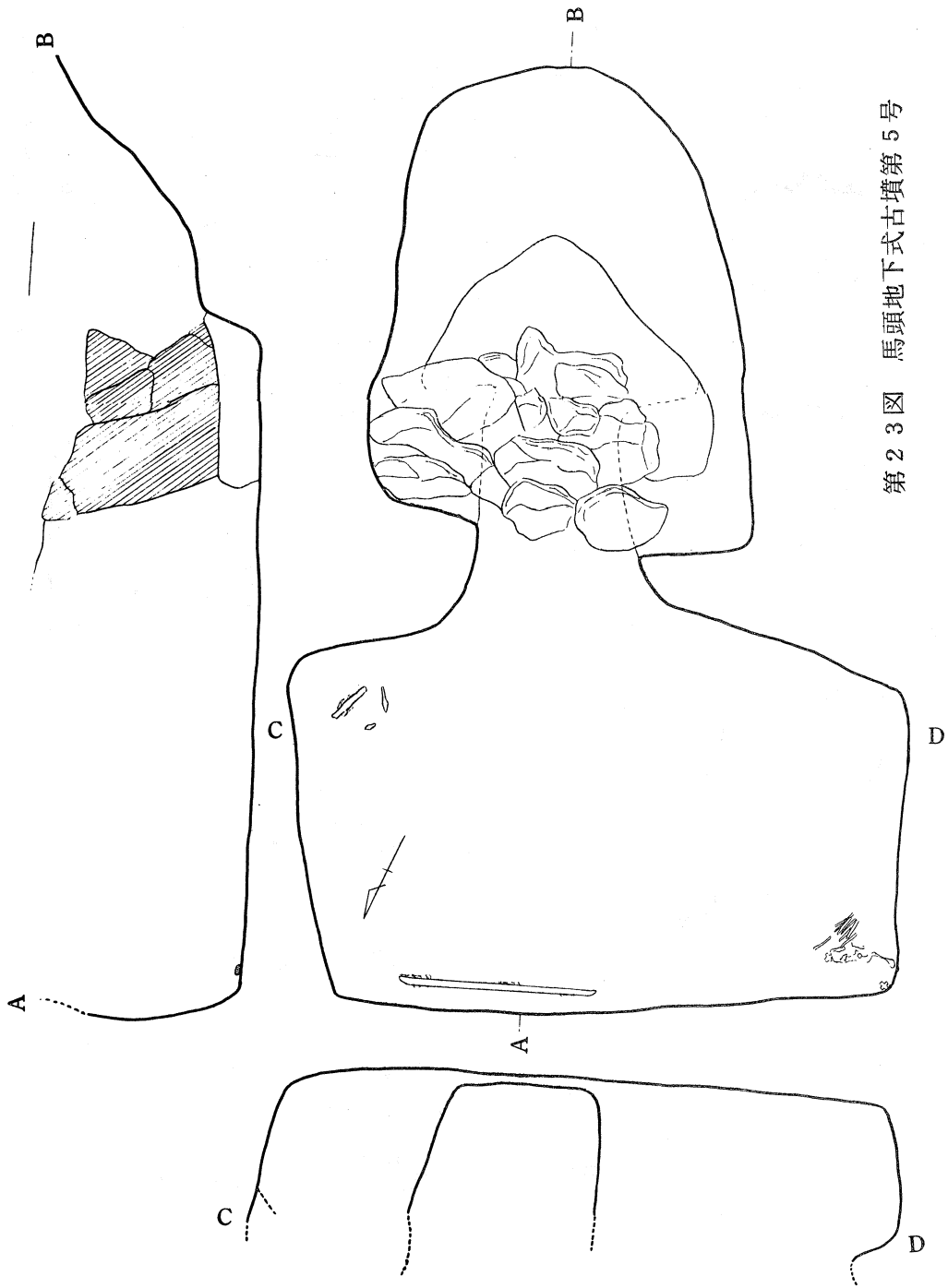
第 20 图 馬頭地下式古墳第 1 号出土遺物



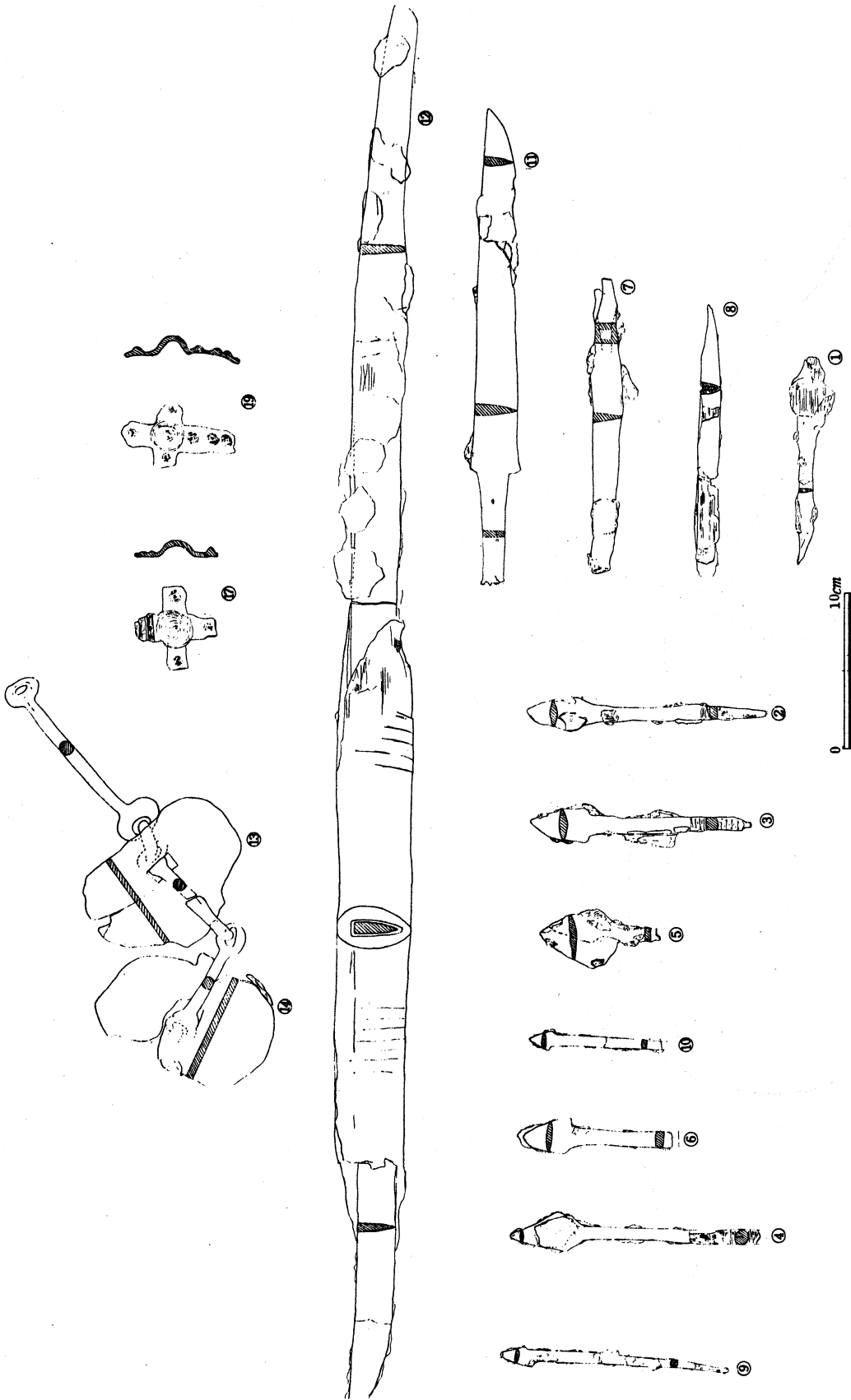
第 2 1 图 馬頭地下式古墳第 2 号



第 2 2 図 馬頭地下式古墳第 3 号

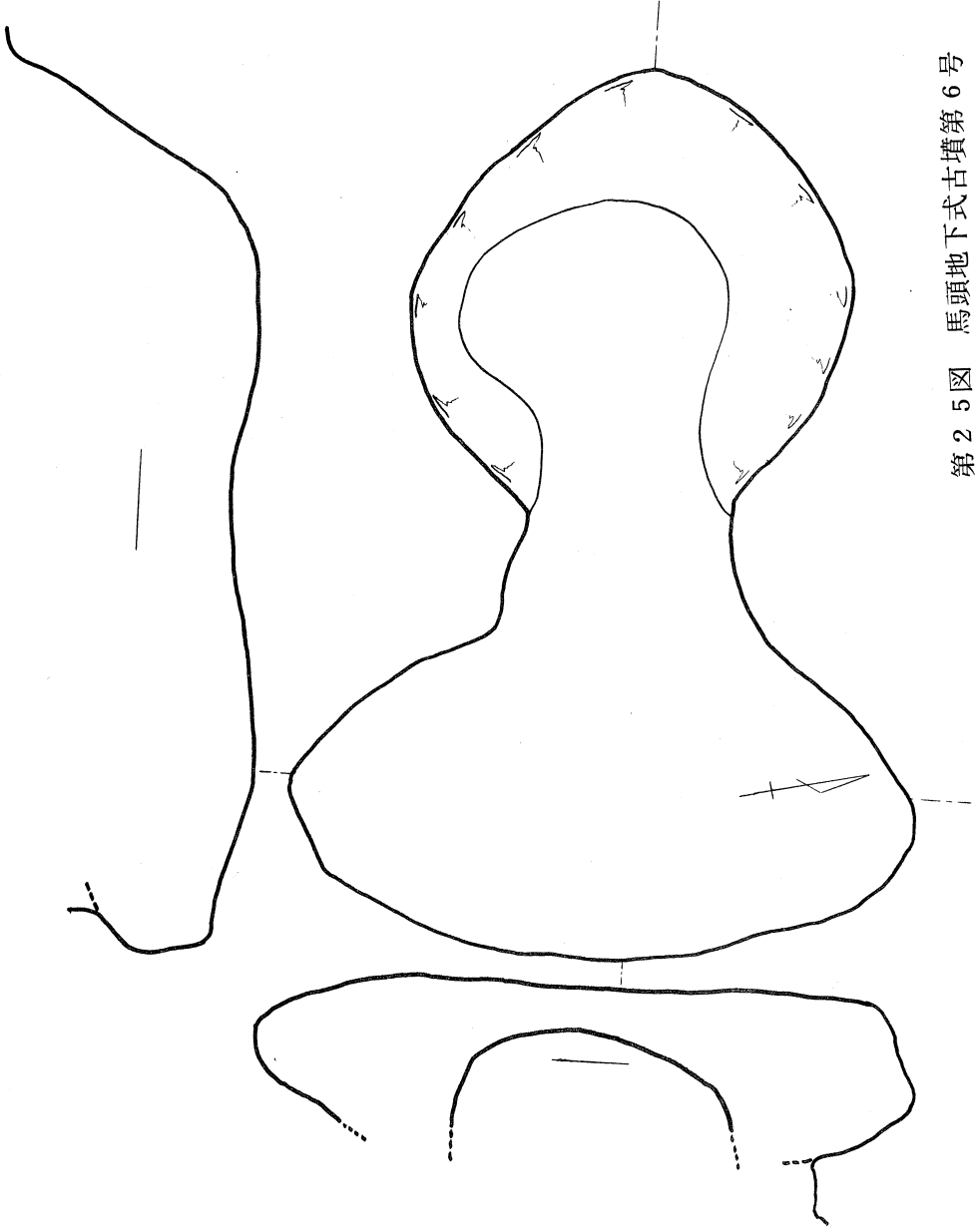


第 2 3 図 馬頭地下式古墳第 5 号

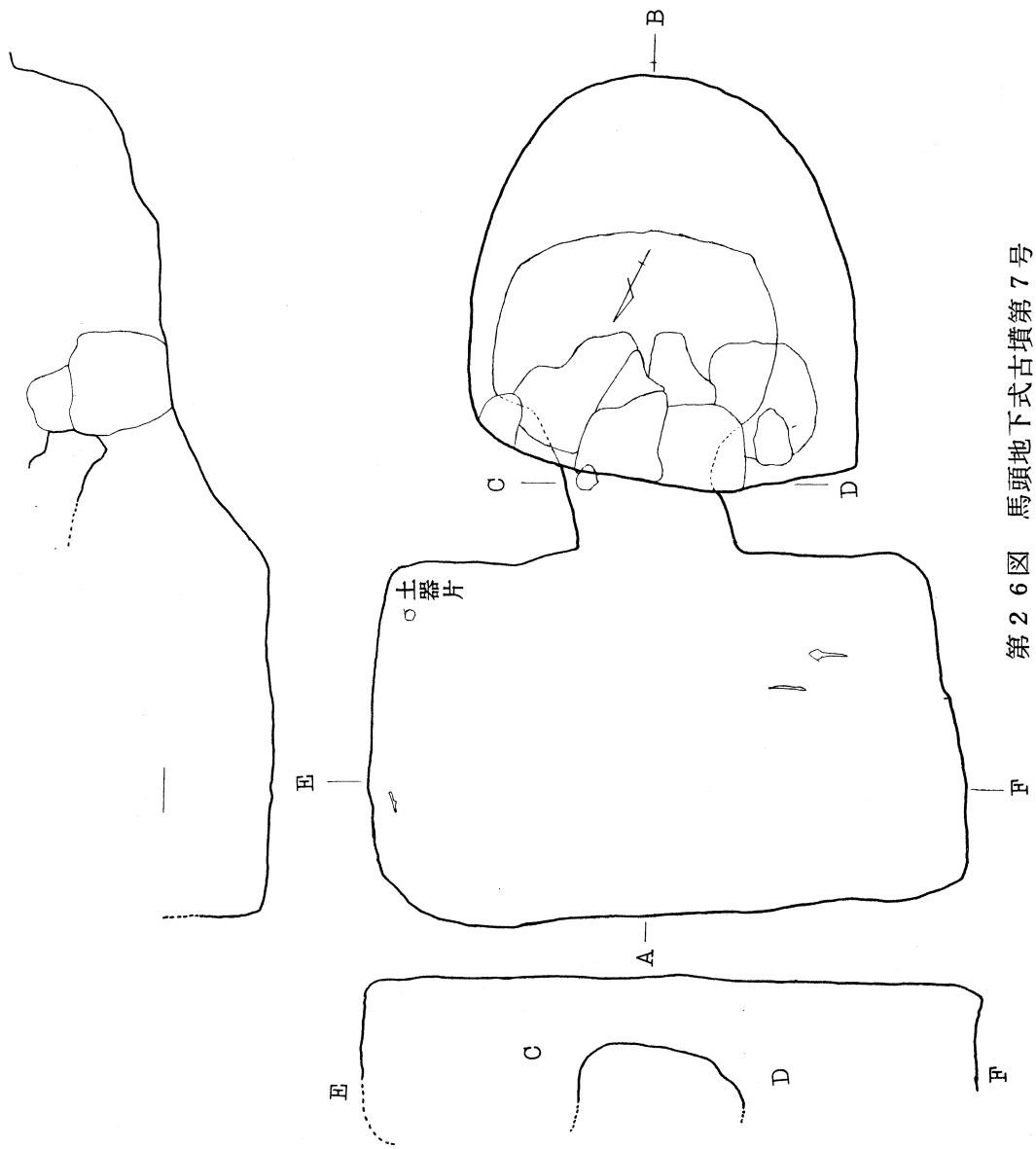


第 2 4 图 馬頭地下式古墳第 5 号出土遺物

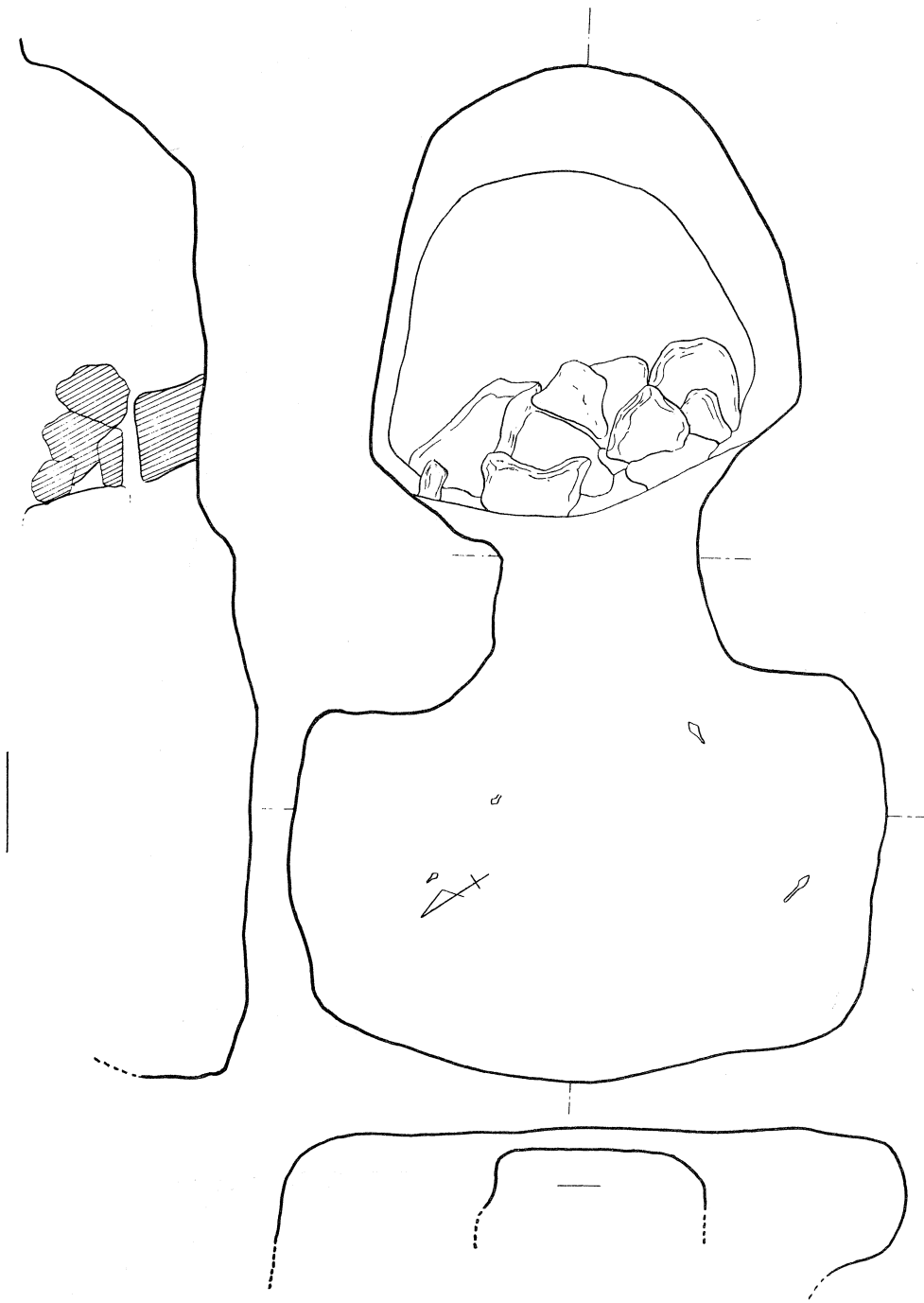




第 2 5 図 馬頭地下式古墳第 6 号



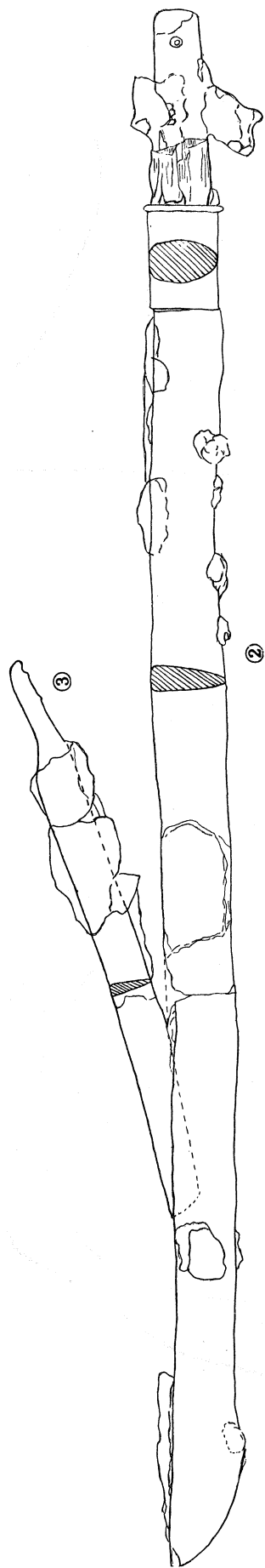
第 26 号 馬頭地下式古墳



第 2 7 图 馬頭地下式古墳第 8 号

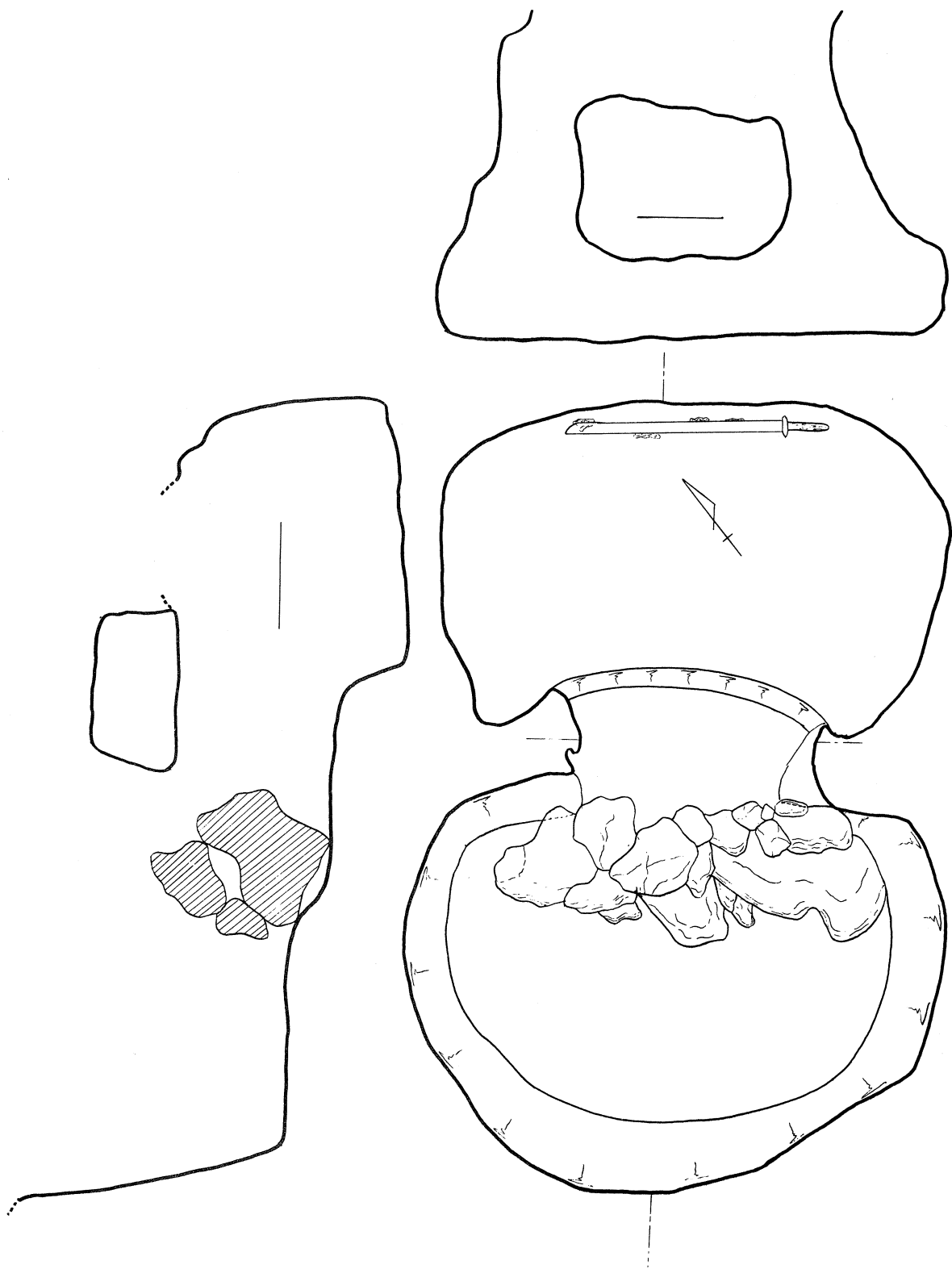


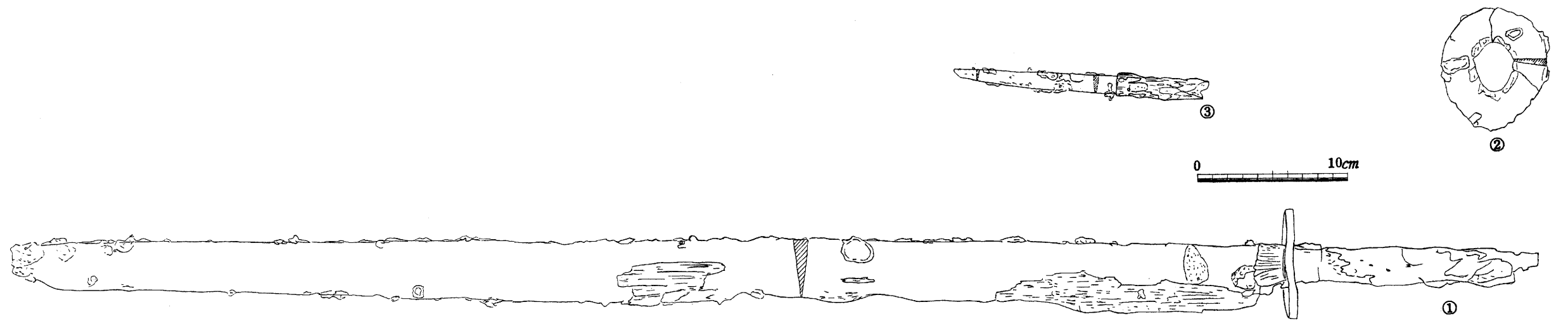
第 2 8 図 馬頭地下式古墳第 9 号



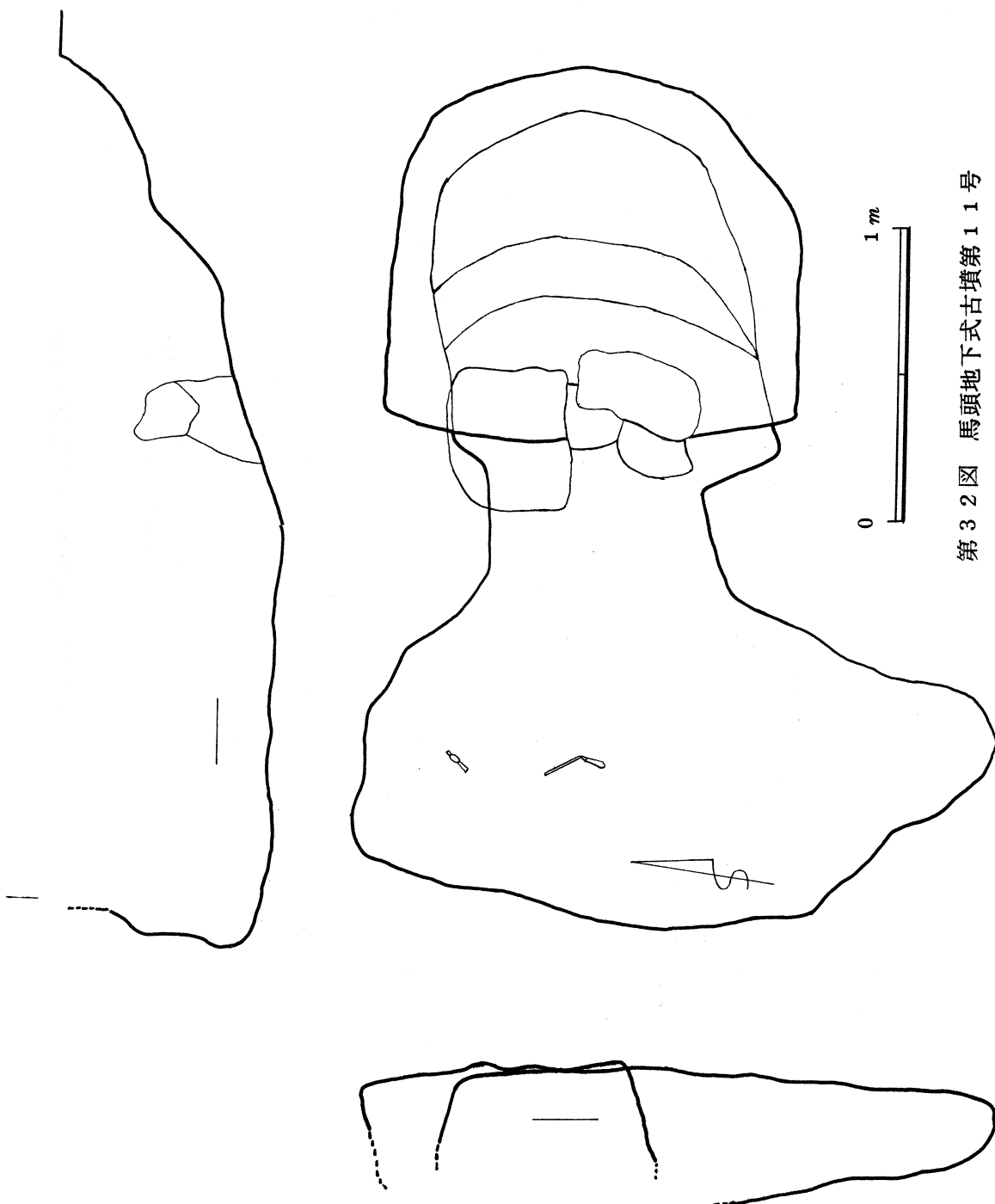
第 2 9 図 馬頭地下式古墳第 9 号・出土遺物

第30号 馬頭地下式古墳第10号



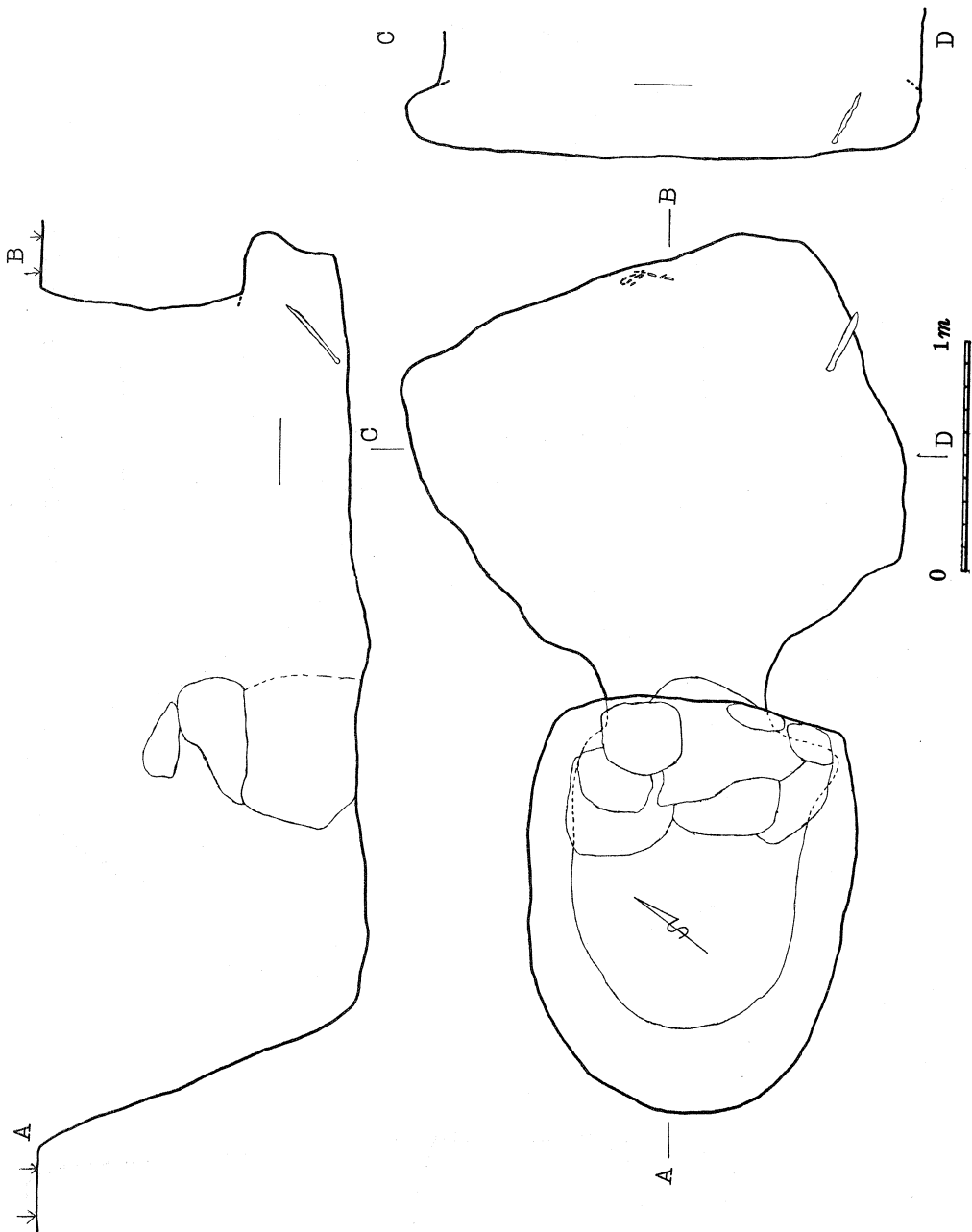


第31図 馬頭地下式古墳第10号・出土遺物

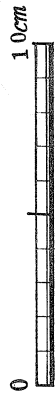
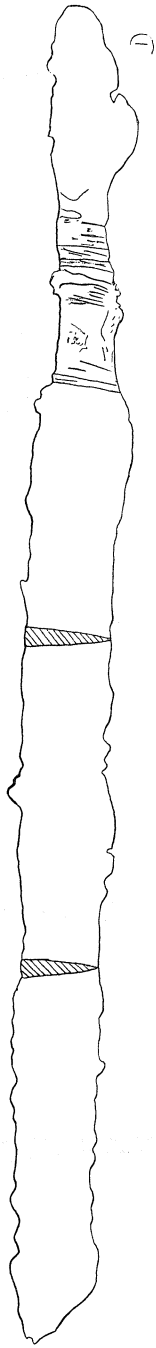


第 3 2 図 馬頭地下式古墳第 1 1 号



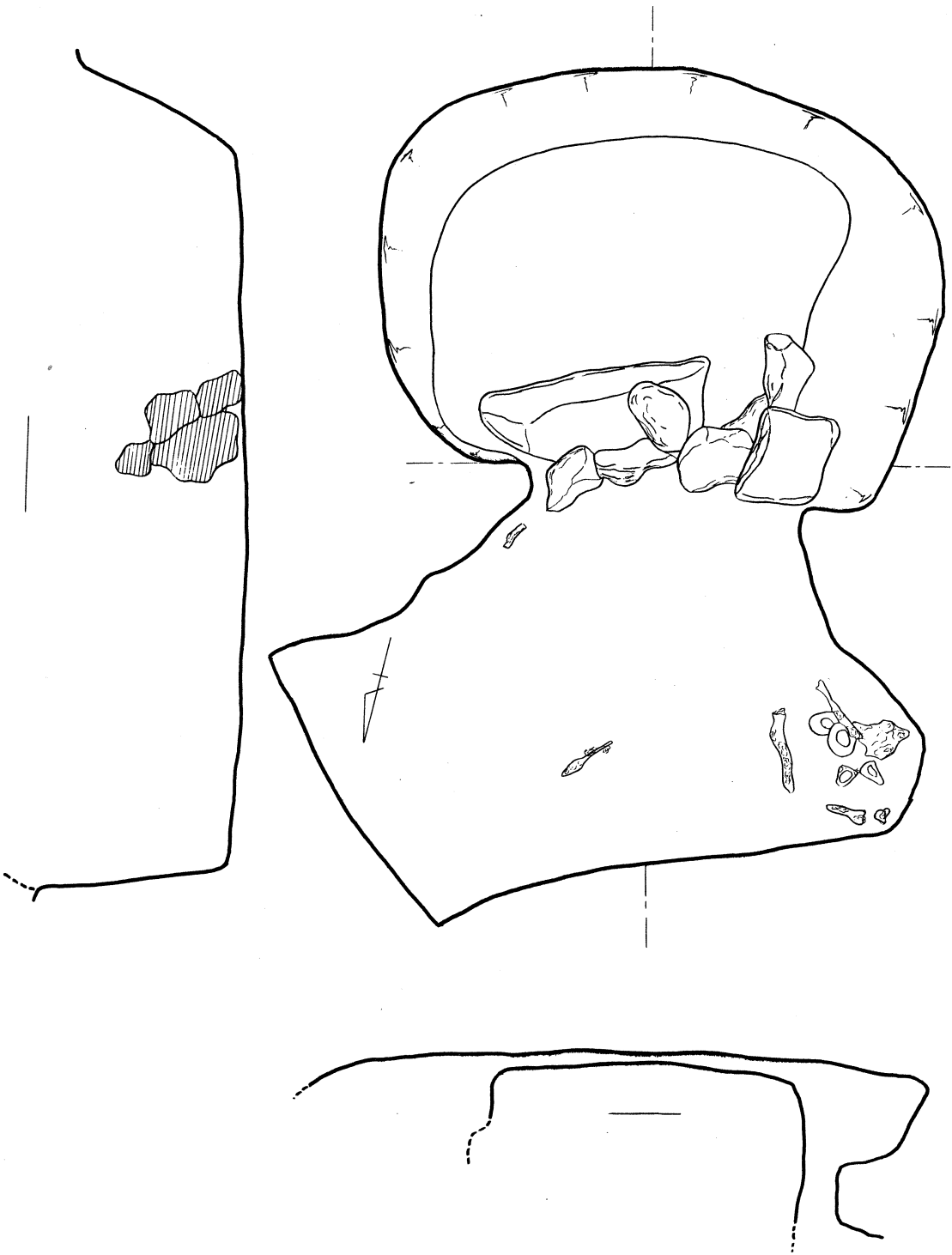


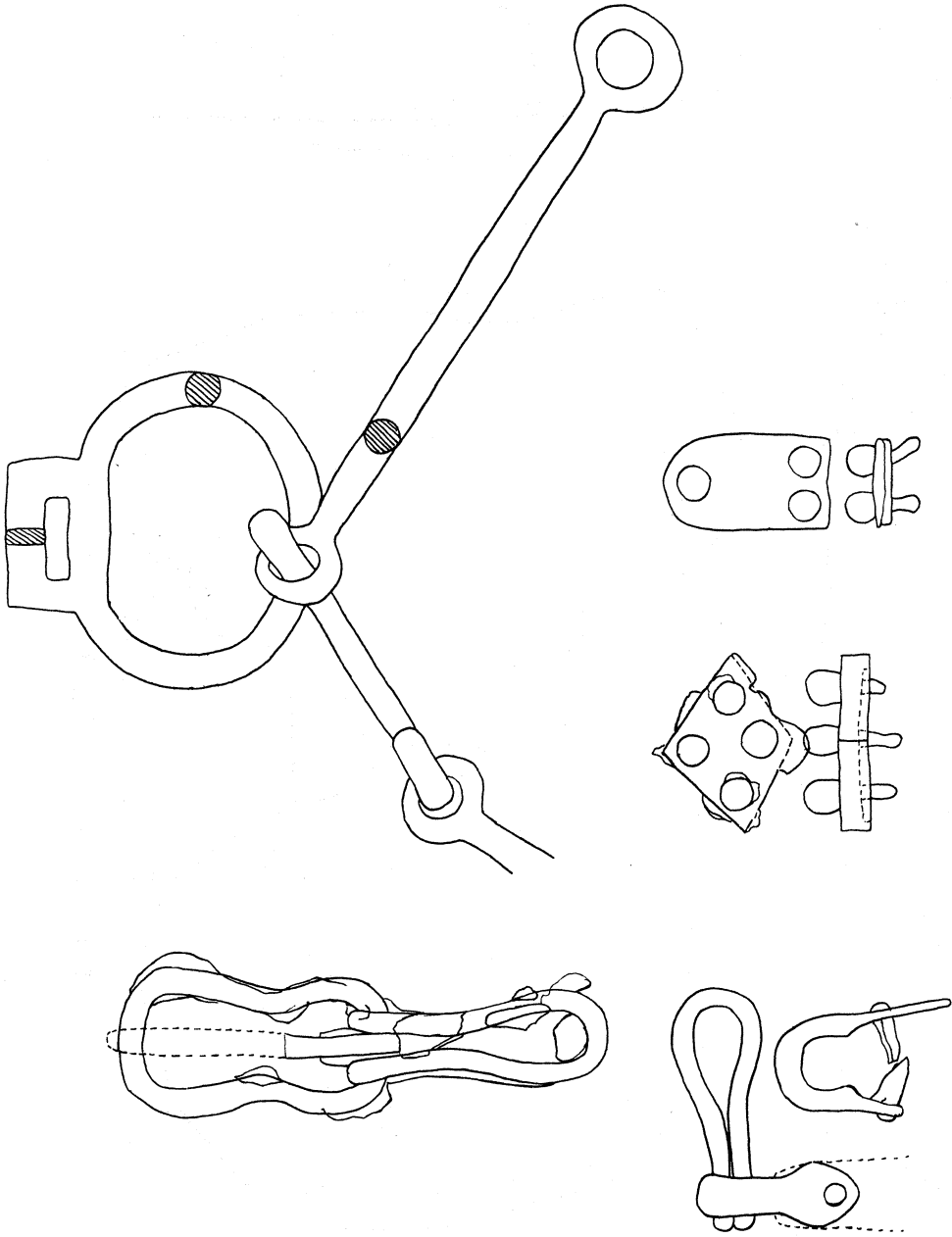
第 3 3 図 馬頭地下式古墳第 1 2 号



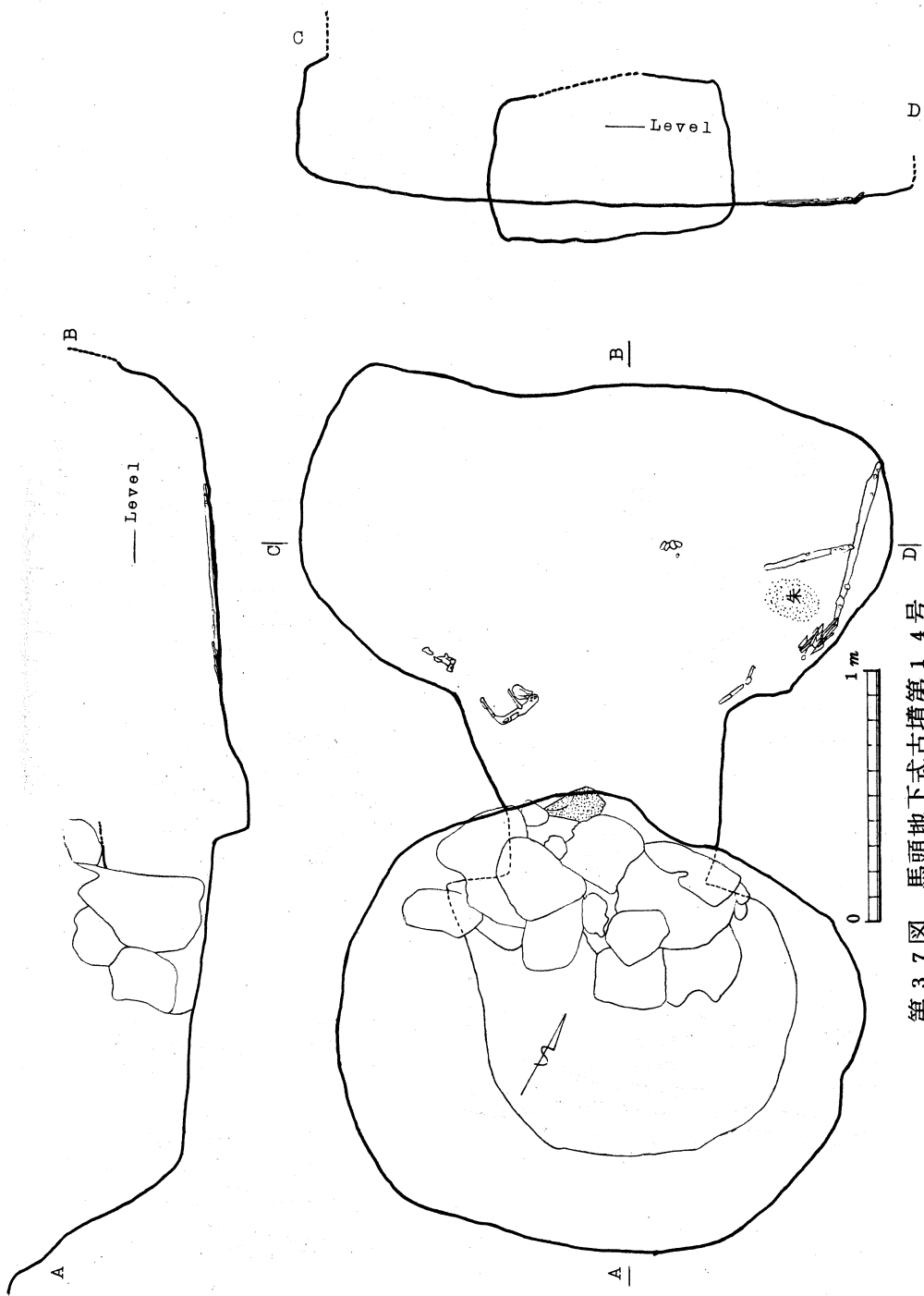
第 3 4 図 馬頭地下式古墳第 1 2 号・出土遺物

第 3 5 号 馬頭地下式古墳第 1 3 号

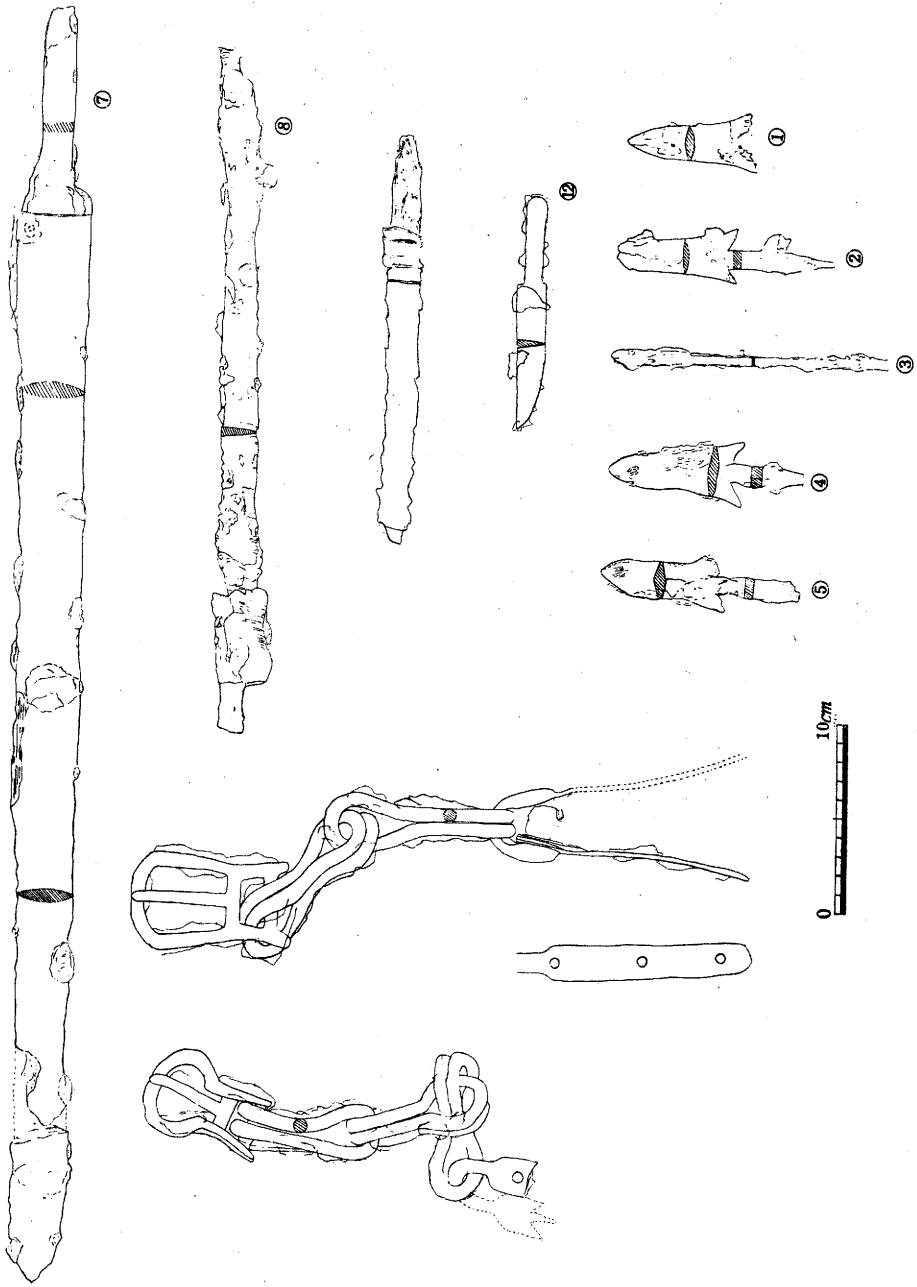




第 3 6 图 馬頭地下式古墳第 1 3 号・出土遺物



第 3 7 圖 馬頭地下式古墳第 1 4 号



第 3 8 图 馬頭地下式古墳第 1 4 号・出土遺物



こまくりげ遺跡全景

## 第4 小林市内の遺跡

### 1 こまくりげ遺跡

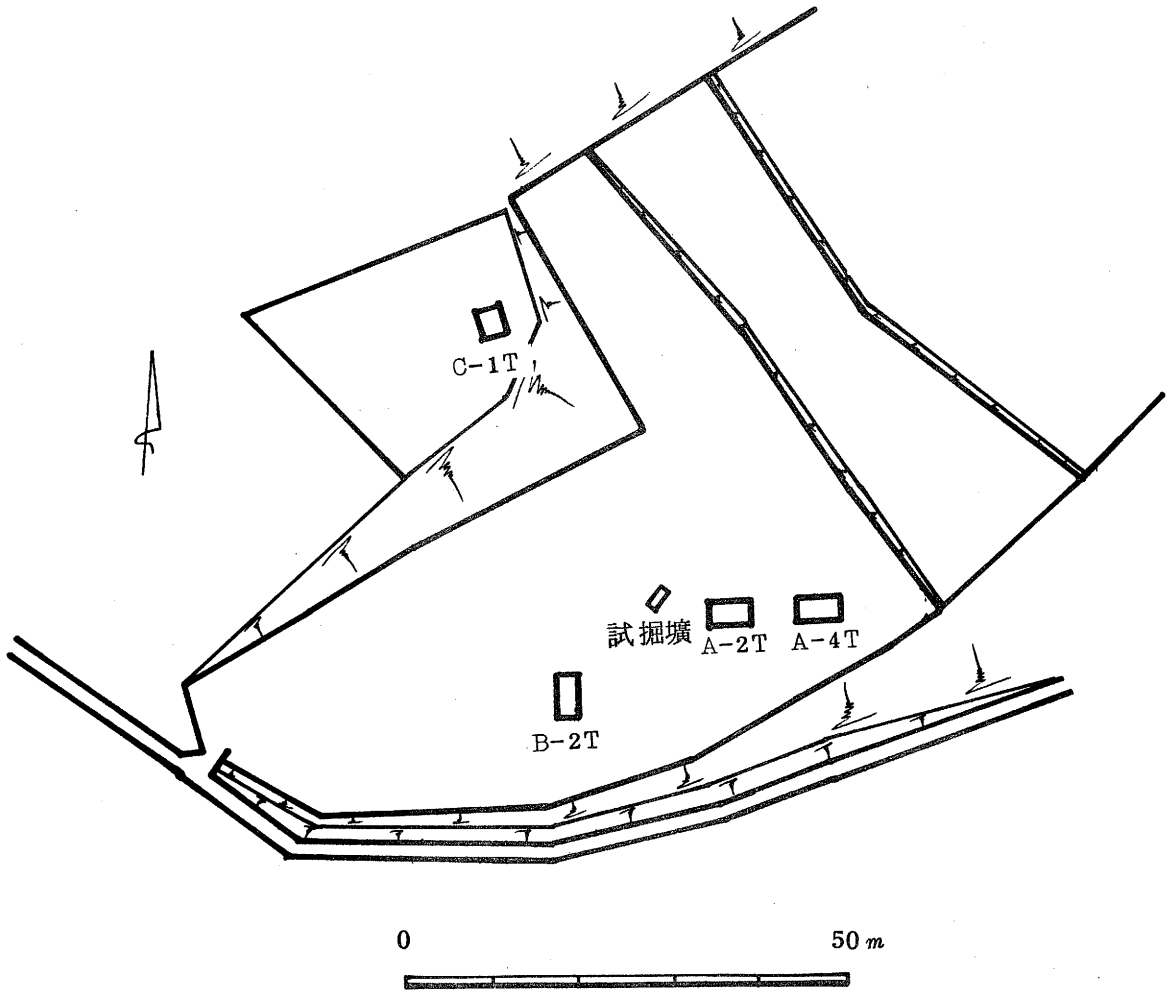
#### 1 立地及び環境

こまくりげは、宮崎県小林市大字細野にあり、市街地からほぼ南西に位置し、霧島連山夷守岳（1344.1m）の北東にあたる。遺跡は、県水産試験場増殖部小林分場のある出の山養魚池の後方丘陵標高288～300メートルの地点である。

この一帯は夷守岳の活動による霧島旧期熔岩（安山岩）を基盤としてその上に火山灰がアバットした起伏のはげしい熔岩段丘になっている<sup>(1)</sup>。今回の発掘地点は丘陵の凹地で出の山用水池（養魚池）を望む位置にあたり、この丘陵の末端からは毎秒1トンの湧水があり下方細野地区の貴重なかんがい用水にもなっている。

出の山用水池付近は、近年、出の山公園と称している。池には鯉やマスを養殖し、時期ともなると団体客や家族連れの慰安地として大いににぎわっているがこれも昭和27年から30年にかけて県水産試験場の分場が開設されてから急に開発されたものでそれ以前は淋しい所であったという。だが、この湧水の利用は古く、小林の上井家文書「小林萬取調帳」によると「井手山用水掛り」として「延宝弍年御取仕建。五百廿間廻り、壹萬弍千坪。右用水掛細野村田地五拾壹町六反八畝。高千弍百五拾石。」とある<sup>(2)</sup>。また、池の南方にある加治屋神社には「元祿六年四月十八日工作之」と銘のある御室（オムロ、厨子のこと）が残っている<sup>(3)</sup>。これはこの「井手山」用水池の開発によって順次開田が進み、それに伴ってその付近に集落が形成されていたことを想像させる。以上近世文書等によりこの地区の歴史的環境をみてきた

が、本調査に最も関連深い先史遺跡も当遺跡を含めて従来から発見されており発掘地点の凹地に接する畑や用水地の北西高所から塞ノ神式土器や轟式土器片、池の東南に位置する高台からは、縄文土器片のほか、石匙、石鏃、石刃等が採集されている。

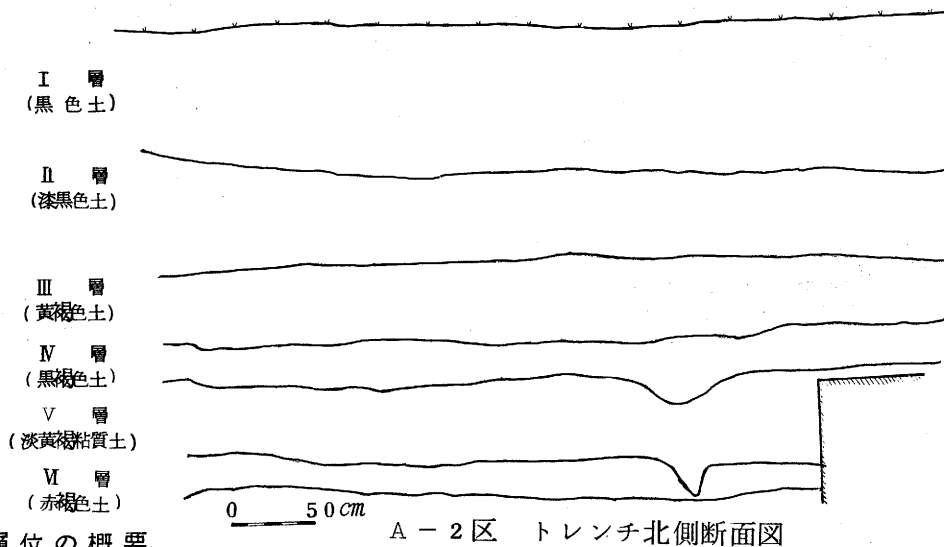


こまくりげ遺跡平面図



## 2 発掘区の設定

発掘地域は西から東にかけてゆるやかな傾斜を呈し、現在は原野に変わっていたが元来は畑地として利用されており最近まで甘藷等が栽培されていたという。周囲は植林後数十年を経過した杉林でおおわれている。高速自動車道は、この原野をほぼ西から東へかけて走る計画になっているので、測量図のセンター・ポールNo. 197 + 40の地点を100 × 200 cmの範囲で試掘したところ、土師及び縄文の包含層を確認したのでこの地を調査することにした。まず、試掘地点から東方へ予定路線のセンターに合わせて300 × 500 cmのトレンチを2ヶ所設定し、これをA-2区、A-4区とし、さらに試掘地点の南西にB区を設けこれをB-2区とした。また、試掘地点から北西25 mの高所（比高5 ~ 6 m）にも1区を設定し、C-1区とした。



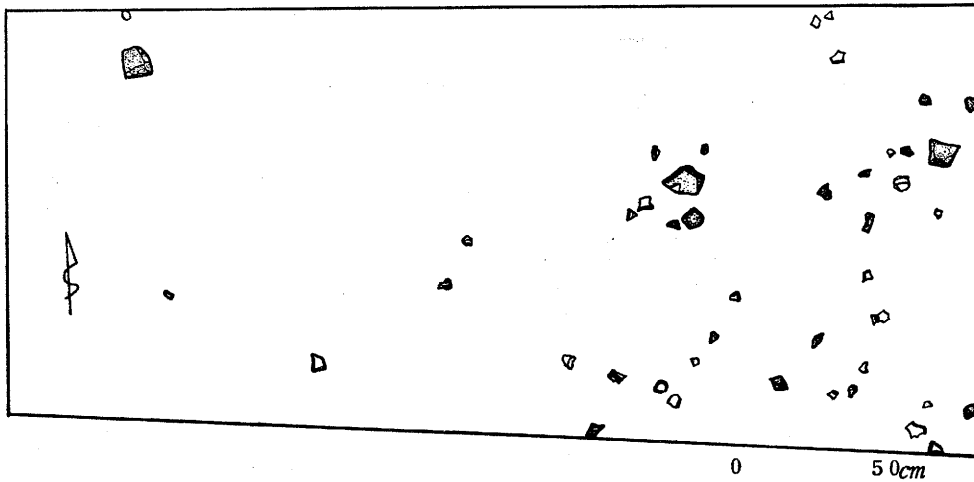
## 3 層位の概要

### A-2区

まず表土には、灰黒色土層があり続いて漆黒色土層となっている。これは一般に黒色腐蝕土層といわれ、俗にいう「クロボク」で土層は深く平均140 cm程もある。この下は黄褐色土層に変わりその直上、つまり漆黒色土層の下部から土師器の破片が普遍的に出土した。黄褐色土層は平均50 cmの厚さで遺物は下部から縄文土器の破片が少量発見された程度で元来の包含層とは思われない。次層の黒褐色土層は縄文の層で厚さ25 cm、上部から口縁部断面が三角形を呈する市来系の土器がみられた。下部になると遺物の出土は少なくなり次の淡黄褐色粘質土層になると全く見られなくなる。この下の層は、赤褐色のロームで俗に「赤ホヤ」、「赤バン」という第一オレンジ層である。続いて多量の葉片状白色片を含む青黒色砂質層になる。

これは「牛のすねローム<sup>(4)</sup>」といわれ、地元では「カシワバン<sup>(5)</sup>」とっている。これらの層位を、他のトレンチも含めて表土の灰黒色土層をⅠ層、漆黒色土層をⅡ層、黄褐色土層をⅢ層、黒褐色土層をⅣ層、淡黄褐色土層をⅤ層、赤褐色ローム層をⅥ層、牛のすねロームをⅦ層とする。

このA-2区ではⅣ層黒褐色土層から4個のピットを発見した。トレンチ東側壁中央下に径25cmの1号ピット。それより80cm東南に径20cmの2号ピット、その西方110cmの位置に径20cmの3号ピット、さらに西方に径20cmの4号ピットである。また、この層からは多量の木炭を検出したがそのほかの遺構は発見されずこの範囲のトレンチ調査では住居址かどうかは判断できなかった。



A-4区 Ⅳ層上部の土器・石屑分布状況

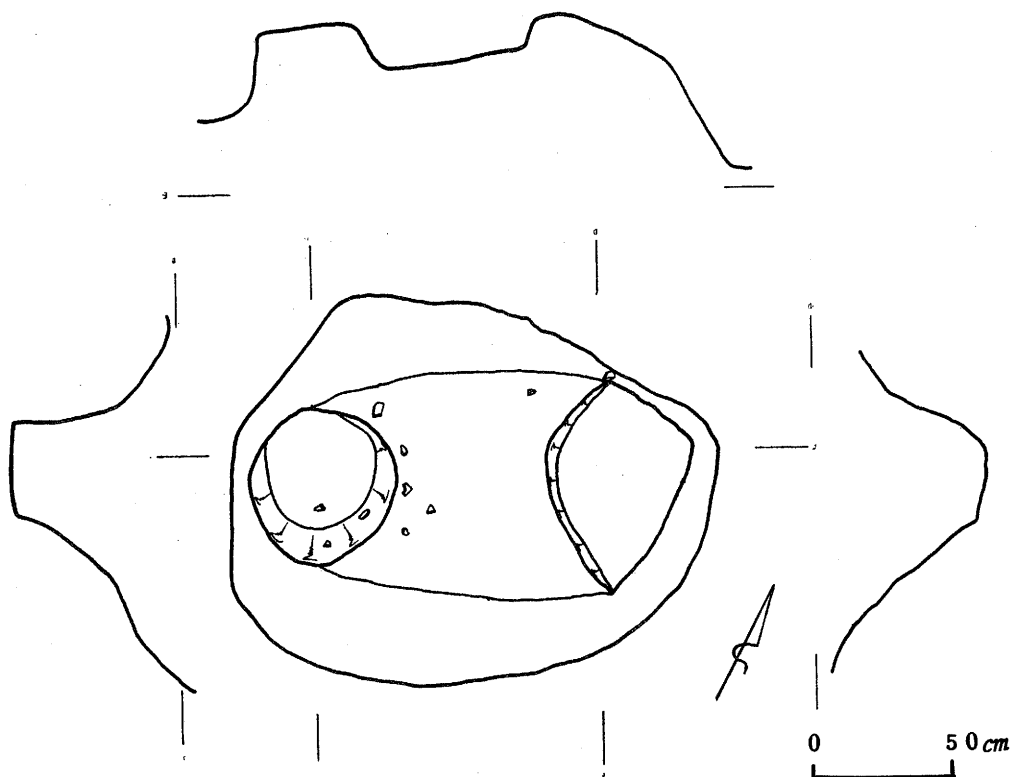
#### A-4区

本トレンチは、A-2区から若干下る5m東側に設定した。Ⅰ、Ⅱ層黒色腐蝕土層の深さは、A-2区よりやや浅いがそれでも平均120cmを計測、Ⅱ層下部からは同様に土師器片が出土した。Ⅲ層黄褐色土層は、A-2区と同じく平均50cmの層で上部には少量の土師器片を含んでいた。Ⅳ層黒褐色土層は、60~70cmの縄文の層で市来式土器と口縁部の隆起帯に平行斜線をもつ市来系土器、それに石鏃、メソコが出土した。Ⅴ層淡黄褐色粘質土層は平均20cm、Ⅵ層第一オレンジ層は85cmの厚さでⅦ層牛のすねロームへ続いている。

## B-2区

B-2区のトレンチはA-2区トレンチより南西17m上方に300cm×500cmの範囲で設定した。上部のI、II層黒色腐蝕土層はA-4区と同じく平均120cmの深さでこの下部と下に続くIII層黄褐色土層の直上面から同様に土師器片が出土している。第III層は平均50cmの深さで下層から縄文晩期の黒色研磨土器が発見され、つぎのIV層黒褐色土層からは既述の調査区と同様に市来式土器と下部からは、貝がら腹縁による条痕の上に浅い凹曲線を施文した岩崎上層式土器が出土している。

ところでこの層位中、トレンチ北西隅の第II層から第III層に移行する面、つまり土師器にかかわる生活面に、上縁長軸185cm、同じく短軸150cm、深さ約40cmの楕円形状の土壌を発見した。内部に堆積している黒色土からは土師器及び自然釉のある須恵器片が1点出土している。この土壌は、下方が狭くなりさらに長軸の両サイドにそれぞれまた掘りこみがありその形状は逆載頭円錐形状で黒色土が詰まっていた。この掘りこみは、南西側で上縁径55cm、深さ18cm、東北側の掘りこみは不整形で上縁長軸75cm、短軸が50cm、深さ15cmである。この土壌の上面までの深さは120cm、II層の漆黒色土層も攪乱を受けていないので後世の遺構とも考えられない。しかし、特殊な遺構であり、その類似例も知られていないので一応形状、規模を報告するだけにとどめておく。



## C-1区

このトレンチは、A-2区から40m北西、A-2の面より約5~6mの高所に設定した。位置の環境から見て、期待を持って調査を行なったが、高所のためか表土が浅く、II層漆黒色土層中に黄褐色土、黒褐色土が混入し、土師器のほか、縄文土器や石屑が混在し攪乱されていた。前記の調査区では、下層の牛のすねロームまで約3m余りの深さがあったがこのトレンチではわずかに120cm程であった。

## 4 遺物

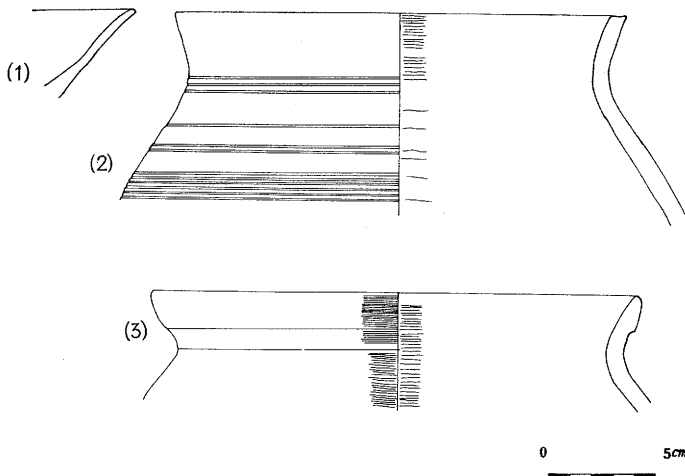
### ① 土器

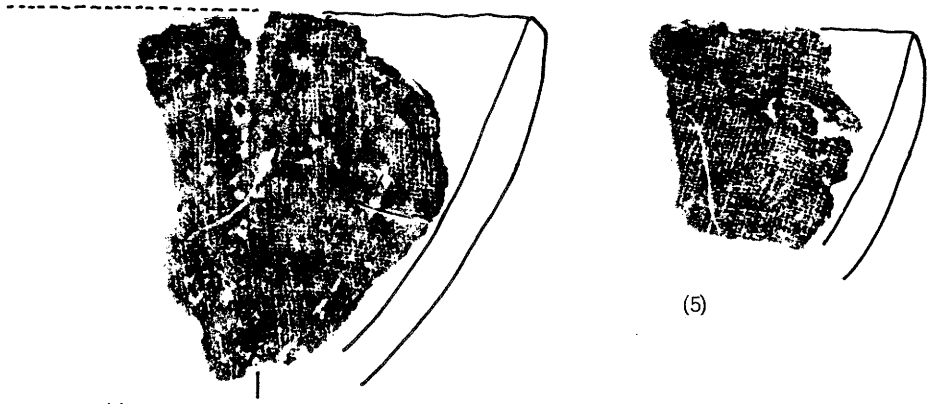
こまくりげ遺跡における土器は上部II層漆黒色土層から出土した土師器及び須恵器数片とIV層黒褐色土層の縄文土器である。

#### (A) 土師器

トレンチ別に出土数をみるとA-2区から90点、A-4区28点、B-2区から31点、B-2区土壇内23点、合計172点、大別すると高台を有し精製された小形の土師器、大形で器面調整が若干荒い壺形土器と土器内面に布痕のある手づくねの埴形状土器に区別される。

- ① 図(1)は、口径約1.5cmの皿形土器とみられる。高台の痕跡がみられる。このほか高台を持つ底部破片が6点程出土している。
- ② 図(2)は、壺形土器の口縁部で口径約2.1cm、頸部から肩部にかけて数条の平行細沈線がめぐらされている。内面には、輪積みの跡もみられ、刷毛状のもので調整されている。
- ③ 図(3)は、上記同様壺形土器口縁部で口径2.2.8cm、口唇部直下の外面が若干肥厚している。内外面とも刷毛目調整がみられる。



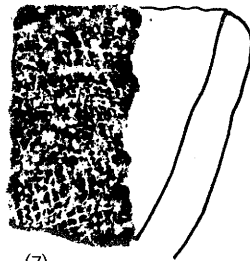


(4)

(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



(10)



布痕土器

④ 布痕土器 (図4～10まで)

C-1区を除いた他のトレンチから出土している。

イ 図(4)は、A-2区から出土したもので口径が約13cm、胴部の最大厚さ1.2cmで外面に凸凹がある。赤褐色を呈し、焼成は良好である。底部が欠失しているので丸底か平底かは不明である。手づくねで口唇部が外面に向けて斜めにそぎ落され、しかもそのあとは調整されていない。内面には、一面に布目痕があり1cmあたりの糸目の数は経糸12本、緯糸11本である。

ロ 図(5)は、A-4区のⅡ層下部出土の口縁部破片で、口唇部が三日月形をしている。胎土は密で焼成良好、黄褐色を呈し内部布目痕の糸目数は、1cmあたり経糸11本、緯糸10本と図(4)と大差はない。

ハ 図(6)は、試掘墳出土のもので、色は黄褐色で胎土に小石を含む、器面は、その小石がぬけ落ち各所に凹所がみられる。また内面の布目も荒く、1cmあたりの糸目は、経糸5本、緯糸6本と少なくかなり布が伸びている。

ニ 図(7)は、B-2区土壌内出土の口縁部で厚さ1.1cm、色調黄褐色、口唇部は同様外方へ斜めにそぎ落されている。内面には同様一面に布目痕がある。

ホ 図(8)は、A-2区出土の口縁部で厚さ1.1cm、黄褐色を呈し焼成良好、口唇部は外方へ斜めにそぎ落されている。糸目は1cmあたり経糸5本、緯糸4本とかなり荒い。

ヘ 図(9)は、B-2区出土、口縁部破片で厚さ0.9cm、色調黄褐色、焼成は良好である。口唇部は同様外方へ斜めにそぎ落されている。内面の布目数は、1cmあたり経糸が9本、緯糸が7本である。

ト 図(10)は、試掘墳出土、口縁部破片、厚さ1.0cm、胎土に小石を含む、色調黄褐色、口唇部はやはり外面へ斜めにそぎ落されている。内面の布目数は、1cmあたり、経糸が8本、緯糸は6本となっている。

以上、布目痕のある土師器についてその特色を示す口縁部の紹介を行ってきたが、もちろん布目痕のある腹部等破片も若干は出土している。このように口唇部を見るといずれも外方へ斜めにそぎ落され、しかもその器形は同様小形の碗形状土器で手づくねである。このような例は、宮崎県串間市下弓

田遺跡から発見されており<sup>(6)</sup>、また、今回の調査でも小林市竹山から多量に出土している。従ってこれ以上の考察については、竹山遺跡報告の中でふれるのでそちらにゆずりたい。

(B) 須恵器

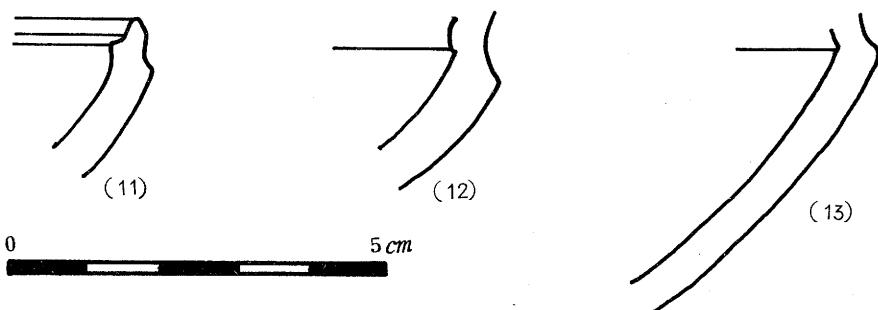
須恵器の出土はごくわずかで、B-2区土壌内のI破片とA-2区出土の2片に過ぎない。このうちB-2土壌内出土のものは、格子状叩き目の上に一面、灰釉がかかっている。また、A-2区の1片にも一部分に自然釉がみられる。A-2区出土、他の1例は、かつて調査された延岡市上舞野苺田古窯址<sup>(7)</sup>や宮崎市那司分松ヶ迫古窯址<sup>(8)</sup>から出土した須恵器群に類似している。

(C) 縄文土器

こまくりげ遺跡出土の縄文土器は大別4種類に分類される。Ⅳ層黒褐色土層上層部の黒色研磨土器、上層から中層にかけての、口縁部が三角形断面を呈し、施文具にアナダラ属の貝がらを用い、器の内外の貝がら条痕や刺突文を特徴とする市来式土器。それに口縁部に稍幅広の文様帯を持ち、平行条線文や羽状文でかざる市来系土器。中層から下層にかけては、貝がら条痕の上から浅い幅広の凹曲線を描く岩崎上層式土器である。

1 類 (図11~13)

A-2区、B-2区のⅣ層上部からわずか3点出土している。いずれも浅鉢形土器の口縁部とみられる黒色研磨土器である。この晩期土器はこの地方では都城市尾平野洞穴<sup>(9)</sup>から多量に出土している。

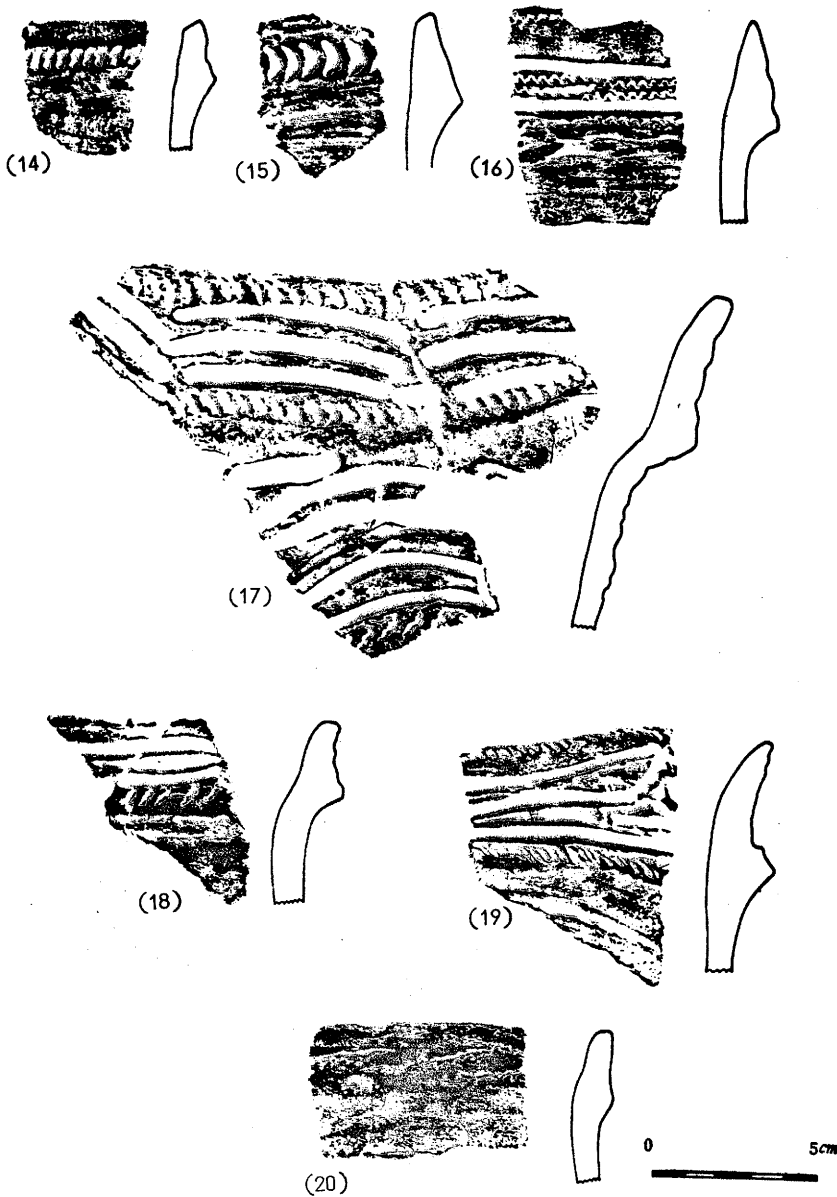


黒色研磨土器片

2 類 (図14~20)

これは、いわゆる市来式土器である。図(14)、(15)は、いずれも A-2 区 IV 層黒褐色土上層から出土した口縁部で黒褐色を呈し、胎土には石英その他小有色鉱物片を含んでいる。文様帯が狭く竹管による爪形文に似ているがアナダラ属科ハイガイ等の小破片を刺突したものとみられる。この種の土器は、串間市下弓田遺跡の中・下層から出土しており、市来式土器の先行形態とみられている。<sup>10)</sup>

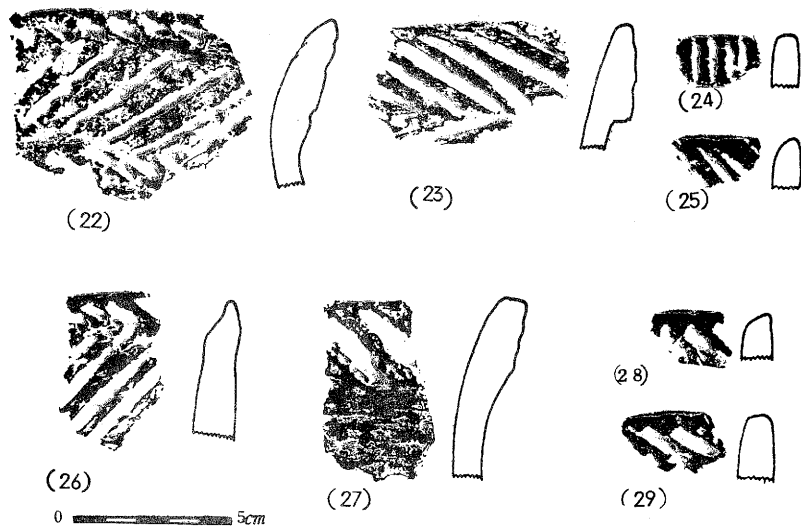
図(16)は、A-4 区 IV 層出土の口縁部で断面は三角形で、外方の文様帯の部分ははりつけて成形したものである。貝がらの刺突方法は、前平式土器に普遍的に見られる方法と同じである。この土器は、やはり型式上市来式土器では古い土器であろう。





図(19)は、B-2区Ⅳ層中からの出土で波状口縁の一部である。黒褐色を呈し、胎土には、石英、長石、その他小有色鉱物を含んでいる。口唇部外側と突出部上側に貝がら口唇部による刺突文があり、その間は、押し引きの沈線文がみられる。

図(17)は、2類土器片群中最大の口縁部破片で文様帯も広く変化に富んでいる。口縁部は黒褐色を呈し、肩部付近は赤褐色で胎土には多量の雲母が含まれている。口縁部上縁はカーブがみられず、直線的であるので恐らく突角形口縁の市来式土器であろう。内面にも一面に貝がら条痕があり、波状口縁部の裏面にも、凹線文がある。器面には各所にススが附着している。



### 3 類 (図 21~29)

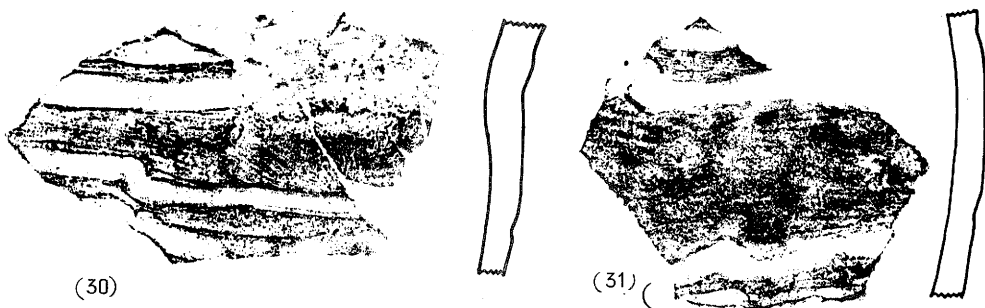
この一群も、Ⅳ層黒褐色土層からの出土で下層出土の1点を除いては、2類土器との層位的上下関係を把握することはできなかった。

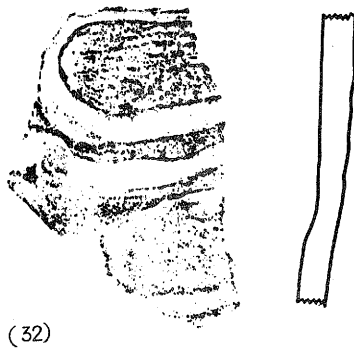
図(21)は、A-2区出土の口縁部で本遺跡中最大の土器片である。口縁部径約32cmの深鉢形土器とみられ、色調は黄褐色で、胎土には石英、長石等を含んでいる。口縁部は外反し、外面には3cm程の隆起した文様帯があり平行斜行線が描かれ第2類土器として分類した市来式土器とは文様のスタイルが異なっているが口縁部断面はやはり三角形を呈している。従って、このグループは一応市来式系土器として分類した。

図(22)は、A-4区出土の口縁部で黒褐色を呈し、焼成は稍脆弱である。文様は口唇部直下に平行の短斜行線を描き、その下に逆方行へ平行斜向線を施文し、さらにその下へ口唇部直下と同様の平行斜行線を描いている。つまり羽状文である。これに類似した破片は、同じA-4区から1点出土している。文様形式は出水式土器に酷似しているのでその影きようをうけているとみられる。

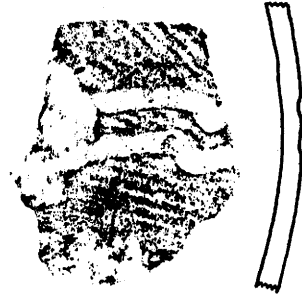
### 4 類 (図 30~35)

このグループは、B2区のⅣ層下部から出土したもので他のトレンチからは出土していない。口縁部が稍外開きで胴部が少し張った深鉢形とみられる。焼成は稍もろく、色調は黒褐色を呈し、胎土には、石英や長石を含んでいる。内外面には貝がら口縁によって調整されその条痕を有するものもある。また、器面には、一様に平行直線や平行曲線を描いている。これは鹿児島県肝属郡田代村岩崎出土の上層土器の系統を引く土器である。しかし凹線文は一般に浅くなかにはよく観察しないと見落すほどのものもある。





(32)



(33)



(34)



(35)



## ㊦ 円板

A-4区東側壁面下のⅣ層中から出土したもので径3.6 cm、厚さ0.8 cmで縁どりがされている。

## ㊧ 石器

### (A) 石匙 (図②)

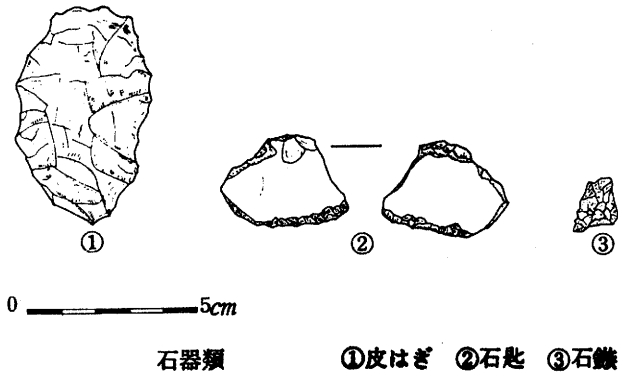
A-2区Ⅳ層出土、2.7 cm × 3.7 cmのホルンフェルス製の石匙である。刃部は両面から剝離されている。

(B) 石鏃 (図③)

A-4区Ⅳ層出土，黒曜石製で先端部と基部の一方が欠失している。底部には若干のえぐりこみが認められる。

(C) 皮剥ぎ (図①)

B-2区Ⅲ層黄褐色土層中からの出土，チャート製で6.4 cm×4.2 cm，横剥ぎで一部には自然面が残っている。



5 結 語

小林市を中心とする西諸県郡地方にはかなりの縄文遺跡等が従来から知られているが、今まで調査が行なわれたのは、高原町広原の県立高原畜産高校校庭の遺跡と小林市の本田遺跡だけである。本田遺跡の調査ではかなりの遺物が出土し、成果をあげたといわれる。今回の調査は、九州縦貫高速自動車道予定路線にかかわる発掘のため有望な包含層の調査ではないのであまり期待はもたれなかった。事実出土遺物も少なかった。

しかし、Ⅱ層漆黒土層下部の土師器群中から若干の布痕土器を発見し、その土器形態や焼成が串間市下弓田出土の布痕土器と類似していることは大へん貴重な出土といえよう。下弓田発見の土器は疑わくをもたれながらも一応縄文土器として報告

されているが、今一度考慮される関係資料が提供されたことになる。

この布痕土器は、国分期の土師器と共伴しているなのでその所産は奈良時代以降と考えられるが、その他に、確実に後世の須恵器も数点ではあるが含まれているので時代はさらに下り平安時代中期相当としたい。

縄文の包含層からは、晩期黒色研磨土器、後期の市来式土器、市木式系土器、岩崎上層式土器が出土している。このうち、岩崎上層式土器は、Ⅳ層下部から出土し他の土器との上下関係をつかむことができ、これは一応の成果と思われる。

この地方は、霧島火山の周辺部にあたり、火山灰が多量に堆積し今回の調査でも縄文後期の包含層下位まで2.7～3 m程の深さがあり、短日間の発掘では必要に応じてトレンチの範囲を拡張することもできず、せつかく、ピットを2,3検出してもそれが住居址の柱穴かどうか判断することはできなかった。

#### 註

- (1) 遠藤 尚「火山灰層による霧島熔岩類の編年（試論）」（霧島総合調査報告書 宮崎県 1769 3.）
- (2) 小林市史編纂委員会「小林市史第一巻第八節田畑開発」（小林市 40. 3. 21）
- (3) 上 同
- (4) 註(1)に同じ。「牛のすね」は、都城市の一地名
- (5) 日本書紀卷七（岩波書店版・日本古典文学大系）景行天皇十三年の条に「故、<sup>なづ</sup>其の国を號けて日向と曰ふ。是の日に、<sup>のなか</sup>野中の<sup>おほかしは</sup>大石に<sup>のぼ</sup>陟りまして、<sup>みやこ</sup>京都を<sup>しの</sup>憶びたまひて、歌して曰はく。」とあり、「大石」について、註で北野神社蔵本の訓としてカシハは、磐をいう。磐石の意か、あるいはカシハはカタシハ（堅岩）の約か、とある。また、万葉集卷七には、「吉野川いはと堅磐と常磐なす」という歌がある。これらのことから、地元でいうカシワバンは恐らくカタイバンの意とみられる。
- (6) 海岸に近い縄文後期の遺跡で昭和34年、宮崎県教育委員会が調査を行っている。「下弓田遺跡・日向遺跡総合調査報告第一輯」（宮崎県教育委員会 昭・36・3・30）
- (7) 「日本の考古学・歴史時代上」所収 小田富士雄〈窯業の項〉（昭・42・7・5）
- (8) 石川恒太郎「宮崎県の考古学」第6有史文化〈窯跡の項〉（昭・43・4・10）

- (9) 小林久雄「九州縄文土器の研究」 115 ページ<宮崎県北諸県郡中郷村二俣尾平野洞窟住居跡> (昭・42・7・10)
- (10) 註(6)に同じ
- (11) 河口貞徳「南九州における縄文式文化の研究」 (鹿児島考古学会紀要第3号)
- (12) 石川恒太郎「高原町縄文期包含層調査報告」 (宮崎県文化財調査報告書第16集 昭・47・3)

(文責 田中 茂)

## 2 平木場遺跡

### 1 遺跡の位置

平木場遺跡は、小林市大字南西方字平木場に所在する。その位置は、国鉄吉都線飯野駅の南東約1 km、えびの市と境界を接する平木場台地は、南東から北西へ舌状に突出した標高400 mの日向ローム層をかぶるシラス台地である。台地の南を平木場川が流下し、シラス台地特有の浸蝕谷を形成している。台地面は、概して平坦で、黒褐色火山灰層に被われている。この台地の西、県道小林京町線と平木場川に沿う南側傾斜地保安林との間にかこまれた6 haの畑地が遺跡となっている。特に畑地の中央を南北に通る農道の西側に広がるブドウ園に遺物の散布が多く、遺跡の主要部をなしていることが、表面調査から予想された。

### 調査の概要(第2図)

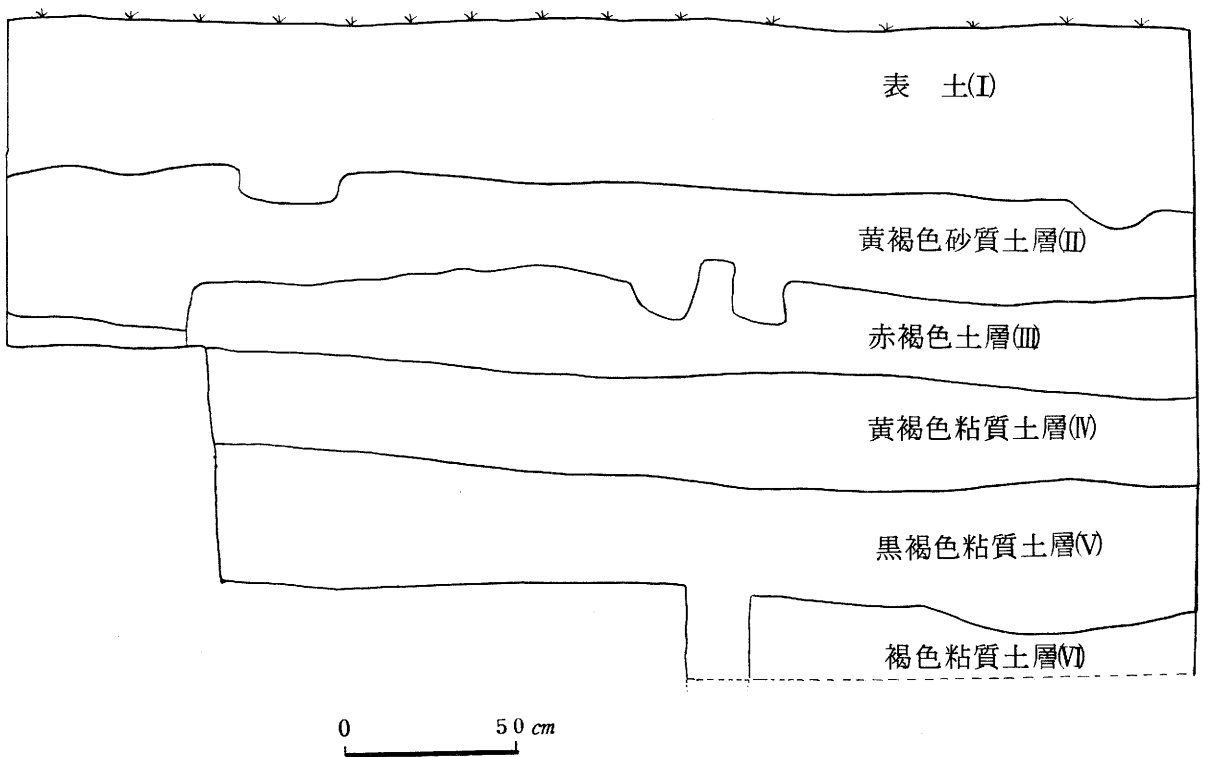
平木場遺跡の調査は、8月5日から8月19日までの15日間実施した。計画道にかかる台地南西の傾斜地保安林に沿う凡そ3000 m<sup>2</sup>の畑地を調査地域としたが、作物補償の制約をうけ約300 m<sup>2</sup>を発掘した。あらかじめ、保安林に通じる農道の東側をA地区、西側のブドウ園に近い畑地をB地区と決め、A地区から発掘に着手した。

A地区では、2×50 mのトレンチを東西に設定、それを5 m毎に区切り、西から1～10区として一つ置きに発掘した。各区とも表土下30～40 cmで黄褐色火山灰土層に達した。

発掘の結果Aトレンチでは、I区の黄褐色火山灰層(上部10 cmの層位)に縄文土器片が6個と、フレイクやチャップパー形の小石器数点とⅦ～Ⅷ区で、黄褐色土層に掘り込まれた柱穴28個を検出した。また、I区で層位確認のため掘り下げ調査を行なったところ地表下1.9 m橙色火山灰層下の黒褐色ローム層に柱穴とみられるピット6個を検出したが、この層からは、文化遺物は何も見出せなかった。

B地区の発掘は、安楽・日高によって11日から着手した。B地区は、これまで多量の石器や土器が地元の鬼目祥次郎氏によって採集されており、現在でも多量の土器を散布するブドウ園に近いこともあり、遺構の存在が予期された。トレンチは、ブドウ園に近い調査地域の西端保安林ぎりぎりに、2×30 mを設定、4区に分けて発掘した。発掘の結果、トレンチの西端で、多量の弥生式土器と押型文を含む数

点の縄文土器，須恵器甕，土師器を黒褐色火山層から検出した。第1層は耕土として利用され，かつ層も薄く20～40cmしかなく，かなりの攪乱を受けており，土器も細片化し，確実な包含層をとらえることは困難であった。この土器出土地点の下層，黄褐色土層面に方形の陥込みがあることがわかり，綿密な発掘作業によって，堅穴住居跡を検出した。しかし，トレンチの北側は，計画道の副員よりはずれるので拡張ができず，堅穴の全貌を明らかにすることはできなかった。



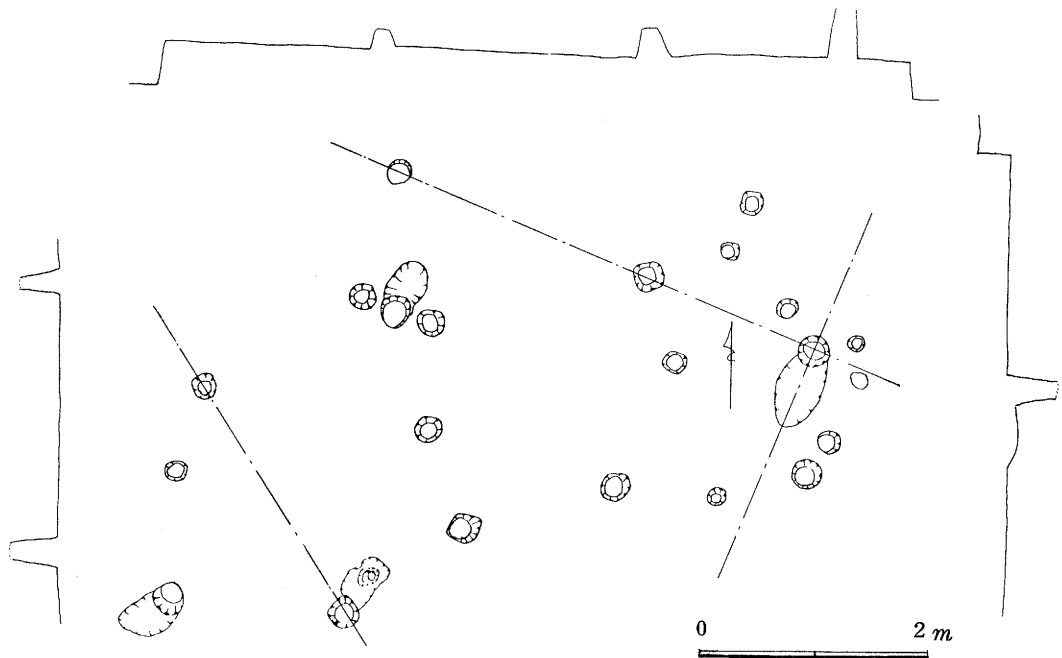
第2図 平木場遺跡・A区第Iトレンチ層位図



### 遺 構 (第3図)

検出された遺構は、A地区に分布する柱穴群と、B地区の方形竪穴住居跡である。

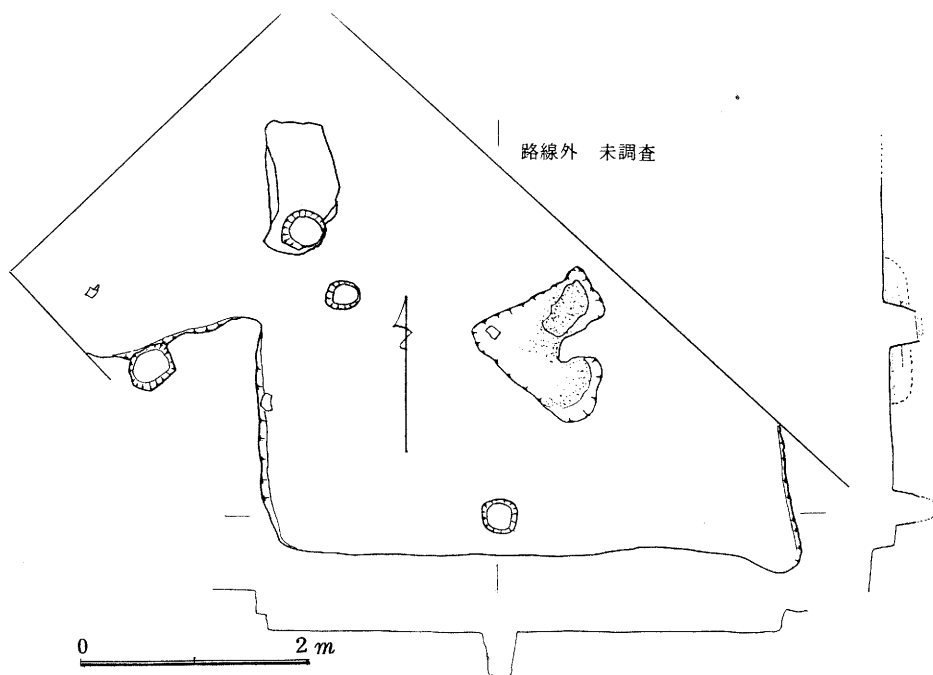
柱穴群 AトレンチのⅦ区を中心に28個が検出された。これらの柱穴群は、円形や隅丸方形で、内部には暗黄色乃至暗褐色の土が詰まっていた。これらの柱穴は、大きいもので、上径35~40cm、深さ50~60cm、小さいものは上径25cm前後のものも多く、垂直のものと、傾斜しているものがあった。また、大きい柱穴には長さ50~90cm、深さ15~20cmの楕円形の掘り込みがあり、一個だけは、灰混りの黒褐色土で埋め固められていた。柱穴群内には、確実に炉跡と認められるものは検出されず、また、竪穴を示す壁面も確認できなかった。或は、黒褐色火山灰土層面に掘り下げ面があったのかもしれないが、耕土層下柱穴群掘り込の黄褐色土層面までの層が薄く、観察の不十分な点もあって、ついに見出し得なかった。しかし、これら柱穴群が、住居跡であることは否定できない。年代については、これを決定づける遺物が、ほとんど出土していない。ただ、6号柱穴の上面で、<sup>(第3図)</sup>刷毛目調整の土器片が、1号と5号柱穴の中間地点の黒褐色土層下部から粘板岩製の長さ5cm、幅2.5cmの磨製石鏃が採集されている。或は、これが、A地区柱穴群の年代の決定に、一つの資料を提供しているのかもしれない。



第3図 平木場遺跡A区ピット群実測図

方形竪穴住居跡〔第4図〕B地区で検出された方形竪穴は、発掘上の制約で完全に調査することができなかったが、南北方向に構築された方形の竪穴住居跡とみられる。南壁の長さ4 m 4 0 cm、壁面の高さ1 5 cm、南北の長さは計測できないが、西壁は、南壁隅より2 mの地点で西へ折れ造り出し部を構成している。竪穴内部には、径30 cm、深さ3 5 cmの丸形柱穴2個と、径4 0 cm、深さ6 0 cmの方形状柱穴2個を検出した。また、南壁より1.8 m、西壁より2 mの位置に炉跡があり、床面下4 0 cmの深さに木炭・灰の堆積を見た。木炭の中からは、梅の実と見なされる炭化物を検出した。

この住居跡の年代については、上層に出土した多量の弥生式土器から、最初弥生期のものと考えたが、床面に検出された土師器や、炉跡内に検出した土師器片から、この住居跡は土師期の竪穴住居跡であることがわかった。従って、住居跡上層部の弥生式土器は、弥生期の生活層に掘り込まれた土師期の住居跡に後から再堆積したものとみなすべきであろう。ところで、土師期の年代であるが、完全に復原できるものがなく、確実に形式を判定できない。ただ、柱穴4号の西側に、口縁に櫛描波状文をめぐらす大形の甕形須恵器<sup>(第7図38)</sup>が出土していることは、或は、土師期の編年をこの須恵器の編年に近づけるものかもしれない。だとすると、当然住居跡の時期も引き下げられることになる。



第4図 平木場B区竪穴住居跡

## 遺物（第5・6・7図）

出土の土器には、縄文土器と弥生式土器・土師器それに須恵器がある。縄文土器はA地区に多く、B地区では、押型文の小破片が12点検出されている。今回の調査では、確実な縄文土器の包含層を見出せなかったが近くに、縄文期の生活層の存在を想定させるのに十分であった。

弥生式土器には、甕形、高杯があり、そのほとんどはB地区に集中して出土した。しかし、その大半は、細片であり磨滅したものが多く復原できるものはほとんどなかった。

石器類は、表面採集では、石匙や石斧、石鏃等が収集されているが、今回の調査では、数えるほどしか検出されず、石器の少なかったことは特徴的であった。

以下出土遺物について簡略に記していく。

（文責 茂山 護）

## 縄文式土器

平木場遺跡では自動車道のセンターポールに沿って東西にA区、B区、2つのトレンチを設定し、弥生式土器、縄文式土器の出土と文化層を確認することができた。

この章では縄文式土器および石器について書くことにする。縄文式土器は台地全体に文化層をもつものではなくトレンチの中でもごく限定された区画から少量の出土をみたにすぎない。土器、石器の確認されたトレンチはAトレンチ0区、1区それにその後南側に設定した11区、12区、約200m西側に設定したBトレンチ1区、2区である。

## 層位

当遺跡における層序関係は第2図のように観察される。

〔第Ⅰ層〕 耕作土で40～45cmの厚さがあり、これより弥生式土器片が出土している。上層は攪乱であるが、下部層に於て漸移層が認められⅠ層下部は弥生式土器がしっかりした形で出土する。

〔第Ⅱ層〕 黄味をおびた割合さらっとした砂質を含む層でこの下部層から前期の土器、石器が出土している。トレンチの全体的なこの面にピットが多数確認されたが、遺構としての把握はできないまま終わった。第Ⅱ層が主要包含層であり25～30cmの黄褐色砂質の堆積がみられ、他の区画ではこの層がカットされている所もある。

〔第Ⅲ～Ⅵ層〕 第Ⅲ層以下の土層では遺物は全く検出することはできず、観察は次のようにされた。Ⅲ層は通称赤ホヤと言われる霧島第1オレンジ層、第Ⅳ層はⅢ

層にさらに粘質味をもたせた黄褐色粘質土層，V層は黒褐色土層でここにも1個のピットの検出をみたが，遺構との関連が認められずに終わった。VI層はオレンジを含む粘土質で水分を含み褐色粘土層と呼称されたもので地表下約2mの所まで確認することができた。

## 出土遺物

### 土器

当遺跡出土の土器はAトレンチ，Bトレンチに於いて形式の相違が若干認められる。時期的には早期から前期に至っている。押型文土器をのぞくすべての土器が薄手であり，下記のごとく文様構成によって分類できる。

#### 第5図 (1. 2. 3. 4)

(1)は口縁部であり，口唇に竹へら状のものできざみをつけゆるやかな波状口縁をなす。さらに同一の施文具で器面にほぼ平行にしかも断続的に沈線文を描き縦の文様は一見撚糸文に見えるが，約5mm幅を一単位とする条痕が沈線文を施す以前につけられ，器面内側にも条痕で調整したあとがうかがえる。胎土はきわめて固く焼成は良好で外面は黒く一部スス状のものが付着している。(2)は胎土焼成とも(1)と同じであるが条痕文は(1)よりも繊細になっており綾杉状に整然と施文され，器面は黒く一部スス状のものが付着している。(3)は条痕文は少し乱れ，半分から上部はススが付着し黄褐色を呈している。(4)の土器は底部である。ゆるやかなカーブをえがく丸底で，これも外側には底部の中心を軸とした放射状の条痕文があり，一番底部では磨耗をみる。これも胎土焼成とも良好であるが，色は黄褐色である。以上(1)(2)(3)(4)の土器を観察してみると共通した点はいずれも角閃石の混入があり，焼成度合が同じであること，施文具が一致していることなどから，口縁のやや外反した胴部にふくらみをもつ丸底の土器が想像され同一個体と考えられる。土器の形式からいっても各地の報告例に見られるように曾畑式の特徴をよく表わしており，轟式にも類似点を見い出せる所から前期中葉に比定されると考えられる。(5)は器面外の文様は(1)と同じく竹へら沈線であるが，口唇につけられた刻みは大きく深く口縁部内側には2条のへら沈線を描きその下に2段の刺突文を施している。胎土は固く良好であるが，焼成は甘くやや赤褐色を呈している。時期的には前述のものと同じと思われる。(6)は口縁部がわずかに破損していると思われ，やや口唇が外反して胴部にかけて丸味をおびるもので，2本の沈線をもち粗雑な沈線に近い条痕と刺突文から成りススが付着している。焼成胎土とも良好で曾畑式の変型であろう。(7)は貝の押しびき文

に類似しているが竹を施文具に用いており、浅い刺突の連続文で構成され、胎土は固いが少し粗雑で焼成は悪い。しかし前期の土器のグループで並木式の垂流とも考えられる。(8)は胎土焼成ともしっかりしているが波状になった沈線文と平行沈線文から成り(9)とともに同一グループであり曾畑式の系統をひく。(10)は胴部に上下二つの竹ヘラ刺突文で構成され(5)の口唇部近くに施文された刺突文と同様で時期的には同じである。

#### B トレンチの土器〔第 5 図〕 (11)～(17)

(11)は短かくて深いはっきりとした沈線文がやや波状に施文されて前期の土器と思われる。(12)は胎土焼成はこれまでと変わらないが、やや外反し胴部中央に上下2段の凸帯刺突文とハイガイ腹縁と思われる沈線文を有し曾畑式土器の変形とみることができる。(13)はやや底部に近い部分で器面には撚糸縄文が施文され後期における縄文文様とは区別できる。なおこれに類似したものは宮崎市周辺より確認されている花見式、跡江式があげられる。(14)はA トレンチ出土の(7)と同一であり遺跡の広がりに関連づける一つの手がかりとなるであろう。

#### 押型文土器 (15) (16) (17)

この三点はいずれも楕円穀粒文であり、胎土焼成とも粗雑である。これら三点は同一形式のものであるが、施文には若干の乱れがある。時期的な編年は層位的にⅠ層とⅡ層に移行する層で検出され確定的な出土位置は認めがたいが、早期末に編年され得ると思われる。

#### 石器〔第 6 図〕 (1)～(9)

平木場遺跡Ⅱ層より出土した石器類は5点(1)～(5)で他(6)～(9)は表面採集によった。

#### 石 鏃 (1) (2)

ともに石質はチャート製で(1)は二等辺三角形に近い形をしており鋸歯に類似している。(2)は一部欠損しているが基部がやや張っている。

#### 剥片石器 (3) (4)

石質はチャートで(3)は一部二次加工の痕跡がみられるが、(4)は細石刃を思わせる縦長の剥片で横断面は、台形をなし使用痕は認めがたい。(5)は剥片石器というよりれっきとした石器であるが片面は古いパテナの面を残し一方にはすどい刃部をそ

なえ、小型のチョッパーといえるものである。石質は石英質でこの種のものはあまり材料としては用いられていない。

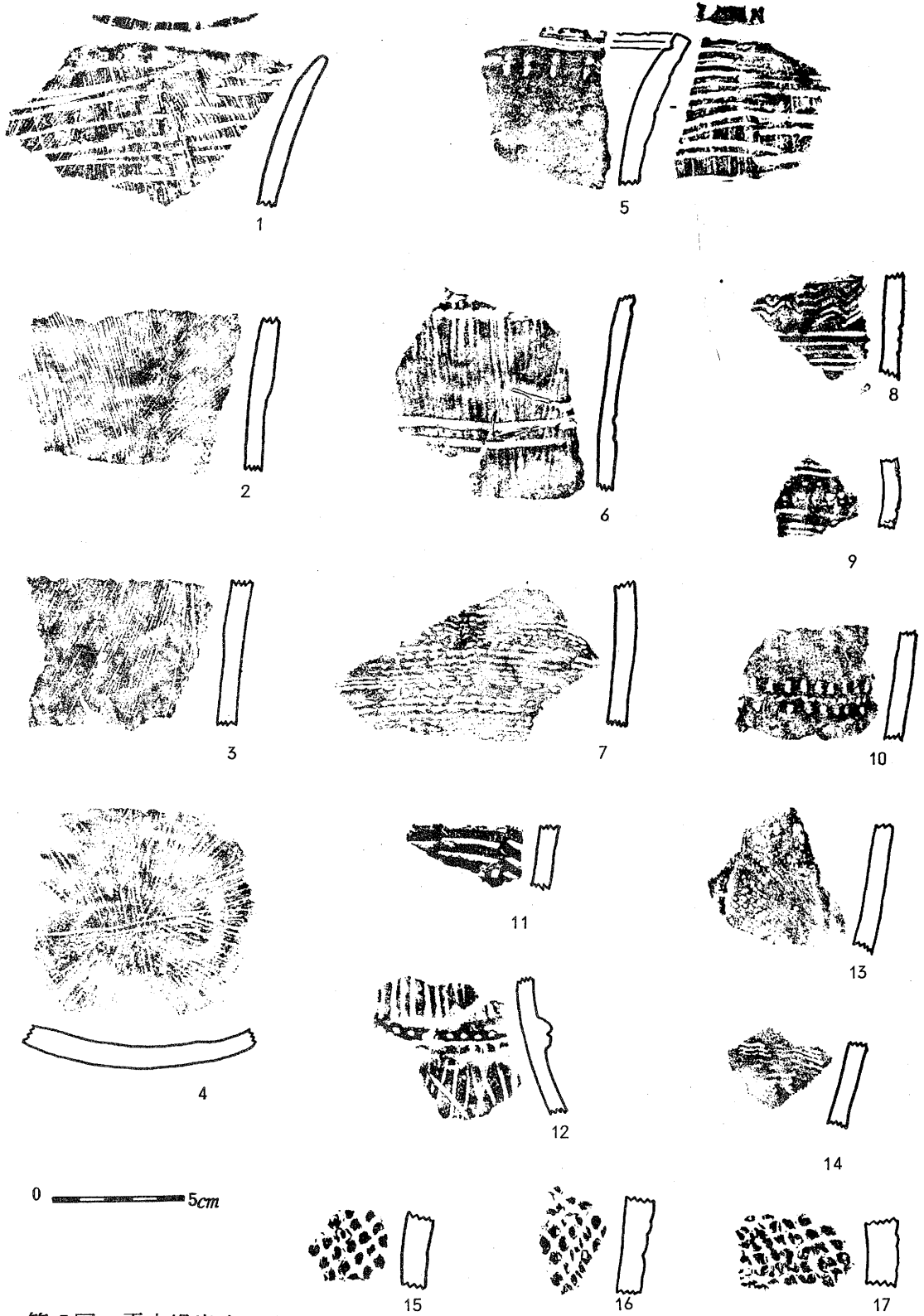
#### 搔器 (6) (7)

表面採集によるものであり、横剥ぎ横長のもの石質はチャートである。表裏とも全面加工が施してあり前期の土器と供伴してもよいものである。なおまだこの地区から縦長の石匙も採集されている。

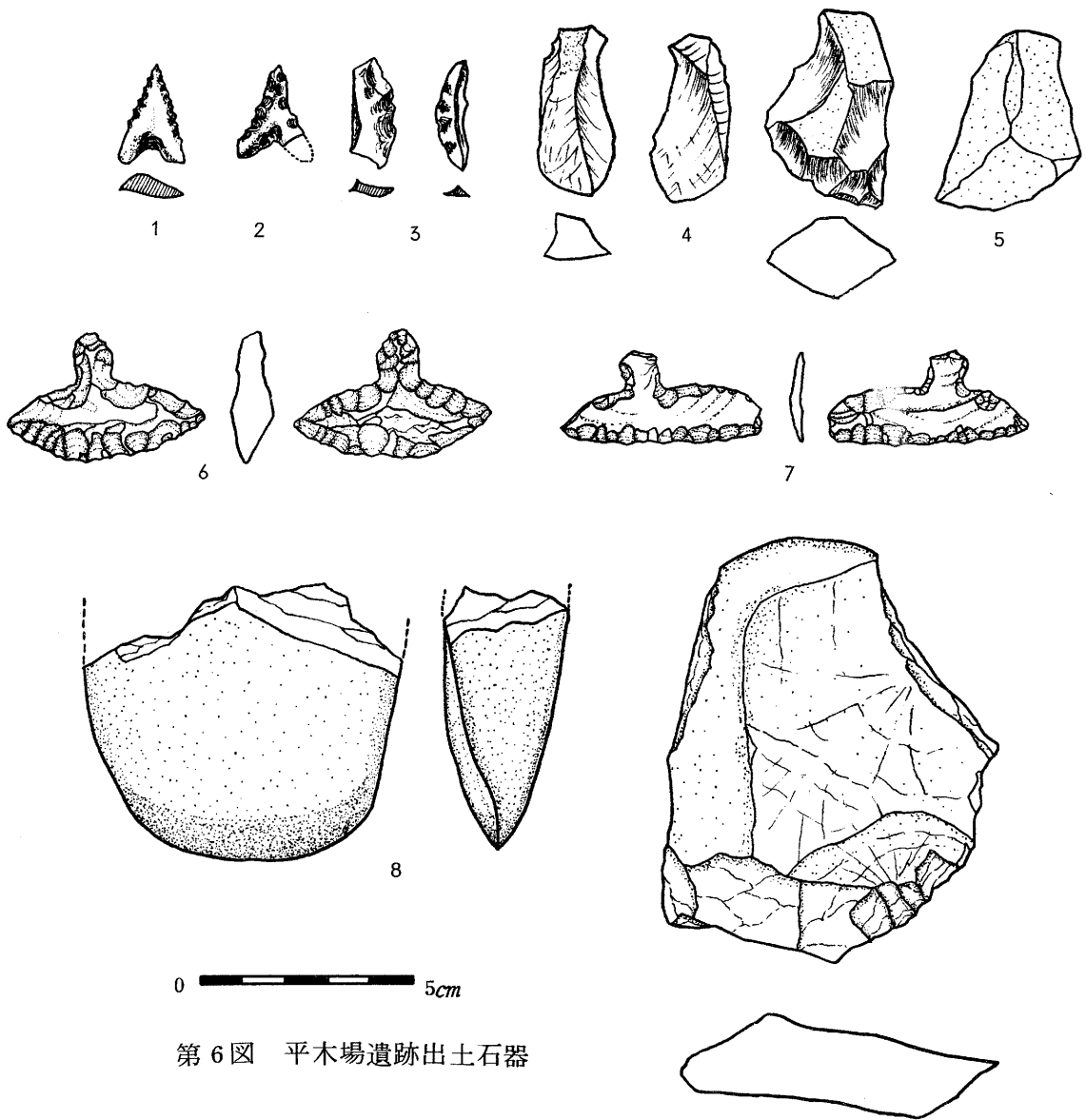
#### 打器 (8) (9)

(8)は一部に礫面を残し先端部に刃部をつけている。石質は安山岩で厚さは薄く大型のスクレパーともいえるもので、機能面からするとやはり打器であろう。(9)は上部が破損しているが頁岩製の磨製石斧で蛤刃をなしている。弥生式土器と供伴すると考えられるが、層位的に確認されなかったのでこの項に入れた。

以上のごとく石器の出土品は極めて少量であり多くのことが言えないが、剥片石器、石鏃、石匙など一応の供伴関係は認められ土器との関連づけがなされると思われる。



第5図 平木場出土・土器拓影



第6図 平木場遺跡出土石器

考 察

以上A B二地区に於ける出土遺物の細かい観察をしたが、全体的流れとして西北九州的な要素を強くもつ、南に霧島連山、北に九州山脈を見渡しその間にはさまれたこの盆地状の西諸地区は数多くの遺跡があり、当遺跡と関連ある前期土器の確認された遺跡は、東側では野尻町萩の茶屋周辺、小林市本田遺跡、最近ではえびの町四日市原灰塚遺跡でも有望な出土品をみ、その一連の流れを構成している。今回の調査では限定された調査区域であったため資料が乏しく、決定的な考察を欠いたが、今後の周辺の遺跡の関連性も考慮しつつ今回の調査をこれからの指針としてゆきたい。

(文責 安 楽 勉)



## 参 考 文 献

- 1 日本の洞穴遺跡鹿児島県片野洞穴 河口貞徳
- 2 考古学雑誌第47巻3号轟式土器の編年 松本雅明・富樫卯三郎
- 3 小林市本田縄文遺跡の調査昭和41年度西日本史学会九州考古学会秋季大会発表要旨 鈴木重治

### 弥生式土器

(第7図 1~15)

主要な土器は、外反する口縁をもち、ややくくれた頸部に絡縄凸帯をめぐらした甕形土器である。<sup>(図7の1~15)</sup>頸部から胴部にかけて張りの少ないものと、胴部がふくらみ、頸部がやや「く」字形を呈するものがある。絡縄凸帯は、鈍い三角状或は台形の凸帯に篋或は指頭によって、斜に刻目を押圧したものである。押圧刻目内に布痕を認めるものもみうける。

胎土は粗く砂粒を混入する。赤褐色乃至黄褐色を呈す。器面にかすかに刷毛目調整を残すものもある。復原形は確認できないが、底部は、小形の平底か上り底である。煮沸実用器であることは、どの破片も外面に黒く煤を付着していることで明らかである。

この土器は、西諸地方に多く類例を見る。今回調査した小林の竹山遺跡こまくりげはじめ高原町立山、立脇など、特に霧島山麓一帯に分布する。しかしながら、いずれも出土数が少なく伴出土器との関連、層位的確認ができていない。

器面に見られる刷毛目調整や、小形化し丸底化する底部の傾向、はりの少ない胴部、外反する口縁が、内面に稜をなして「く」字形を呈する器形など、竹山遺跡の出土例などもあわせ考慮するとき、後期末に相当することは否定できない。さらに南九州第V様式の城ノ上や、北九州の西新町などと対比するとき、実用性を重んじた成形や、一部にみられる土師器の存在と共に、後期の伝統を温存した東九州の終末期に比定すべき形式であろう。

### 高坏形土器

(第7図 34~37)

赤褐色乃至黄褐色の篋研磨された下開きの脚部をもつ。坏部は復原できるものがないが図33にみるような碗形が予想される。脚台及び坏部内面が黒色研磨されたものがある。(第7図 34. 35) 土師器とみるべきであろう。

### 土 師 器

(第7図 22~32, 21)

口縁形だけで全形が復原できないが、椀形乃至口縁の開いた埴形土器の破片とみられるいずれも竪穴面や炉跡から出土している。

### 須 恵 器

(第7図 38)

口縁が、朝顔形に開いた大甕である。稜をなす口辺下部に、凹線で分けられた二段の簡描波状文をめぐらす。胴径凡そ50cmに達する器面には、叩目成形のあとがみられる。外面は黄灰色、内面灰色を呈する。

### 結 び

今次の調査は、6kaにわたる遺物散布地のうち縦貫道にかかる3000m<sup>2</sup>の範囲を対象に、約300m<sup>2</sup>を発掘したのであるが、平木場遺跡の実態の一端をうかがうことはできた。

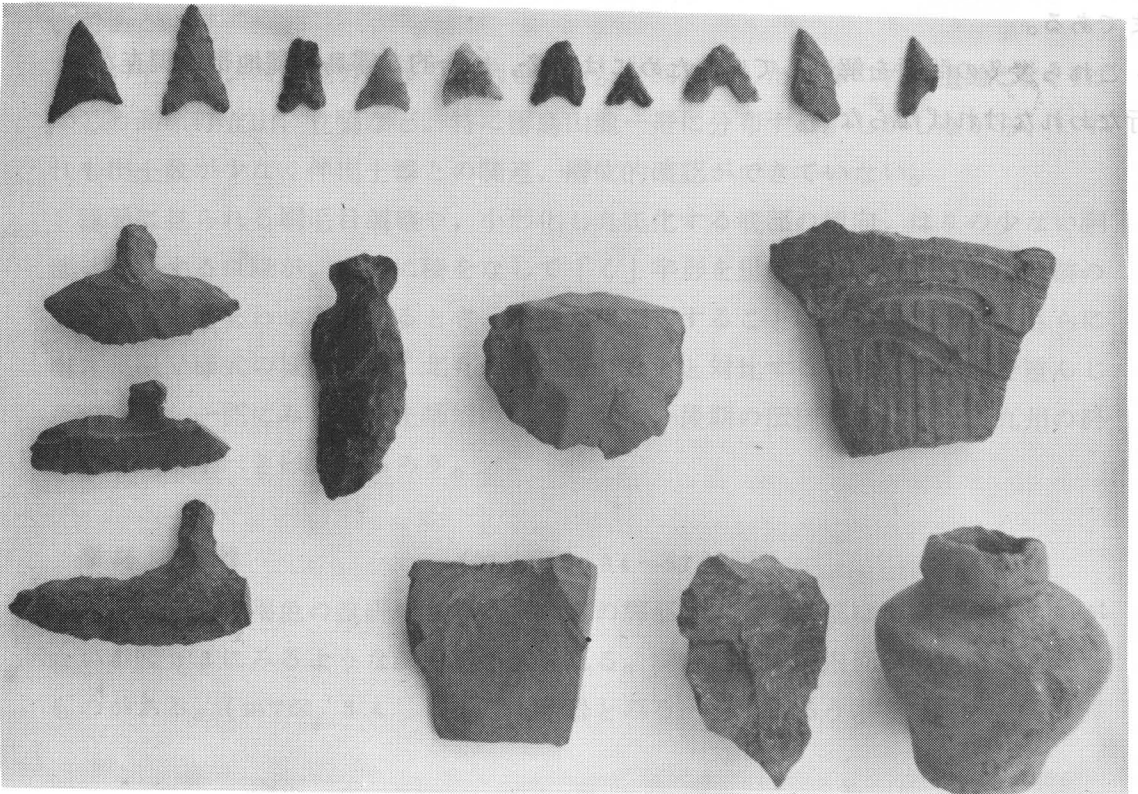
しかし、住居跡遺構や遺物の包含状態については、発掘地域の制約や、耕地整備のための削平攪乱等によって十分その性格を究明することはできなかった。柱穴群の時代、弥生終末期と考えられる絡繩凸帯土器の編年等、多くの問題が残されたままである。

これら幾多の問題を解決していくためには今後、総合的な霧島山麓地帯の調査が行なわれなければならない。

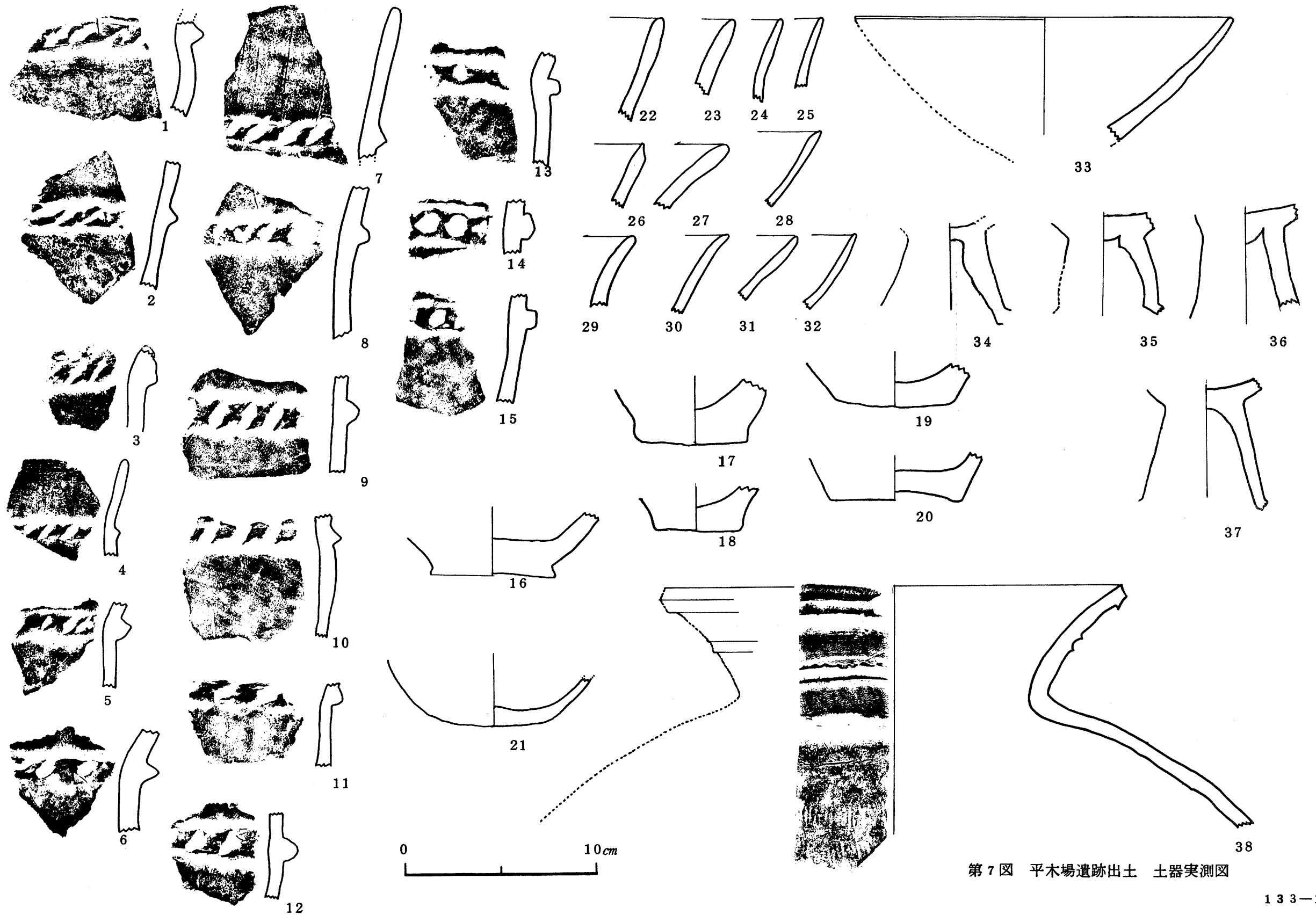


平木場遺跡

A 地点遠景



表面採集遺物（鬼目祥次郎氏採集）



第7図 平木場遺跡出土 土器実測図

### 3 竹山遺跡

#### 1 遺跡の位置

標高1344mの夷守岳は、北部山麓に緩斜面の熔岩台地と、これに連続する丘陵山地を形成する。小林から高原に広がるこの丘陵山地には数条の川が北東へ流下し、それぞれの流域丘陵に多くの遺跡を残している。

竹山遺跡もこれら丘陵遺跡の一つである。行政上は小林市大字細野字竹山に属し、小林の市街地の南西4kmの場所にある。小林から東牧場に通じている県道に沿って進むと、まもなく承和4年の由緒をもつ霧島岑神社に達する。この神社の南東500mに南北に横たわる丘陵が遺跡である。現在、畑地として利用され三段の段々畑が構築されている。遺跡は一番下の、竹山部落に通ずる市道に面した緩やかな南斜面畑地である。東九州縦貫道遺跡分布調査では、竹山北遺跡の名称で、弥生土器の散布地として報告されている。

#### 調査の概要〔第1図〕

発掘は、7月24日より8月1日まで9日間実施し、遺跡地にかかる計画道3600m<sup>2</sup>のうちおよそ250m<sup>2</sup>の面積を発掘した。

調査は、対象区域内の遺跡の所在と遺物の包含状態の確認を重点に進められた。調査にさきだち、遺物の散布が多く、本遺跡の主要部をなす下段の畑地をA区、丘陵の鞍部にあたる上段畑地をB区として、トレンチを設定した。

A区、黒色火山砂層に被われた畑地は、10度前後の緩やかな傾斜をなし、道路に面した南と、上段B区下とでは、およそ2mの比高差がみられる。この斜面に、2×60mのトレンチを南北に設け、10m毎に南よりI～VI区に分け発掘に着手した。遺構の検出によって、III区とV区を拡張し、IV～V区の東側にVII～VIII区をL字状に設定した。

発掘の結果A区では、黒色火山砂層をI層として、II層に黒褐色土層、III層黄褐色火山砂層、IV層にオレンジ層と呼ばれる橙色火山砂層、V層に褐色ローム層がありI層～II層が遺物の包含されるのを見た。またIII層の黄褐色砂層面では、黒褐色土の陥込んだ柱穴を検出した。遺物包含層のうちI層は、遺跡全面を被い耕土として利用されているため完全に攪乱されている。第II層の黒褐色土層は、なかでも、III区とV区において多量の土器を出土したのであるが、包含状態は不規則で、土器

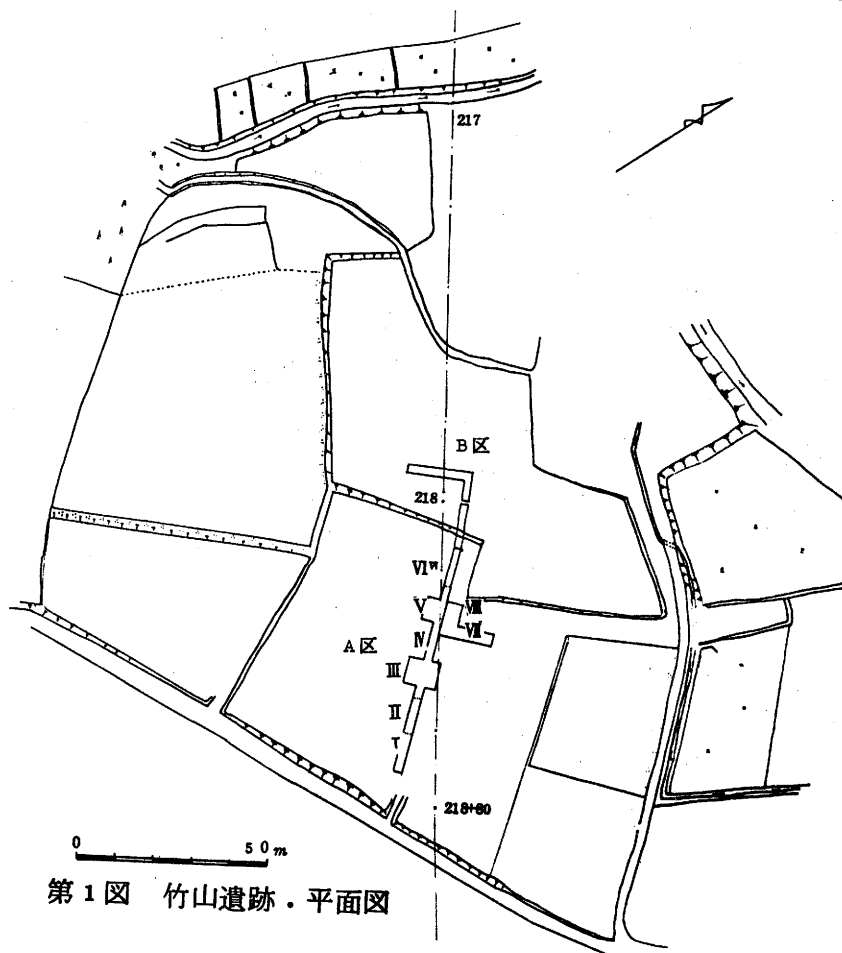
も細かく破碎され、完全に復原できるものは、ほとんどなかった。そして、II層の堆積区域が、II区の間からVI区の間までしかなかったことは、土器の破碎状況とあわせ、二次的な堆積層であることを示すものであった。従って、今回の調査では、完全な文化堆積層と確認できる層は検出できなかった。

III層に掘り込まれた柱穴は、III区とV区を中心に36個を検出した。このうち数個は、II層の黒褐色土層内で検出された。

出土遺物は、弥生式土器、土師器それに布痕土器であり、石器は検出されなかった。

B区 Aトレンチの北側延長線上に $2 \times 15\text{ m}$ 、その北端から西へ $2 \times 20\text{ m}$ のトレンチをL字形に設け、5 m毎に区分して発掘した。予期に反して、B区の表土層は薄く、 $15 \sim 20\text{ cm}$ で黄褐色土層となり、70 cmほどで橙色火山砂質層に達した。

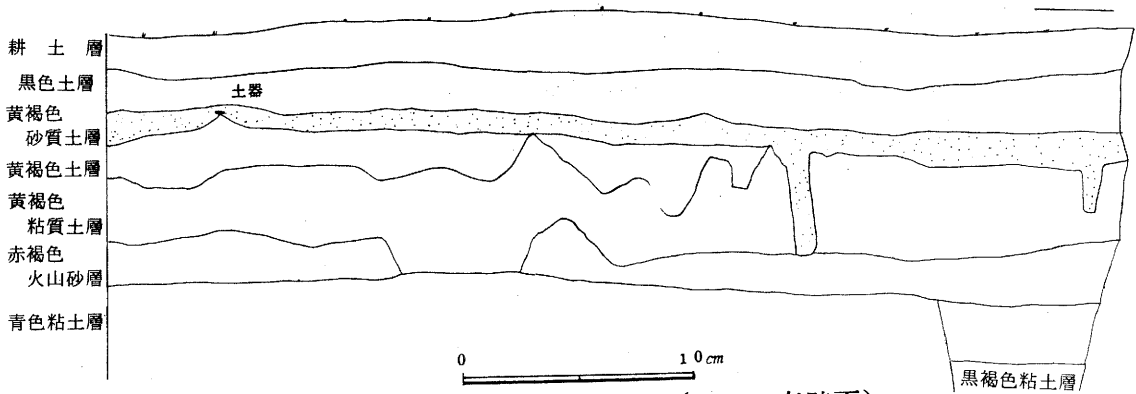
発掘の結果、トレンチ北側L字の部分の第II層に、幅60 cm、深さ40 cmの溝跡を検出した。溝内には、耕土と同じ黒色火山砂層が落込み内部から茶色の陶器片1点が出土した。この溝跡は南北に走り、北側の削取された崖面に露出していた。近世の用水路とみなされる。ほかに径60 cmの円形掘り込みもあったが、藁の混入など芋つばと断定した。出土遺物は、上記陶片以外全く検出できなかった。〔第2図〕



## 遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構や遺物は、Aトレンチで採集した弥生式土器や土師器布痕土器と、第Ⅲ層に掘り込まれた大小の柱穴群36個であった。土器類は、Ⅰ層からⅢ層にかけて混在しており、層位による型式区分はできなかった。弥生式土器は、Ⅱ区からⅧ区まで広く出土したが、土師器と布痕土器は、柱穴の集中したⅢ区とⅤ区に最も多く検出された。しかし、これらの土器は細片が多く、磨滅が激しく、完全に復原できるものはほとんどなかった。

以下、これらの遺構や遺物について、その概略を述べる。



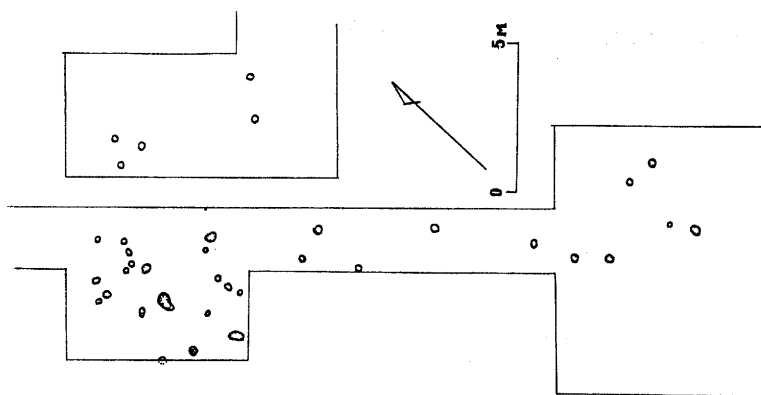
第2図 竹山遺跡・層位図 (A-Ⅲ南壁面)

### (1) 遺構〔第3図〕

Aトレンチに検出された柱穴は、直径20～40cm、深さ40～60cmの円形または楕円形で、ほとんどが垂直位であった。内部には、黄褐色土を混えた暗褐色の土が詰まっていた。ほとんど第Ⅲ層の黄褐色火山砂層面で検出したが4個ほどは、Ⅱ層の黒褐色土層内で検出されている。ことにⅢ区とⅣ区の境で検出された柱穴は、黒褐色土層内に固い層をもっていた。このことは、黒褐色土層を床面とした住居遺構の存在したことを示していたのかもしれないが、それを確認することはできなかった。

この柱穴群は、上層においては、多くの土器を出土しているが、直接柱穴と関連づけられる形での出土例はなかった。しかし、土師器や布痕土器が、この柱穴群の上層に集中して出土していることは、何等かの関連を示しているともいえる。

堅穴を示す壁面や固い床土、それに炉跡の検出されなかったことや、土師器との関連を考えると、これら柱穴群は、土師器以降の平地或は高床住居跡の柱穴と見るべきではなかろうか。



第3図 ピット配置図

## (2) 遺物

### 弥生式土器 (第4図 1~16)

甕形土器、鉢形土器、高坏形土器に分けられる。甕形土器は、外反りの口縁をもつ、胴部のはりの少ない土器で、口縁部が「く」字形をなすものと、ややくくれた頸部に絡縄状凸帯をめぐらすものがある。共に胎土の粗い土器で、赤褐色乃至黄褐色を呈する。器面に刷毛目を残すものと、よく篋磨きされたものがある。

鉢形土器 短い外反する口縁をもち「く」の字形に屈曲する内面が稜をなす。口縁内面はよく調整されているが、稜線以下の胴内部は篋けずり痕をのこしている。胎土は比較的良好で、焼度は高い。黄褐色乃至灰黄色を呈する。

高坏形土器 出土例が少ない。裾広がり脚部をもち、坏部と脚部は別々に作られたはめこめ式のもので、坏のつけ根に臍がある。坏部形は不明であるが、器面はよく篋磨研され、褐色を呈する。

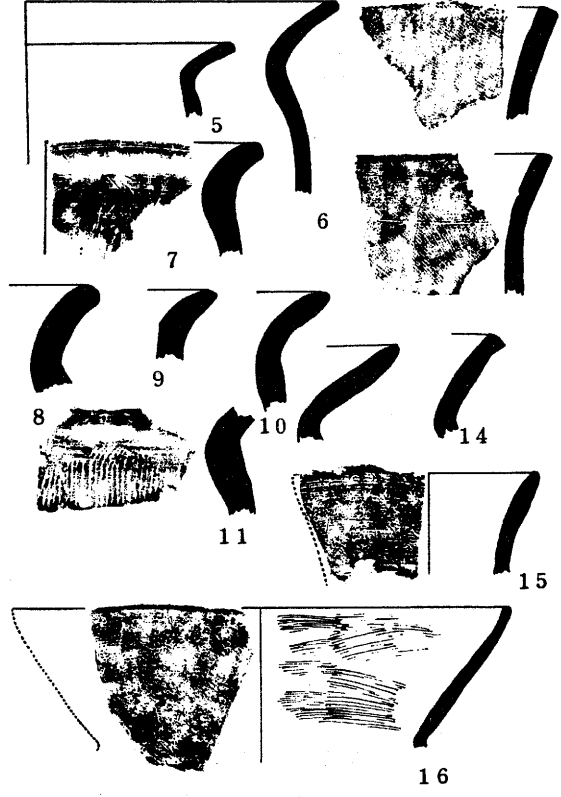


第4図の16は、内外面に刷毛目の調整痕をのこす焼度の良好な土器である。頸部以下の器形が不明であるが、口縁の大きく開いた甕形土器が想定される。器形調整から土師器に近いものといえる。

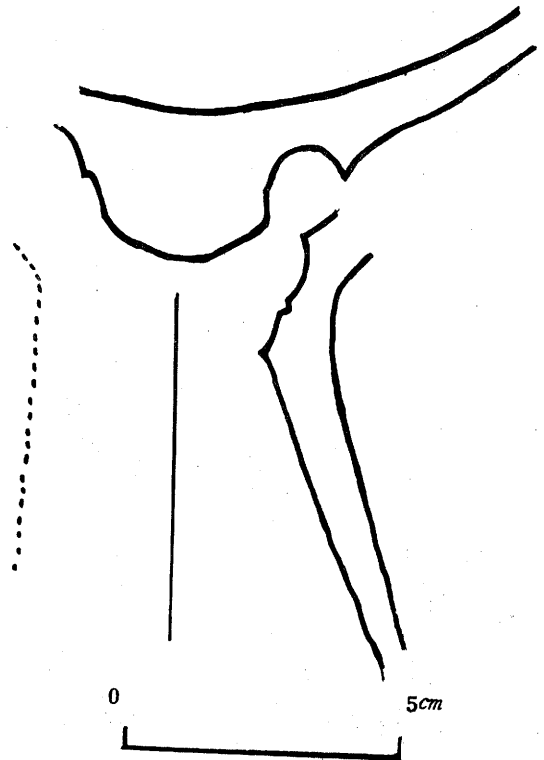
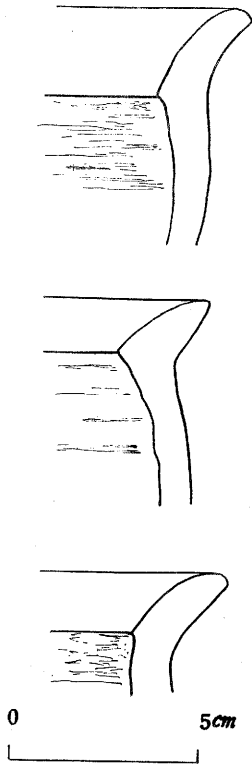
このような土器の伴出状況を考えると、以上の土器は弥生式土器というより、むしろ弥生の伝統を残した土師器とみるべきかもしれない。



第4図 土器実測図



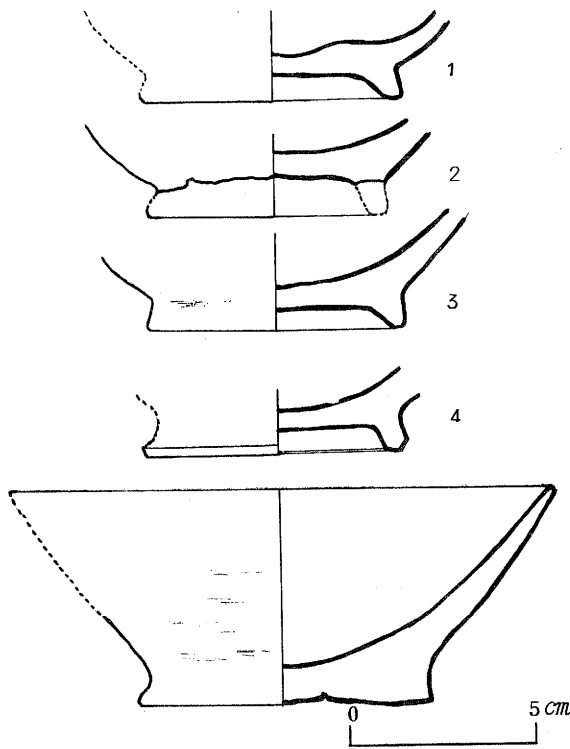
第4図



土師器（第7図 1~5）

平底乃至高台付の椀形土器である。口径14cm、高さ6cm、底部の径7cm前後の復原形をなす。黄褐色乃至灰黄色を呈する。器の外面には成形の際のろくろ目を残す。5は平底で篋切りの痕を残している。内面黒色研磨されたかなり焼度の高いものがみられる。外面に墨書痕をとどめるものもあった。

底部から口縁までまっすぐに成形された器形や黒色研磨土器の存在から、国分期を下るものであろう。



第6図 第7図 土師器実測図

布痕土器（第8図 1～3）

器の内面全域に平織布目の圧痕をもつ土器である。完全に復原できるものがなかったが口縁形や底部破片から推定復原形は、口径1.3～1.4 cm、高さ9～1.1 cmの尖底乃至丸底を有する碗形土器である。口唇が内面にそぎ落された傾向があり断面三角形を呈し、焼成時のひび割れが刻目状にのこり、口縁は波状をなす手捏による成形のため、器の外面は凹凸が多く調整はあまりされていない。

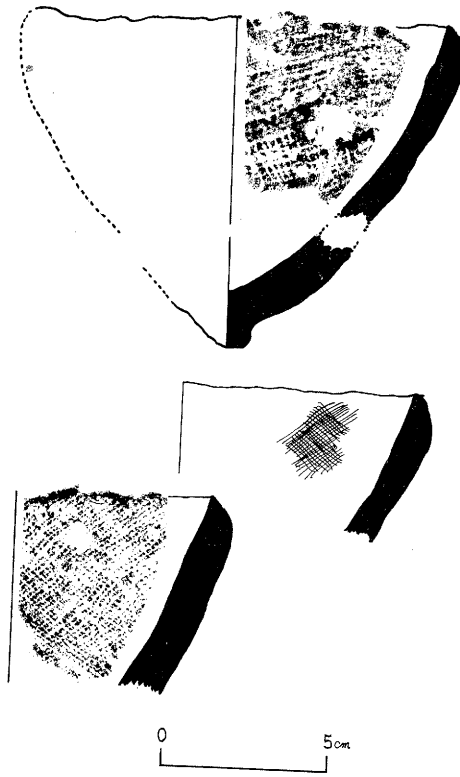
胎土は、砂粒を混入するがよく精撰され、なかには明らかに水漉した粘土を使用したものである。

この土器は、串間市下弓田遺跡での出土例が報告されている<sup>②</sup>。下弓田出土例にくらべて竹山出土の布痕土器は、焼きしまりが弱い。色調は赤褐色乃至黄褐色で、吸水性の高いのも竹山の土器の特徴である。

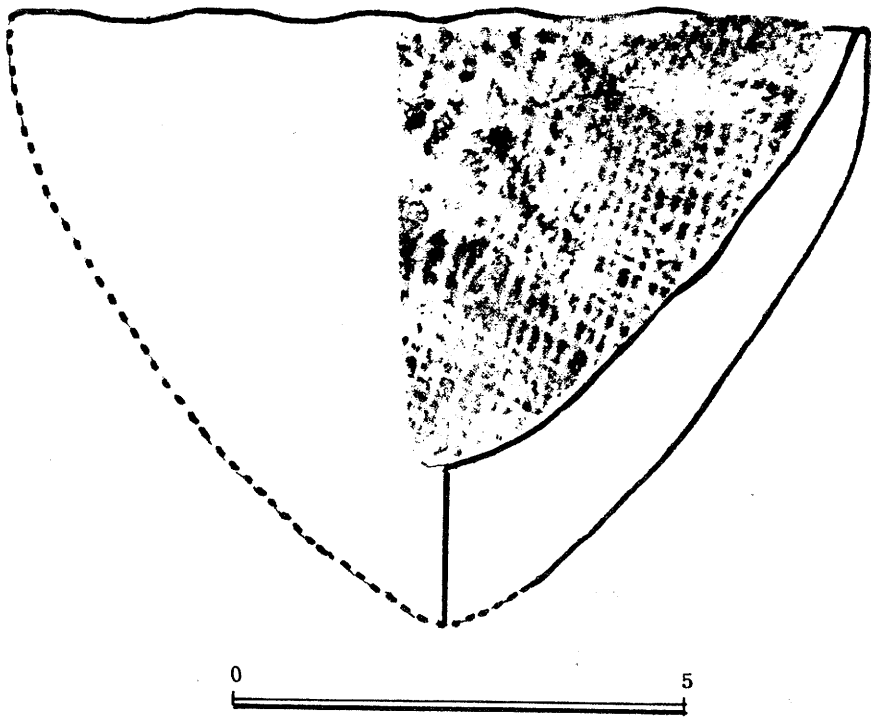
今回の縦貫道調査でも小林市出の山で、土師器や須恵器と共伴出土している。

ところで、布痕土器の年代であるが、弥生式土器と土師器の混在している本遺跡において、いずれに共伴するものかにはわかに断定できないが、今次調査で発掘された小林市平木場遺跡が、竹山と同じ絡縄状凸帯土器を出土しながら、布痕土器は一点も出土しなかったことは、布痕土器の土師器との共伴性を強く示すものではなからうか。

最近、西都市三宅国分寺址で、宅地造成に伴う緊急調査の際、布目瓦、高台付碗



第 8 図 布痕土器



第 9 図 西都市大字三宅 国分寺址出土

形土師器と共に布痕土器が出土した③(第9図)器形は小形で器面調整されているが、成形手法は、竹山出土のものとは変らない。

水漉した粘土を使用した緻密な胎土、吸水性の高い焼度、国分寺址における布目瓦との共伴例など考え合わせると、竹山遺跡の布痕土器は、土師器に共伴するものとみるべきである。

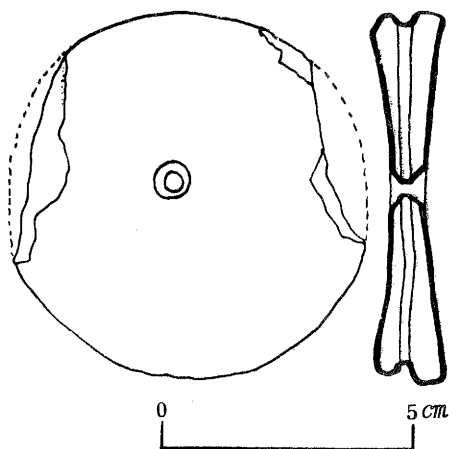
内面布目について、出土片109点のうち、ゆがみや、のびの少ない、布目痕の明瞭な40例について、1櫃当りの本数を調べたところ次の様な結果を得た。参考に掲示する。

糸目数	事例数
5 - 6	1
5 - 7	1
5 - 8	1
5 - 9	1
6 - 6	3
6 - 7	7
6 - 8	2
7 - 7	2
7 - 8	7
7 - 9	1
7 - 10	1
8 - 8	6
8 - 9	5
10 - 10	1
10 - 2	1
平均 7.3 - 8.4	

国分寺址出土の例

糸目の密なところで 7 - 8

糸目の粗なところで 6 - 6



第10図 有孔円板

有孔円板 (第10図)

Ⅲ区のⅡ層より出土したもので、土師器の底部を利用したものである。坏部の欠けた底部の上面を削り平坦にして、中央に中心径3mmの円錐孔を両面より穿ったものである。

側面に幅2mmの凹線ができています。糸をかけた溝であったか、かなりの磨滅がみられる。紡垂車であったか、用途については種々考慮されるが、ここでは、有孔円板としておく。

## 結 び

竹山遺跡の今回の調査は、あくまでも、縦貫道計画線内の遺跡の所在確認にあった。たしかに250㎡許りの発掘によって、遺構と遺物の包含状況を調べ、古代竹山に於ける生活史の一端をとらえることはできたが、それは、かならずしも竹山遺跡全体の完全な究明にはならなかった。

平地住居乃至は高床住居跡と考えられる柱穴群にしても、住居跡調査としては、発掘地域が狭かったこと、床面調査の精査度の低かったことなど多くの問題点を残してしまった。

しかしながら、層位的編年はできなかったが、弥生終末形式とみられる絡繩凸帯土器の問題、いまだ、年代確定のできなかった布痕土器の共伴土器との関係による使用年代確認への手がかりを得たことは、幾多の未解決な問題を残しながらも、究明への一步を踏み出すことができたといえよう。

## 注

- ① 遠藤 尚「火山灰層による霧島熔岩類の編年（試論）」  
(霧島総合調査報告書 宮崎県1769, 3)
- ② 「下弓田遺跡, 日向遺跡総合調査報告 第一輯」  
(宮崎県教育委員会 昭36, 3, 30)
- ③ 昭和47年7月 宮崎県教委, 西都市教委による緊急調査(未報告)  
(文責 茂山 護)



高原鷹巣原トレンチ断面



鷹巣原表面採集遺物

弥生式土器片



高原町鷹巢原全景

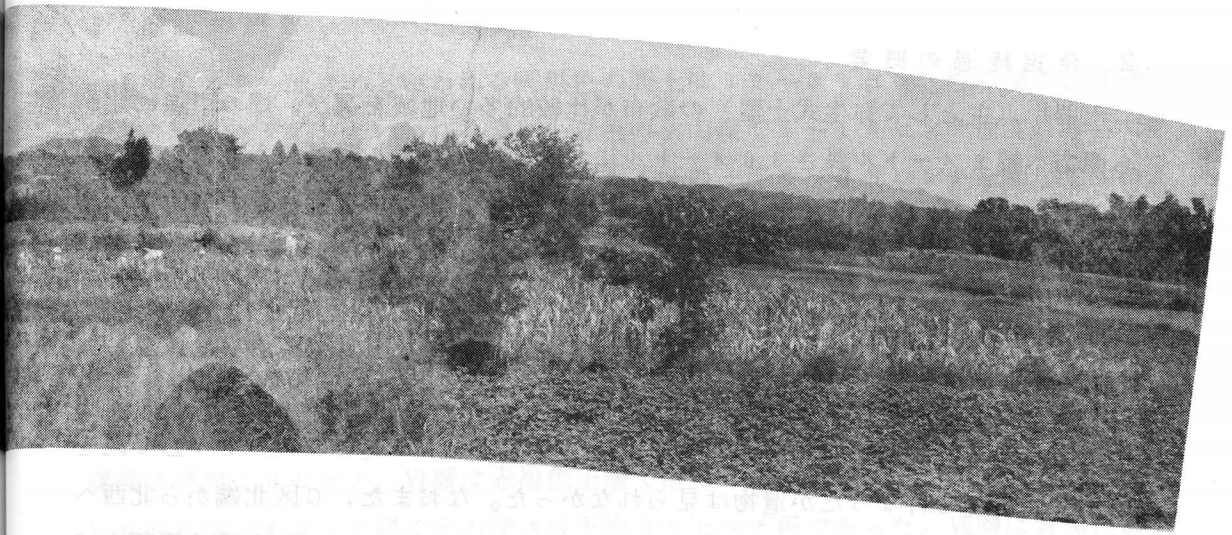
## 第 5 西 諸 県 郡 高 原 町 内 の 遺 跡

### 1 高原町鷹巢原土器散布地

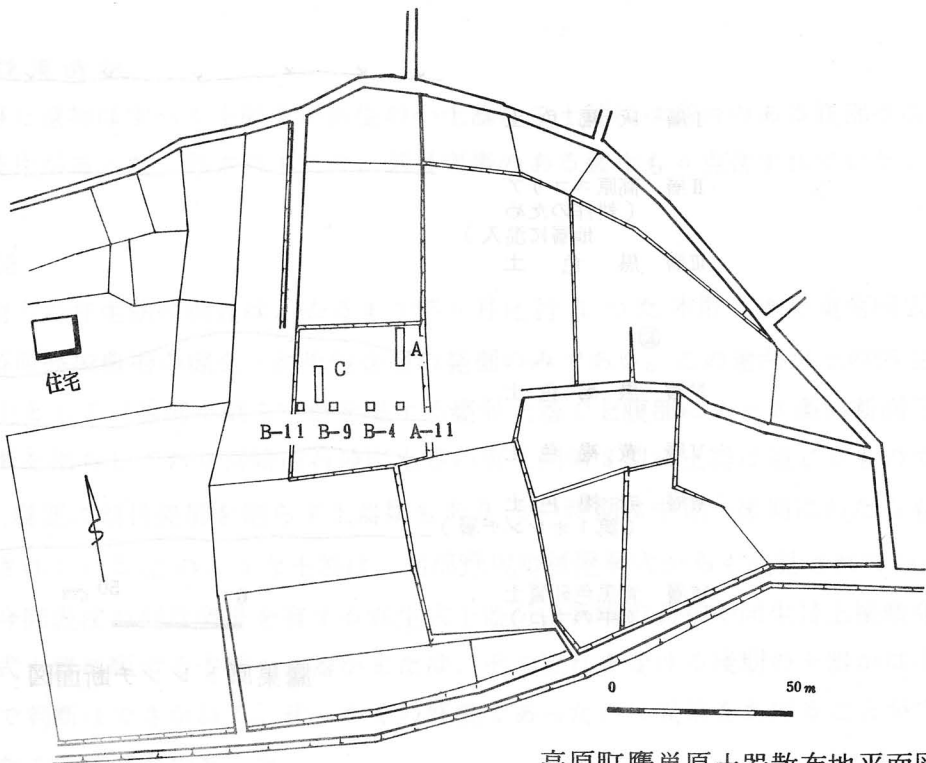
#### 1 立 地

鷹巢原は、高原町広原に属し、国鉄吉都線鷹巢原無人踏切から北西数百メートルの地点に位置する。広々とした開けた土地で、北西に夷守岳（1344.1 m）を望み、南西には霧島の秀峰高千穂峰（1573.7 m）を間近に仰ぐ形勝地である。調査地は、畑地であったが、付近には水田も開けている。この一帯は地質学的には高原扇状地といわれる所で、基盤は、シルト層、凝灰岩を伴う礫層から成っている<sup>①</sup>。





へ西に... 土器... 散布地... 平面図... 50m

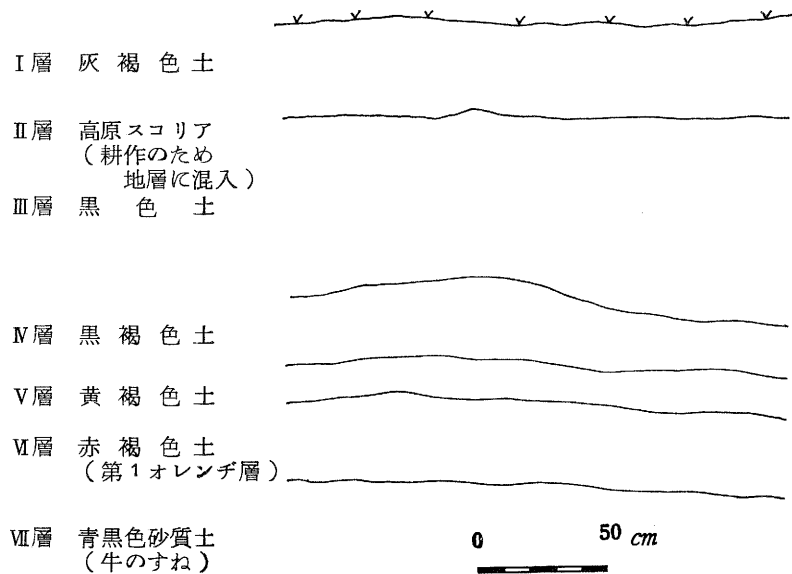


高原町鷹巣原土器散布地平面図

## 2 発掘経過の概要

土器片（主として弥生式土器）の散布が比較的多い地域を選び、畑の東隅に北から西方へ幅2メートル長さ36メートルにわたり2メートル間隔でトレンチを計画、北端をA-1区として18区を設定した。ところが、すでに攪乱され、遺物は包含されていないことがわかったのでこの予定を中止し、A-5区、A-11区を層位調査の目的として下部「牛のすねローム」層まで掘り下げることにした。

つぎに、A-11区の地点から西方にB区を設け、そのうちからB-4、B-9、B-13の3区を下部まで掘り下げたが結果はA区と同様であった。さらに、B-11区（未発掘区）から北方へA区に平行して2メートル×10メートルのC区を設定して調査を行なったが遺物は見られなかった。なおまた、C区北端から北西へ30メートル、C区面よりの比高約50センチの地点にDトレンチを設け下部まで掘り下げたが、成果を得ることはできず発掘開始から3日目の夕方全調査を終了することにした。



鷹巣原トレンチ断面図

### 3 層位の概要

I層の「クロボク」といわれる灰黒色の表土は30～35センチ程の深さ、II層は「高原スコリア」といわれる濃い小豆色の火山礫で5～10センチ程度の厚さで堆積している。しかし、A-5区、A-11区の一部及びDトレンチを除いて他の調査地区では、すでに表土や次層に混入しスコリア層を見ることはできなかった。III層は黒色土層で平均70センチの深さがあるが、この層の中間、あるいは下部までスコリアが混在し農業によるすき、くわがこの層まで及んでいることがわかった。本来ならばこの層中から土師及び弥生の土器が出土するはずなのに遂に発見することができなかった。IV層は、黒褐色土層、深さ平均25センチ、V層は、黄褐色土層深さ平均20センチ、VI層は赤褐色土層で俗に「アカホヤ」とか「アカバン」といわれる第一オレンジ層でその深さは平均30センチ程であった。VII層は青黒色砂質土層で地元では「カシワバン」という「牛のすねローム」層である。地表からこの層上面までは、2.7メートル～3メートルの深さであった。

### 4 表面採集遺物

表採で得た遺物はすべて土師及び弥生の小土器片で土師には高台のある底部や高坏脚部の破片があった。弥生の中には、刻目突帯のある破片も6点含まれていた。

### 5 結語

西諸県郡地方の弥生期の調査は、去る43年5月に行なつた本散布地の東南同広原の高原畜産高校農場の縄文・弥生包含層の発掘のみである<sup>②</sup>。この遺跡出土の弥生式土器は、主として口縁部が倒L字形を呈する甕形土器で上腹部に2-3条の断面三角形の突帯を廻らしており宮崎市石神出土等の東九州第3型式土器に通じるものである<sup>③</sup>。また、肩部に刻目突帯を廻らす土器類もあり、その時期は中期～後期にわたるものと報告されている。このような土器は、同郡野尻町紙屋洞穴からも発見されている。しかし、今回表採の刻目突帯を有する弥生式土器が、宮崎市石神や同生目上屋敷発見の下城式土器に類する中期の土器かまたは、その流れを受ける後期の土器かは小破片なので判断はできかねる。せつかくの好機であったのに成果をあげることができなかったことは残念であった。

註

- ① 遠藤 尚「火山灰層による霧島熔岩類の編年（試論）」  
（霧島総合調査報告書 宮崎県 1 7 6 9. 3）
- ② 石川恒太郎「高原町縄文期包含層調査報告」  
（宮崎県文化財調査報告書 第 16 集 宮崎県教育委員会  
昭 4 7. 3 ）
- ③ 小林行雄編「弥生式土器集成 本編 1」所収 森貞次郎「東九州地方第Ⅲ様式  
杉原荘介 土器」（日本考古学協会 昭 3 9. 1）  
（文責 田中 茂）

## 2 立山遺跡

立山遺跡は、西諸県郡高原町大字西麓字立山にあり、高原町役場の北西に、迫を隔てて南北に横たわる標高200米の台地に位置している。（※1）

遺跡の主要部分とみられる役場裏手の高台は、すでに宅地造成のために大部分が開削され、弥生式土器や土師式土器の破片が散乱している。遺物の散布状況から、遺跡はこの台地のかなり広い範囲に及ぶことも予想される。

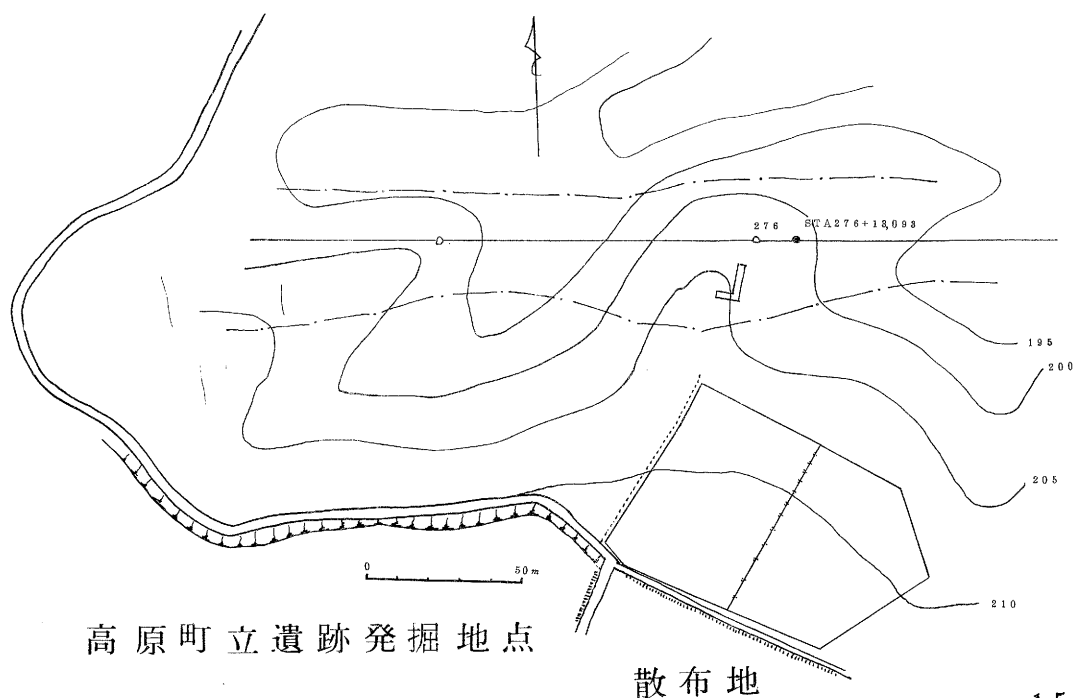
今回調査の対象になったのは、北方の辻の堂川に向って伸びた台地の先端部分であった。この台地縁を横断する計画路線のうち、散布地に最も近く、ゆるやかな傾斜をなして舌状に突出した台地縁の、道路中心標柱276の南側に、2m×7m、2m×10mののトレンチをI字状に設定発掘した。

発掘の結果、層位は第I層黒色火山灰層（30～45cm）、第II層茶褐色粗粒ボラ層（25～35cm）、第III層に黒褐色ローム層（25～30cm）、VI層が橙褐色火山砂層となり、第VI層まで遺構はもとより、一点の遺物も検出されなかった。

遺物の散布地点からは、およそ130mしか離れていないが、発掘地点に関する限り、地形的にも遺跡の周辺になり、生活跡は存在しないものとして、立山の調査は1日で打切ることになった。（文責 茂山 護）

註 ※1（九州縦貫自動車道遺跡分布調査報告書）

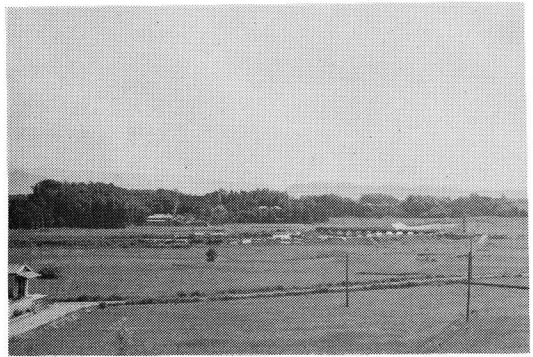
（宮崎県教委 昭和44年）では弥生土器の散布地となっている。



小 木 原 古 墳



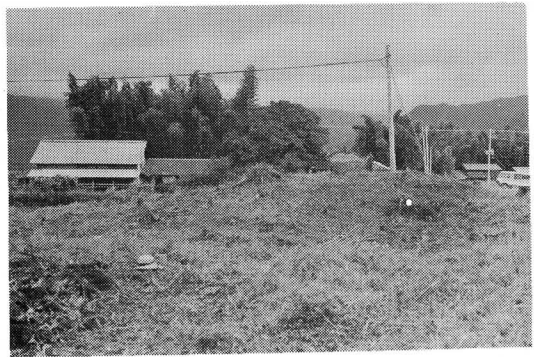
小木原古墳を望む



小木原台地を望む



小木原古墳陥没穴



小木原古墳



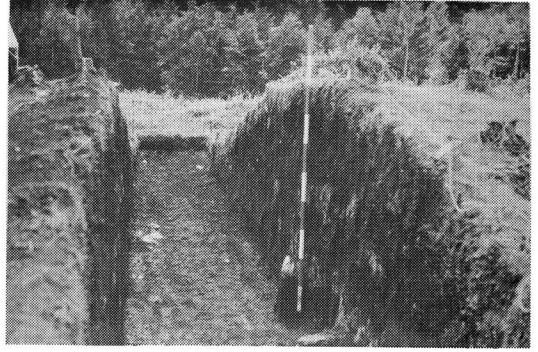
先方、小木原古墳 手前、地下式A号墳



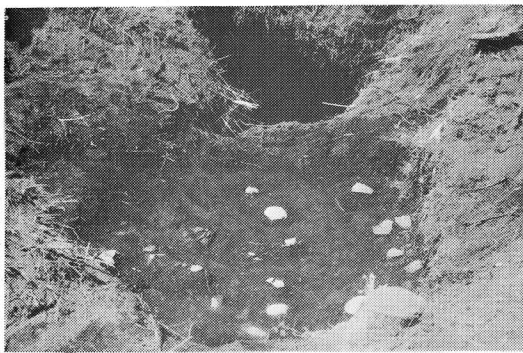
小木原古墳の封土が除去された光景



小木原古墳の墳丘断面



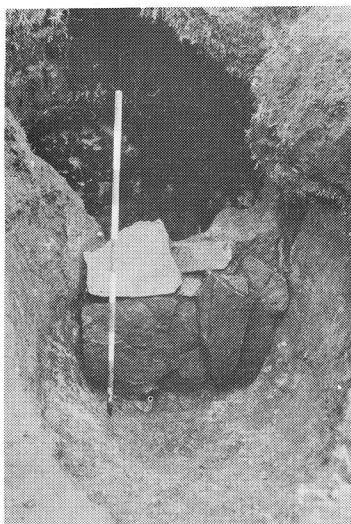
小木原古墳A・T内地盤



地下式 竪穴上部の土器片



小木原古墳発掘状況



地下式 竪穴と閉塞石

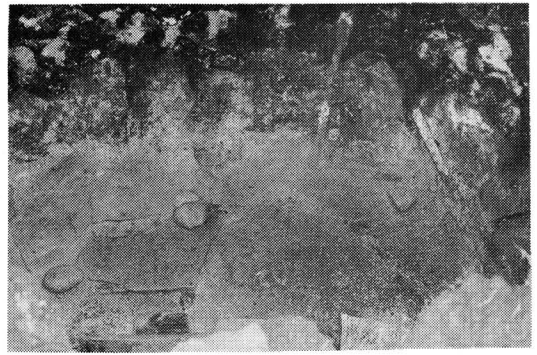


小木原古墳A・トレンチ





玄室内敷石床面



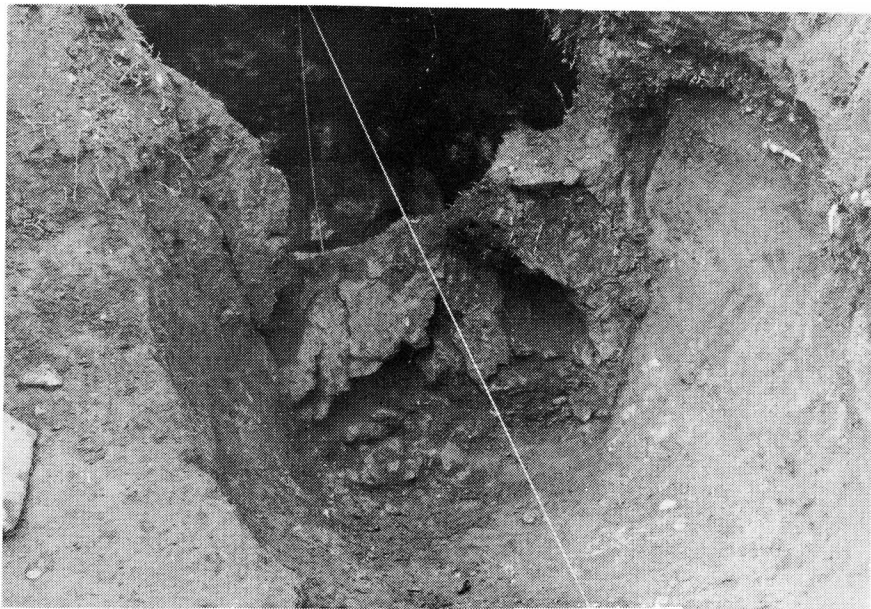
玄室内敷石上の遺物



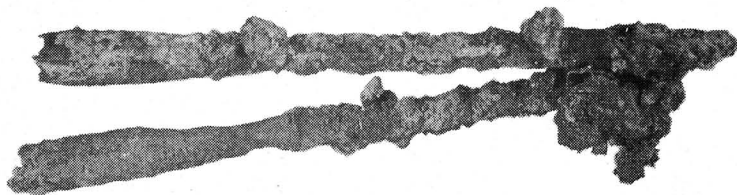
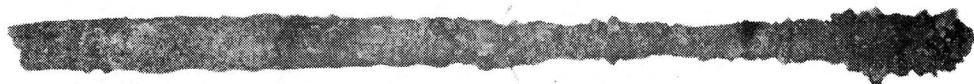
玄室床面上の仿製鏡



玄室内出土の直刀

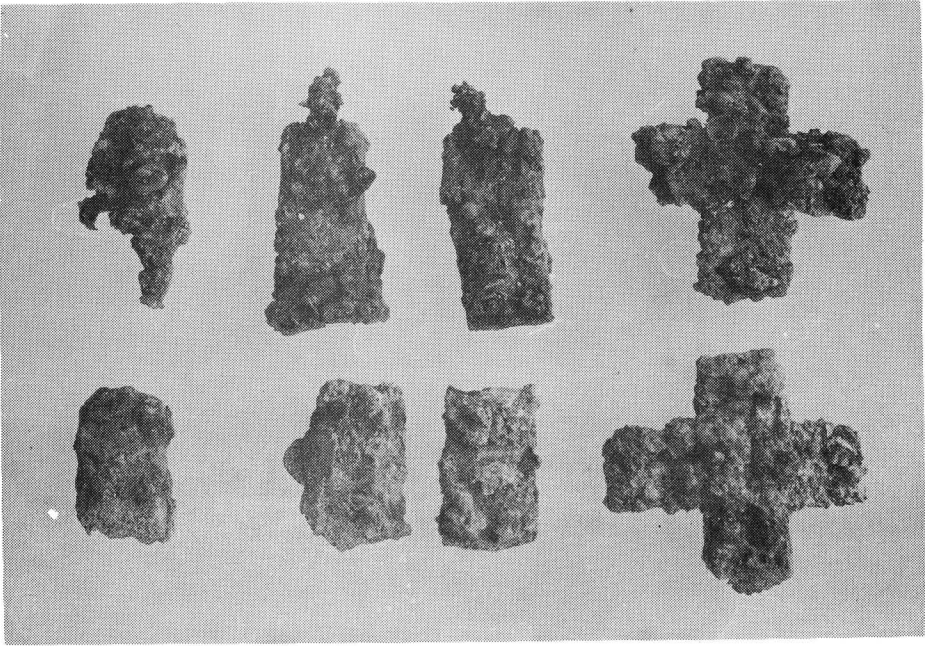
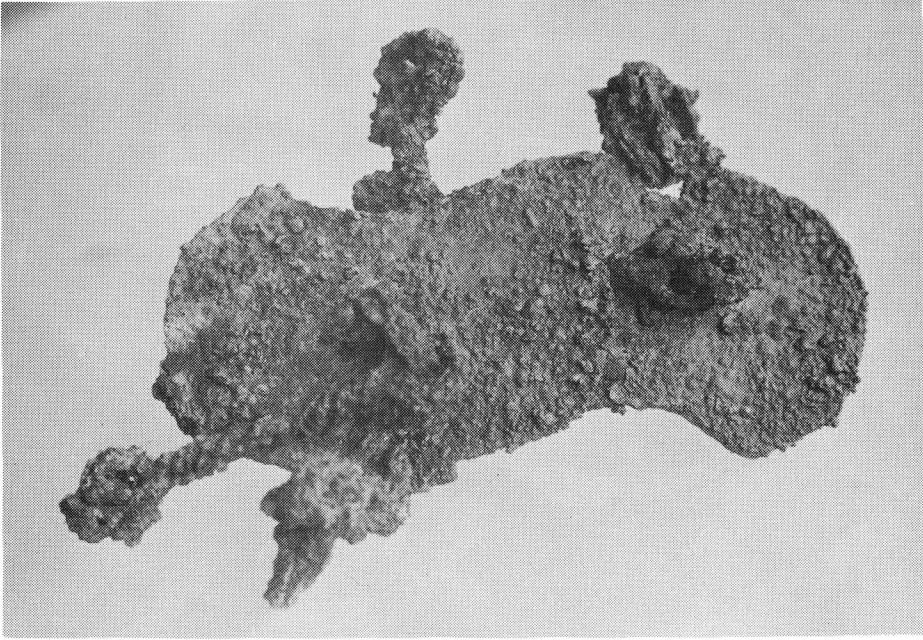


小木原古墳地下式玄室内部

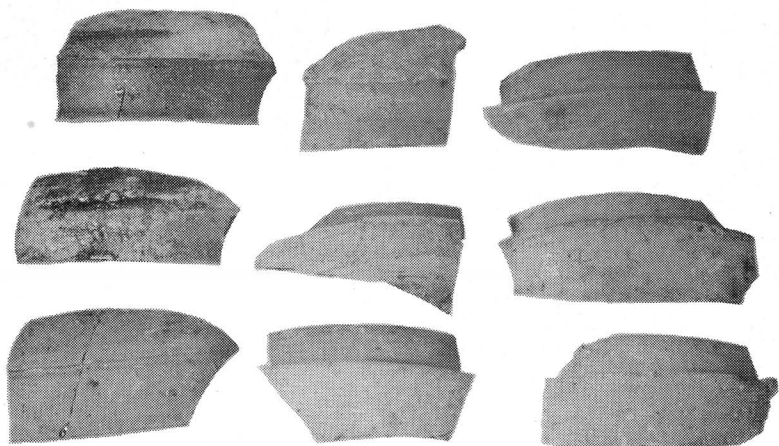
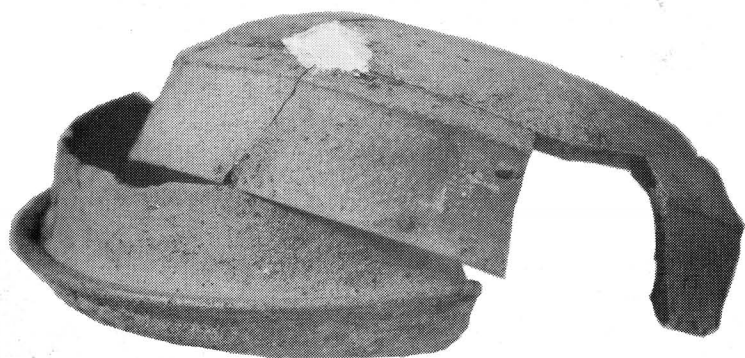


(上) 獸形鏡・小木原古墳地下式玄室出土

(下) 鉄 鍬・地下式A号墳出土



小木原古墳地下式玄室内出土の馬具



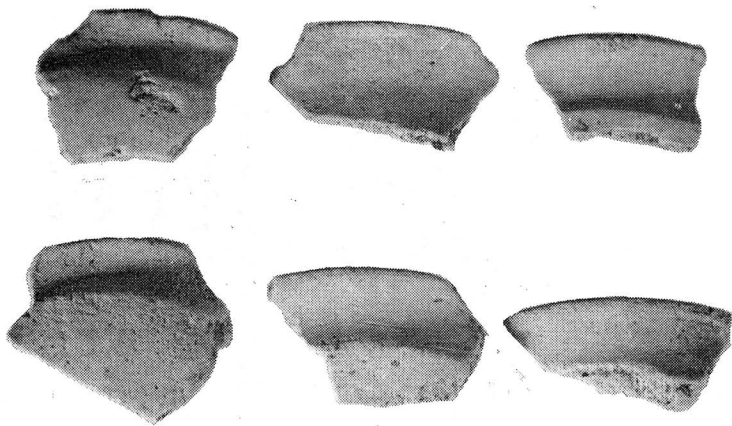
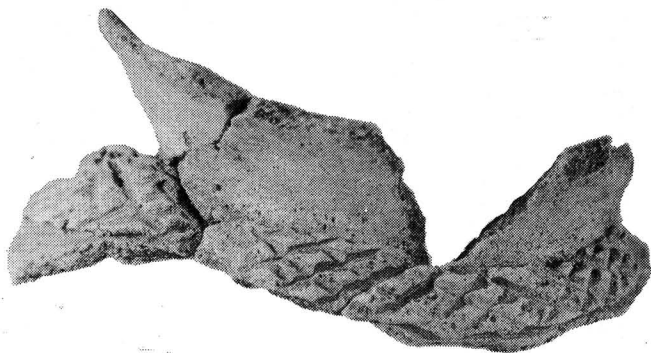
小木原古墳地下式玄室出土・須恵器（C区）



小木原古墳地下式玄室出土・須恵器（C区）

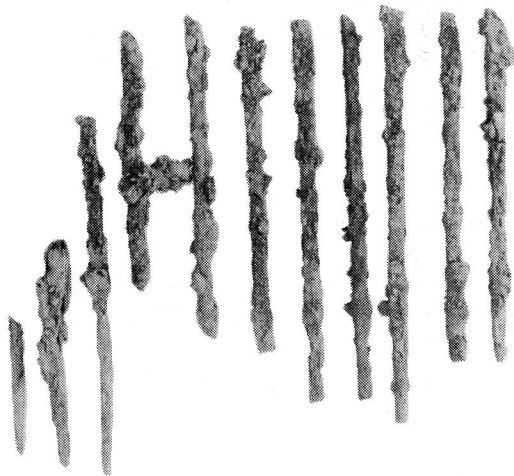
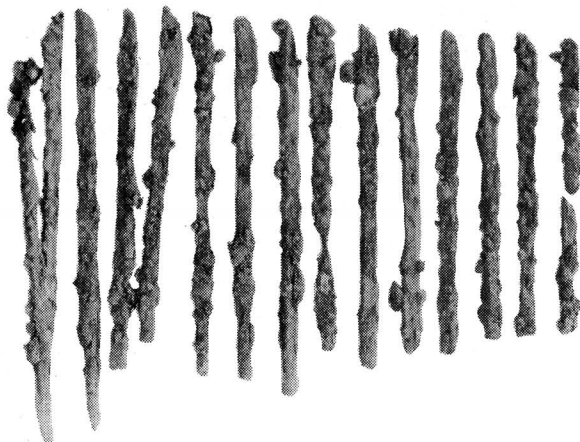
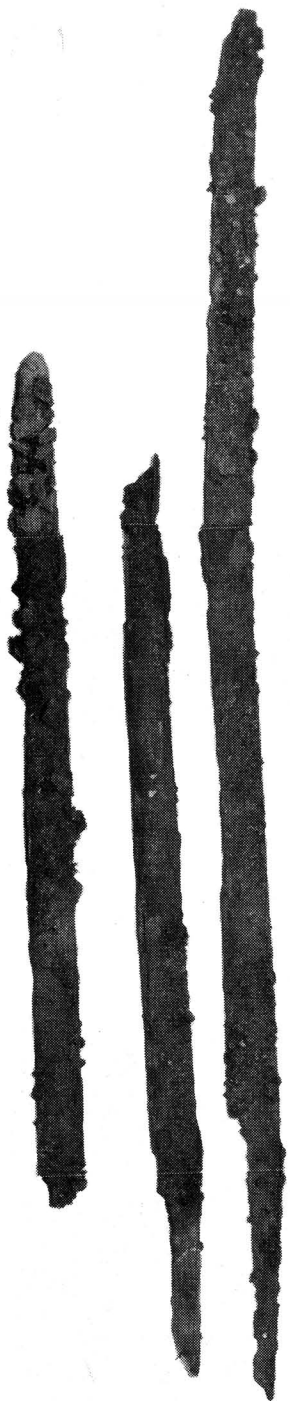


土師器  
(2)地下式A号竖穴出土



須恵器・土師器  
(1)(3)(4)小木原古墳C区出土

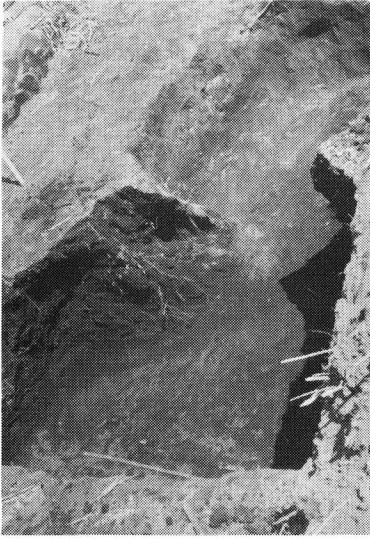




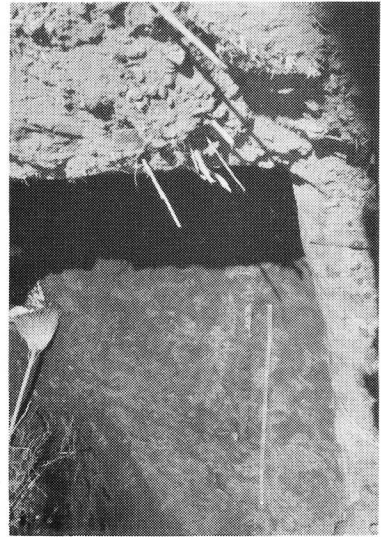
小木原古墳地下式玄室内出土・刀剣・鉄鏃  
中央の直刀のみは地下式A号墳出土

久 見 迫 遺 跡  
馬 頭 遺 跡

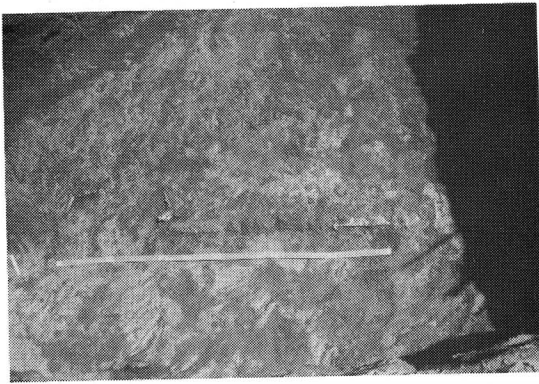




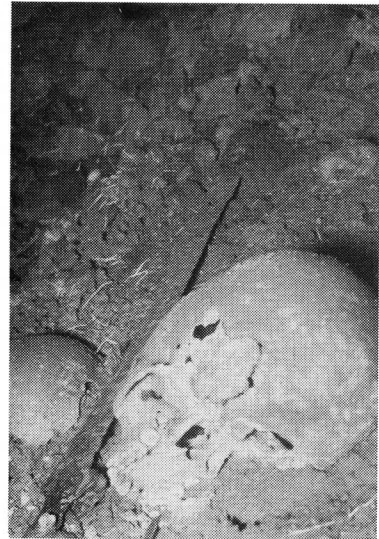
久見迫第 1 号遺構



久見迫第 1 号遺構



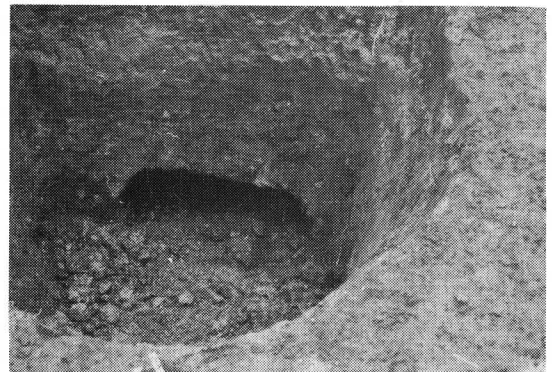
久見迫第 1 号出土状況



久見迫第 3 号出土状況



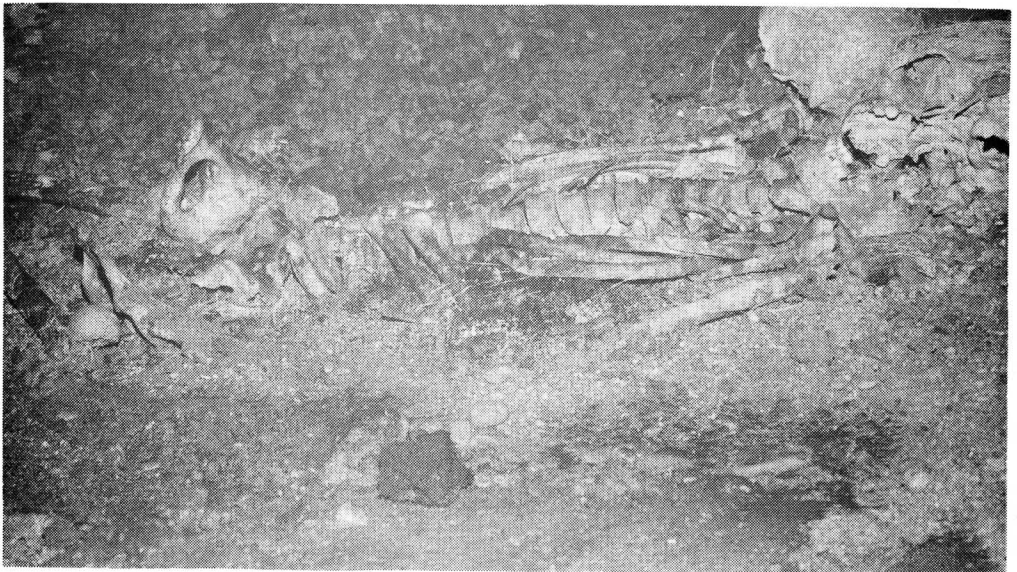
久見迫第 4 号羨道部閉塞状況



久見迫第 4 号羨道部開口状況



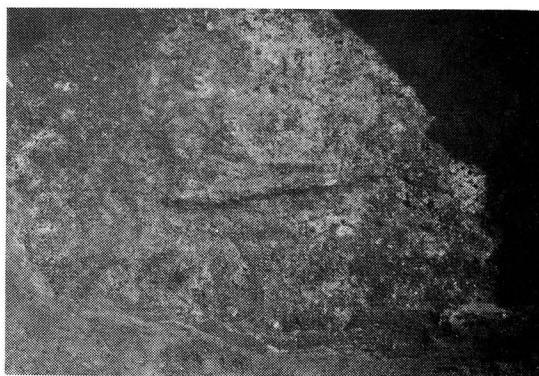
久見迫第 4 号断面



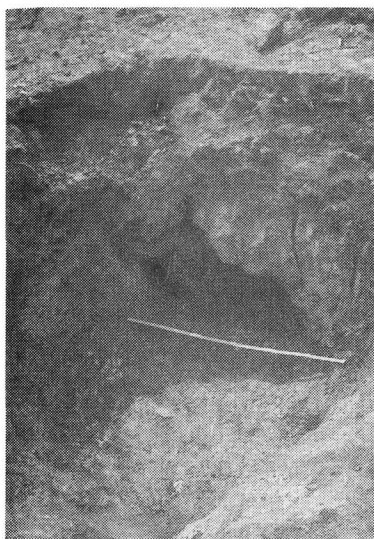
久見迫第 4 号人骨



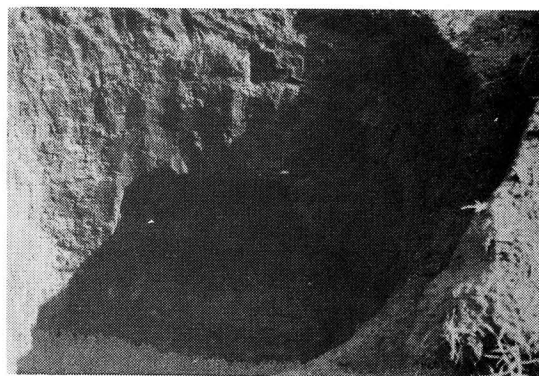
久見迫第 6 号遺構



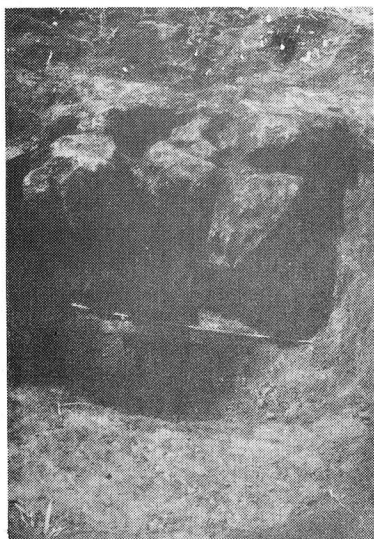
久見迫第 7 号出土状況



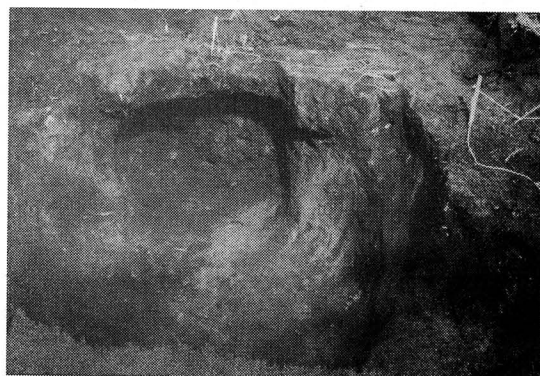
久見迫第 8 号遺構



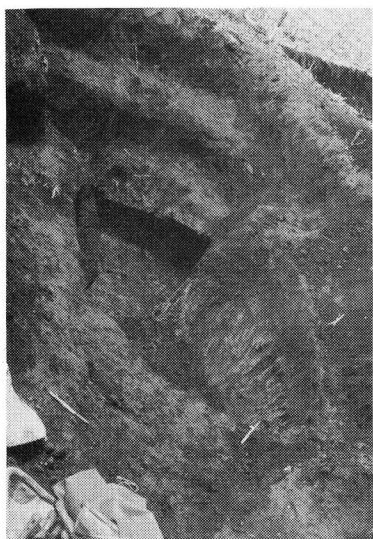
久見迫第 9 号遺構



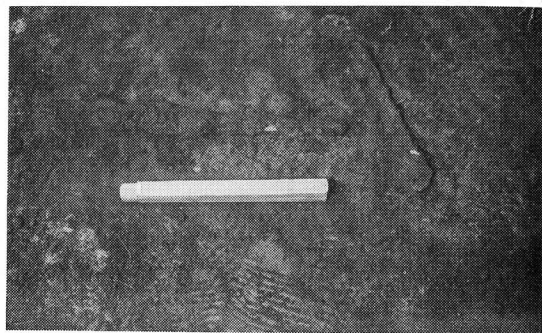
久見迫第 10 号遺構



久見迫第 10 号羨道開口状況



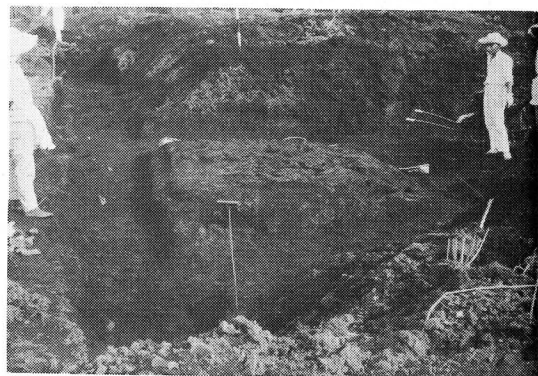
久見迫第10号遺構



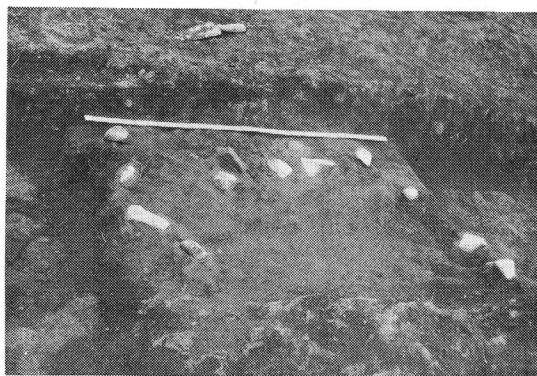
久見迫第10号出土状況



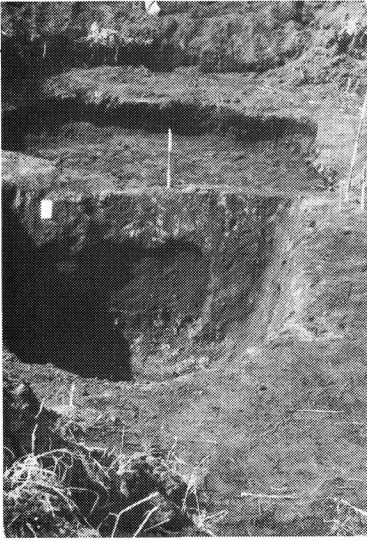
須恵器出土状況



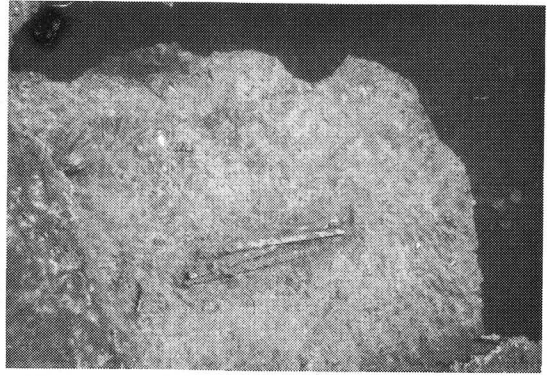
久見迫溝状遺構



久見迫溝状遺構



馬頭第 1 号遺構



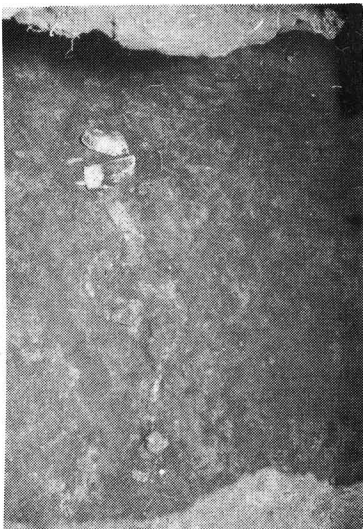
馬頭第 1 号出土状況



馬頭第 1 号出土状況



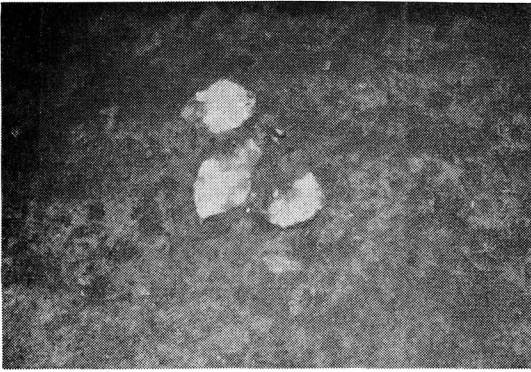
馬頭第 1 号勾玉出土状況



馬頭第 1 号馬鐸出土状況



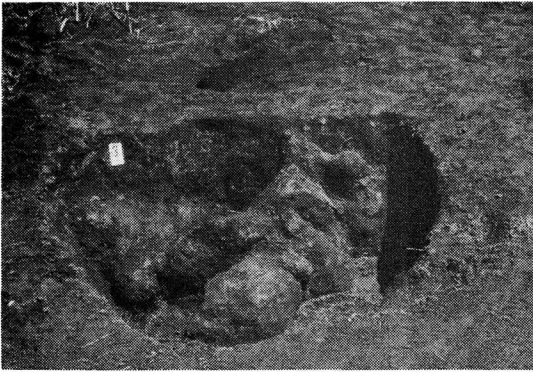
馬頭第 1 号馬鐸出土状況



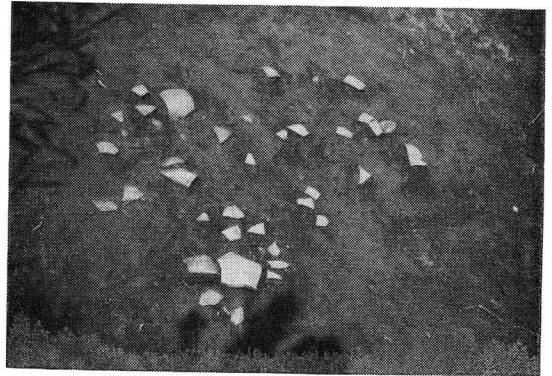
馬頭第 1 号否葉出土状況



馬頭第 1 号鉄鏟出土状況



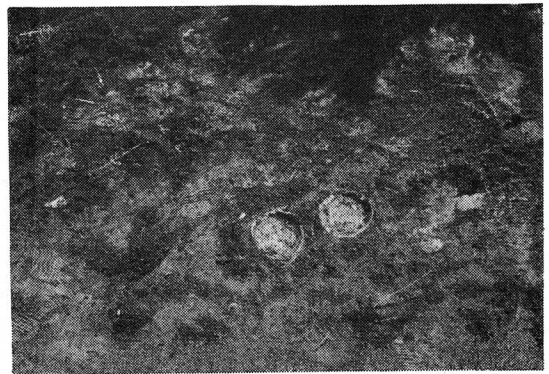
馬頭第 3 号遺構



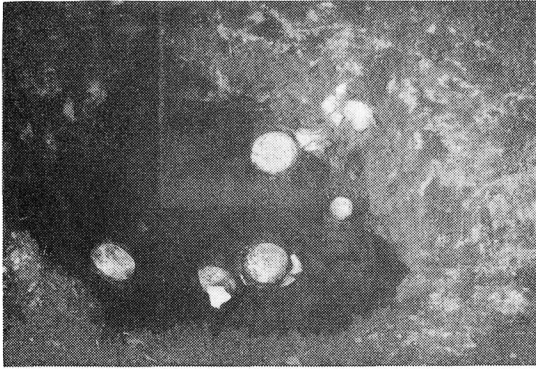
馬頭第 4 号須恵器出土状況



馬頭第 4 号須恵器出土状況



馬頭第 4 号土師器出土状況



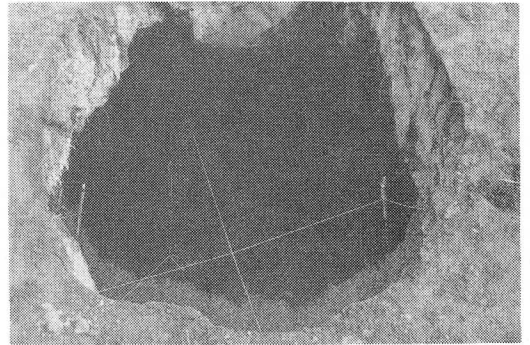
馬頭第 4 号土師器出土状況



馬頭第 5 号閉塞部



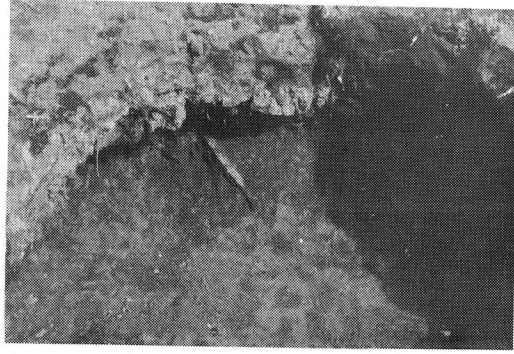
馬頭第 7 号閉塞部



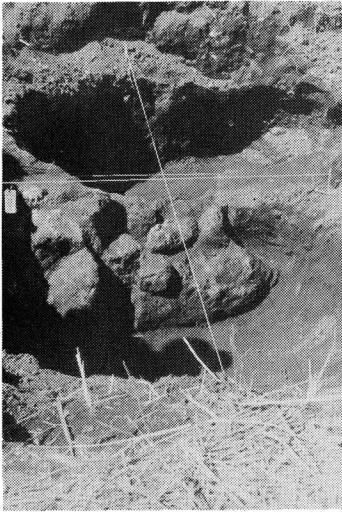
馬頭第 2 号玄室



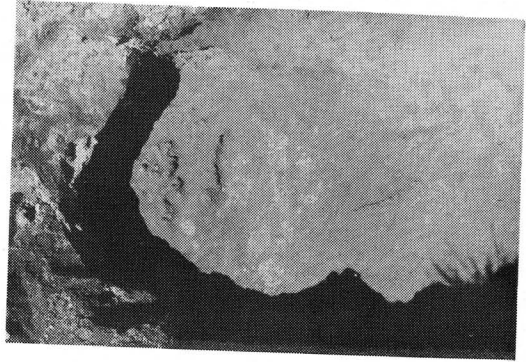
南方より馬頭遺跡を望む



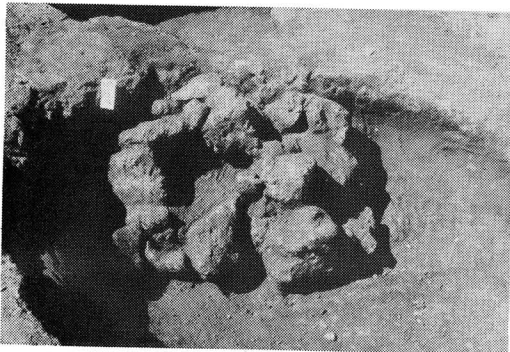
馬頭第12号出土状況



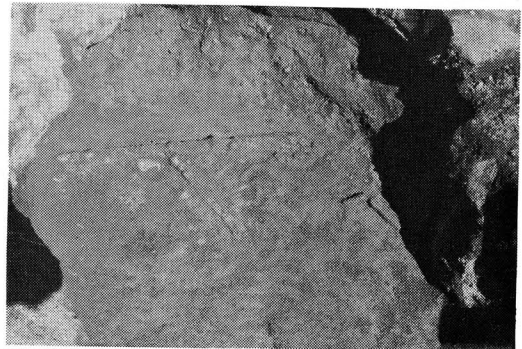
馬頭第13号



馬頭第13号出土状況

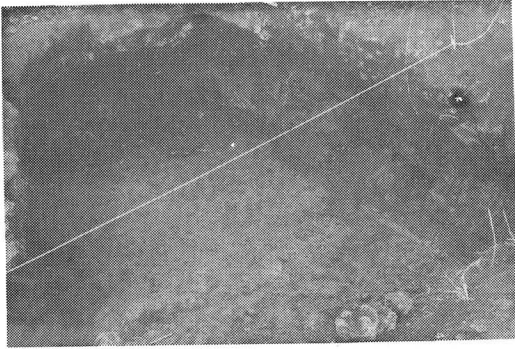


馬頭第14号閉塞部

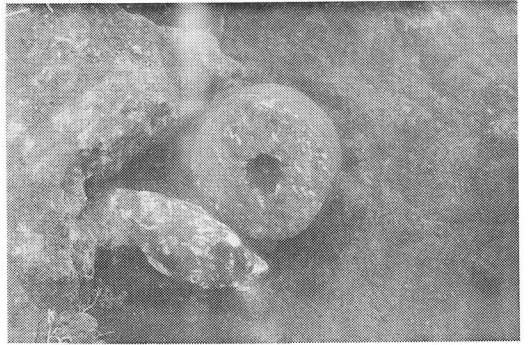


馬頭第14号閉塞部





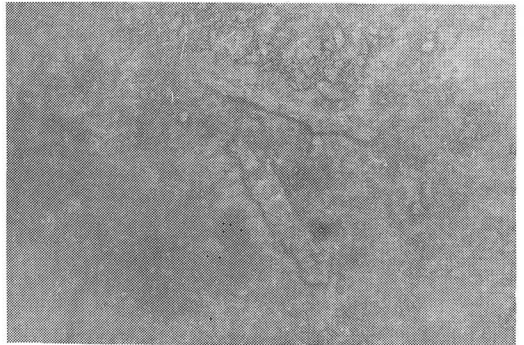
馬頭第 5 号出土状況



馬頭第 6 号



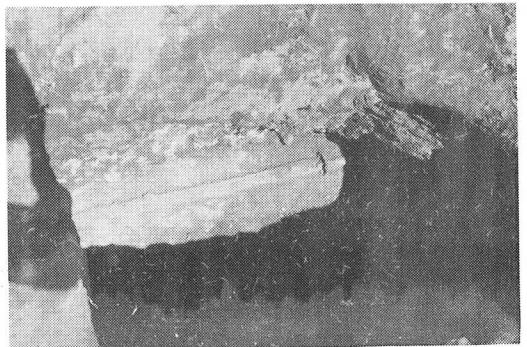
馬頭第 9 号閉塞部



馬頭第 9 号出土状況

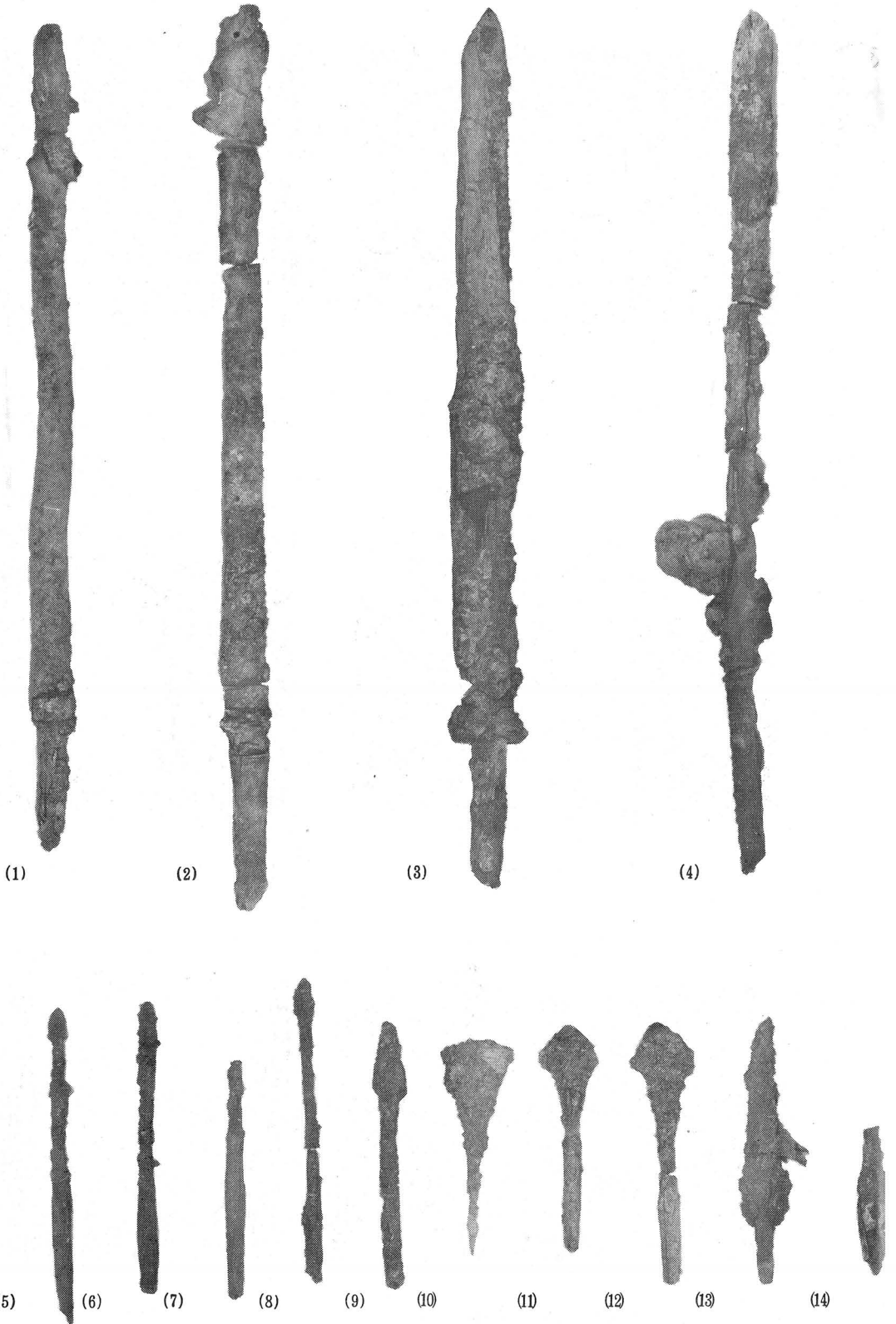


馬頭第 1 0 号閉塞部



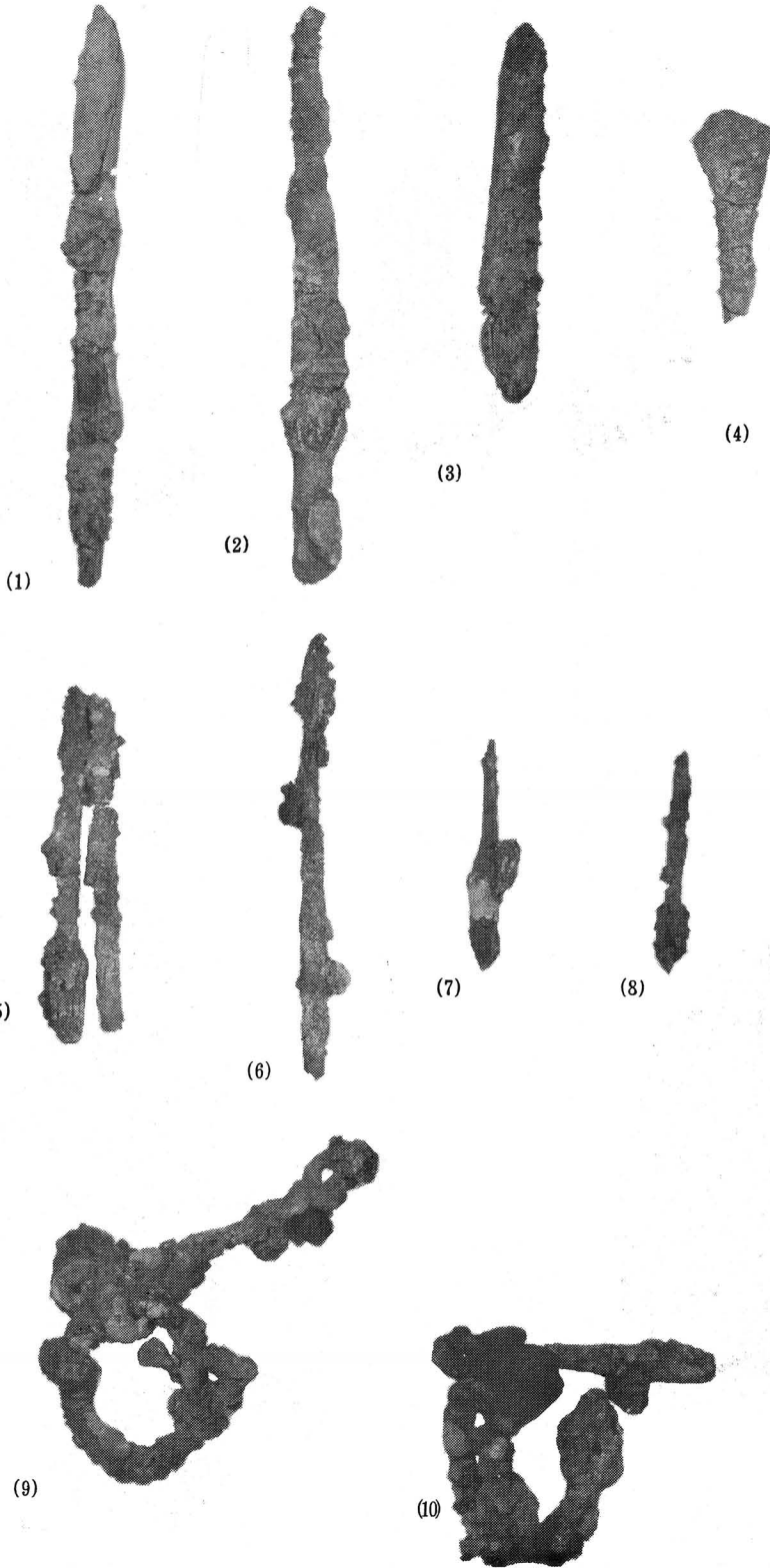
馬頭第 1 0 号出土状況

久見迫地下式横穴出土品



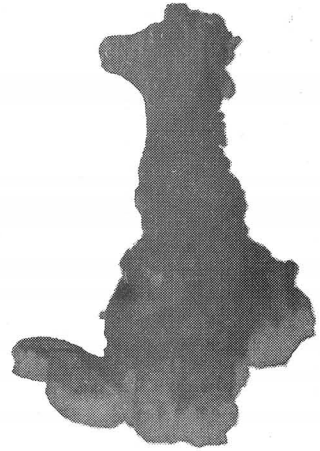
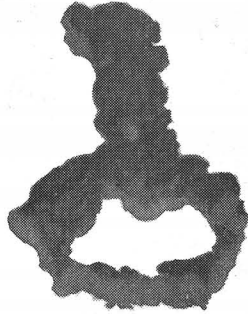
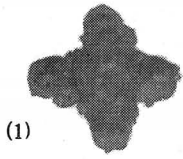
劍(1) 3号, (2) 6号, (3) 7号, 直刀(4) 1号,  
鏃(5)~(12) 1号, 刀子(13) 1号, (14) 9号

久見迫地下式横穴出土品



直刀(1) 6号, (2)直刀 1 0号, 劍(3) 1 0号,  
鉄鏃(4) 1 0号, (5) . (6) 7号, 刀子(7) 3号, (8) 1号,  
轡(9) . (10)土壤

久見迫・馬頭地下式横穴出土品



(5)



(6)

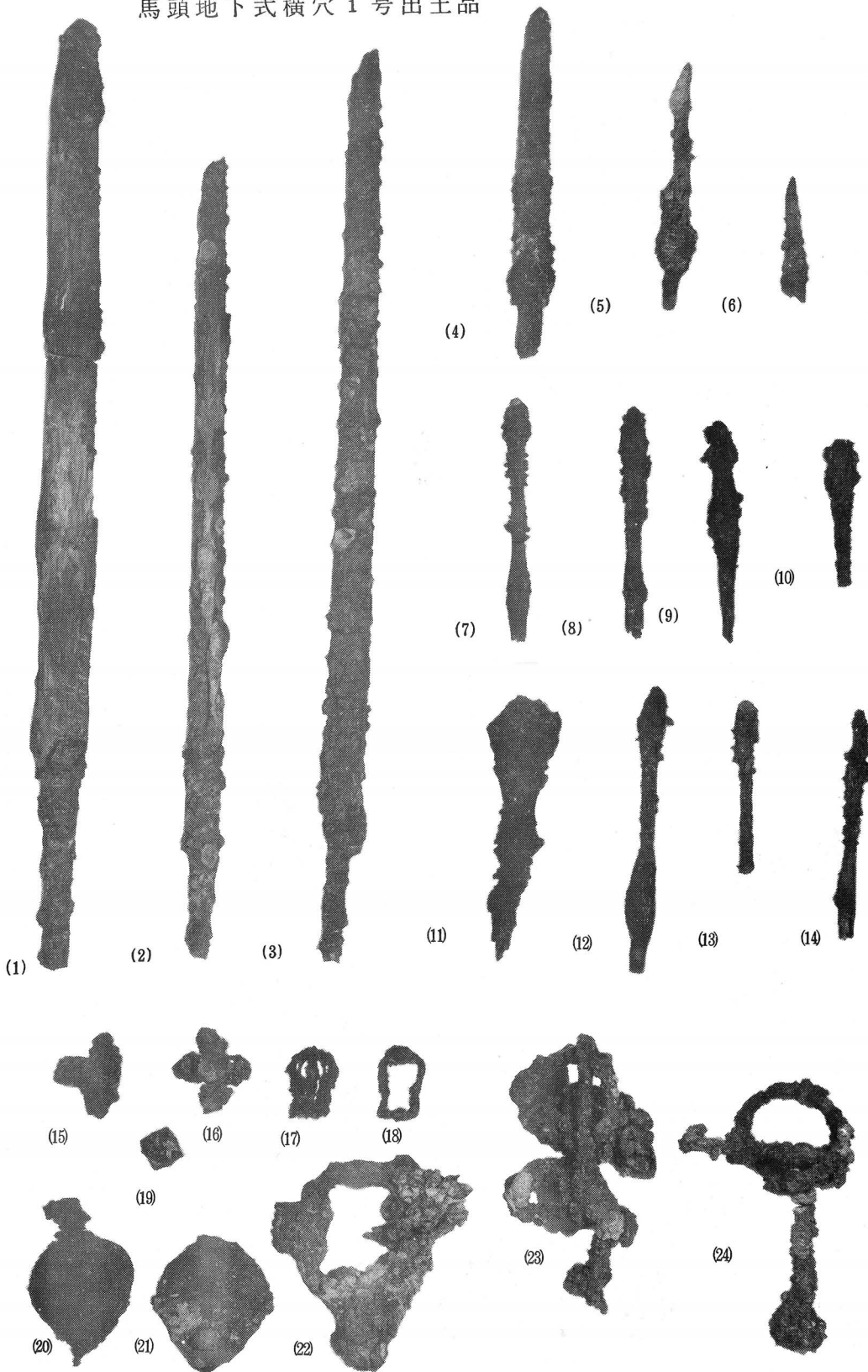


(7)

馬具類 (1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)

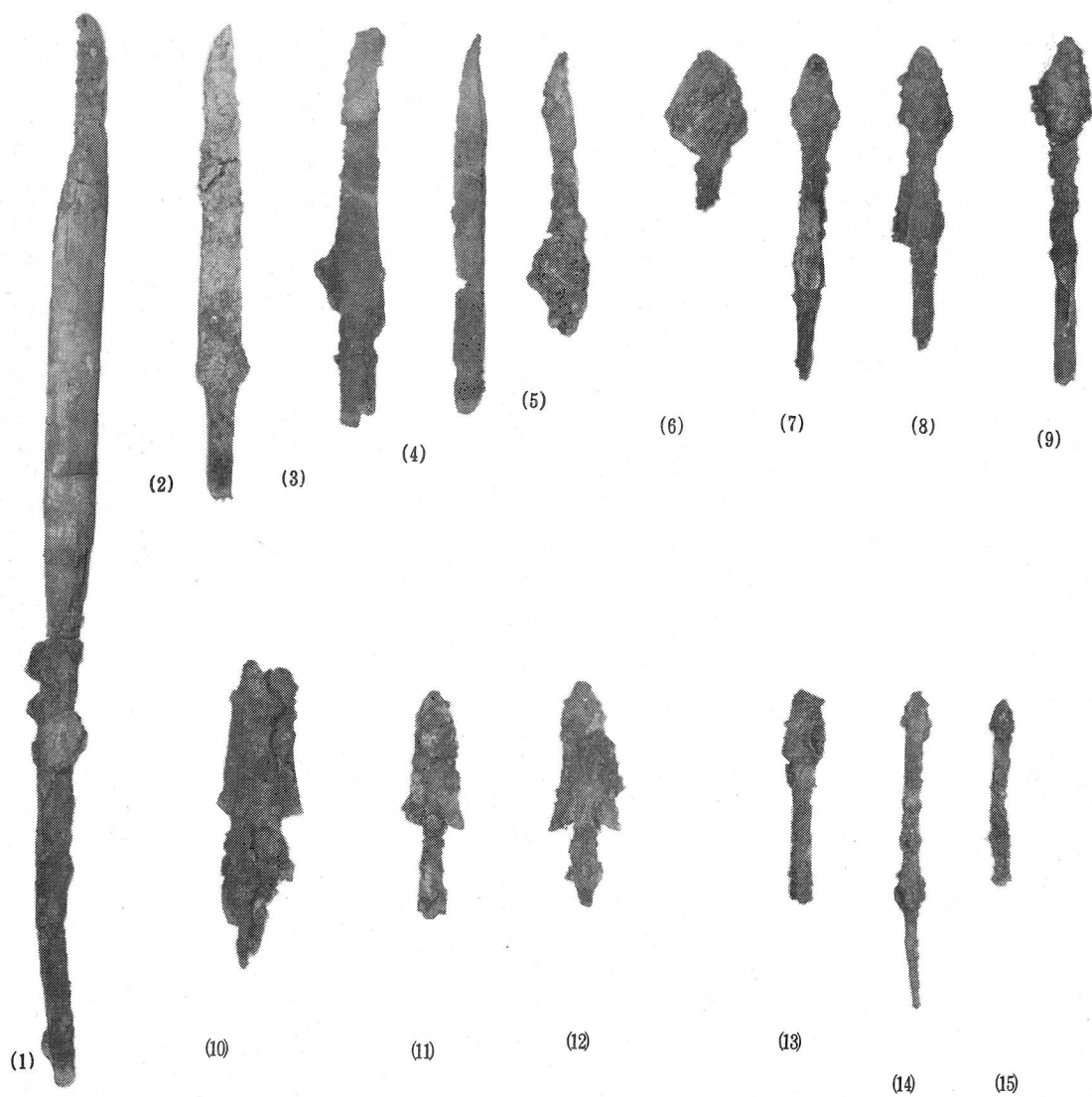
馬鐸 (6)・(7)馬頭 1号

馬頭地下式横穴 1 号出土品



(1) . (4)劍, (2) . (3)直刀, (5) . (6)刀子  
 (7) ~ (14)鐵鏃, (15) . (16)辻金具, (17) . (18)鉸具  
 (19)留金具, (20) . (21)杏葉, (22) ~ (24)轡

馬頭地下式横穴 5 号出土品



(1) . (2)直刀, (3) ~ (5)刀子, (6) ~ (15) 鐵鏟 (16) 轡鏡板, (17) . (18) 辻金具

馬頭地下式 1 4 号出土品

劍(1) 1 4 号, 刀子(2), 直刀(3)

刀子(4) 1 4 号, 鏃(5) . (6) . (7) 1 4 号

馬具(8) . (9) . (10) , (11) 1 4 号



馬頭地下式横穴出土品

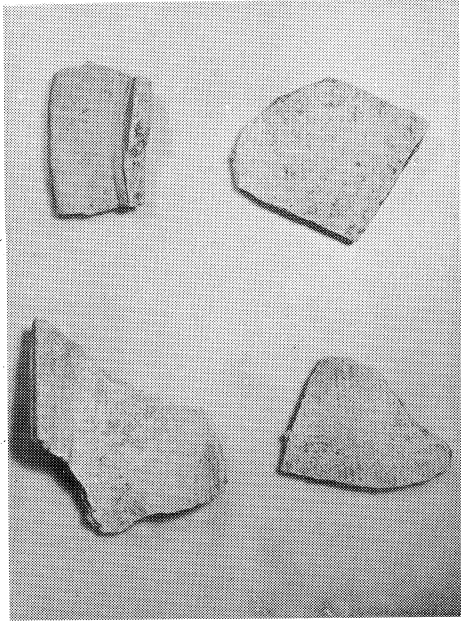


直刀(1) 1 0号, (2) 1 2号, (3) 9号

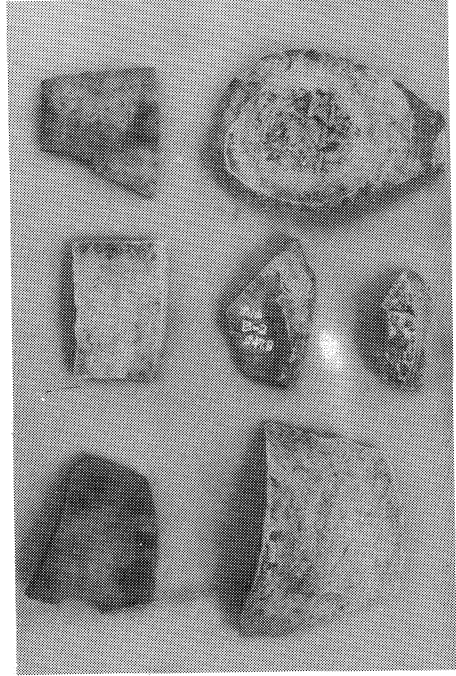
刀子(4) 9号, (5) 3号, 馬具類(6) 1 3号



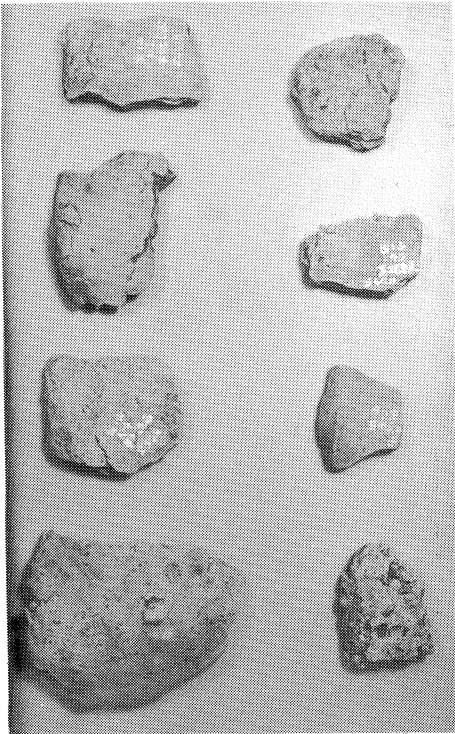
こまくりげ遺跡  
竹山遺跡  
平木場遺跡



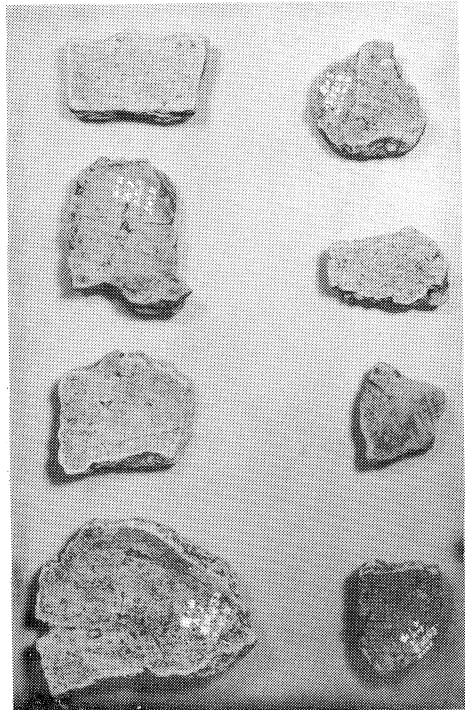
土師器



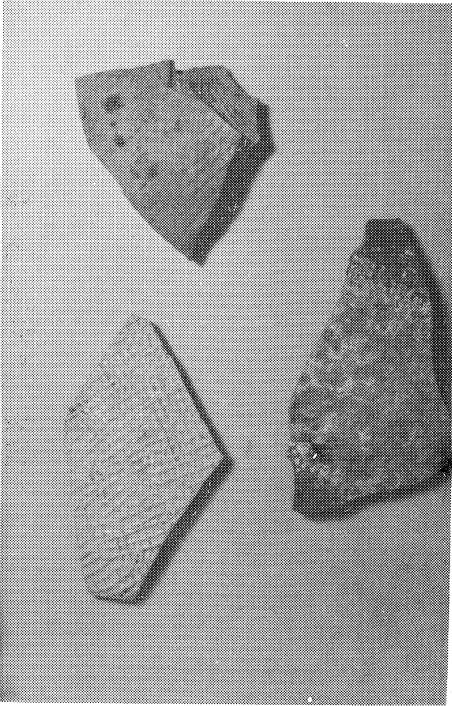
土師器



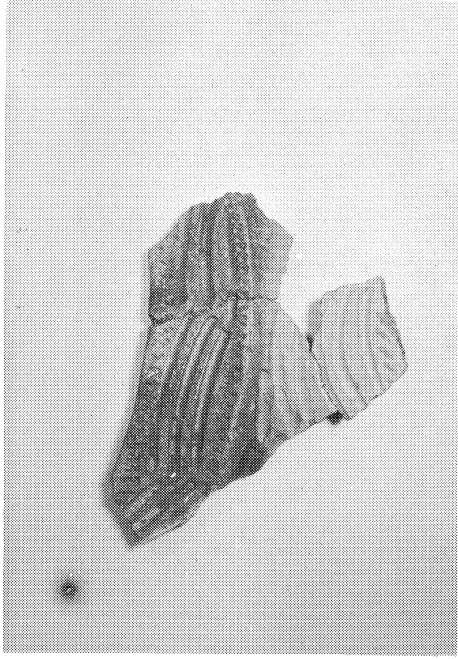
土師器 (布目痕土器の表)



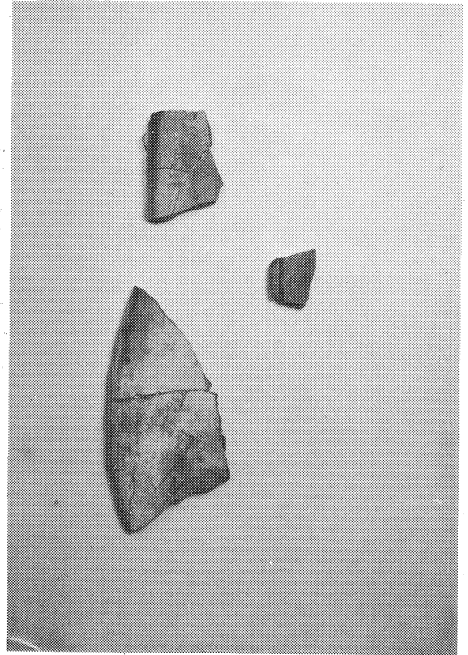
土師器 (布目痕土器の裏)



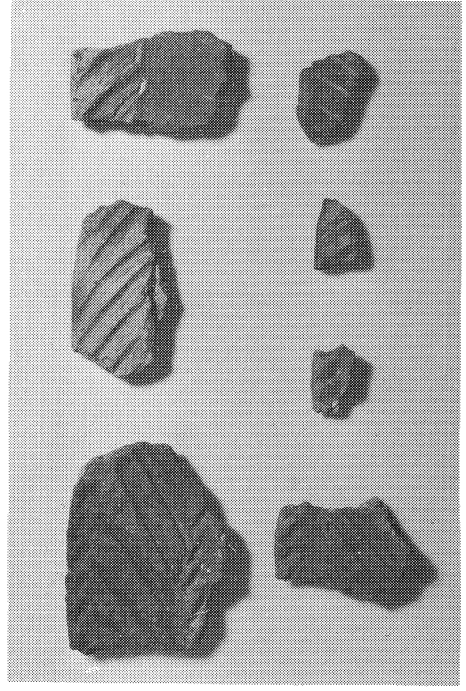
須 恵 器



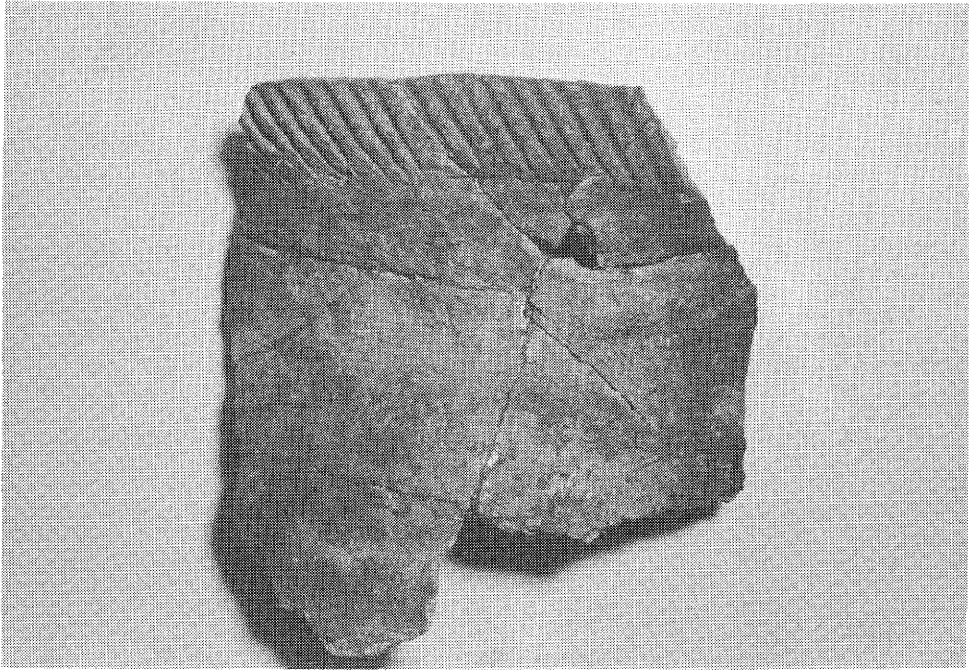
繩文土器・第二類



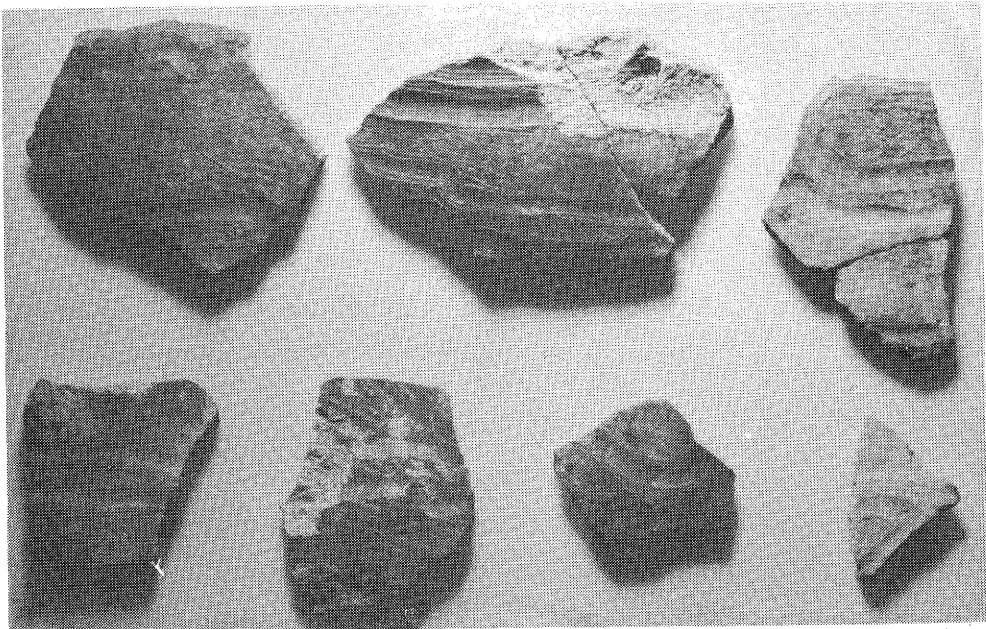
繩文土器・第一類



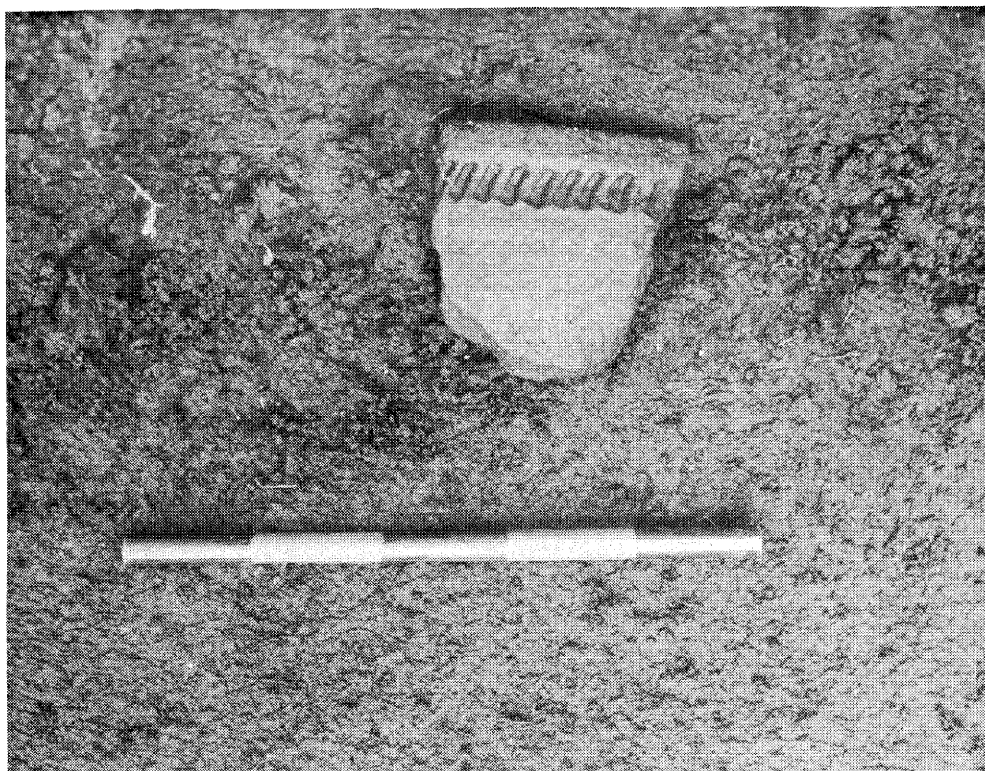
繩文土器・第三類



繩文土器第三類



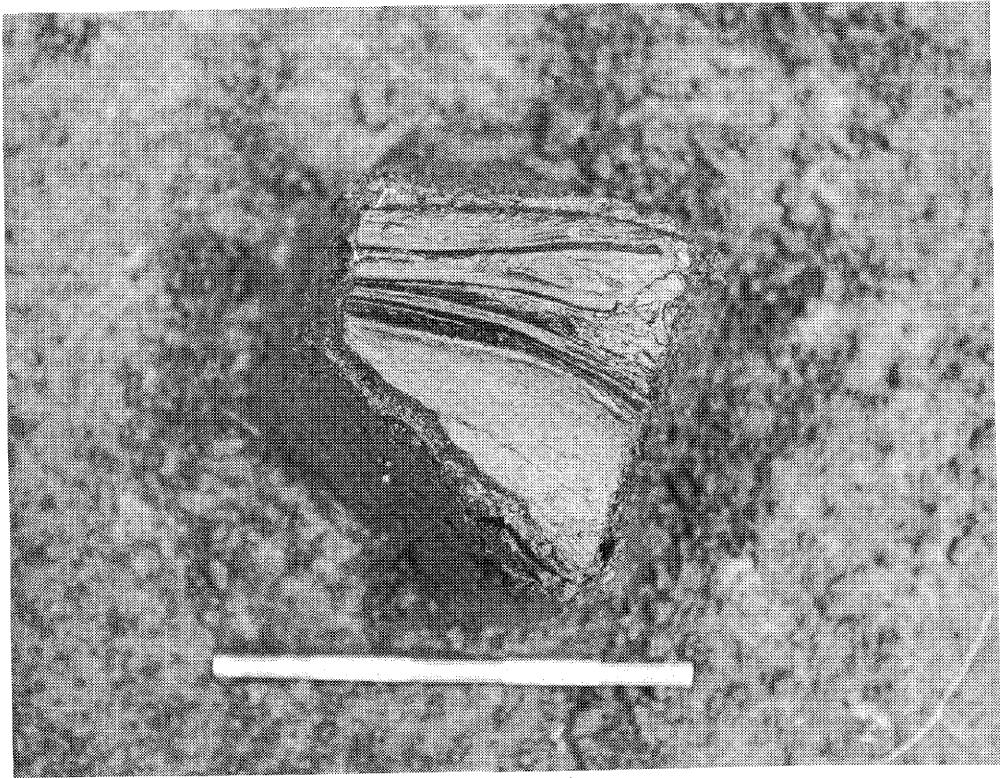
繩文土器・第四類



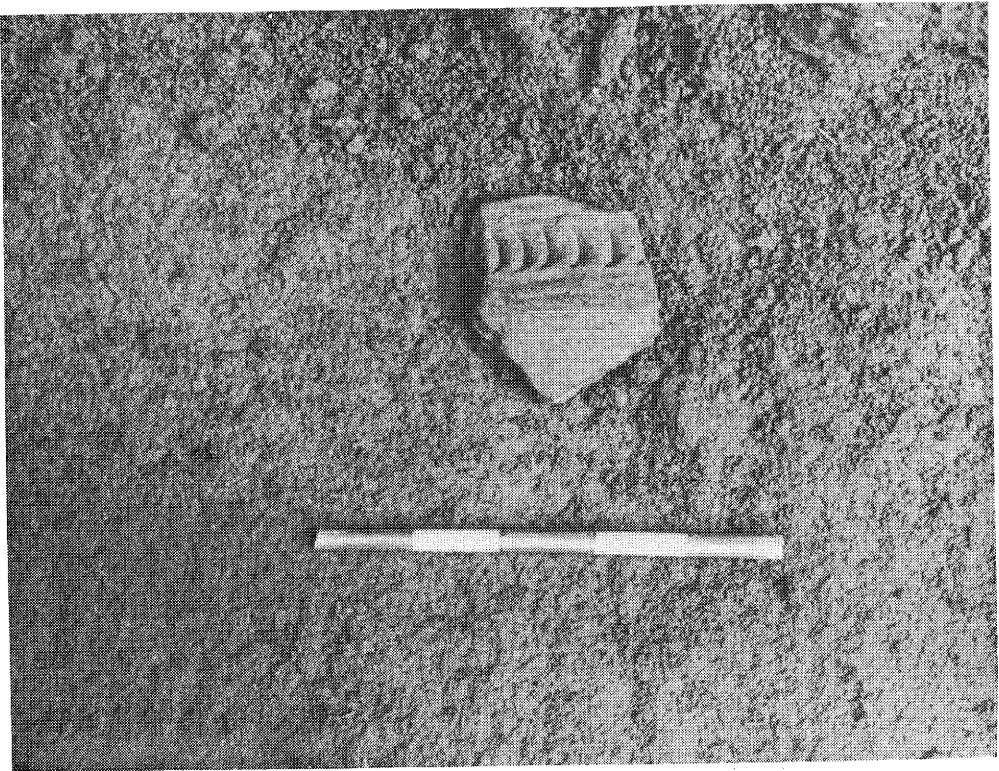
市来式土器の出土状況



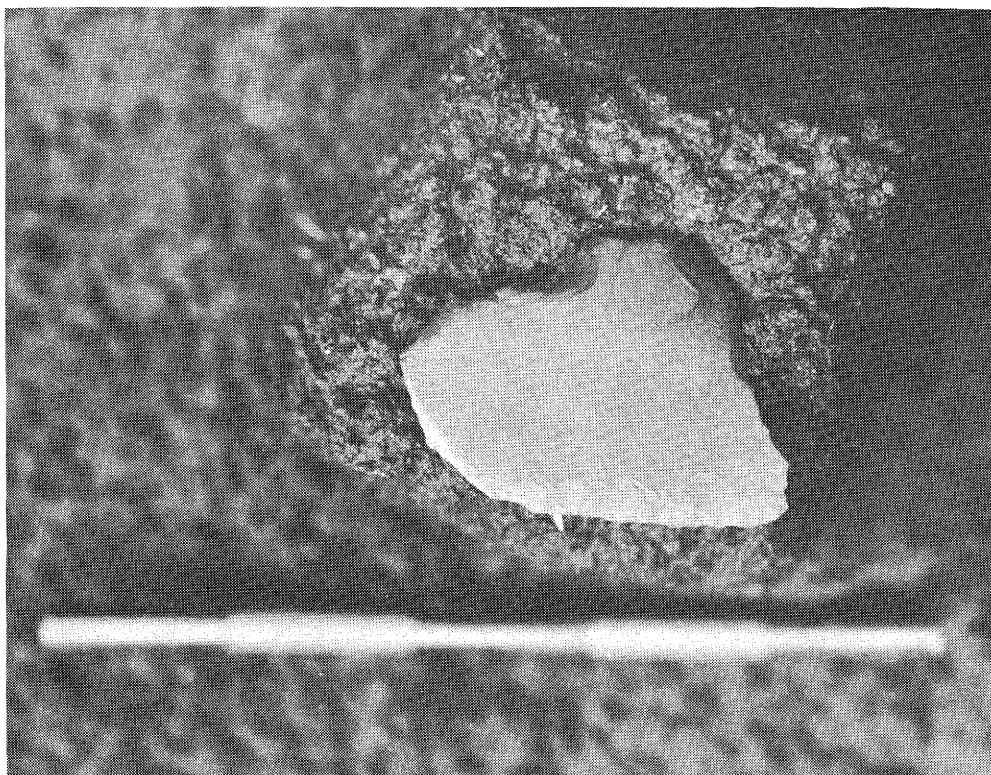
市来式土器の出土状況



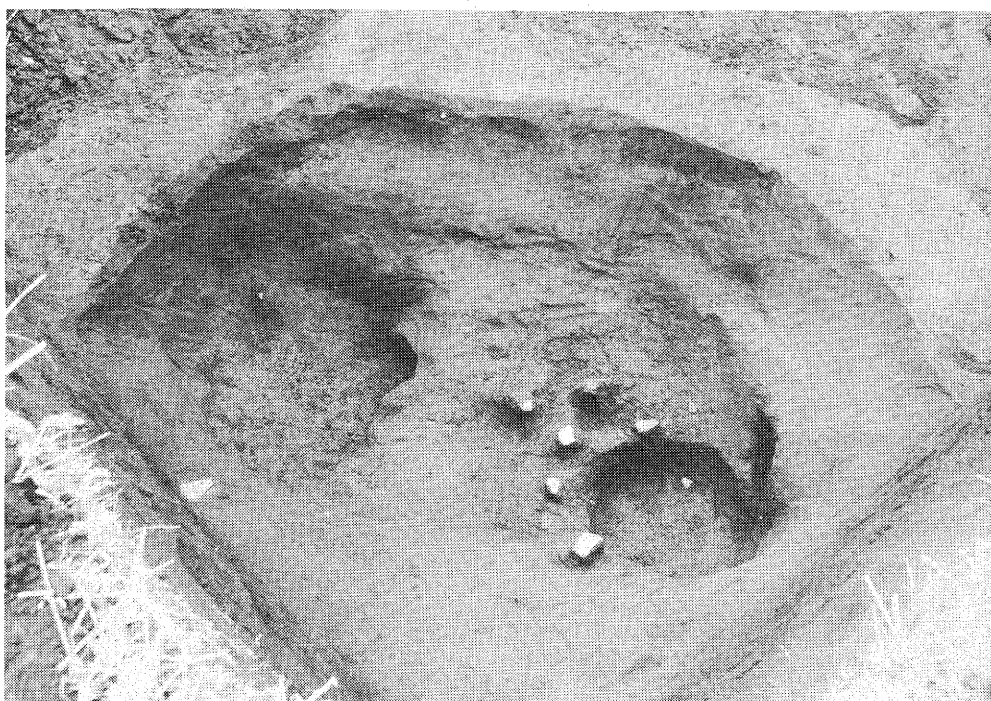
市来式土器の出土状況

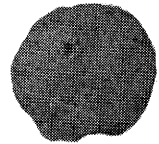
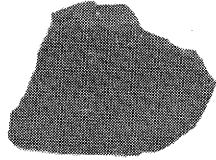
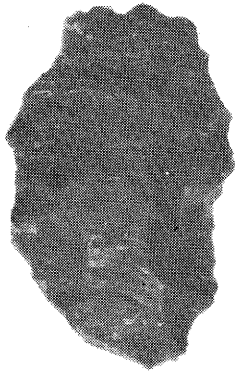


市来式土器の出土状況



石匙の出土状況





石器類

円板



発掘の準備

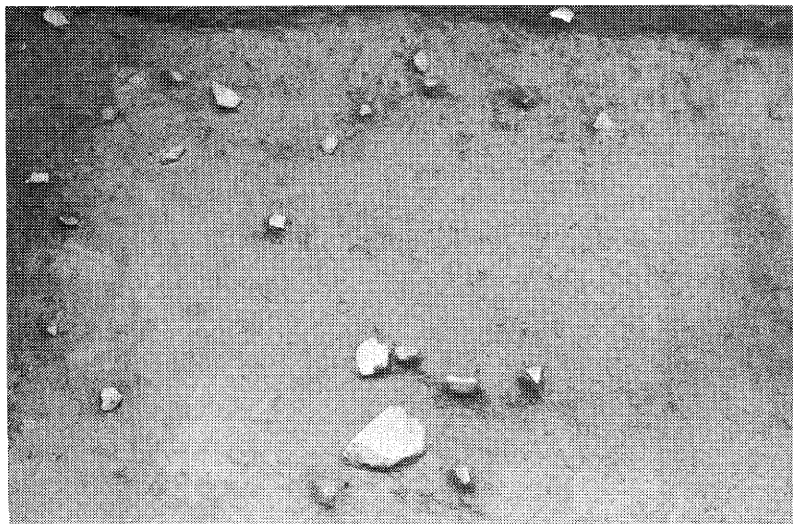


A-2 A-4区の発掘光景





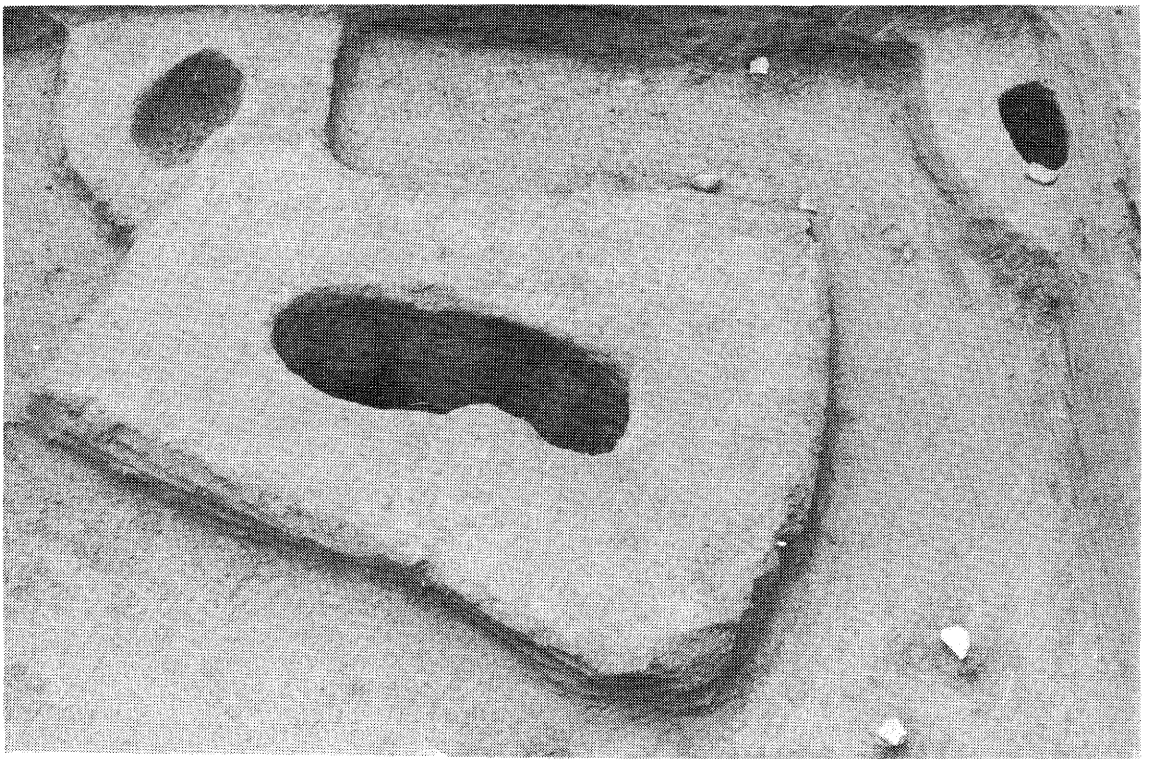
A-2区 トレンチ土層位



A-4区Ⅳ層 土器・石屑の出土分布状況



A-2区 トレンチ東部のピット



A-2区 トレンチ南西部のピット  
中央は木の根跡

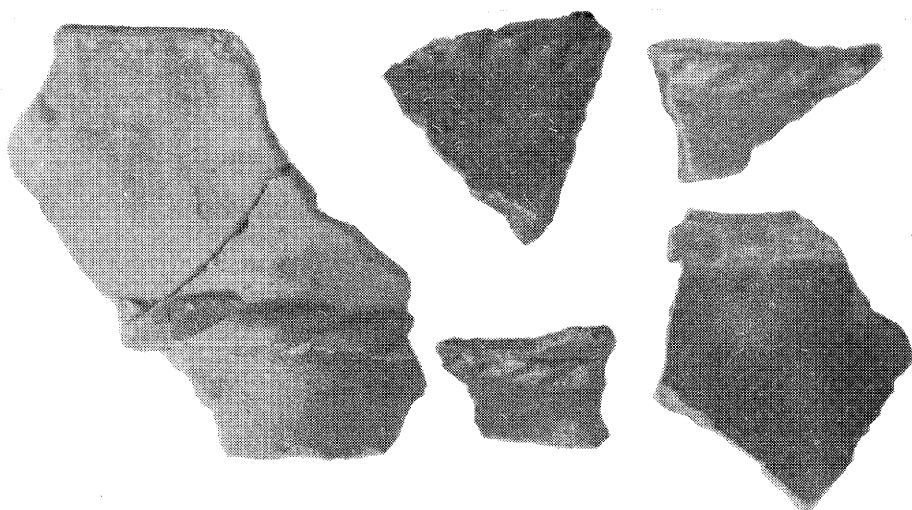
# 竹山遺跡



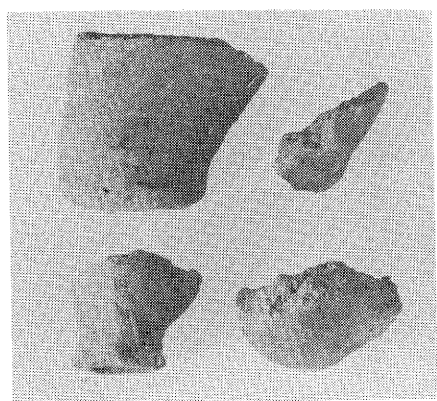
竹山遺跡調査状景



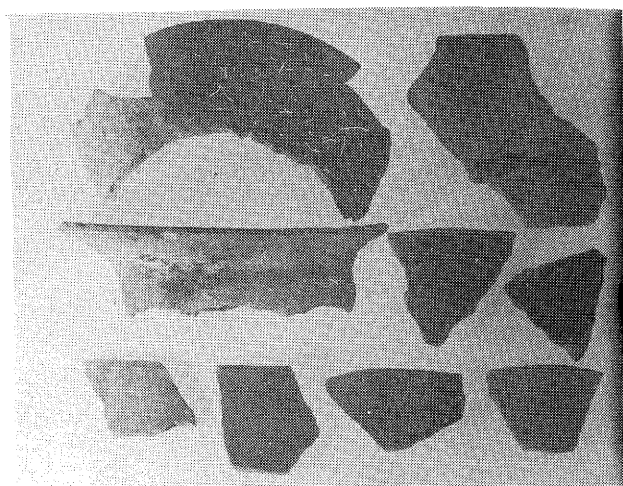
第Ⅱ区ピット群



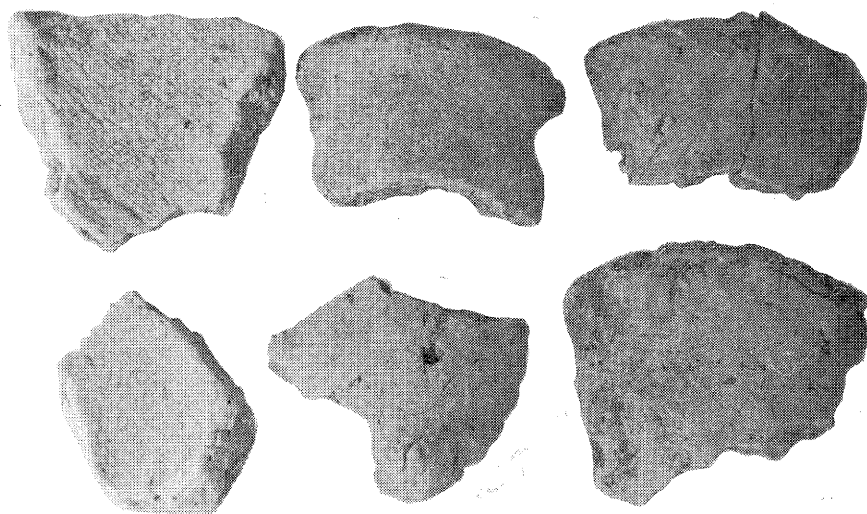
絡繩凸帶文土器



底 部

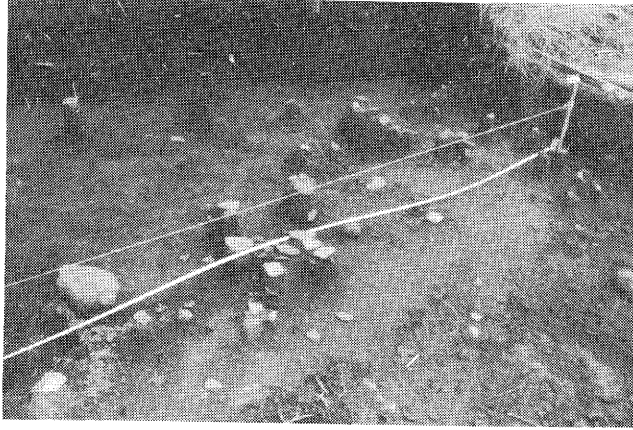


粗製土器

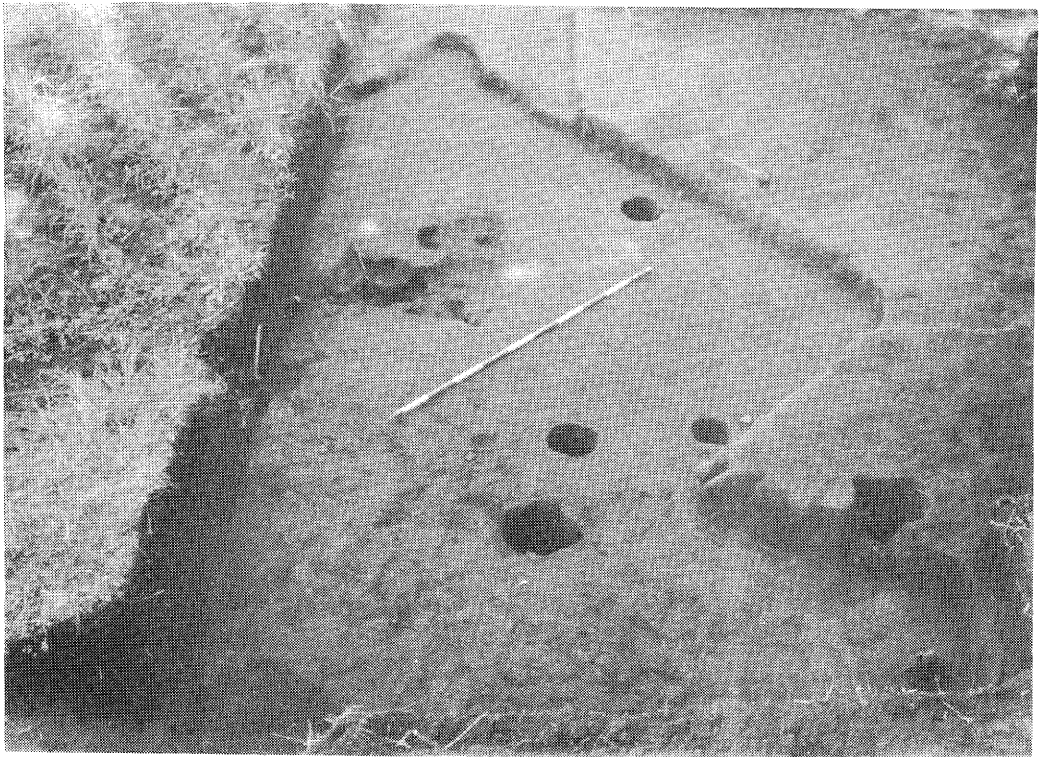


布目庄痕土器

## 平木場遺跡



方形住居跡・上層土器出土状況



B区 方形竪穴住居跡

平木場遺跡

A区ピット群

